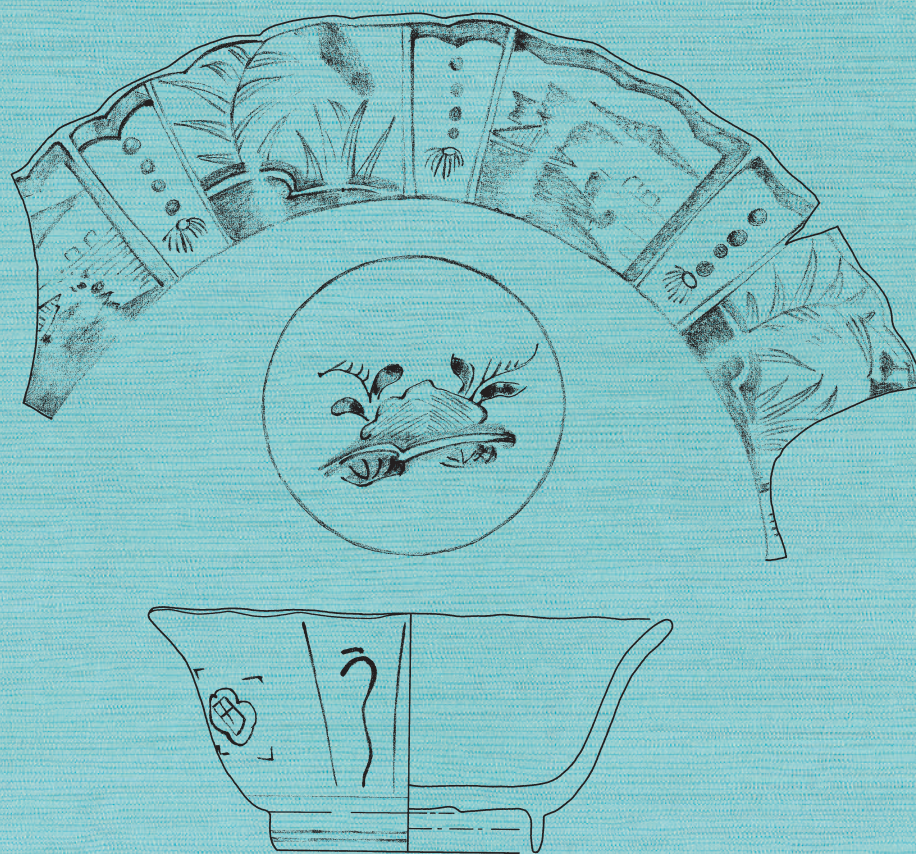


(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター調査報告書第31集

# 陣山遺跡

## 陣山北三区遺跡

— あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書 —



1997. 9

(財) 高知県文化財団  
埋蔵文化財センター



陣 山 遺 跡  
陣 山 北 三 区 遺 跡

1997.9

(財) 高知県文化財団  
埋蔵文化財センター





143

染付 麒麟文角鉢



142

染付 松竹梅牡丹唐草文大皿



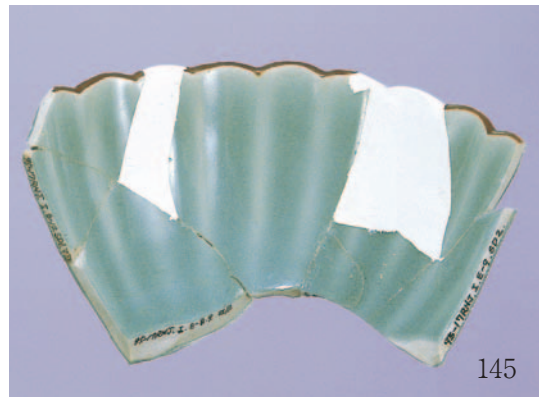
127

色絵窓牡丹唐花文小碗



146

青磁陽刻花形鉢



145

青磁菊花形鉢





132

染付山水文輪花形小皿



108 (左)・109 (右)

染付草花文小碗、染付雁文小碗



76

染付松丸文反端形碗



59

染付葦水鳥文広東形碗



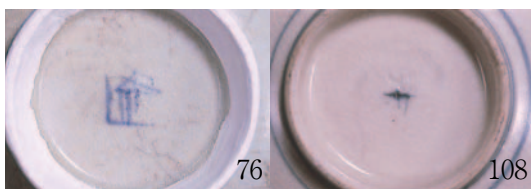
77

染付草花文端反形碗



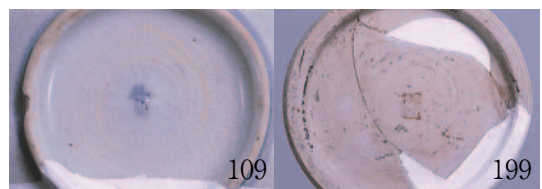
199

染付梅格子文火入れ



76

108



109

199

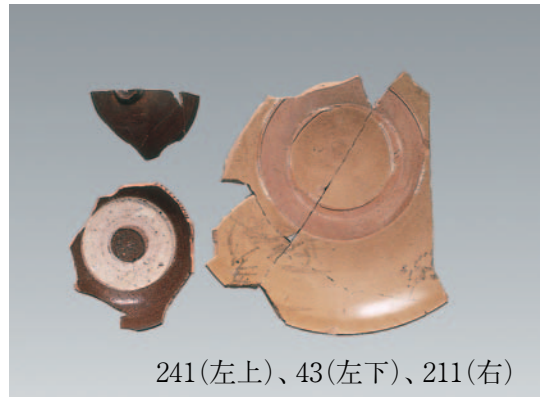






48

灰釉蓋



241(左上)、43(左下)、211(右)

鉄釉蓋、鉄釉小皿、灰釉竹雀文大皿



316

灰釉火入れ



228

灰釉飼鉢



240

鉄釉片口鉢



250

鉄釉行平鍋



266

土灰釉德利



322

鉄釉火鉢



## 序

「あけぼの道路」敷設に伴う発掘調査は、平成6年度から始まり今年で4年目を迎えました。昨年までの調査では、長岡台地の開発の歴史に新たな1ページを加える貴重な発見が相次ぎ、土佐の古代史を解明するうえでも大きな成果を得ることができました。

本書は平成7年度から8年度に実施した陣山遺跡・陣山北三区遺跡の成果をまとめたものです。本遺跡では近世から近代を中心とする遺構・遺物が発見され貴重な成果をあげることができました。発掘資料は、周辺地域はもとより高知平野の歴史を明らかにするうえでも掛け替えのない文化遺産として、後世に伝え歴史研究の貴重な資料として活用されねばなりません。今後、本書が埋蔵文化財への一層の理解を深めていただく一助となり、考古学研究の資料として広く活用されますことを念じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたっては、高知県南国土木事務所、共運工業、地元陣山地区の方々の埋蔵文化財に対する深い御理解・御協力を賜ったことに厚く御礼申し上げます。

平成9年9月

(財) 高知県文化財団 埋蔵文化財センター  
所長 古谷 碩志



# 例 言

1. 本書は、高知県文化財団埋蔵文化財センターが、平成7年度に実施した国道195号道路改良(あけぼの道路)に伴う陣山遺跡、並びに8年度に実施した陣山北三区遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 陣山遺跡は高知県南国市陣山字南鍵山他、陣山北三区遺跡は同北鍵山2359他に所在する。
3. 発掘調査は、平成7年度は9月18日から12月13日まで、8年度は8月26日から11月13日まで行った。
4. 調査面積は以下の通りである。

〔平成7年度〕 陣山遺跡 I区 (1,466m<sup>2</sup>)、II区 (1,865m<sup>2</sup>)、  
陣山北三区遺跡の一部 (361m<sup>2</sup>) 総調査面積3,692m<sup>2</sup>

〔平成8年度〕 陣山北三区遺跡 I区 (945m<sup>2</sup>) II区 (1,265m<sup>2</sup>) III区 (879m<sup>2</sup>)  
IV区 (1,055m<sup>2</sup>) 総調査面積4,144m<sup>2</sup>

5. 調査体制は以下の通りである。

(1) 調査員

〔平成7年度〕 吉成 承三 (高知県文化財団埋蔵文化財センター 調査員)  
浜田 恵子 ( 同 主任調査員)  
〔平成8年度〕 出原 恵三 ( 同 調査第3班長)  
佐竹 寛 ( 同 専門調査員)  
行藤たけし ( 同 調査補助員)

(2) 総務担当

吉岡 利一 ( 同 主幹)

この他測量については、小倉功、山本純代、泉幸代、大原喜子、山中美代子の助力を得た。

6. 本書の編集は浜田が行い、執筆は以下のように分担した。

第I章 (浜田)、第II章 (浜田・佐竹)

第III章 第1節、陣山遺跡 I区の調査 (浜田) ・ II区の調査 (吉成)

第2節、陣山北三区遺跡 (佐竹)

第IV章 第1～3節 (浜田)、第4節 (出原)

7. 本報告書を作成するに当たっては、特に近世陶磁器の整理について大橋康二 (佐賀県教育庁文化財課)、中野泰裕 (愛知県立陶磁資料館)、藤方正治 (当センター調査員)、古銭の整理について泉幸代 (当センター調査員)、胎土分析に関して山本順 (高知県工業技術センター)、二宮修治 (東京学芸大学化学教室)、白石純 (岡山理科大学自然科学研究所)、在地窯調査に関して門田由紀 (安芸市立歴史民俗資料館)、西村昇 (宿毛市平田)、はじめ諸氏のご教示を頂いた。(敬称略)
8. 発掘現場作業員は下記の方々である。猛暑・酷寒を厭わず作業に従事して下さい皆様に対して、記して感謝の意を表したい。

発掘作業員

秋月 富 猪野美佐恵 大和田延子 岡田 晃 岡本 陽子 小笠原雪美 金子 博文  
上池 喜江 川原 庸照 楠瀬 正人 小松 木義 小松 浜子 小松 雪子 小松二三子  
近藤美代喜 島井 博志 島井 澄子 島井 周子 高橋 延子 田島 一徳 田代 勝  
恒石 富子 永田美津子 南 照子 松崎 邦久 森本 幸栄 吉川 勉

9. 重機による表土剥ぎ、廃土運搬、埋め戻しについては、共運工業の石川康人・石川功・石川健史・竹村達臣・竹村弘樹氏の便宜、助力を得た。
10. 遺物整理、報告書作成作業は下記の方々の協力を得た。  
岩本須美子 大原 喜子 尾崎 富貴 小野山美香 川久保 香 田村 美鈴 浜田 雅代  
東村 知子 松木 富子 松山 真澄 宮地 佐枝 矢野 雅 小松 経子 中西 純子 宮本 幸子
11. 出土遺物他関係資料は埋蔵文化財センターで保管している。

## 凡 例

### 1. 図版縮尺

図版の縮尺は各々の図版に記したが、原則として次の通りである。

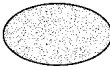
遺構図版 1/40

遺物実測図 煙管・古銭・土人形製品：実寸、 鉄釘・簪等の金属製品：1/2、  
径30cmを超える陶磁器類：1/4、 その他の陶磁器類・石製品：1/3

### 2. 遺構図版トーン

遺構断面図中のスクリーントーンの指示は次の通りである。

#### 陣山遺跡

黄色粘土 

石 

#### 陣山北三区遺跡

石 

# 本文目次

第Ⅰ章 遺跡の位置と地理的・歴史的環境	1
第Ⅱ章 調査に至る経過と調査の方法	5
第Ⅲ章 調査成果	9
第1節 陣山遺跡	9
1. I区の調査	
(1) 基本層準	9
(2) 遺構と遺物	10
(3) 包含層出土遺物	22
(4) 一括廃棄遺物	26
2. II区の調査	
(1) 基本層準	59
(2) 遺構と遺物	59
第2節 陣山北三区遺跡	
1. 調査区の概要と基本層準	89
2. 検出遺構と遺物	93
3. 表面採集遺物	98
4. 小結	98
第Ⅳ章 考察	
第1節 陣山遺跡、所有者の推定とその性格	101
第2節 陣山遺跡出土陶器の生産窯推定	105
第3節 陣山遺跡出土近世陶磁器の検討	128
第4節 陣山海軍送信所と爆発事故	138

## 挿図目次

- Fig. 1 遺跡の位置と周辺の地質分布図  
Fig. 2 本遺跡の位置と周辺の遺跡分布図  
Fig. 3 陣山遺跡・陣山北三区遺跡調査区位置図
- 陣山遺跡
- Fig. 4 I区基本層準  
Fig. 5 陣山遺跡I・II区検出遺構全体図  
Fig. 6 SK1・2平面図・セクション図  
Fig. 7 SK4平面図・エレベーション図  
Fig. 8 SK7～9平面図・エレベーション図  
Fig. 9 SK11平面図・エレベーション図  
Fig.10 SK10・12平面図・エレベーション図  
Fig.11 SK3・4・13平面図及びSK13セクション図  
Fig.12 SD1・2セクション図・エレベーション図及びSD1出土遺物実測図  
Fig.13 SP1平面図・セクション図・エレベーション図  
Fig.14 SP1セクション図・石組み図・東壁石組図  
Fig.15 SP1出土遺物実測図  
Fig.16 SS1集石検出状況  
Fig.17 I区包含層出土遺物実測図(1)  
Fig.18 I区包含層出土遺物実測図(2)  
Fig.19 I区包含層出土遺物実測図(3)  
Fig.20 一括廃棄遺物実測図(磁器1)  
Fig.21 一括廃棄遺物実測図(磁器2)  
Fig.22 一括廃棄遺物実測図(磁器3)  
Fig.23 一括廃棄遺物実測図(磁器4)  
Fig.24 一括廃棄遺物実測図(磁器5)  
Fig.25 一括廃棄遺物実測図(磁器6)  
Fig.26 一括廃棄遺物実測図(磁器7)  
Fig.27 一括廃棄遺物実測図(磁器8)  
Fig.28 一括廃棄遺物実測図(磁器9)  
Fig.29 一括廃棄遺物実測図(磁器10)  
Fig.30 一括廃棄遺物実測図(陶器1)  
Fig.31 一括廃棄遺物実測図(陶器2)  
Fig.32 一括廃棄遺物実測図(陶器3)  
Fig.33 一括廃棄遺物実測図(陶器4)  
Fig.34 一括廃棄遺物実測図(陶器5)  
Fig.35 一括廃棄遺物実測図(陶器6)  
Fig.36 一括廃棄遺物実測図(陶器7)  
Fig.37 一括廃棄遺物実測図(陶器8)  
Fig.38 一括廃棄遺物実測図(陶器9)  
Fig.39 一括廃棄遺物実測図(陶器10)  
Fig.40 一括廃棄遺物実測図(瓦質土器)  
Fig.41 一括廃棄遺物実測図(土師質土器)  
Fig.42 一括廃棄遺物実測図(土人形型1)  
Fig.43 一括廃棄遺物実測図(土人形型2)  
Fig.44 一括廃棄遺物実測図(土人形)  
Fig.45 一括廃棄遺物実測図(石製品)  
Fig.46 一括廃棄遺物実測図(瓦1)  
Fig.47 一括廃棄遺物実測図(瓦2)  
Fig.48 一括廃棄遺物(古銭)  
Fig.49 一括廃棄遺物実測図(金属製品)  
Fig.50 II区基本層準  
Fig.51 II区SK5・6平面図・セクション図  
Fig.52 II区SD4・5セクション図・エレベーション図  
Fig.53 II区SX1～4平面図・エレベーション図及びSS2集石図  
Fig.54 送信所跡出土遺物実測図  
Fig.55 II区SR1及び包含層出土遺物実測図



- 陣山北三区遺跡
- Fig.56 基本層準
- Fig.57 I区検出遺構全体図
- Fig.58 II区・III区検出遺構全体図
- Fig.59 I区SD1～4セクション図・エレベーション図
- Fig.60 I区包含層出土遺物実測図
- Fig.61 II区SD1・2エレベーション図
- Fig.62 II区包含層出土遺物実測図
- Fig.63 III区SD1～4セクション図・エレベーション図
- Fig.64 III区SD4・包含層出土及び表面採集遺物実測図
- 考察
- Fig.65 窯跡出土資料実測図 (1)
- Fig.66 窯跡出土資料実測図 (2)

## 写真図版

- 巻頭図版 1
- 巻頭図版 2
- 巻頭図版 3
- 陣山遺跡
- PL. 1 I区調査前全景 (北より)  
II区同上 (北より)
- PL. 2 I区遺構検出状況 (西より)  
SK1半截状況
- PL. 3 SK2、SK3・4・13完掘状況
- PL. 4 SK7礫及び遺物出土状況、SK8完掘状況
- PL. 5 SK9完掘状況、SK10半截状況
- PL. 6 SK12遺物出土状況、SK12半截状況及び遺物出土状況
- PL. 7 SD1検出状況、SD1遺物出土状況
- PL. 8 SD1セクション (西)、SD1セクション (東)
- PL. 9 SD1 (西から)、SP1検出状況
- PL.10 SP1遺物出土状況、SP1セクション
- PL.11 SP1石組み検出状況、SP1胴木検出状況
- PL.12 SP1南側掘り込み部完掘状況、SP1完掘状況
- PL.13 SS1礫出土状況、I区完掘状況全景
- PL.14 II-北区東壁セクション、II-北区遺構検出状況
- PL.15 SD4・SR1検出状況、SD4・SR1礫出土状況
- PL.16 SD4礫出土状況、II-北区完掘状況全景
- PL.17 SK5検出状況、SK5半截状況
- PL.18 SK6検出状況、SK6半截状況
- PL.19 SD5・SK5・6、  
II-南区完掘状況全景 (南より)
- PL.20 送信所跡遺物出土状況、同上
- PL.21 送信所跡遺物出土状況
- PL.22 I区SD1 (1・3・4～6・8)  
・SP1 (9～11・13) 出土遺物
- PL.23 I区包含層出土遺物

- PL.24 I区包含層出土遺物
- PL.25 I区包含層出土遺物・一括廃棄遺物
- PL.26 I区一括廃棄遺物(磁器)
- PL.27 I区一括廃棄遺物(磁器)
- PL.28 I区一括廃棄遺物(磁器)
- PL.29 I区一括廃棄遺物(磁器)
- PL.30 I区一括廃棄遺物(磁器)
- PL.31 I区一括廃棄遺物(磁器)
- PL.32 I区一括廃棄遺物(磁器)
- PL.33 I区一括廃棄遺物(磁器・陶器)
- PL.34 I区SD1出土・包含層出土・一括廃棄遺物
- PL.35 I区一括廃棄遺物(陶器)
- PL.36 I区一括廃棄遺物(陶器)
- PL.37 I区一括廃棄遺物(陶器)
- PL.38 I区一括廃棄遺物(陶器)
- PL.39 I区一括廃棄遺物(陶器・土師質土器)
- PL.40 I区一括廃棄遺物(陶器・瓦質・土師質土器・土人形型)
- PL.41 I区一括廃棄遺物(土人形型)
- PL.42 I区一括廃棄遺物(土人形型・土人形・石製品)
- PL.43 I区一括廃棄遺物(金属製品)
- PL.44 I区一括廃棄遺物(瓦)
- PL.45 I区一括廃棄遺物(瓦・古銭)
- PL.46 SR1及びII区包含層出土遺物
- PL.47 II区包含層出土遺物
- PL.48 II区包含層及び送信所跡出土遺物
- PL.52 I区SD1セクション(南より)、I区SD2(東より)
- PL.53 I区SD2(西より)、I区SD2・3合流点(南より)
- PL.54 I区SD2a・b(南より)、I区SD2a・b及びセクション(東より)
- PL.55 I区SD2西セクション(西より)、I区SD2中央セクション(西より)
- PL.56 I区SD2東セクション(東より)、I区SD3セクション(南より)
- PL.57 I区SD4セクション(南より)、I区西半分全景(北より)
- PL.58 II区SD2セクション(南より)、II区SD2(南より)
- PL.59 II区全景(東より)、III区SD4セクション(南より)
- PL.60 III区SD4(南より)、III区SD1~4(北より)
- PL.61 IV区全景(東より)、I区作業風景
- PL.62 I区包含層出土遺物(外面)、同上(内面)
- PL.63 II区包含層出土遺物(外面)、同上(内面)
- PL.64 III区SD4・包含層出土及び表面採集遺物(外面)、同上(内面)
- PL.65 I区包含層出土遺物(古銭)、同上
- PL.66 I区包含層出土遺物(古銭)、同上

#### 陣山北三区遺跡

- PL.49 調査前全景(南西より)、I区西壁セクション
- PL.50 I区ピット列完掘状況(南より)、I区遺物出土状況
- PL.51 I区遺物出土状況、I区SD1(南より)

# 第 I 章 遺跡の位置と地理的・歴史的環境

## (1) 地理的環境

陣山遺跡・陣山北三区遺跡の立地する南国市は、北の大部分を占める山地と南部の平野部・沿岸部に大きく分けられ、西端では小丘陵とその間の平野によって高知市に接する。河川は穴内川が山地を東流し、国分川、下田川、物部川の主要河川が高知平野の東部を占める香長平野を貫いている。この香長平野は物部川によって形成された本県最大の扇状地であり、物部川西岸北方の長岡台地と東岸の野市台地によって代表される更新世形成の古期扇状地と、これら2つの台地に挟まれた沖積層の新期扇状地から形成されている。

長岡台地は東西延長8km南北最大幅2kmの規模をもち、物部川の谷口に位置する片地村神母木を頂点として西方へ移るに従い緩やかな傾斜を見せて標高を減じているが、台地上には若干の分離小丘が点在する。台地上は上層を更新世最終氷期に形成された礫層堆積物で覆われているため、台地の中位標高26～30mの地点に位置する陣山遺跡・陣山北三区遺跡においては、極めて薄い表土下に拳大から人頭大の円礫を多量に含む礫層が認められる。又、低位段丘面上には火山性堆積物である黒ボクが残り、礫層上部が腐植物に富んだ黒色土の堆積となっている。この土壌は細砂と腐植物が適度に混合したもので細壤土と呼ばれ地味が肥え耕作に適するものであり、当地域が近世以降、県下有数の穀倉地帯として発展を遂げた一因となっている。

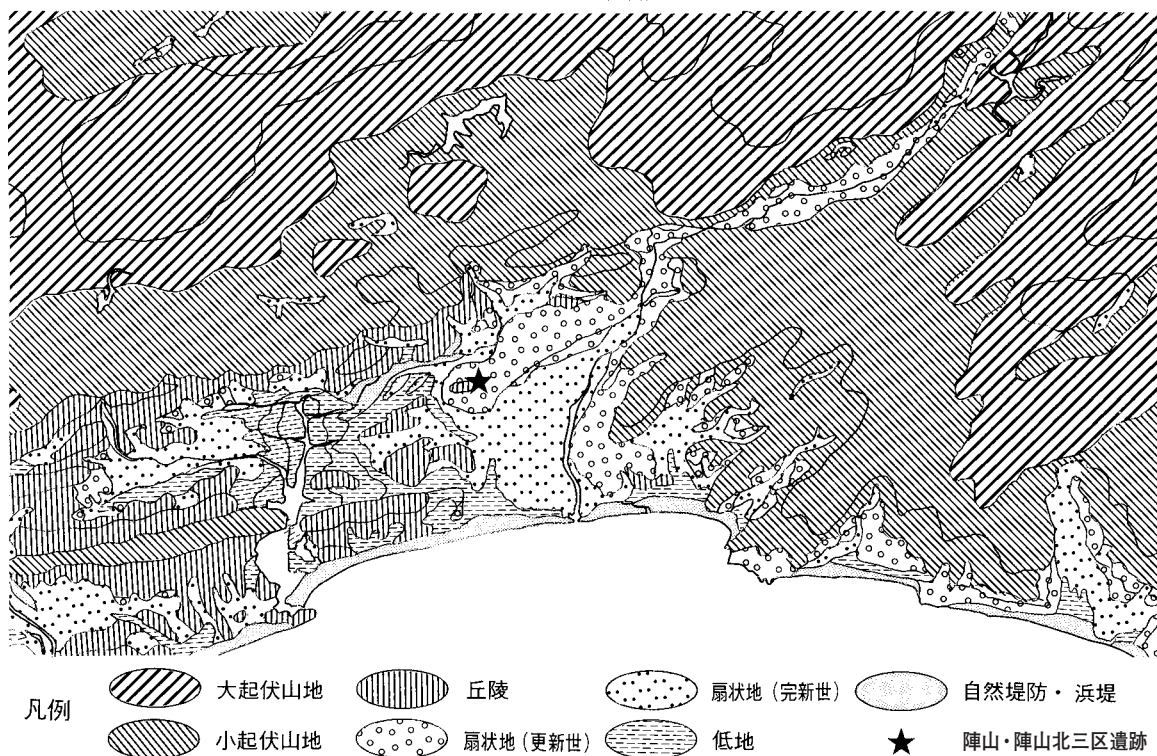


Fig. 1 遺跡の位置と周辺の地質分布図

## (2) 歴史的環境

長岡台地及びその周辺部には縄文時代から近世に至る多くの遺跡が立地しており、県下最大の遺跡密集地域となっている。弥生時代の遺跡は拠点的母亲村落である田村遺跡群に代表されるが、弥生後期に入ると集落遺跡の立地に変化がみられ、台地上又はその周辺地域に多くの遺跡が展開する。この時期に該当するものとして、長岡台地では小籠遺跡・東崎遺跡などの拠点集落を始めとして三畠遺跡・比江廃寺跡・金地遺跡・久次遺跡・ひびのき遺跡・ひびのきサウジ遺跡等が確認されている。又、古代においては、台地北西部に位置する国分・久礼田地区周辺には土佐国衙跡、土佐国分寺跡、比江廃寺跡、野中廃寺跡等の官衙関連遺跡が所在し、土佐律令政治の中心地としての展開をみせ、さらに中世には、西部に位置する岡豊山に岡豊城跡が築かれ、15世紀後半から以後100年間に亘って長宗我部氏の居城としての機能を果たすようになる。これに伴い岡豊町周辺では家臣団の屋敷地が展開し、又、一般集落においても生活域が拡大し、台地上の遺跡数はさらに増加する。

一方、このような歴史の中心舞台ともいえる長岡台地にありながら、陣山及びその周辺地域に関しては、中世以前に遡る遺跡は殆ど存在しなかったとあってよい。『土佐州郡志』には17世紀末から18世紀にかけての土佐の村々の姿が記述されているが、その中には陣山遺跡・陣山北三区遺跡が位置した近世西野地村の成立に関して「東西二十五町余南北十六町余、・・相伝、此地昔草野也、寛永中引物部川、漑此犁而成田畝、然後為此村」との記述が見られ、寛永年間以前まで、陣山を含む西野地地域が野草採取の他には活用できない林野であったことが窺われる。合わせて、陣山が中世まで荒地であったことを示す史料には『長宗我部知検帳』が挙げられる。同地検帳は当時の長岡郡の土地利用を知る上での貴重な資料を多く提供しているが、記載には、該当地域の記載がなく、16世紀末段階まで未耕作地であったことを示している。この様に、中世末まで台地上の広範な地域に耕作地化が進まなかった要因の一つとして、水利を得難い長岡台地の地理的条件が大きく関わっていたものと考えられる。

この長岡台地の景観を大きく変貌させたものに、近世前期、寛永16年（1639）から寛文4年の間の野中兼山による用水路建設事業が挙げられる。これは物部川の水を中井・上井・舟入れ他11の人工水路によって引水し、長岡・山田・野市の広範な地域を灌漑するもので、中井川は長岡・山田・旧明治村を灌漑している。この事業を契機として、その後長岡台地上には大小の規模をもつ水路が網目状に縦横に走り、新田開発が急速に進められた。新田化が最も進んだのは先の未耕作地に当たる地域であり、ここに新田開発による新たな村々が成立している。陣山地区が位置する長岡郡西野地村はこの新田開発によって生まれた村であり、『土佐州郡志』にその成立の過程や村の境界が詳述されている。又、寛保3年編纂の『御国七郡郷村牒』には元禄期の本田高年が記されているが、それによると西野地村の地高は4917石であり、生産高は長岡郡第1位にまで成長している。

この西野地村開拓においては郷士（長宗我部氏の遺臣である土着の武士層を在郷武士として登用したもの）が重要な位置を占め、終始新田開発の中心的役割を果たしている。『土佐藩郷士記録』によると、18世紀後半には譲り受け郷士も含めて池知・猪野・細川・細木他16名の西野地郷士が記載されているが、その中には当調査区に屋敷地が所在したと思われる「細木幾之丞」の名もみられる。陣山遺跡Ⅰ区の所在する陣山南鍵山地区周辺は、土地の人々の言によると、幕末頃まで地元郷士細

木氏の屋敷地が所在していたと伝えられており、現在でも「細木屋敷」という伝承名が残っている。明治22年の長岡村成立を期に小字名にはすでに「鍵山」に改められ、現在、地図上からその位置を確認することは困難であるが、地元の人々の言では調査 I 区の西に接する区間（現在は田）が屋敷地に当たると言う。細木屋敷に関する文献調査の詳細は後述に譲るが、当初の予想通り、陣山遺跡調査 I 区からは郷土屋敷に関連すると思われる多くの遺物、遺構が検出されている。

近代に至り、明治5年の農制改革を経て以後陣山では農業を主体とした景観が展開されるが、1941年から、軍の統制の元に南国市に高知海軍航空隊三島飛行場が建設され、これに関連して北方7キロの地点に立地する陣山に送信所が設けられた。さらに、終戦直後の1945年11月、占領軍が高知平野一帯の日本軍を武装解除した際、大量の武器弾薬が陣山に集められ弾薬の解体作業が行われている。この解体作業には地元を中心とする多くの勤労奉仕者が充てられたが、この時弾薬の大爆発が起こり、周辺に甚大な被害を出している。この陣山大爆発は当時の占領軍の報道管制のため全く報道されなかったが、現在では、地元研究者や高校生らの手によって当時の体験者の聞き取り調査や記録保存が行われており、戦争体験を風化させないという強い意志のもとに平和を守る取り組みが進められている。

#### 参考文献

島田豊寿「南国市の自然」『南国市史』1979年 南国市史編纂委員会

平尾道雄『長岡村史』1955年 長岡村史編纂委員会

『南国の歴史』1989年 南国市教育委員会

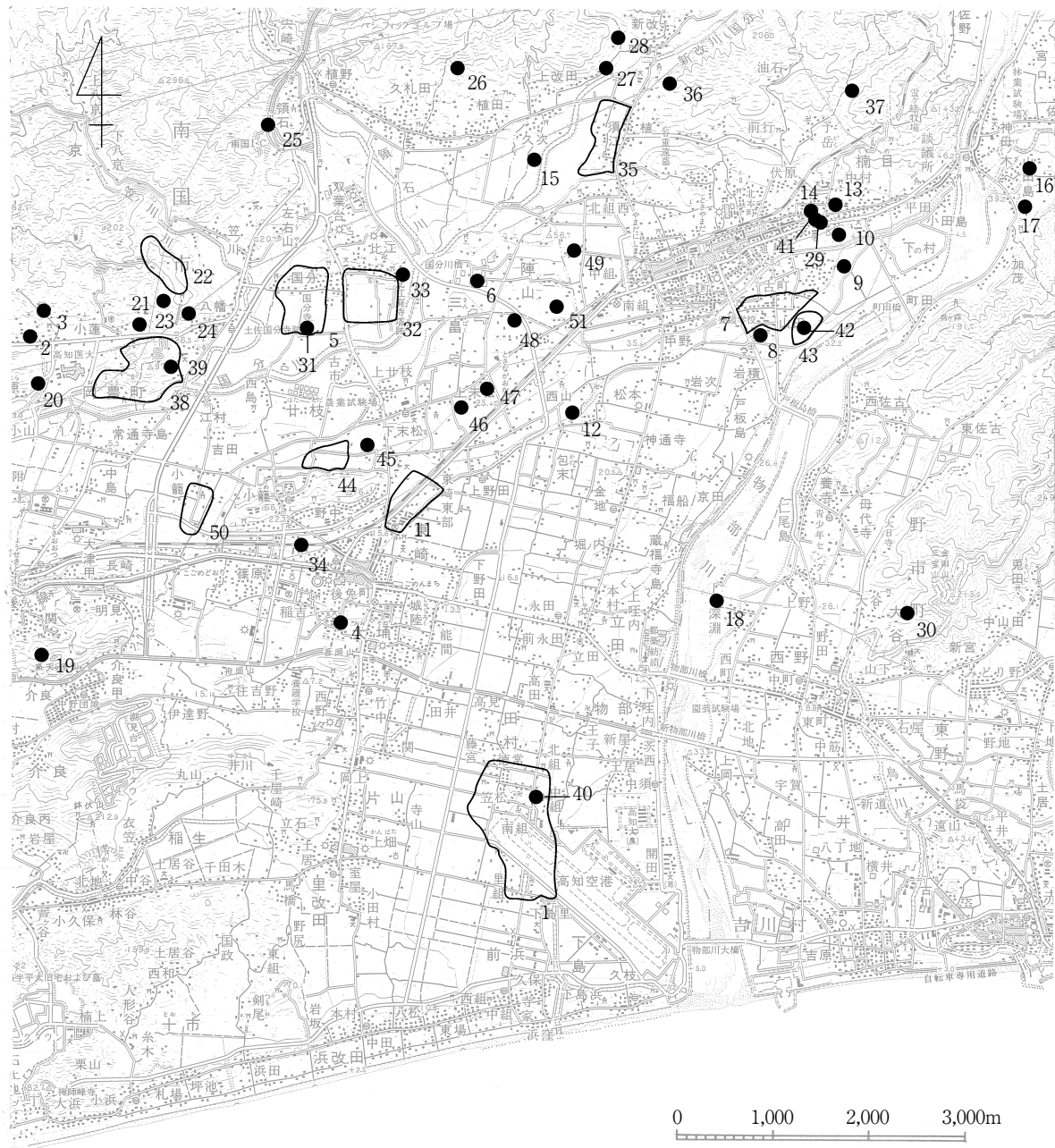
『野市町史』1992年 野市町史編纂委員会

出原恵三・藤方正治・泉幸代『小籠遺跡 I』1995年高知県埋蔵文化財センター

平尾道雄『土佐藩郷土記録』1964年 高知市立市民図書館

窪田充治他『証言・陣山送信所爆発の記録』1995年 香長ゼミナール館

※Fig.1掲載の地図は「高知県地質鉱産図」（高知県商工課）及び「土地分類図」（経済企画庁）をもとに作成した図を『小籠遺跡 I』より引用した。



No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名
1	田村遺跡群	14	ひびのきサウジ遺跡	27	新改古墳	40	田村城跡
2	栄エ田遺跡	15	久次遺跡	28	西ノ内2号墳	41	大塚遺跡
3	奥谷南遺跡	16	シタノチ遺跡	29	伏原大塚古墳	42	高柳土居城跡
4	大篠遺跡	17	林田遺跡	30	大谷古墳	43	高柳遺跡
5	国分寺遺跡群	18	深淵遺跡	31	土佐国分寺跡	44	土島田遺跡
6	三島遺跡	19	高間原1号墳	32	土佐国衛跡	45	久保遺跡
7	原遺跡	20	蒲原山東1号墳	33	比江廢寺跡	46	末松遺跡
8	原南遺跡	21	小蓮遺跡	34	野中廢寺跡	47	五反地遺跡
9	稻荷前遺跡	22	船岩古墳群	35	須江上段遺跡	48	明神遺跡
10	楠目遺跡	23	狭間古墳	36	タンガン窯跡	49	浜道の西遺跡
11	東崎遺跡	24	蔵本2号墳	37	長谷山窯跡群	50	小籠遺跡
12	金地遺跡	25	口ミノヲ谷古墳群	38	岡豊城跡	51	陣山・陣山北三区遺跡
13	ひびのき遺跡	26	高松古墳	39	西谷遺跡		

Fig.2 本遺跡の位置と周辺の遺跡分布図

## 第Ⅱ章 調査に至る経過と調査の方法

### (1) 調査に至る経過

国道195号線は高知市から東部四国山地を経て徳島県阿南市に至る幹線道路であるが、南国市及び土佐山田町域で市街地を通過しているため沿線地域からの人や物が集中し、近年慢性的な交通渋滞を招いている。195号線改良「あけぼの道路」はこの状況を受け、地域産業の振興や四国横断自動車道建設に伴う流通の円滑化を図るために、南国市西部の高知東道路から土佐山田町市街地に至る幹線道路として計画されたものである。

道路建設予定地は途中陣山地区を通過するが、周辺には五反地遺跡・末松遺跡・米屋の東遺跡等が所在していることから、当地点にも遺跡が散布していることが予測された。そのため、埋蔵文化財センターは平成6年度に建設予定地内での試掘調査を行い、任意に設定した数箇所のトレンチから近世に所属する遺構・遺物を確認した。この試掘調査報告を受けて高知県と高知県文化財埋蔵文化財センターとの間で委託契約を締結し、文化財保護法57条第1項の規定に基づき、同埋蔵文化財センターが遺跡の調査と記録保存を目的として発掘調査を実施するに至った。

### (2) 調査の方法

#### ①平成7年度調査

陣山遺跡の発掘調査は9月18日から開始した。調査区については、便宜上、現在の道や畦畔を利用して任意にⅠ～Ⅱ区を設定した。平成7年度の調査面積は陣山遺跡Ⅰ区(1,466㎡)、Ⅱ区(1,865㎡)、及び陣山北三区遺跡の一部(361㎡)であり、総調査面積は3,692㎡である。

このうちⅡ区は南半分のほぼ全域が旧日本陸軍の陣山送信所の敷地内に該当している。当地点は当時埋め戻された大量の弾薬類が現在も地下に残されたままであることが事前の聞き取り調査から把握されていたが、予想通り重機による表土掘削作業中に砲弾が出土し、このことを契機として、急遽南国警察署へ通報、警察立ち会いの元に現場確認が行われた。出土した弾薬類は何れも信管は抜かれていたが、危険物という遺物の性格から該当区の調査中止を南国警察署より求められた。しかし、当時の状況を探る上で貴重な資料を提示する近代遺跡であるとの確認の元、送信所の北西側の一部について確認調査を続行することとなった。調査に際しては、金属探知機の使用、火気の厳禁、作業員への安全指導の徹底等に厳重に配慮し、数回にわたる警察署の指導のもとに発掘調査が続けられた。又、出土した弾薬類は記録保存の後、直ちに南国署を經由して陸上自衛隊爆発物処理班に送り処理を依頼した。調査範囲は送信所跡地北西側の一部にとどめ砲弾・薬莢他多数の遺物を検出した時点で当地点の調査を終了させた。以上の経過を経て、陣山遺跡の調査は12月13日に終了した。

#### ②平成8年度調査

8月26日から11月13日まで実施した。本調査の手順としてまず、調査対象地内に調査区を設定し、耕作土等の表土については、主に重機によって除去を行い、遺構検出面または遺物包含層直上まで掘削を行った後、遺構及び遺物包含層の検出・掘り下げは人力により精査に努めた。検出した遺

構・遺物の出土状況、及び土層等については写真撮影を行った後、平面図及び断面図を作成した。遺物の取り上げ、遺構の実測については、公共座標に基づいて調査区全体に4m方眼をかけ、東西方向に1、2、3、…、南北方向にA、B、C、…のNoを付して地点の記録及び実測を行った。



Fig.3 陣山遺跡・陣山北三区遺跡調査区位置図



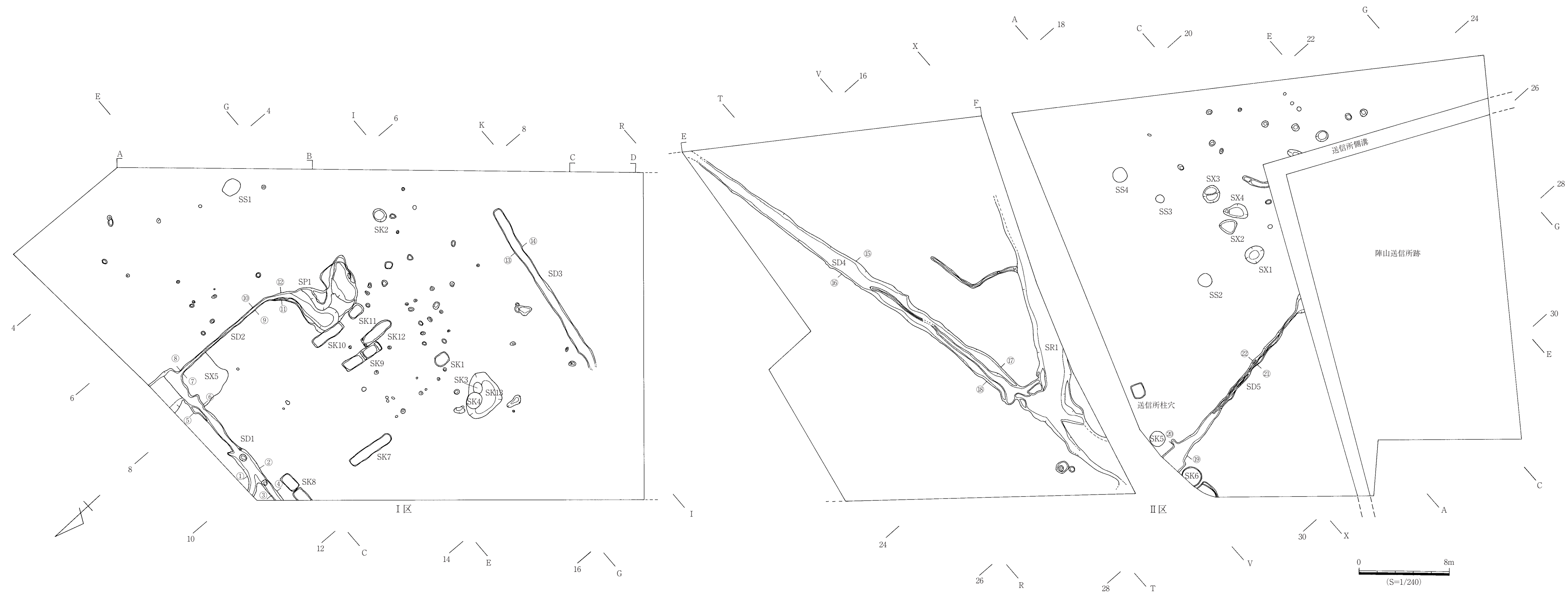


Fig.5 陣山遺跡 I・II区検出遺構全体図



# 第Ⅲ章 調査成果

## 第1節 陣山遺跡

### 1. I区の調査

#### (1) 基本層準 (Fig.4)

調査区の東壁で層準を観察した。基本的な層準は以下の通りである。

I層：現水田耕作土。

II層：黒褐色粘質土（黒ボク）。調査区のほぼ全面に認められるが、調査区北東部では削平を受け非常に薄い。近世後期の遺物を多量に、弥生～中世の遺物を疎らに包含している。

III層：黄褐色粘質土（地山）。1～6cm大の砂岩礫を多量に含んでいる。

IV層：基盤礫層。長岡台地を形成する更新世扇状地の層準である。拳大から人頭大の砂岩礫が主体を占める。

当遺跡においては基盤礫層が北東に向うに従い高さを増しており、I区北東部ではII～III層が削平を強く受け耕作土直下に礫層が認められる。また、近世後期の遺構検出面は北端部で耕作土直下・II層上面となっている。近世遺構検出面の標高は北端部で29.6m、南端部で29.8mである。

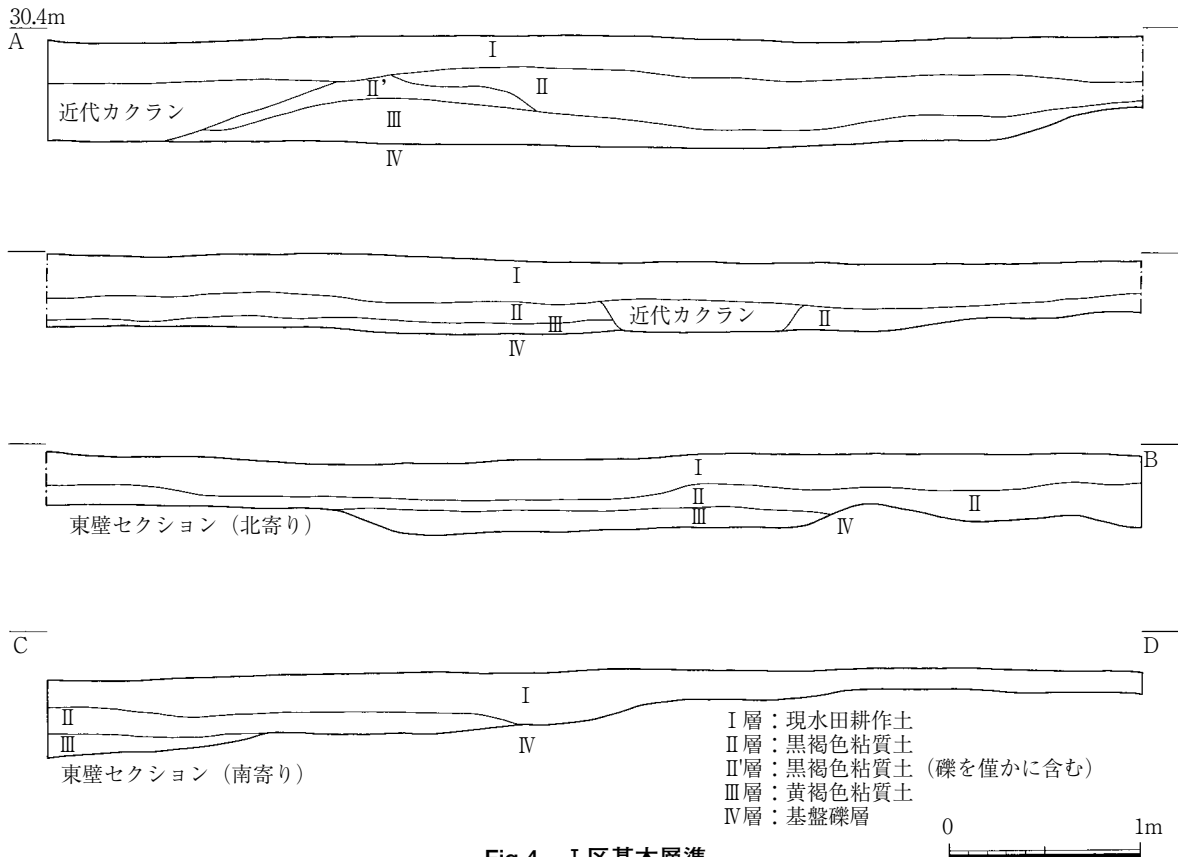


Fig.4 I区基本層準

## (2) 遺構と遺物

I区では近世後期の溝2条、池状遺構1基、土坑11基、ピット多数が検出された。各遺構の出土遺物のうち一括廃棄遺物については別に項を設けている。

### ①土坑

#### SK1 (Fig.6)

調査区の中央に位置する。平面形は楕円形で、長軸1.26m、短軸0.98m、深さ50cmを測る。壁はほぼ直立して立上がり、底部は平坦である。壁及び底部は、厚さ3~4cmの黄色粘土によって叩き固められている。埋土はI層：灰色礫層、II層：灰色粘質土、III層：橙色粘質土である。III層は側壁の黄色粘土崩落土層であり、堆積状況より、II~III層はSK1廃棄時直後に落ち込んだものと考えられる。

出土遺物は近世陶磁器口縁部25点・底部及び細片20数点、かわらけ2点、土師質の人形型破片4点、瓦片4点、及び炭化物であり、何れも埋土中及び埋土上層よりの出土である。これらの遺物中にはSK7・9、SP1、SD1・2との接合関係をもつものが多く含まれており、口縁部の遺構間接合点数は10点、破片を含む遺構間接合率は30%となる。中でもSP1とは最も高い接合率を示している。

SK1は出土した肥前系磁器及び他遺構との接合関係により、19世紀中葉~幕末の間に他の遺構群と時期を同じくして廃絶され、遺物廃棄がなされたものと考えられる。

#### SK2 (Fig.6)

調査区の東端に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径1.24m、短径1.04m、深さ60cmを測る。断面形は袋状を呈し、壁は南側ではほぼ垂直に立ち上がるが、他の部分では下半が外側に向かって張り出している。底面は平坦である。埋土はI層：黒褐色土、II層：黒色土、III層：黒色粘質土である。出土遺物はない。

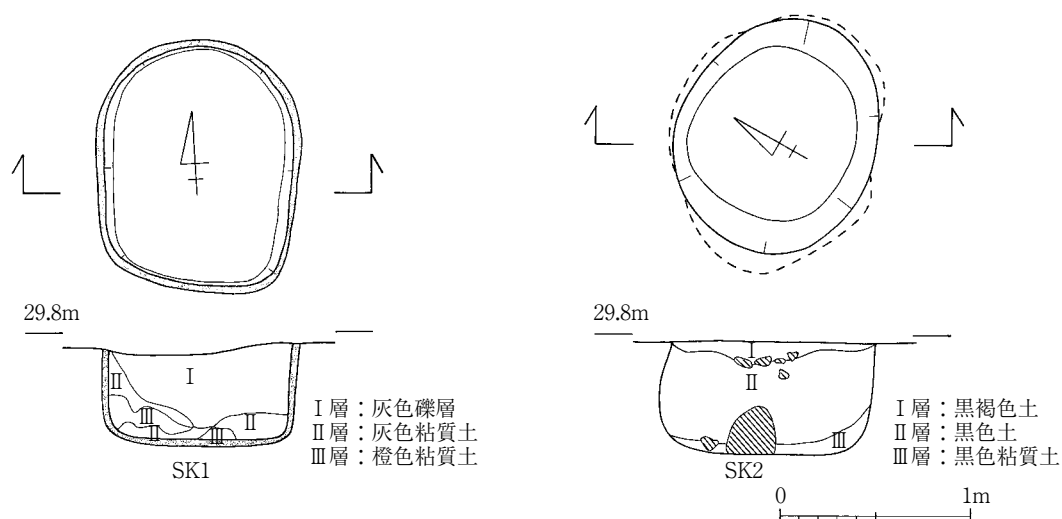


Fig.6 SK1・2 平面図・セクション図

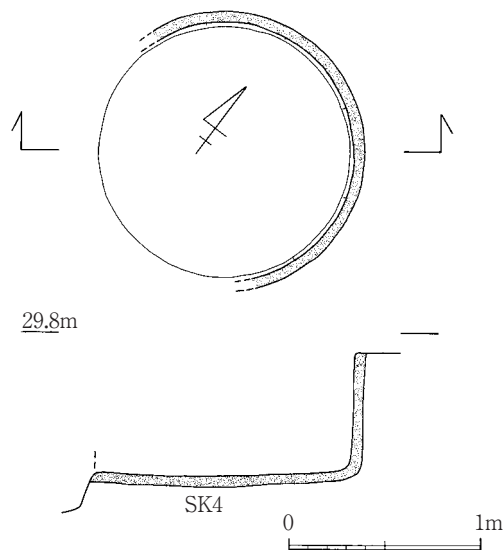


Fig.7 SK4 平面図・エレベーション図

調査区西寄りに位置し、SK13の床及び壁面より検出されたハンダ土坑である。東端でSK3を切り、南半分はSK13によって斜めに大きく削平されている。平面形態は径1.38mの円形を呈し、残存する北側壁の深さは64cmを測る。北側壁は直立して立ち上がり、壁及び床面を厚さ6cmの黄色粘土で固めている。SK13による攪乱のため埋土・出土遺物ともに不明であるが、削平を免れた北側床面にはSK4廃絶時の黄色粘土崩落土層が認められる。SK14はSK13掘削に伴って遺構廃絶されたものと考えられる。

### SK7 (Fig.8)

調査区の西寄りの地点で検出した浅い箱型の土坑である。平面形は細長い隅丸長方形で、主軸方向はN-6°-E、規模は長軸4.28m・短軸0.88m・深さ22cmを測る。埋土は褐灰色粘質土であるが、床から検出面にわたるその殆どが円礫及び近世陶磁器・瓦等の遺物破片で占められており、埋土はこれらの陶磁器破片間を埋める状態で堆積している。

遺物の出土総数は近世陶磁器口縁部48点・底部及び破片50数点、土師質土器口縁部2点、土師質の人形型1点、硯1点であった。他遺構との接合関係はSP1、SD1、SK1・8・9・10・12との間に認められ、口縁部の遺構間接合点数は13点、破片総数の遺構間接合率は25%となる。これらの遺物は多くが細片で、意図的に打ち砕いた状況を呈している。

以上の遺物出土状況と他遺構との接合関係よりSK7は廃棄土坑として位置付けることができ、他遺構と時期を同じくして掘削・遺物廃棄が行われたものと考えられる。

### SK8 (Fig.8)

調査区の北西端に位置し、SD1に並行する。形態は東西2つの箱形の落込みからなり、中央に幅8~6cm程の掘り残しを設け、東西に区切っている。西端は調査区外に出ているため全体規模は不明であるが、長軸確認長3.04m、短軸0.98mを測る。深さは東側落込みがやや深く30cm、西側が浅く16cmである。軸方向はN-88°-Eでほぼ東西方向を示す。埋土は褐灰色粘質土で多量の円礫及び遺物を含んでおり、遺物包含状況はSK7に酷似している。

遺物の出土総数は近世陶磁器口縁部12点・底部及び破片25点、土師質土器口縁部9点・細片3点、

### SK3 (Fig.11)

調査区の西寄りに位置し、SK13の床面より検出されたハンダ土坑である。西端をSK4によって切られその後SK13によって北側全面と南側上半を削平されているために、黄色粘土で固めた床の一部が確認されたのみであるが、残存する底部形態から径約1.3m程の円形土坑であったものと予想される。

出土遺物がなく廃絶時期は不明であるが、切り合い関係により、SK13・SK4に時期的に先行する遺構として位置付けることができる。

### SK4 (Fig.4・11)

調査区西寄りに位置し、SK13の床及び壁面より

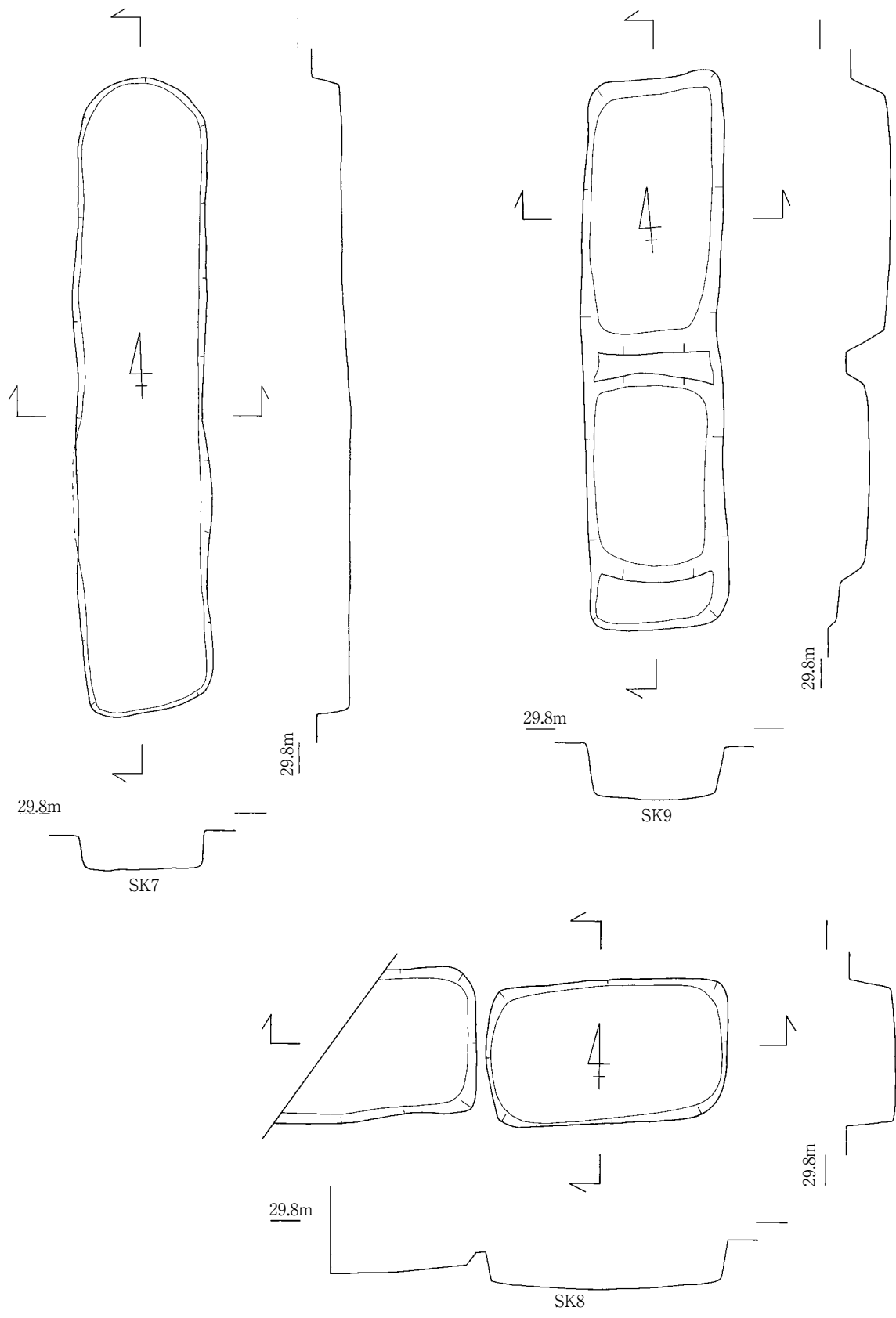
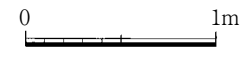


Fig.8 SK7~9 平面図・エレベーション図



砥石1点であった。他遺構との接合関係はSP1、SD1・2、SK7・9・10・12との間に認められ、口縁部の遺構間接合点数は9点、破片の遺構間接合率は37%となる。

SK8はSK7と時期・性格を同じくする廃棄土坑として位置付けられる。

#### SK9 (Fig.8)

SK12の西に接する。平面形は長軸3.72m、短軸0.9mの細長い隅丸長方形を呈する。中央に幅16cmのテラスを設け、南北に二分される。南側掘り込み部は深さ20cm、北側掘り込み部は深さ28cmを測る。軸方向はN-5°-Eで、SK7・10~12とほぼ同じ軸方向を示している。埋土は褐灰色粘質土で、他の箱形土坑群と同様の遺物包含状況を示す。

遺物の出土総数は近世陶磁器口縁部9点・底部及び体部破片20数点、土師質細片3点、瓦片15点である。他遺構との接合関係はSP1、SD1・2、SK7・8・10・12・13との間に認められ、口縁部の遺構間接合点数は2点、破片の遺構間接合率は33%となる。

SK9はSK7・8と時期・性格を同じくする廃棄土坑として位置付けられる。

#### SK10 (Fig.10)

調査区のほぼ中央部、SP1の西側に接し、SK9・11・12と近接する。軸方向・形態・規模ともにSK7・9・12と極めて類似し、主軸方向はN-4°-Eである。平面形は細長い隅丸長方形で長軸3.10m、短軸0.82m、深さ22cmを測る。埋土は褐灰色粘質土であり、他の箱形土坑群と同様に埋土の殆どが円礫と遺物破片で占められる。

出土遺物は近世陶磁器破片と混入による須恵器細片である。遺物の出土総数は近世陶磁器口縁部12点・底部及び体部破片60数点、土師質人形型破片7点、須恵器細片2点である。他遺構との接合関係はSP1、SD1・2、SK7~9・12との間に認められ、口縁部の遺構間接合点数は2点、破片の遺構間接合率は23%となる。SK10は廃棄土坑として位置付けられる。

#### SK11 (Fig.9)

調査区の中央に位置し、SP1の西に接する。平面形は不整楕円形で、規模は長軸1.4m、短軸0.88m、深さ24cmを測る。埋土は褐灰色粘質土で、他の箱形土坑群と同様の遺物包含状況を示している。

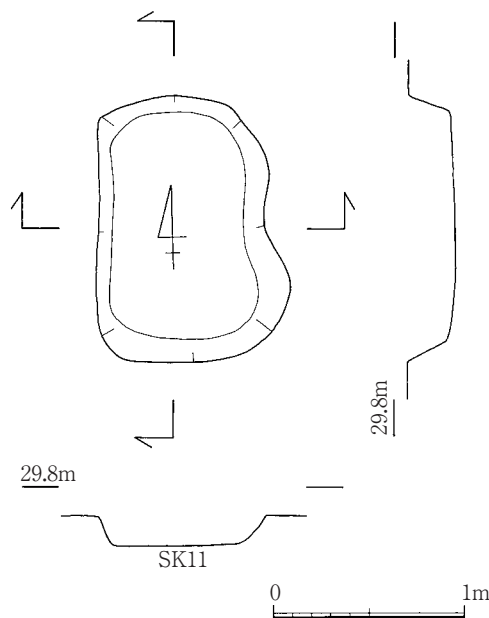


Fig.9 SK11 平面図・エレベーション図

遺物の出土総数は近世陶磁器口縁部10点・底部及び体部破片11点、土師質及び瓦質土器口縁部10点・底部と細片10数点、瓦片7点である。他遺構との接合関係はSP1、SD1・2、SK7～9・12との間に認められ、口縁部の遺構間接合点数は9点、破片の遺構間接合率は31%となる。

SK11はSK7～10と時期・性格を同じくする廃棄土坑として位置付けられる。

### SK12 (Fig.10)

調査区のほぼ中央に位置し、SK9・10・11と並行している。軸方向はN-1°-Eで、ほぼ南北方向を示す。平面形は南側に丸みをもつ細長い隅丸長方形で、断面形は浅い舟底形を呈する。規模は長軸3.08m、短軸1.0m、深さ16cmを測る。埋土は褐灰色粘質土で多量の円礫と遺物を含み、SK7・8と同様の堆積状況を示している。

遺物の出土総数は近世陶磁器口縁部57点・底部及び体部破片150数点、土師質及び瓦質土器口縁部5点・細片18点、人形型破片8点、コンテナ約1箱分の瓦片である。他遺構との接合関係はSP1、SD1・2、SK1・7～11・13との間に認められ、口縁部の遺構間接合点数は20点、破片の遺構間接合率は21%となる。

SK12はSK7～11と時期・性格を同じくする廃棄土坑として位置付けられる。

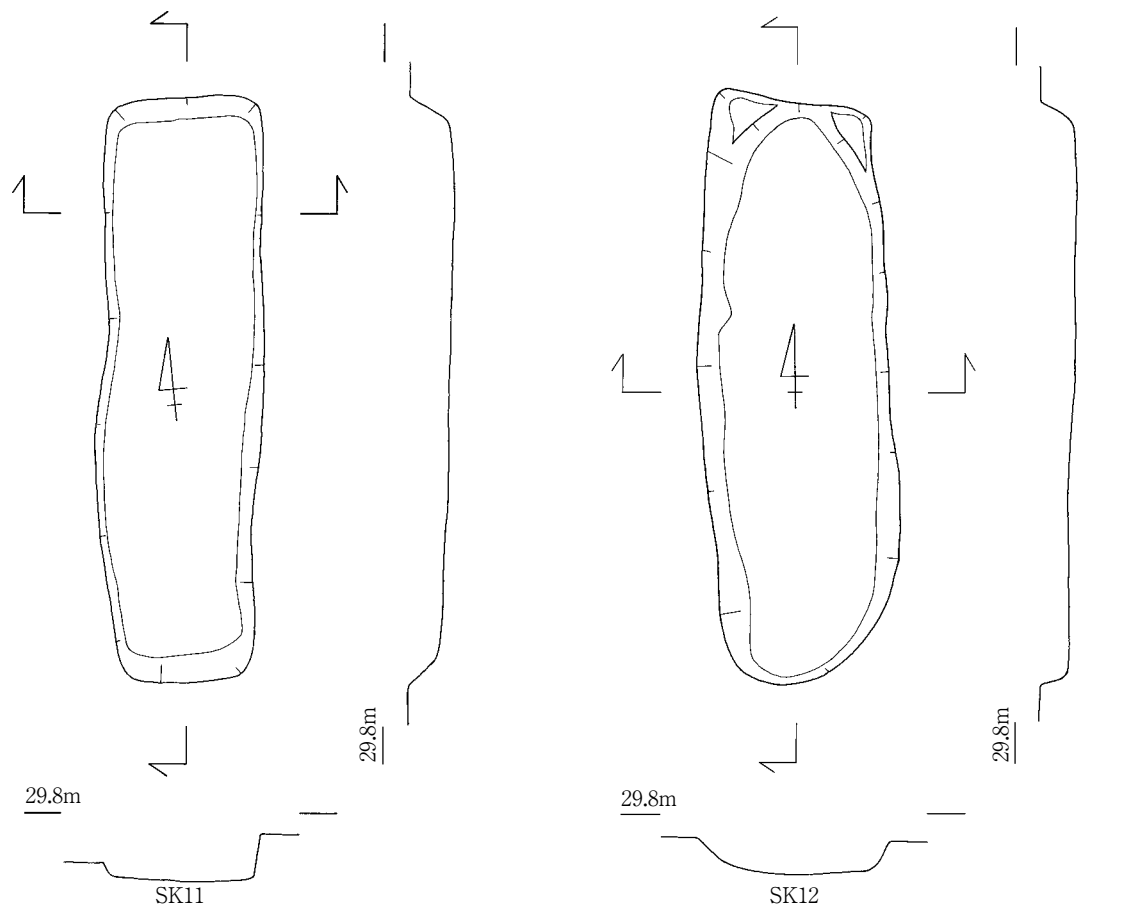


Fig.10 SK10・12 平面図・エレベーション図





SK13 (Fig.11)

調査区の調査区西寄りに位置する土坑で、SK3・4を切っている。平面形は長軸4.16m、短軸3mの不整楕円形で、南側が最も深く、深さ90cmを測る。北側壁は緩やかに段をもちながら立ち上がり、SK3・4の壁及び底部が残存する。南側壁は直立気味に立ち上がる。埋土はⅠ層：暗灰褐色土、Ⅱ層：灰褐色土、Ⅲ層：黒褐灰色土（黒ボク・赤ホヤ火山灰をブロック状に含む。）Ⅳ層：灰色粘質土（炭化物が混入する。）であり、Ⅳ層中には近世陶磁器破片・瓦片等の遺物を多量に含んでいる。

出土遺物は近世陶磁器口縁部44点・底部及び体部破片50数点である。他遺構との接合関係はSP1、SD1・2、SK7～10・13との間に認められ、口縁部の遺構間接合点数は7点、破片の遺構間接合率は17%となる。

SK13はSK3・4を利用して穴を拡大した遺物廃棄土坑と考えられ、時期は他の廃棄土坑と同時期のものとして位置付けられる。

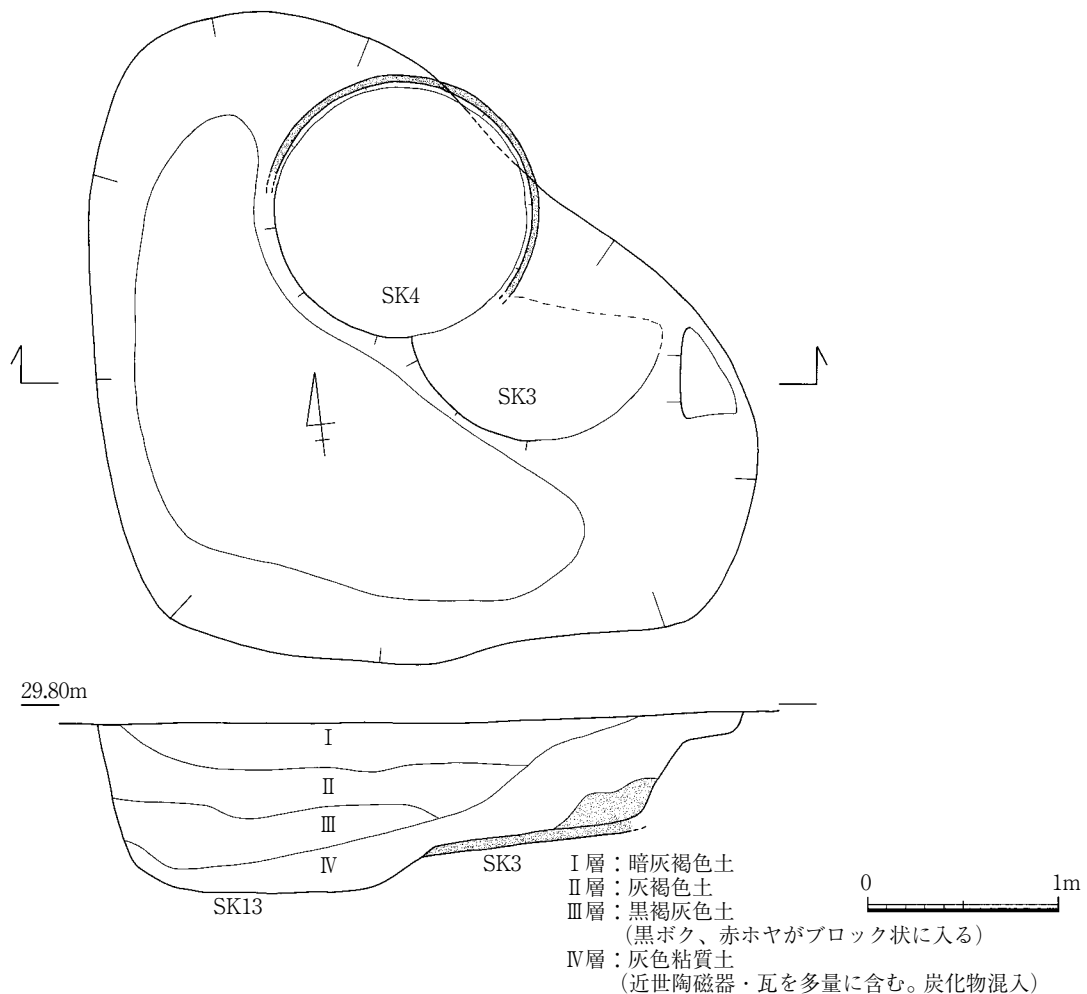


Fig.11 SK3・4・13 平面図及び SK13セクション図

## ②溝

### SD1 (Fig.12)

調査区の北端に位置し東西方向に延びる溝で、主軸方向はN-90°-Eとなる。断面形態は浅いU字形で、床面に砂の堆積が認められるため、水路として機能したものと推定される。確認延長は12.2m、幅は70~80cm、深さは西側で24~28cm、東側で18cmを測る。溝は調査区西端から東西方向に延び、B-8グリット地点で拡張部をもつが、拡張部は北側を近代の用水路設営工事によって攪乱されるため、全体の規模は不明である。溝はこの拡張部から北に方向を変え、南北方向にさらに延びていたものと推定される。又、西端のB-10グリット地点では北西方向へ迂回して延びる旧溝跡が確認されている。埋土の堆積状況では東西方向の溝が切っているため、本来東から北西方向へ迂回して延びていた溝を、東西方向へと改修したものと考えられる。

埋土はⅠ層：灰色粘質土（近世陶磁器類と瓦片及び円礫を多量に含む）Ⅱ層：褐灰色砂質土（褐色土を層状に含む）Ⅲ層：褐灰色砂質土、である。Ⅰ層は新水路埋め戻し時の埋土、Ⅱ層は新水路活動時の堆積層、Ⅲ層は旧水路埋土に該当する。

出土遺物は近世陶磁器、砥石、瓦等であり、多くはⅠ層に集中している。Ⅲ層からは土師質土器7点、近世陶磁器5点が出土しているが、何れも細片であり旧水路の時期詳細は掴めなかった。Ⅱ層埋土中よりは陶磁器口縁部13点、底部及び細片8点、土師質土器細片2点が出土している。この内1点には他遺構（SD2・SP1・SK1）との接合関係が成立しているが、Ⅰ層からの混入である可能性が高い。図示したものは1~8である。Ⅲ層埋土中からは、陶磁器口縁部61点・底部及び体部破片150数点、土師質及び瓦質土器口縁部11点、細片多数が出土している。これらはSP1、SD2、SK1・7~10・12との間に接合関係を持ち、破片の遺構間接合点数は34点を数える。Ⅰ層出土の遺物は一括廃棄遺物として別章に取り上げる。

以上の遺物出土状況から、SD1は旧水路から新水路への改修を経て19世紀中葉から幕末頃まで活動し、他の遺構群と時期を同じくして遺構廃絶され遺物廃棄がなされたものと考えられる。

### SD2 (Fig.12)

調査区の中央北寄りに存在し、北端でSD1拡張部と、南端でSP1と連結する溝である。軸方向はN-0°-Eで、ほぼ南北方向に延びる。延長は12.8mである。断面形は浅いU字形で、Eグリット地点までは幅24~28cm、深さ8~12cmと一定の幅・深さを保つが、SP1との連結部付近では幅・深さともに増し、幅68cm、深さ24cmを測る。埋土は明灰褐色粘質土である。

出土遺物は近世陶磁器口縁部26点・底部及び体部破片10数点、土師質土器細片20数点である。他に土師質の人形型破片12点、硯・砥石各1点が出土している。他遺構との接合関係はSP1、SD1、SK1・8~10・12・13との間に認められ、遺構間接合の成立した破片点数は37点であった。出土遺物の大多数は他遺構と時期を同じくする一括廃棄遺物と捉えられるが、中にSD2活動期に廃棄された遺物も混入している可能性がある。しかし、一括廃棄遺物は床面からも多く出土しており、活動期の遺物を特に抽出することはできなかった。なお、遺物は全て18世紀後半から幕末期にかけてのものである。図示できたもののうち床面出土のものを除いて、明らかに一括廃棄と捉えられる埋土出土遺物を一括廃棄遺物として別章に取り上げる。

SD2はその構造上からSD1からSP1に水を引く給水溝の働きをしていたものと考えられ、他の遺構群と時期を同じくして19世紀半ばから幕末の間に廃絶されたものと考えられる。

SD3 (Fig.12)

調査区の南側に位置し、東西方向に延びる溝である。軸方向はN-80°-Wで、他の遺構群とやや軸方向がずれる。確認延長は16.4mを測る。調査I区は南に向かうに従い標高が高くなっているため、SD3は上面を著しく削平されている。幅は80~88cmで、溝肩部の残存高はJ-10グリット地点で7.1cm、J-12グリット地点で5.3cmを測る。埋土は暗褐色土である。出土遺物はない。

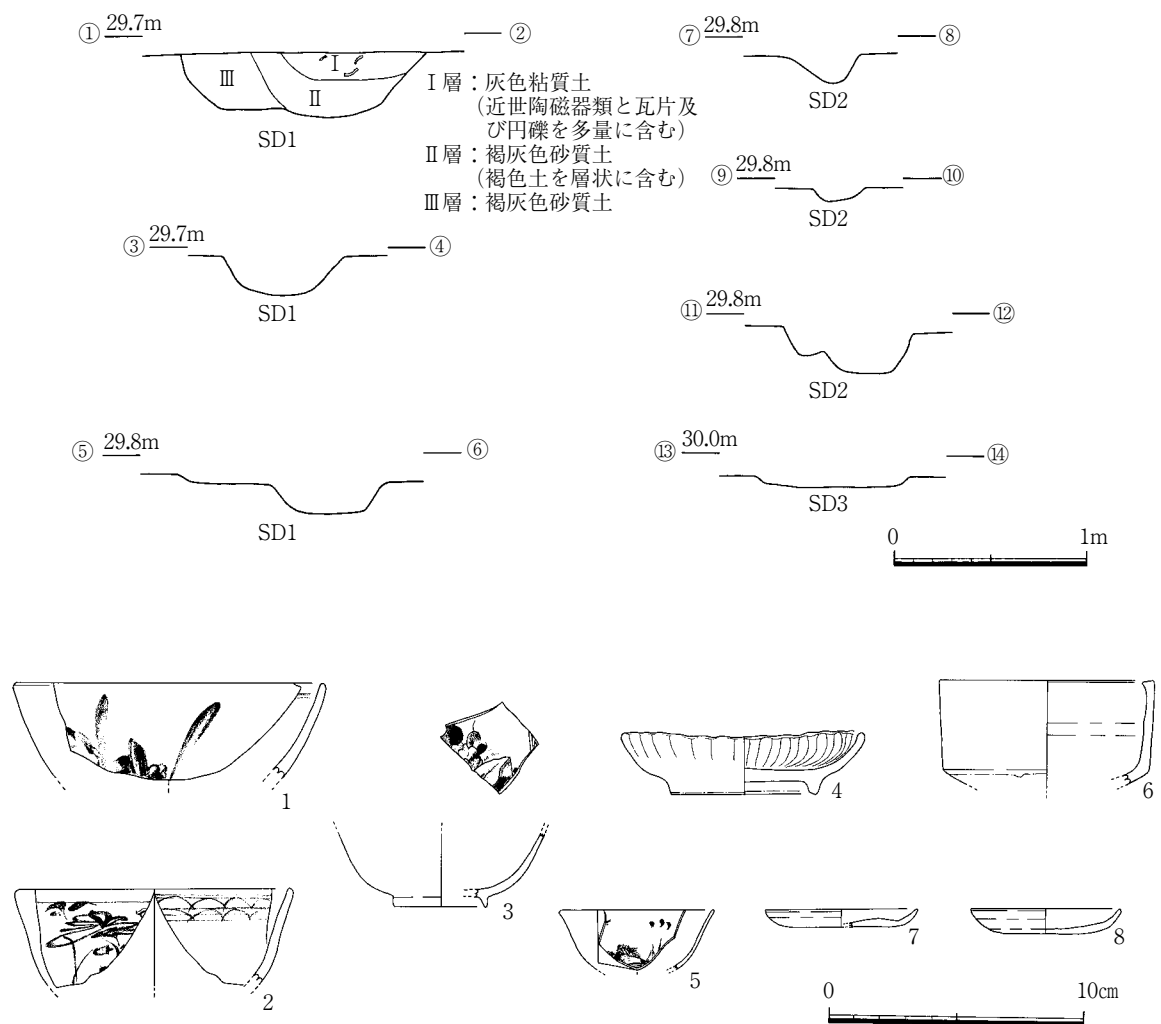


Fig.12 SD1・2 セクション図・エレベーション図及びSD1出土遺物実測図

### ③池状遺構

#### SP1 (Fig.13・14・15)

調査区の中央やや東寄りに位置し、北端部で導水路SD2と連結する池状遺構である。平面形は西側に膨らみをもった三日月状の不整形を呈し、東西径約4.1m、南北径約5.6mを測る。SP1は地山掘り込みによる南北2つの土坑状の掘り込み部分によって構成され、中央には両者を二分する東西方向の高まりが存在する。

南側に位置する掘り込み部分は平面形態長径約3.8m短径約2.2mの楕円形を呈し、深さ約0.9mを測る。断面形態は逆台形で、北側壁は緩やかに立ち上がるが、南側壁はほぼ垂直に立上がり下半がオーバーハング気味となる。北側掘り込み部は、導水路SD2と直接連結する部分であり、溝状に狭まった北端に始まり、南に寄るに従い幅広がりたの形態をもつ。この北側掘り込み部は改修により本来の形態を変更されているが、石列を除いた後の完掘状況においては不整楕円形の平面形態を持ち、深さ約0.37mの浅い皿状の断面形態を呈する。中央の高まり部分は盛り土によるものではなく、南北の掘り込みの間を意識的に掘り残し、帯状の丘部を形成したものである。

付属遺構として、北側掘り込み部の南東側面と南側掘り込み部の北側面に沿って、径20～30cm大の円礫を2～3段積んだ石組みが認められる。これらは検出面を数cm程掘り下げた地点で、I層埋土中より上面が確認されたもので、石組み間の裏込土はI層埋土と類似した明灰褐色土である。北側石組みは、中央の高まり部を利用して設置され、本来の水流路を変更させる形でSD2よりの導水路幅を狭め水路を迂回させながら、なだらかに曲線を描き設営されている。この北側石組みは特に水を迂回させる側面が集中して高く生まれ、強健に補強されている。対して、南側石組みは南側掘り込み部の北壁東側に沿うように、北側石組みよりもやや下方に組まれており、この南側石組みにのみ基礎に径8cmの胴木が据えられている。なお、この胴木を境として層序は上層（明灰褐色土層）と下層（地山礫層）に分かれる。他に、南落込み部の西側にも石組みが認められるが、これは1列組みによるもので、他の石列に比べ弱い作りである。石組みの間には出土遺物は認められず、具体的な設置時期は不明であるが、当初よりの溜池施設の規模・形態を変更させる改修工事に伴い設置されたものと捉えることができる。なお、石組みを取り除き南側落込み部を完掘させた段階で、東壁に旧溜池の石組みが検出されている。

給水構造としては、SP1北端の開口部にSD2が連結され、主要水路であるSD1と溜池SP1の間が約13mの長さをもつ導水路SD2によって結ばれる構造となっている。両者の標高差は、SD1北側で標高29.58m、SP1南側で29.68mと、SP1側が約10cm程高くなっており、その溜池の機能としては、主要水路SD1の増水時に導水路SD2を通して給水し、貯水していたものと考えられる。又、南側落込み部の壁面が床より30cm上位のラインまでオーバーハングしていることから、南落込み部の貯水量は、水位が床上30cm以下であることが多く、水量は常時少なかったものと予想される。

埋土はI層：明灰褐色土、II層：灰色粘質土、III層：褐灰色粘土であり、最下層のIII層はSP1活動期に池底に堆積した還元粘土層である。II層はSP1埋め戻し時の埋土であり、埋土中には多量の河原石と共に近世陶磁器・硯等の遺物を含む。又、他に多量の瓦片と共に、幅1～2cm、長さ20cm程の

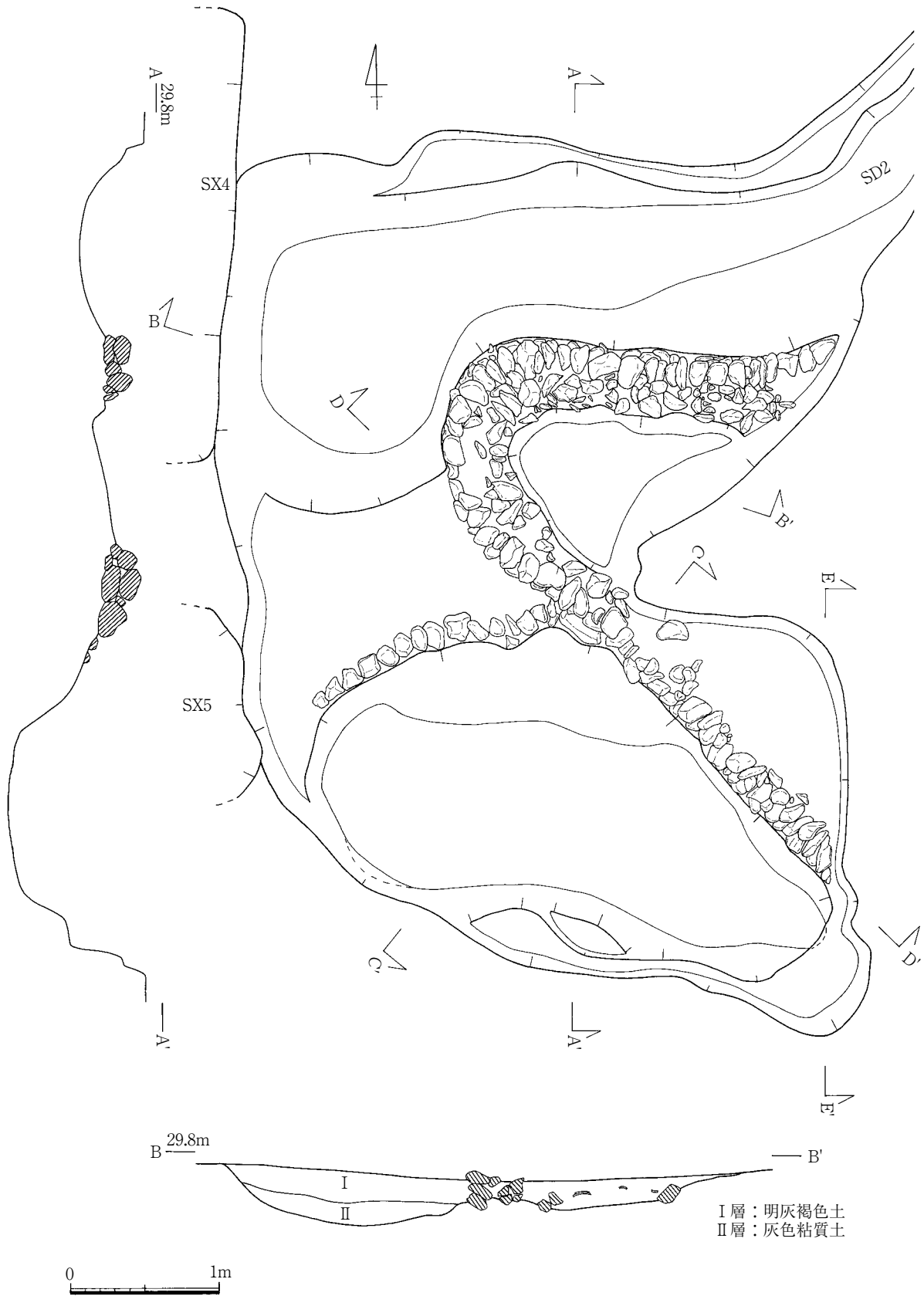


Fig.13 SP1 平面図・セクション図・エレベーション図

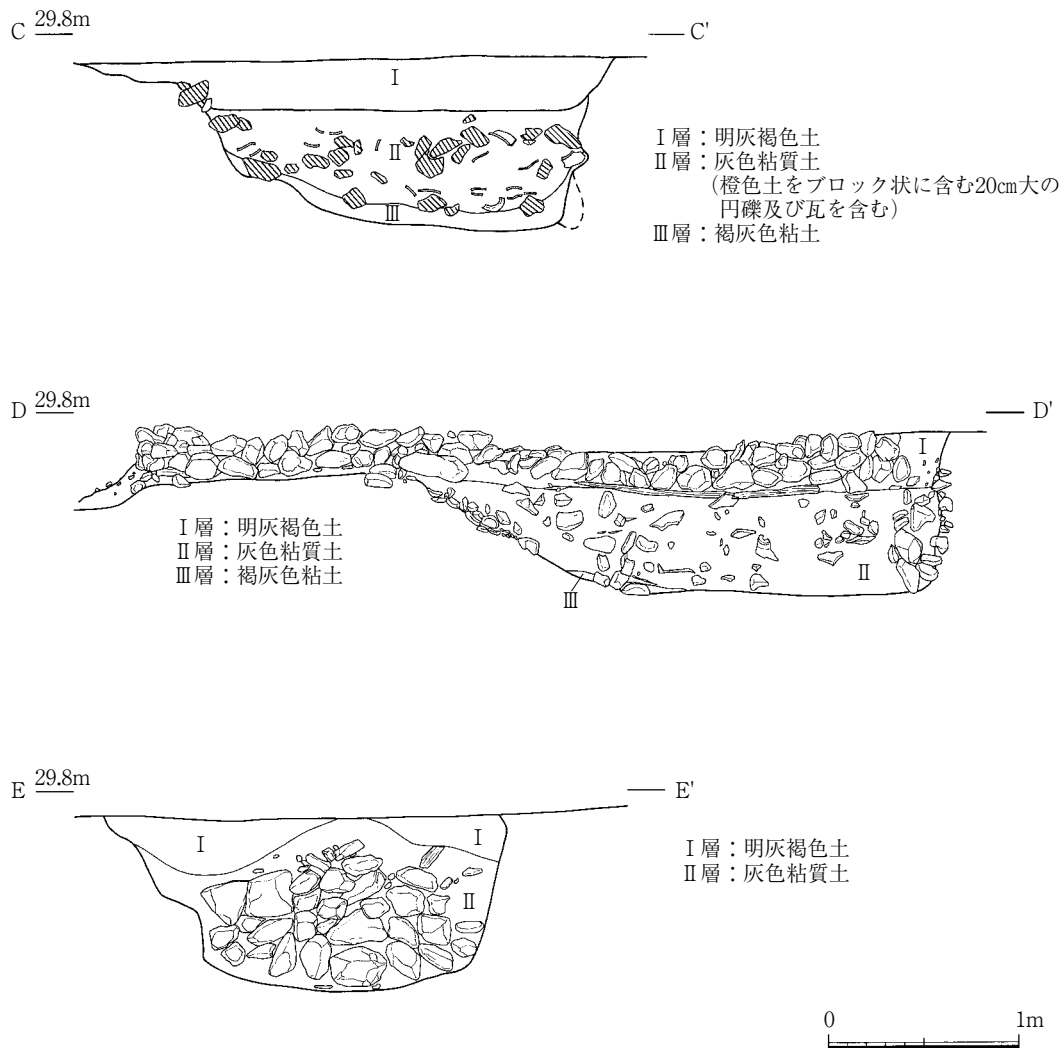


Fig.14 SP1 セクション図・石組み図・東壁石組み図

一定の幅・長さをもつ橙色土（漆喰土か）片がブロック状に含まれており、建築物廃棄に伴って多量の瓦と裏込めの漆喰土がSP1に廃棄されたものと考えられる。

出土遺物はII層に集中している。I層からは能茶山産磁器3点を含む陶磁器数点が出土しているが、他遺構との接合関係はなく、一括廃棄が行われた後に堆積した埋土と考えられる。II層出土遺物は近世陶磁器口縁部105点・底部及び細片多数、土師質及び瓦質土器口縁部10数点・底部及び細片多数、他に硯・砥石・石臼各1点、人形型、コンテナ2箱分の瓦片である。他遺構との接合関係はSD1・2、SK1～13との間に認められ、総破片中の遺構間接合点数は76点、破片の遺構間接合率は35%となる。最下層のIII層からは陶磁器46点、土師質及び瓦質土器12点、人形の型3点、硯1点が出土している。活動時の遺物の流れ込みの可能性をもつSD1・2を除いて、他遺構との接合関係は9点に認められる。このようにIII層埋土中には、一括廃棄遺物も多く混入している可能性が高いが、接合関係等の明確な根拠が得られたもの以外はSP1活動時の遺物との区分は不可能であった。この他、床面出土は陶磁器3点、土師質土器2点、人形型破片1点である。他遺構との接合関係をもつものは271のみで、III層・SD2・包含層II層との接合関係が成立している。

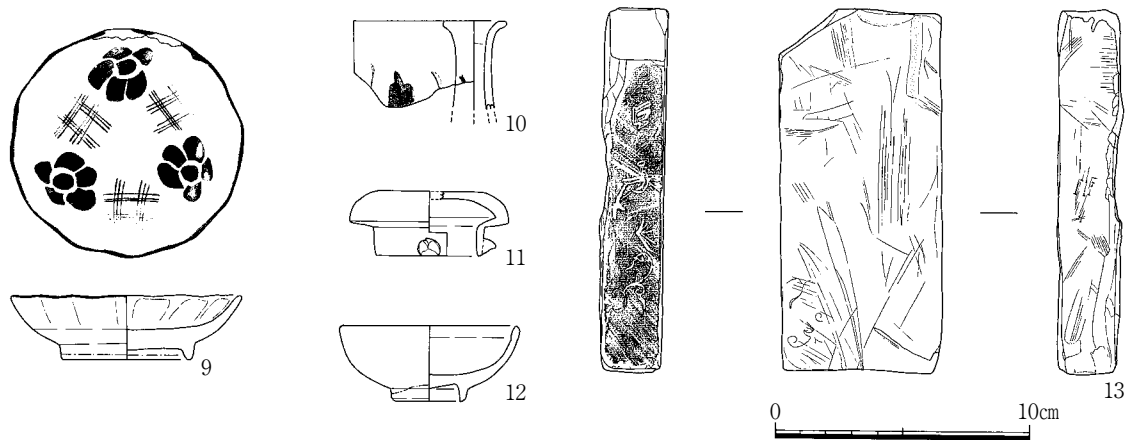


Fig.15 SP1 出土遺物実測図

図示できたもののうち、Ⅱ層出土遺物は一括廃棄遺物として別章に取り上げる。Ⅲ層及び床面1出土の遺物は、SD1・2以外との遺構間接合・包含層Ⅱ層・SP1Ⅱ層との接合が成立したものを除いて、9～13を図示している。9は能茶山産の染付梅文輪花小皿。10は肥前系の染付小瓶であり18世紀後半のものである。陶器は小杯（12）、鉄釉蓋（11）で何れも能茶山産とみられる。他に砥石（13）が出土している。これらの遺物中には一括廃棄遺物が含まれている可能性が高く、9は一括廃棄遺物中の小皿と揃いのものである。

以上のことから、SP1は他遺構と同時期に遺構廃絶され遺物廃棄が行われたものと考えられる。又、Ⅱ層遺物が下層Ⅲ層にまで落ち込んでいることから、遺物廃棄時には、まだSP1床面に水が溜まり軟質な状態であったものと思われる。

#### ④集石遺構

##### SS1 (Fig.16)

I区の東端に位置する集石遺構である。平面プランは円形を呈し、人頭大から拳大の河原石を配している。出土遺物は無く、性格は不明である。

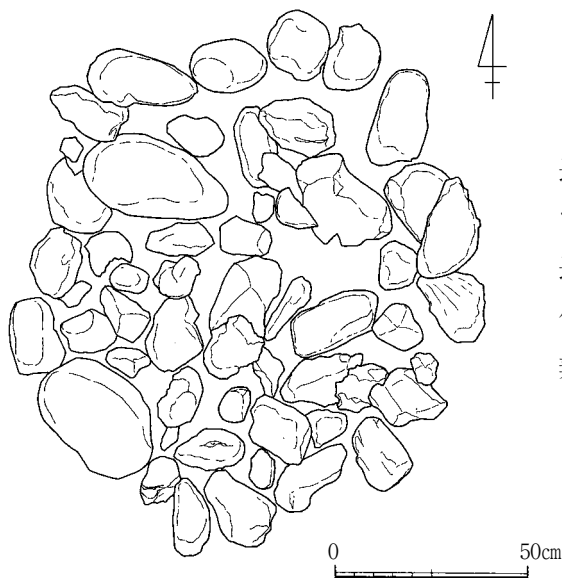


Fig.16 SS1 集石検出状況

している。出土遺物は無く、性格は不明である。

##### ⑤SX5

調査区の北端、SD1の東端に位置する部分には遺構としては捉え得ない浅い落込み部分が存在している。埋土は灰色粘質土で、埋土中より近世の遺物が出土している。これらはやはり他遺構及び包含層出土遺物と多くの接合関係をもち、一括廃棄遺物としての性格をもつ。

### (3) 包含層出土遺物 (Fig.17・18・19)

包含層Ⅱ層（黒褐色粘質土。近世遺構検出面）出土遺物は各遺構出土の一括廃棄遺物と多くの接合関係をもっている。特に、Ⅱ層上層はSD1の東側部分の浅い落込み部やSP1周辺を中心として、多くの遺物がまとまって出土しており、これらに遺構間との接合率が高い。この様に、包含層Ⅱ層の遺物はその大部分が他遺構と同時期に廃棄された一括廃棄遺物としての性格が強い。しかし、中には17世紀～18世紀前半の遺物（29・44・24他）も僅かに混入しているため、ここでは遺構出土のものとして区別し、特に他遺構との接合関係が成立したもののみを一括廃棄遺物として次項に掲載している。又、包含層Ⅲ層（黄褐色粘質土）からも、17世紀を中心とする比較的古い時期のものが出土している。

包含層Ⅱ層出土遺物では、14～56を図示している。14～17は能茶山産の染付端反形中碗、18・20・21・22は同じく能茶山産の染付広東形碗。染付草花文蓋（30）、染付梅文蓋（31）、染付梅鶯文広東形碗（23）、染付山水文輪花形小皿（37）、蛇の目釉剥ぎの染付小皿（36）も能茶山産とみられる。19は瀬戸・美濃産の染付山水文端反形碗で1820年代～幕末。24は肥前系の陶胎染付碗で18世紀前半。25も肥前系で1820～1860年代。26は能茶山産の染付小碗。29は白磁小杯で肥前産17世紀中葉のものである。28は色絵小碗で関西系又は瀬戸・美濃系1820年代～幕末。32は染付蛸唐草文猪口、肥前系1780～1810年代。33は肥前系の染付角鉢で19世紀初頭～幕末。34・35は肥前産1820年代～幕末。染付矢羽根文小皿（38）は有田産18世紀後半。染付菊唐草文大皿（39）も有田産で18世紀第2～3四半期のものである。45は波佐見産の蛇の目釉剥ぎ青磁小皿で18世紀のものである。55は白磁瓶で肥前系18世紀末～幕末のもの。40～44・46～54は陶器。43は能茶山産の蛇の目釉剥ぎ鉄釉小皿。49の灰釉小杯も能茶山産。44は瀬戸・美濃産の天目釉碗。46は関西系の灰釉土瓶蓋。47は灰釉の急須蓋。48は京焼き風陶器の灰釉蓋、53は呉須による文様を施した京焼き風陶器の細片で、48・53とも尾戸窯産とみられる。51は灰釉中皿、52は堺産の播鉢、54は瀬戸・美濃産の火鉢又は焜炉、50は関西系の灰釉灯明皿。56は凝灰岩製の硯である。

包含層Ⅲ層出土の遺物として図示したものは、40・41である。40は砂目積みの唐津系灰釉陶器小皿で肥前産17世紀前葉のもの。41は陶器の香炉又は筒形碗である。41は内面無釉で外面には鎊釉を施釉している。胎土は黒褐色で能茶山のものであるが、出土状況及び高台の形態等から尾戸窯で生産された可能性をもつ。



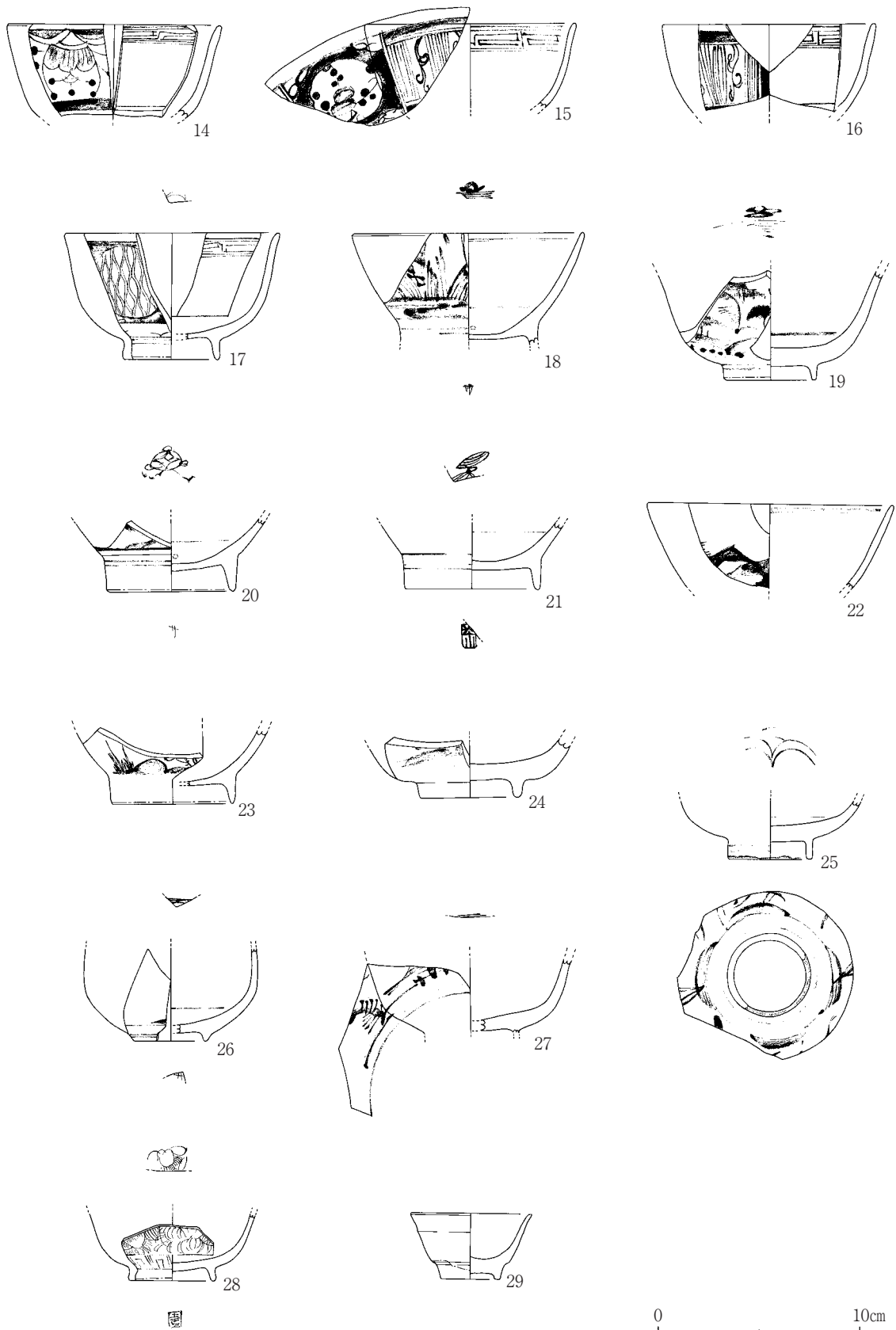


Fig.17 I区 包含層出土遺物実測図(1)

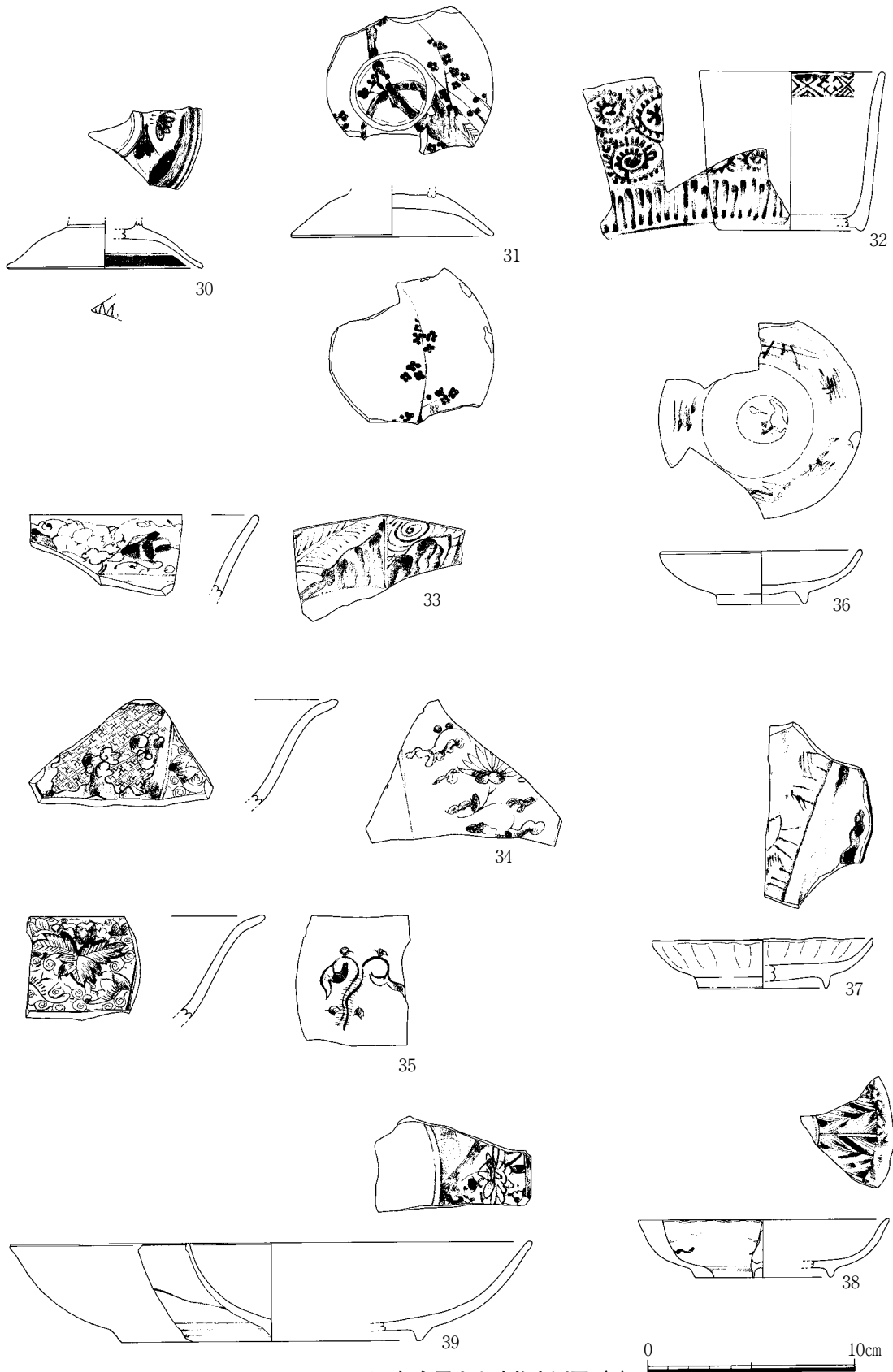


Fig.18 I区 包含層出土遺物実測図 (2)

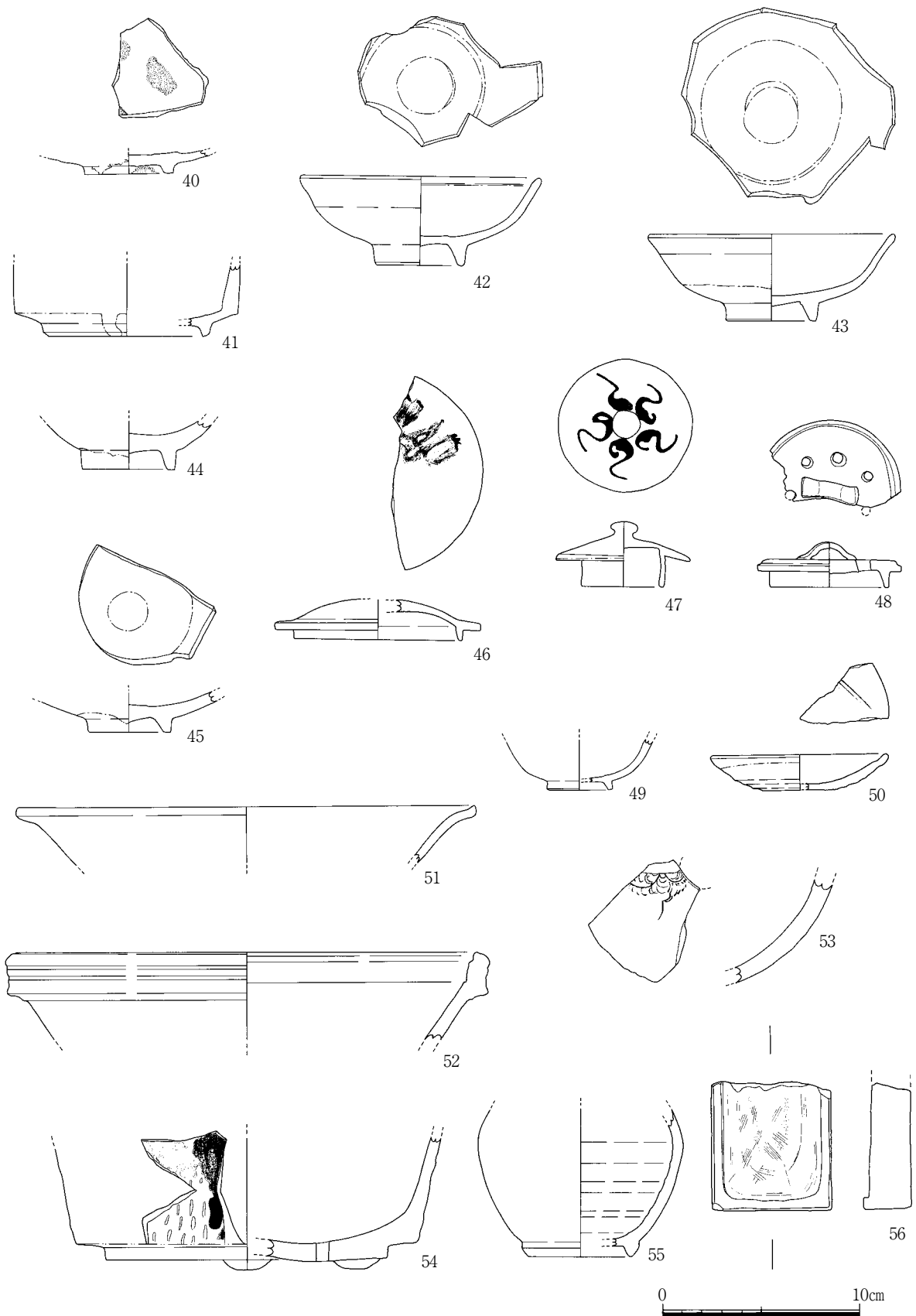


Fig.19 I区 包含層出土遺物実測図 (3)

#### (4) 一括廃棄遺物

前項で詳述したようにI区の調査で出土した遺物中には、他遺構との接合関係が成立し且つ、廃棄土坑又は廃絶された遺構中に一括廃棄された出土状況を示す遺物群が多数存在している。

そこでここでは、出土状況により確実に一括廃棄と捉えることができるSK1・7～13、SD1 I層、SD2、SP1 II層、SX5出土の遺物、及びこれらの遺構出土遺物と接合関係が成立した包含層出土の遺物を取り上げた。得られた遺物は接合前の口縁部点数にして陶磁器483点・土師質及び瓦質土器80点、破片にして土人形型と製品44点・石製品8点、金属製品約50点であったが、他に細片多数とコンテナケース5箱分の瓦片も含まれており、このうち、実測可能であった332点を図示している。

これらのうち陶磁器類に注目すると、全て生産年代が18世紀後半から幕末の間に位置付けられるものである。又、廃棄年代に関しては、遺物中に19世紀中葉以降より生産された遺物が多く含まれること、合成コバルトを用いた明治以降の製品が1点も含まれていないこと等から、19世紀中葉から幕末期前後に廃棄された遺物資料として捉えることができる。又、各遺物は甕等の大型製品を始めとして何れも細片の状態出土しており、意図的に細かく打ち砕いた上で廃棄されたものと予想される。

なお、各々の遺物の出土地点と諸特徴は後述する遺物観察表中に示しているためここでは省略し、種類・器種ごとにまとめて生産地・生産年代等の概要を掲載するにとどめる。

##### ①磁器

###### 碗 (Fig.20～23)

57～98は染付の中碗である。57～63・65～67・70・71・73は能茶山産の染付広東形碗である。57・58・60・61・63・66は草花文に蝶を伴うモチーフのもので、揃いのもと思われる。底部が確認出来たものは高台内に「サ」又は「茶」銘が見られる。又、69・72は銘を持たないが胎土や調整痕から能茶山産である可能性が高い。64・68・74は肥前系の染付広東形碗。64は18世紀後半から19世紀初頭、68は網干に雁、櫛歯文を描くもので1780～1840年代に流行したもの。74は染付千芝福寿文広東形碗で19世紀前半のものである。76～86・88・89は能茶山産の染付端反形碗、91も能茶山産の可能性をもつものである。87は肥前系の染付丸形碗で18世紀末～19世紀前半のもの。90は染付格子文端反形碗、92も染付端反形碗で口縁部内面に墨弾きによる白抜き文様を施すもの、93は染付丸文碗、何れも肥前系で1820年代から幕末期のものである。94～98は瀬戸・美濃産。94は薄手の染付葵文碗で19世紀中頃のもの。95の染付葵文碗・96の染付木賊文碗・98の染付草花文碗共に19世紀～幕末期までのものである。

99～127は小碗又は小杯。99～109は染付の小碗（湯呑碗）で何れも能茶山産である。121も能茶山産の染付端反形小碗。124は肥前産の染付小杯で笹文を描く、18世紀中頃～末。125は染付の薄手酒杯で肥前系又は関西系19世紀前半～中葉。126は瀬戸・美濃又は関西系の染付酒杯。114は関西系の染付木盃形薄手酒杯。120も関西系の染付小碗である。110～113・115・116は色絵小碗である。110・111は肥前産の色絵小碗であるが、110は内面に紅が著しく付着しており紅皿として転用したものと見られる。19世紀前半～幕末頃のもので、当時、日用品としては普及しない高級なものである。

127も肥前産の色絵小碗で窓内に牡丹を描き赤の地埋めと金彩を施している。112は関西系又は肥前系の色絵小碗、113・117は肥前系、115・116は瀬戸・美濃又は関西系の色絵木盃形薄手酒杯で、何れも19世紀前半～幕末頃のものである。118は蛸手の白磁小碗で、瀬戸・美濃又は関西系19世紀中葉以降のものである。119白磁小碗は肥前系18世紀後半。122・123も白磁小杯で、肥前系18世紀末～幕末のものである。

### Ⅲ (Fig.24・25)

Ⅲは128～150を図示している。このうち小皿類に関しては揃いのものが多く出土しており、ここに図示できなかった破片も含めると、能茶山産の染付蛇の目釉剥ぎ小皿(36・128～130・口縁部)、染付山水文輪花小皿(37・132・133・口縁部)、染付梅文輪花小皿(9・134・口縁部)、白磁菊花小皿(4・140・口縁部)、有田産の染付矢羽根文小皿(38・136～139)等が挙げられる。

128～139は染付の小皿。このうち128～130蛇の目釉剥ぎの小皿は能茶山産である可能性が高い。132～134は口鏝の染付山水文輪花形小皿、135も輪花になるもので、何れも能茶山産である。131は肥前系の蛇の目釉剥ぎの染付格子文小皿で1820～1860年代。141は肥前産の染付松文五寸皿で18世紀中葉～1780年代。136～139の染付矢羽根文端反形小皿は五弁花文と渦福銘を伴うもので有田産18世紀後半のもの。142も有田産の染付大皿で当時高級品であったものと思われる。140は型打成形と高台貼付による白磁菊花小皿で能茶山産とみられる。

### 鉢・猪口・盃台 (Fig.25・26)

143・148～152は染付の鉢。144は白磁、145～147は青磁鉢である。151は波千鳥文と連続青海波文を施した染付角鉢で、肥前系19世紀初頭～幕末のもの。149・152は芙蓉手の染付角鉢、肥前系1820～1860年代のもの。150も同様の芙蓉手であるが肥前産のものである。143も肥前産の染付角鉢で19世紀前半～幕末。148は染付山水文鉢で肥前系18世紀末～19世紀前半。144の陽刻型打成形による白磁輪花形鉢は有田18世紀第3四半期のもので当時一般には普及しない高級なものである。147は青磁鉢。145は口鏝を施した青磁輪花形鉢、青磁鉢146は陽刻型打によって内面に植物文様を描く。このうち145・146は類似したものが能茶山窯跡より出土していることから能茶山産である可能性が高い。

153～157は猪口。157は染付蛸唐草文猪口で見込に五弁花文を伴い、肥前系1780～1810年代のものである。156も染付猪口で斜格子文と四方襷文を描き、肥前系で1780～19世紀前半。154は染付山水文猪口、肥前産18世紀中葉。153・155は能茶山産の染付山水文猪口で図示したもの以外にも揃いのものが数点出土している。

158は染付の盃台である。上部を欠損するが、剥離面を研磨した痕跡があり破損後他の目的に転用した可能性をもつ。肥前系19世紀初頭～幕末頃のものである。

### 碗蓋 (Fig.27)

160～162・167～170・172は能茶山産の染付碗蓋である。このうち160～162は摘み内に「茶」の銘をもつ。又、171は胎土特徴から能茶山産とみられる。163～166の染付梅鶯文蓋も能茶山産の可能性をもつもので69・72と組になるものである。159は格子文に紅葉を配したもので肥前系1860～幕末のものである。

### 蓋物・段重・合子・紅皿 (Fig.28)

173・195は染付蓋物の蓋と身で宝珠文を描き、肥前系1780～1840年代のもの。174も染付蓋物蓋で若松に鶴を描き、肥前産19世紀前半。176・177は染付花木文段重で能茶山産の可能性をもつ。178は染付の合子蓋で肥前系18世紀末～幕末のものである。

当遺跡では紅皿の出土も多く口縁部点数にして10点を数える。図示したものは179～187で、何れも肥前産の白磁紅皿である。179は糸切り細工による変形の紅皿で、18世紀前半～中葉のもの。180～186は18世紀末～幕末、187は19世紀のものである。

### 瓶 (Fig.28)

瓶類は188～198を図示している。188～190・192～195・197・198は染付の瓶である。このうち189・190・194・195は肥前系 18世紀後半～19世紀初頭。193は肥前産の染付小瓶で18世紀後半のもの。192は能茶山産の染付小瓶。188は肥前産18世紀後半の染付髪油壺である。191は肥前系の白磁極小瓶。197は肥前系の染付中瓶である。又、196は白磁中瓶で肥前系18世紀後半～19世紀前半のものである。

### その他 (Fig.29)

204は白磁の戸車で、接地面が著しく摩耗している。201・202は染付水滴で、肥前産18世紀後半～19世紀初頭。203も染付水滴で肥前系18世紀後半～19世紀前半のものである。199・200は染付の火入れとともに高台内に「茶」の銘が記され、能茶山産のものである。

## ②陶器

### 碗・皿・鉢 (Fig.30・31)

205～210は碗。205・206は瀬戸・美濃産、陶胎染付の広東形碗で何れも見込にコンニャク印を施す。207は能茶山産の灰釉広東形碗である。208～210は灰釉と緑釉を施釉する端反形小碗で、信楽産のものともみられる。

皿は211～226である。大皿211は竹と雀文を呉須で描いた後透明釉を施釉し、蛇の目釉剥ぎする。又、212・213・215～224は能茶山産の蛇の目釉剥ぎ鉄釉小皿である。このうち212・213には見込に墨書が残る。214も能茶山産 釉蛇の目釉剥ぎ小皿 であるが、透明釉を施釉している。225は型打による陽刻文様を施した鉄釉稜花小皿で、図示したものの他にも揃いのものが出土している。226は関西系の灰釉波縁極小皿である。

この他に嗜好用の器として餌鉢が多く出土しており、227～231を図示している。229は底部回転糸切りの能茶山産の餌鉢で底部に墨書が認められる。227・228・230・231は灰釉を施したもので在地窯のものともみられる。

### 鉢・鍋・土瓶・急須 (Fig.32)

232～237は陶器播鉢である。237は産不明、他は全て堺産である。238は鉄釉こね鉢、240は鉄釉片口、239はこね鉢又は片口ともみられる。239・240は能茶山産のものである。

鍋は242～251である。この内、246～250は能茶山産の鉄釉行平鍋で、飛鉋と白化粧土イッチン掛けによる装飾を施している。鍋底部243・245も能茶山産である。

水注類では急須（254～257）、土瓶（252・253・258～260・261～263）、水注（264・265）を図示している。258～260は関西系の灰釉土瓶蓋、252・257・263は能茶山産の土瓶又は急須である。

#### 瓶・甕（Fig.34～38）

266～292は陶器の瓶である。269は瀬戸・美濃産の灰釉舟徳利、266～268は能茶山産の徳利。270～279は爛徳利で、この内、273～275は底部に墨書が認められる。291は能茶山産の鉄釉瓶の底部である。瓶類にはこの他に鉄釉瓶（280・285・287・289）、白濁釉を施釉した瓶（286）、灰釉瓶（288・290）等があり、何れも能茶山産とみられる。292は鉄釉（鎔釉）の陶器製罌で、内面には黒褐色から赤色に発色する顔料が著しく付着している。この他、鉄釉の小甕（282・283）、灰釉の281（器種不明）を図示している。

甕は293～307を図示している。

#### 灯明皿・火入れ・火鉢・涼炉（Fig.38・39）

灯火具では関西系の灰釉灯明皿（308～310）、能茶山産の灰釉台付灯明皿（311・312）を図示している。又、火具として灰釉の火入れ（313～316）、鉄釉火入れ（317・318）がある。火鉢は瀬戸・美濃産のもの（320）と能茶山産の鉄釉火鉢（322・323）を図示している。321は緑釉を施釉するが、焼成は軟質である。竹を模倣した形態の涼炉とみられる。

### ③瓦質土器及び土師質土器（Fig.40・41）

324・325・328・329～332は瓦質の火鉢、329は瓦質の七輪の底部とみられる。326・327は器種不明である。328は輪積み成形による丸火鉢、330～332は粘土板成形による角火鉢である。

333～335はかわらけ。346は土師質の七輪で胴部に窓をもつ。338は土師質の焜炉で口縁部から下方への開口部を設けている。340・341は七輪さな、342・343・345は土師質の焜炉又は七厘である。347は土師質の火消し壺、337は土師質匣鉢。344は器種不明。336も器種不明だが、内外面に煤が強く付着しており火具としての用途に使用されたものとみられる。

土師質の製品にはこの他に焙烙が出土しているが、何れも細片であり図示できるものはなかった。

### ④土人形型と製品（Fig.42～44）

土人形型は、その型文様や調整・胎土から確実に別個体と確認できるものが14個体。その他識別不可能な破片が26点であった。又、土人形製品では未完成品の破片4点が出土している。製品は、2点は無釉の土師質であるが1点には赤色顔料を塗布している。この他赤色顔料に関連して、一括廃棄遺物中よりべんがら生成時に利用したとみられる陶器製の罌（292）が出土しており、これらの出土品から等遺跡で土人形生産が行われていたものと予測される。

型は胎土や調整から、精製品とやや粗製のものとに分けられる。精製品（348～355）は非常に精選された胎土で、全体に丁寧なナデ調整が行われる。一方、粗製のもの（356～359）は胎土特徴から在地産と見られ、成形・調整ともにやや粗雑である。さらに、篋状工具によって外面に文字を刻むものが数点確認されているが、字体が精製品のものとは大きく異なっている。これらの点からも、粗製の型は当遺跡または周辺地域で精製品を模倣して製作していた可能性が高い。

図示したものは土人形型（348～359）、製品（360・361）である。

348～355は精製品に当たる型で、お多福面の婦人頭部（348）、人物の衣服の一部（349・350・395）、馬に乗った男児（351）、男児（353・354）、布袋とみられる人物の胸部（352）等を描いている。351には篋描きによる文字（上部の「土」のみ確認。文字不明）が刻まれる。357～359は粗製の型で、人物の脚部（357）、動物の脚部（356・358）等を描いている。粗製型は何れも内外面に指頭圧痕及び絞り目が顕著に認められる。356には「は」、357には「ろ」、細片359には「□は」の文字が共通した字体で外面に篋描きされる。（拓本359）これらの土人形型は精製・粗製ともに内面に雲母粉の付着が認められる。

360・361は製品の未完成破片である。360は型押成形によって外面に俵の文様を施し、内面には指頭圧痕が残る。361は人物の衣服の裾部分で、内面には指による押圧とナデ、篋状原体による押圧が加えられている。外面には赤色顔料が一部に塗布される。又、何れの製品も外面に雲母粉が薄く付着している。

#### ⑤石製品（Fig.45）

石製品では硯破片が比較的多く出土している。硯の破片点数は6点、石質及び形態から識別できた個体数は3点であり、このうち保存状態の良い363・364を図示している。364は硯、裏面には「垣内」の釘書きが残り、破損後は砥石として転用されている。363は小型の硯。363・364ともよく使い込まれ陸部が著しく摩耗している。

362は凝灰岩製の砥石で、中央部から欠損する。又、主研面は使い込まれ弓なりに摩耗している。

365は砂岩製石臼の下臼破片で、すり面、受け皿部分ともに欠損している。

#### ⑥瓦（Fig.46・47）

瓦はSK1・9・11・12・SD1・SP1よりコンテナケースにして約5箱分が出土している。この内SP1よりの出土数が最も多く約2箱分の出土がみられた。

軒丸瓦は5点が出土しており、全て連珠三つ巴文である。そのうち特徴的な2点（366・367）を図示した。366は珠文数16で、1珠を欠損している。巴の尾は断面三角形で細く、頭から尾へ向けて左回りに半周巡るもの。367は珠文数12になるもので、巴の尾は断面ドーム形で太く、左回りに半周巡るものである。何れも瓦当面は燻しによって僅かに銀色に発色する。他の軒丸瓦破片も文が確認できるものは全て左巻きであった。

軒平瓦は19点出土しており、この内、A：中心文様の両側に均整唐草文を配するもの（368～374）、B：両側に幅広の葉を配するもの（375）を図示した。この内、368・369は三つ巴文の中心飾りと唐草下上2反転、370は尾が一周する巴と巻き込みの深い唐草下上2反転からなる。371・372は唐花文による中心飾りと巻き込みの深い唐草下上2反転からなるもの、373も同様の文様構成であるが、唐花の茎が太く唐草の巻きが弱い。374は花文に唐草上下2反転を配し、右脇に「右」字を配する。375は花弁と幅広の葉を左右に配し左周縁に「中」銘を刻印する。



この他に平瓦と丸瓦が多数出土している。丸瓦は内面に布袋痕が認められ、この内圧痕が顕著であるものの拓本（A～C）を掲載した。刻印では、「アキ」銘1点、「中」銘7点が確認されている。

### ⑦金属製品 (Fig.49)

今回の一括遺物中には鉄製品も多く出土しているが、腐蝕が著しく、器種やその形態を確認できたものは僅かであった。鉄釘は約30点が確認できたがこのうち特徴的な8点（376～383）を図示した。何れも体部は断面四角形で、頭部をもつもの（376～378）、先端を直角に曲げ頭部としたもの（379・380）、頭部をもたないもの（381～383）、の3種類に大別される。この他、農耕具とみられる鉄製品の一部や、鉋状の鉄製品が数点確認されているが何れも腐蝕が著しく図示できるものはない。

銅製品は384～389を図示した。384～386はかんざし。387は用途不明の銅線で他にも類似したものがまとめて出土している。388は煙管の雁首である。火皿部分を欠損するが、形態より古泉編年のV期（18世紀後半）に該当させることが出来る。388は器表の腐蝕が著しいが、陰刻による花と莖状の文様が僅かに認められる。又、花と莖には各々赤と緑色の顔料が、器表には金彩が僅かに残存しており、製品は非常に装飾的なものであったとみられる。上部には打痕が著しく認められる。389は煙管の吸口である。比較的残存状態が良く、器表には唐草状の陰刻文様が施されている。吸口部分は窄まらず僅かに開く形態をとる。

### ⑧古銭 (Fig.48)

銅銭は5点が出土している。このうち内観察可能な4点（a～d）を掲載した。aは文銭（1668年以降）、b・cは新寛永（1697年以降）、dも新寛永（1741年以降）で背足のものである。

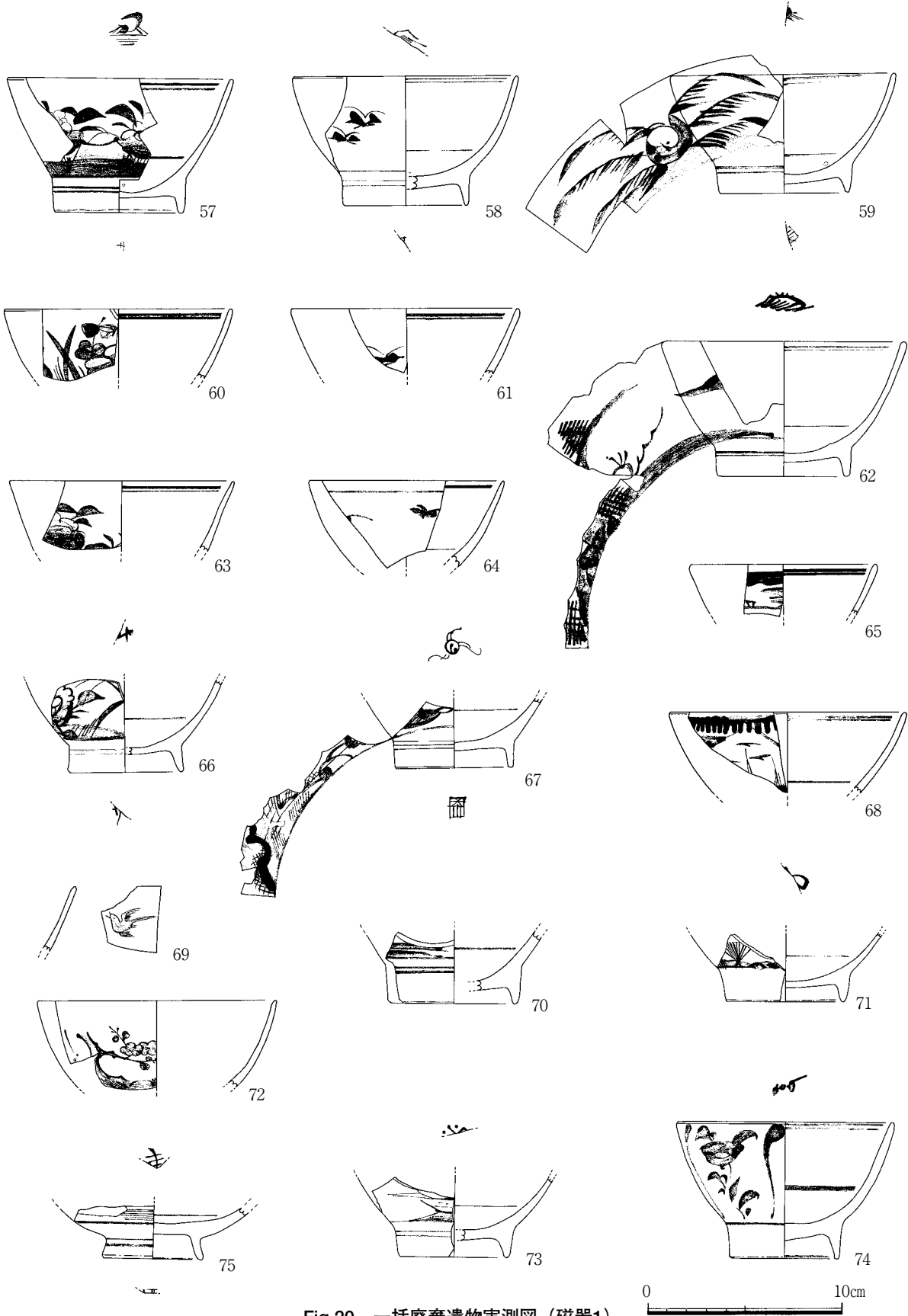


Fig.20 一括廃棄遺物実測図(磁器1)

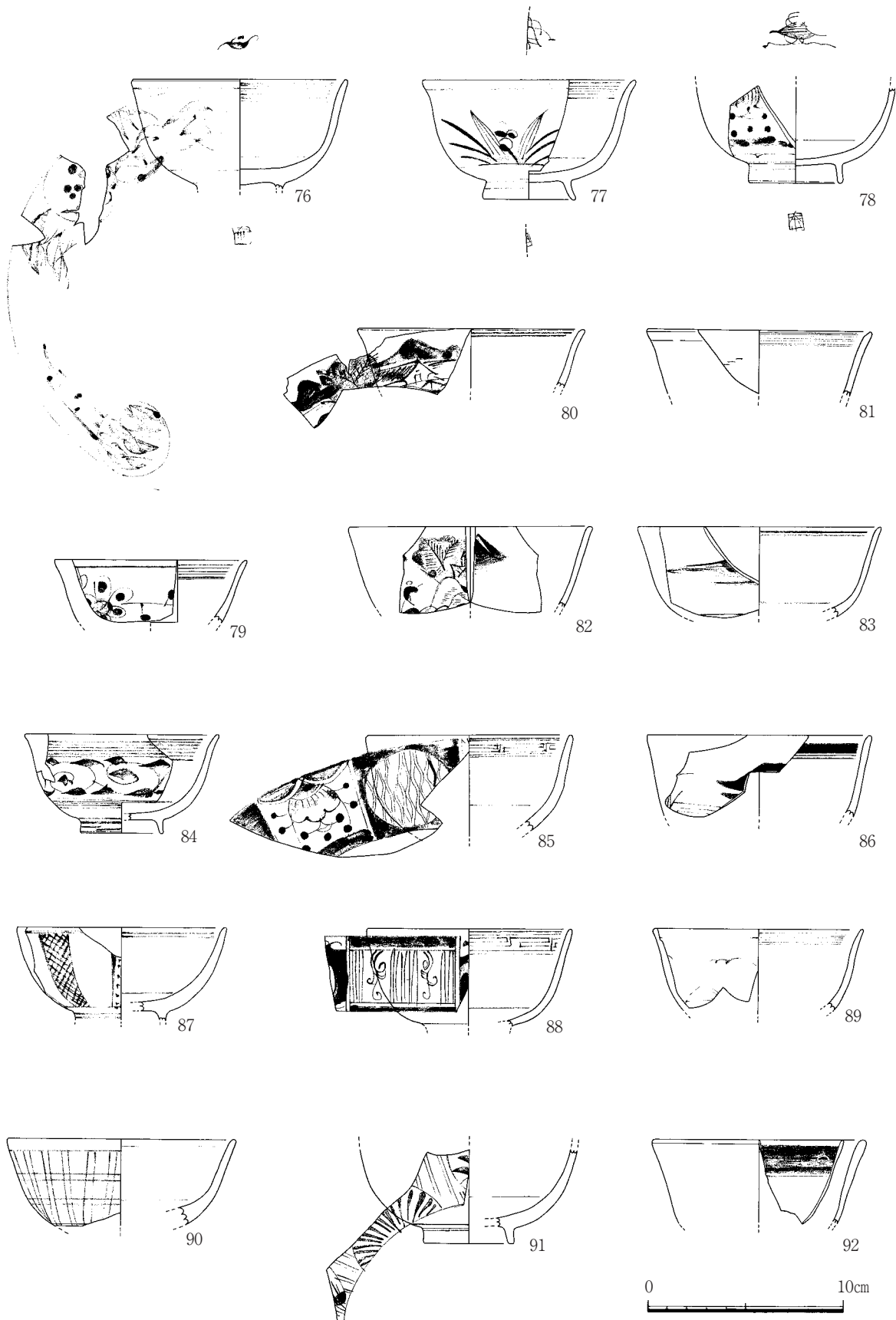


Fig.21 一括廃棄遺物実測図 (磁器2)

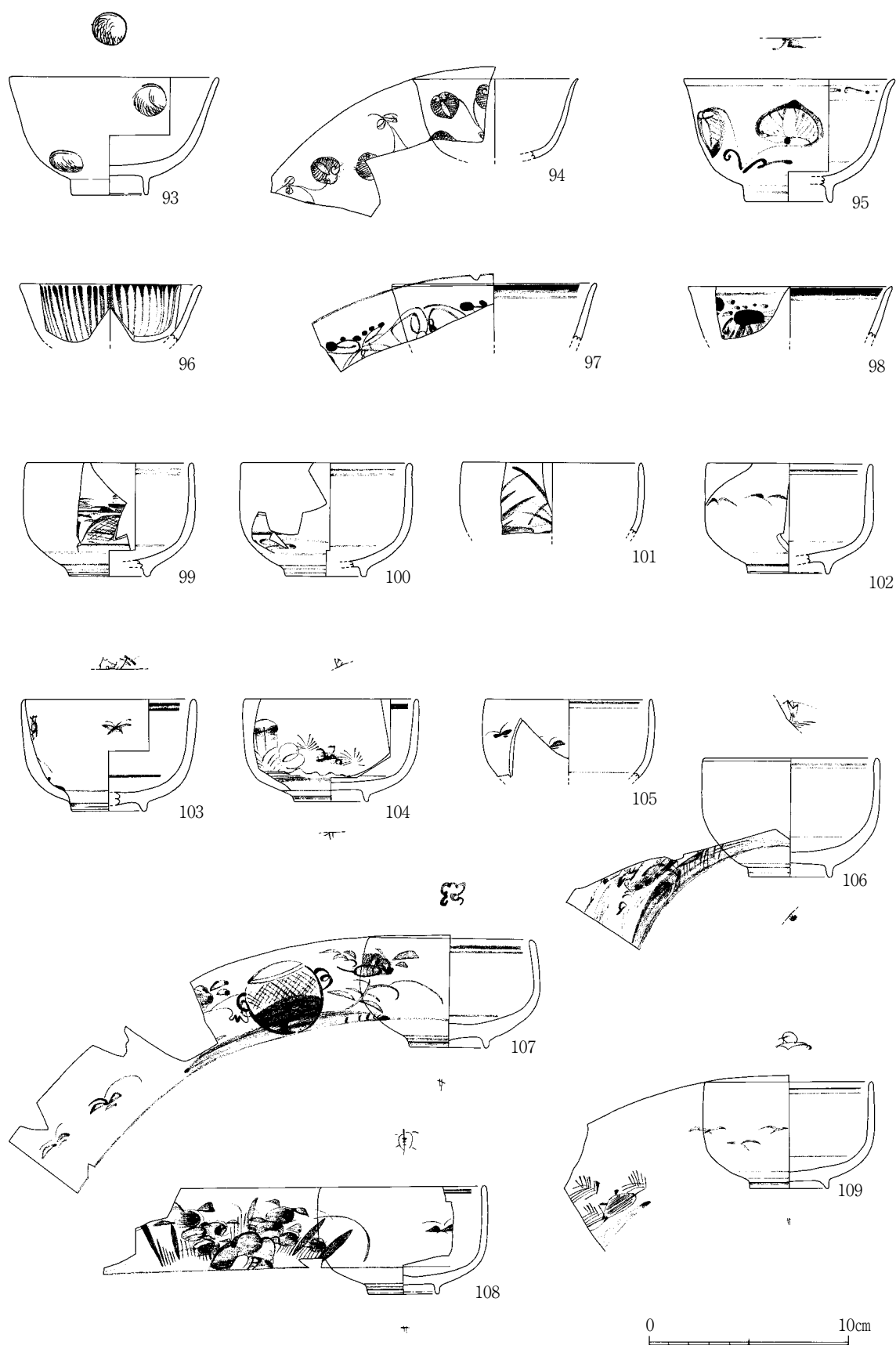


Fig.22 一括廃棄遺物実測図 (磁器3)

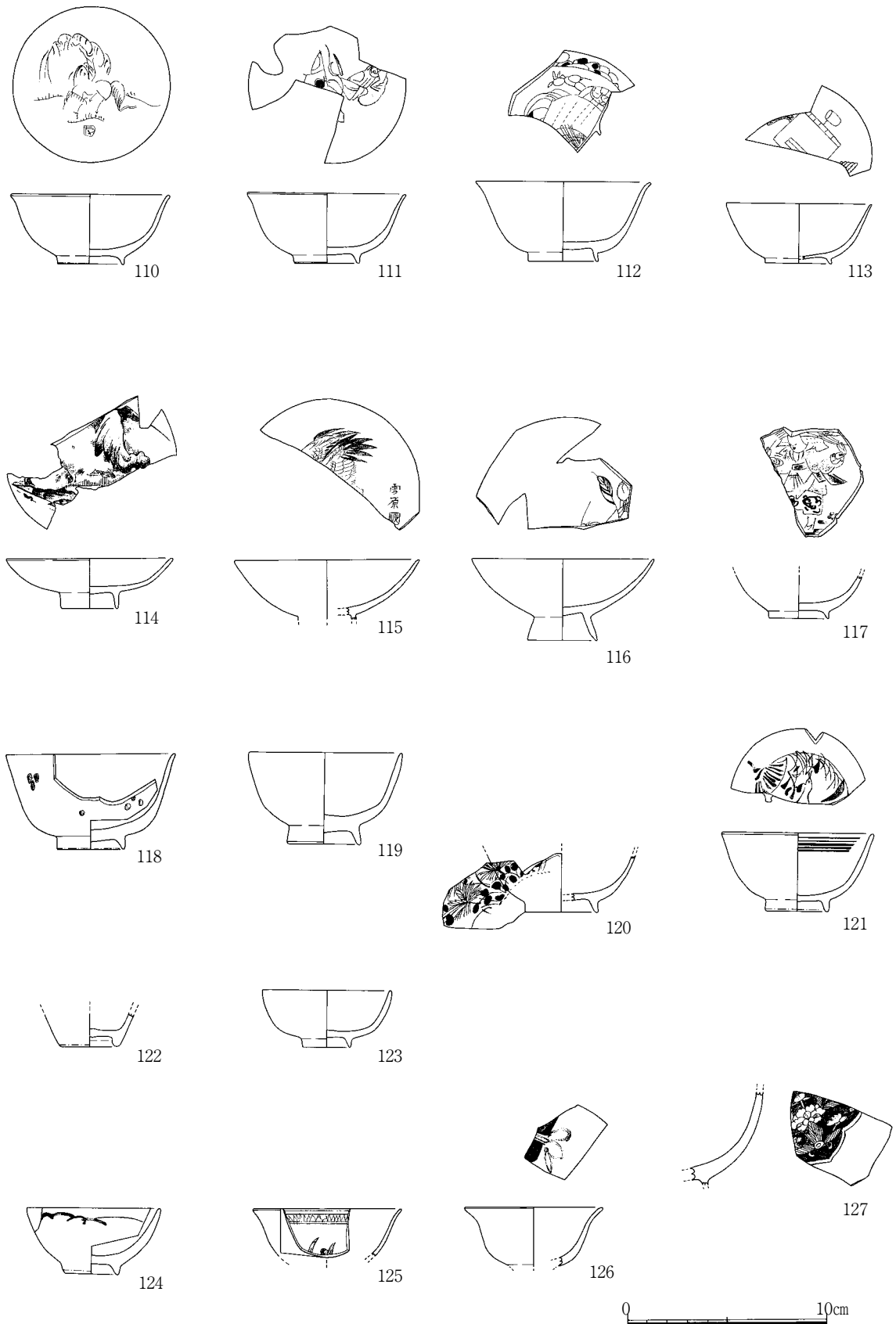


Fig.23 一括廃棄遺物実測図 (磁器4)

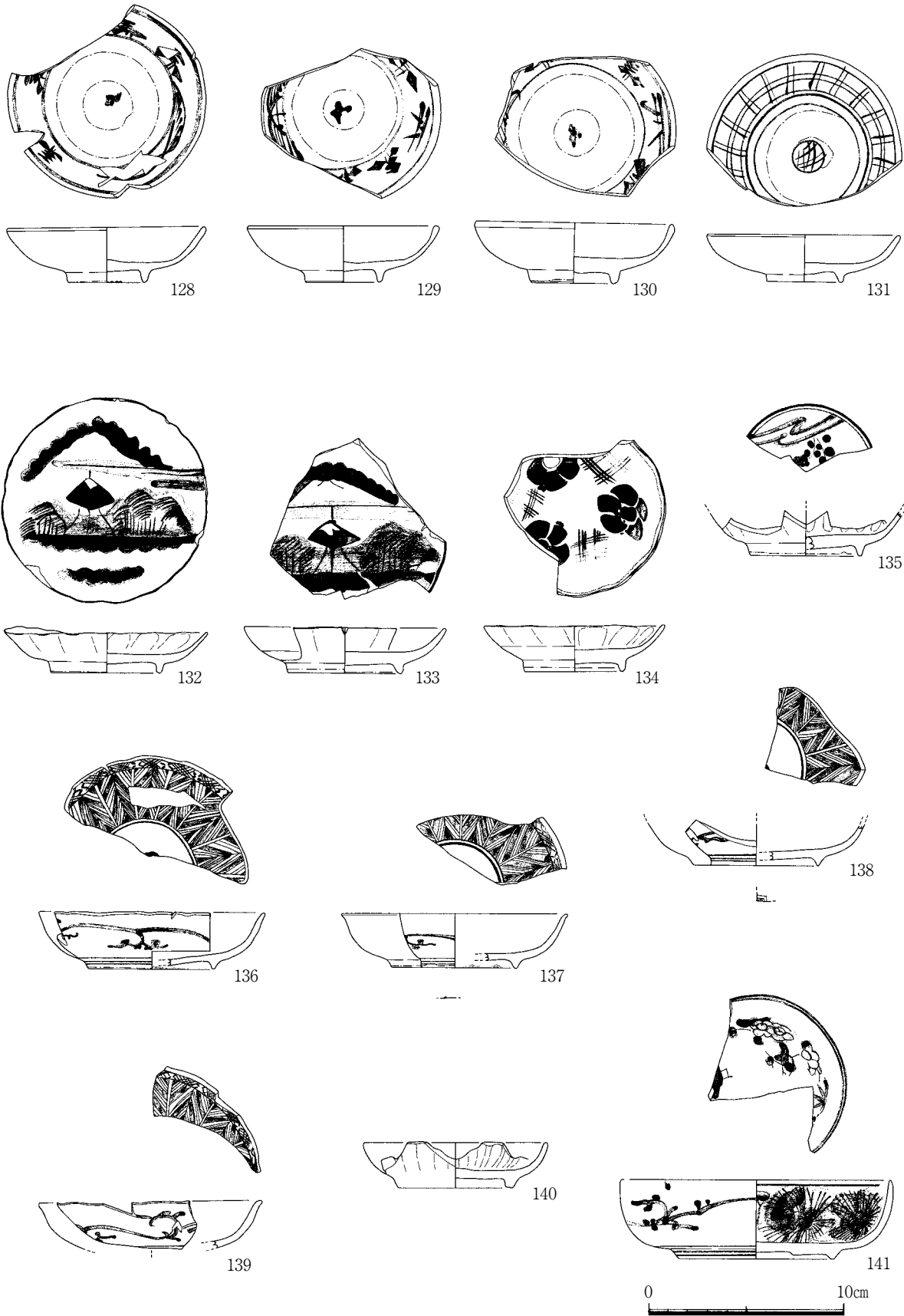


Fig.24 一括廃棄遺物実測図 (磁器5)

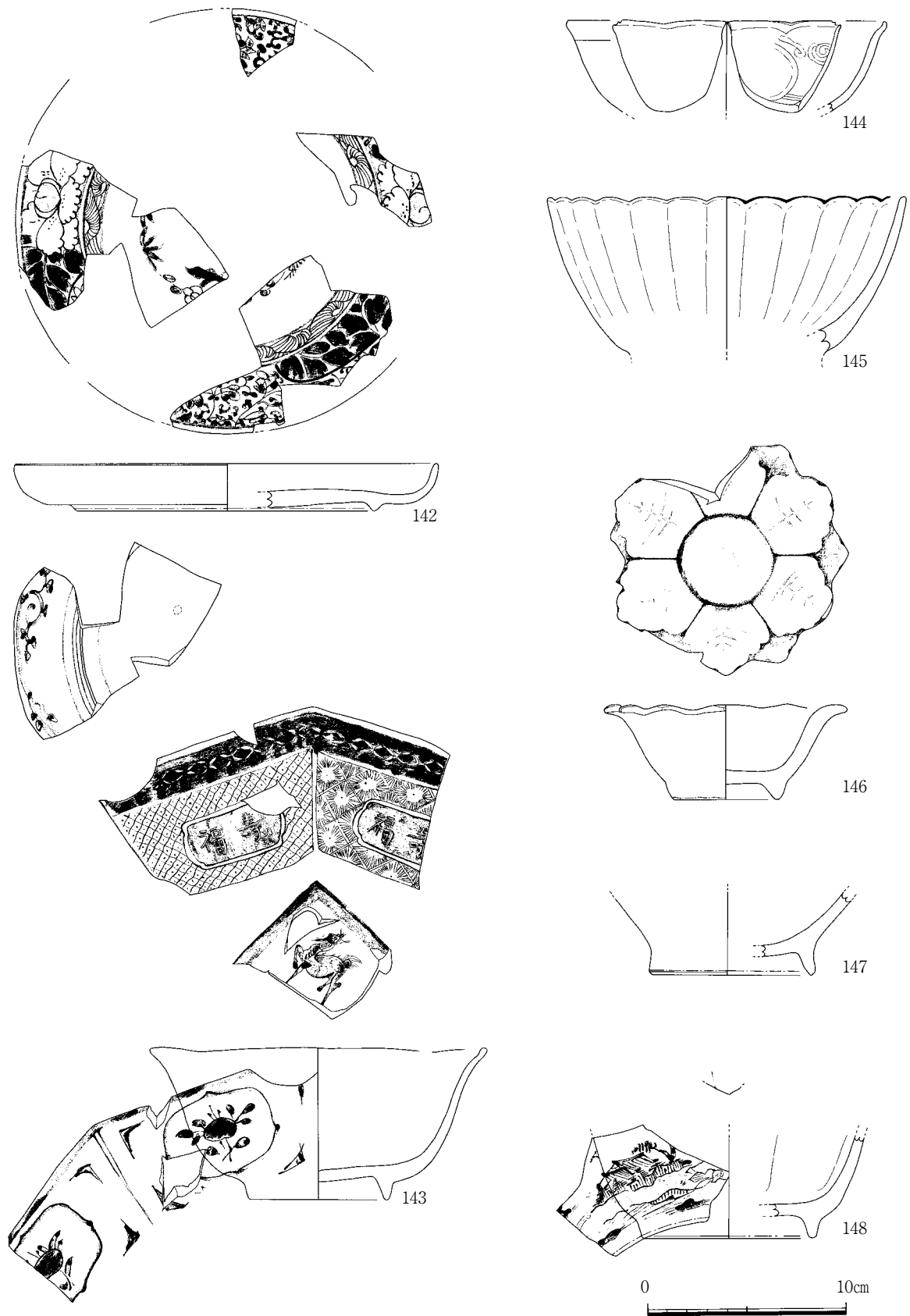


Fig.25 一括廃棄遺物実測図 (磁器6)

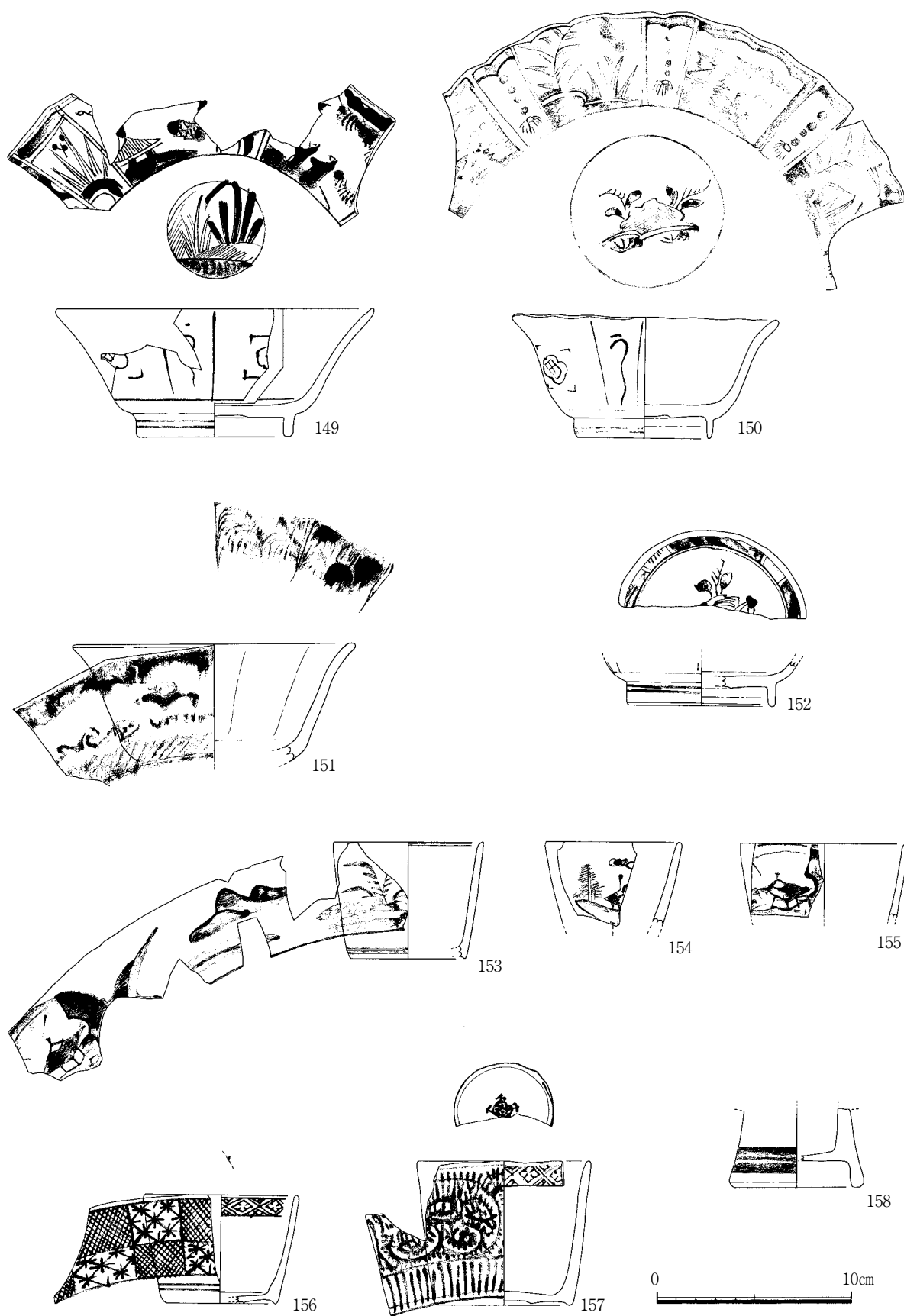


Fig.26 一括廃棄遺物実測図（磁器7）



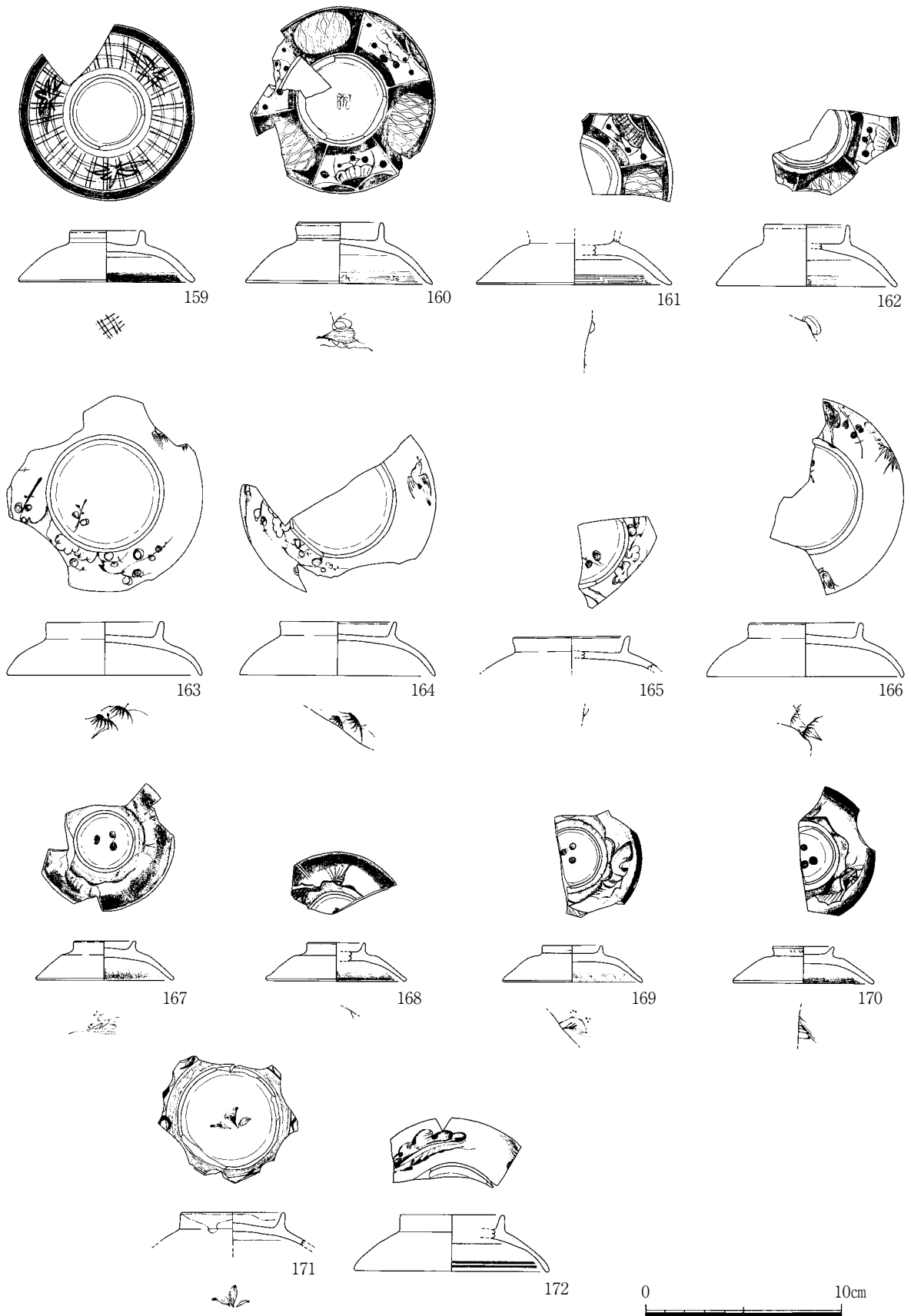


Fig.27 一括廃棄遺物実測図 (磁器8)

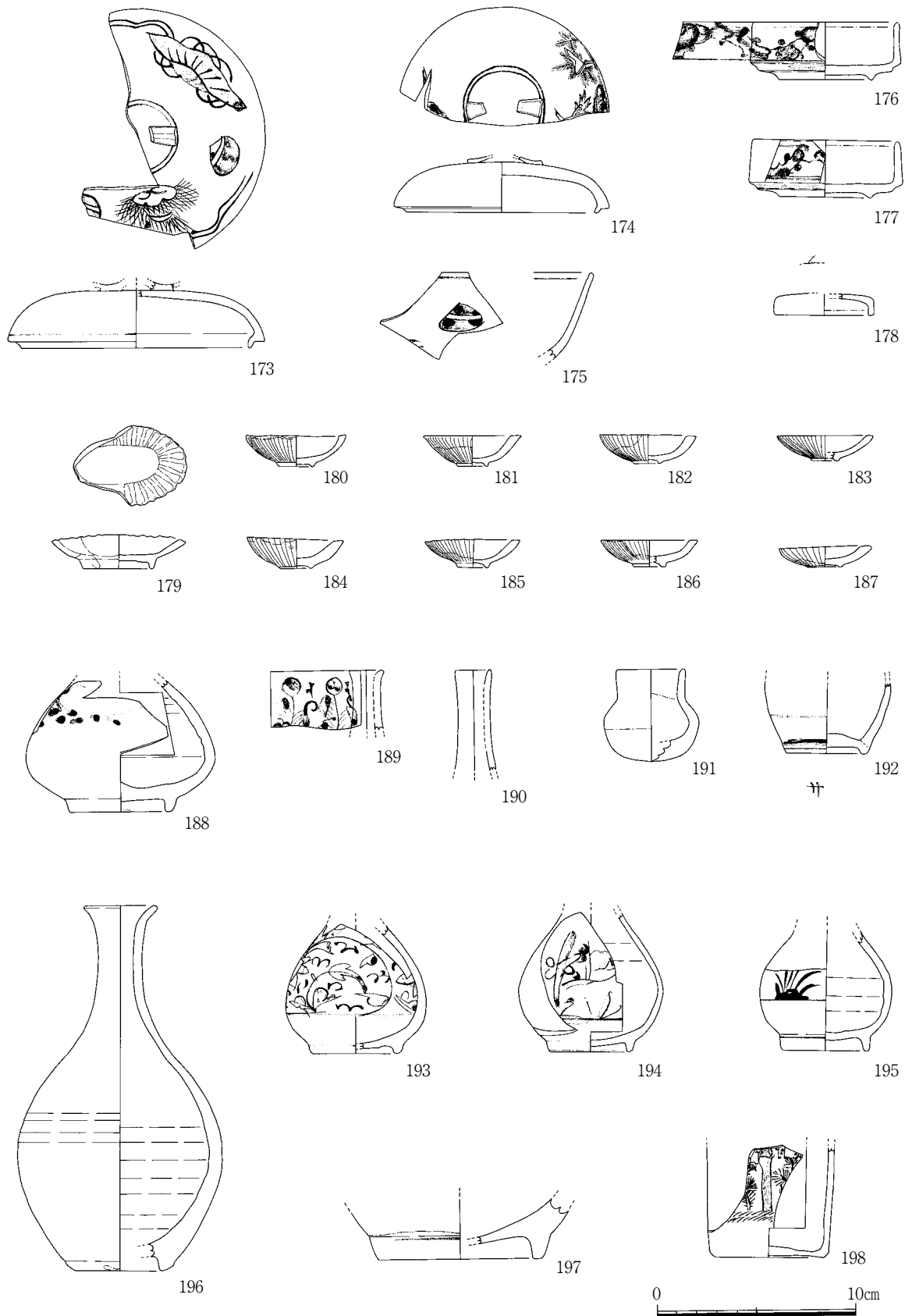


Fig.28 一括廃棄遺物実測図 (磁器9)

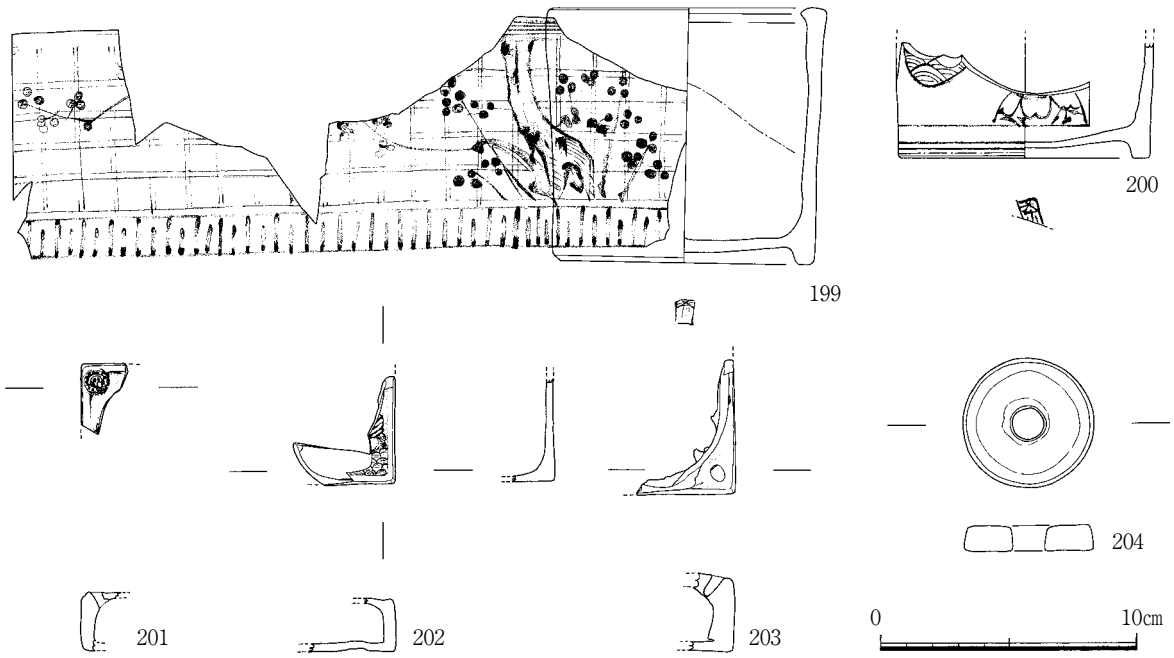


Fig.29 一括廃棄遺物実測図 (磁器10)

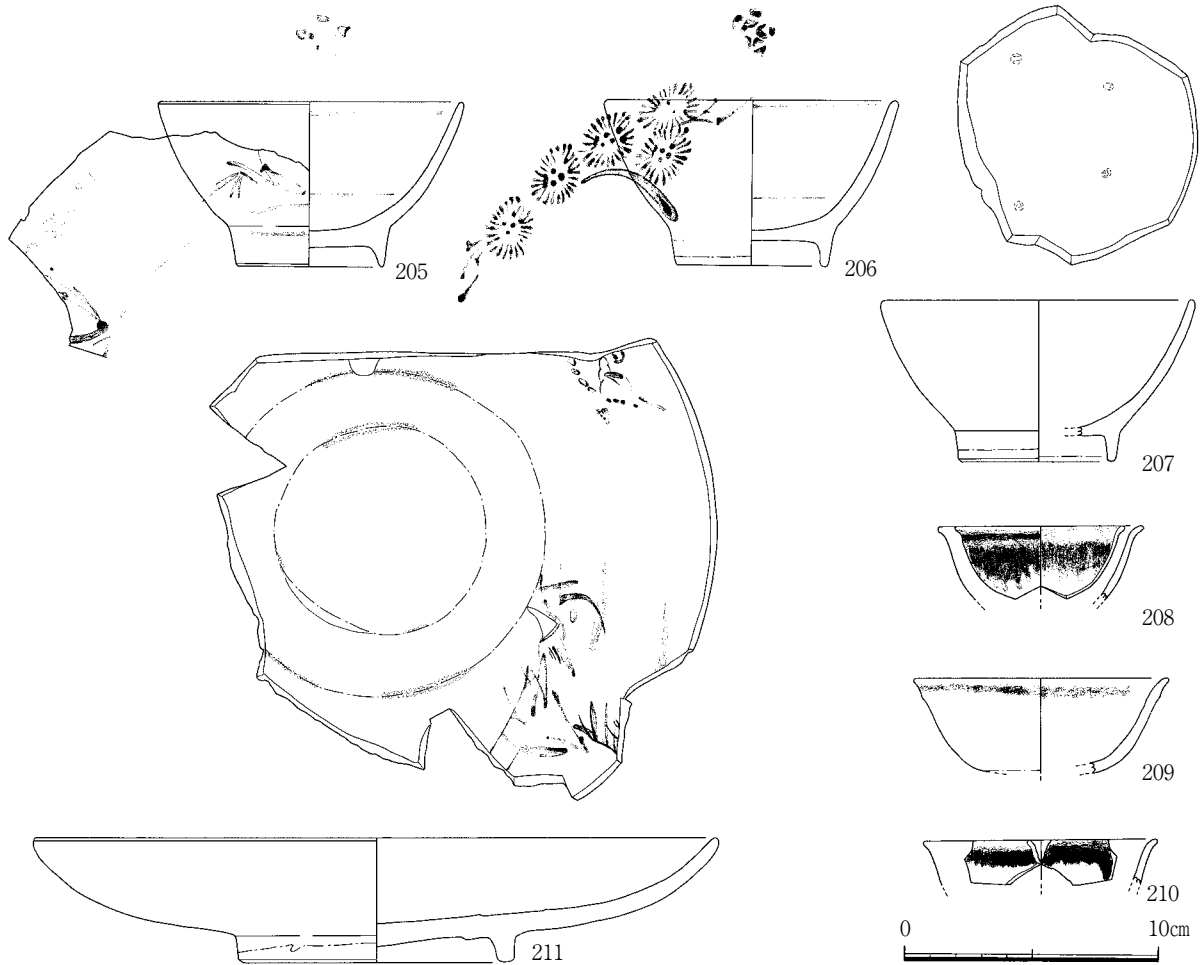


Fig.30 一括廃棄遺物実測図 (陶器1)

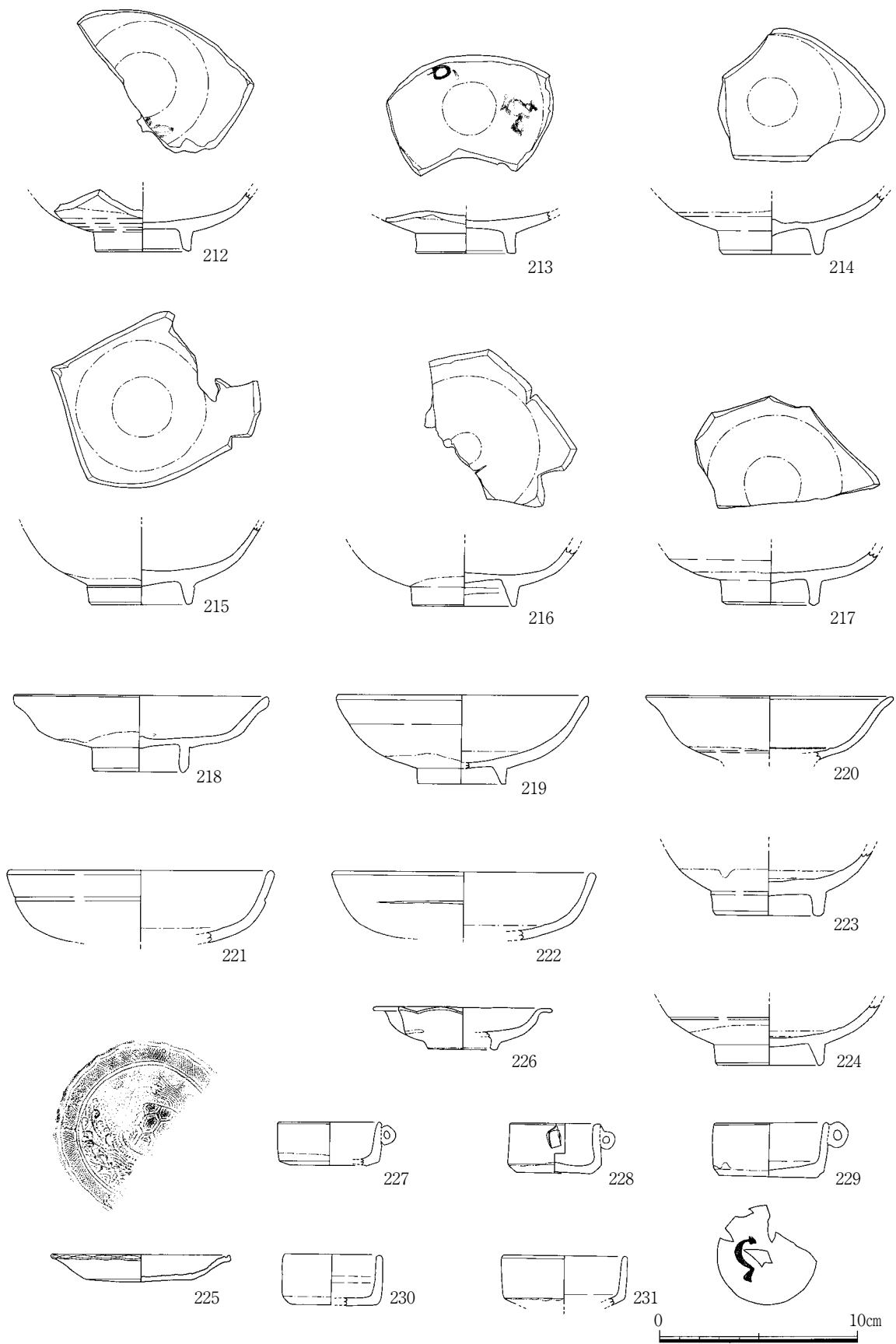


Fig.31 一括廃棄遺物実測図（陶器2）

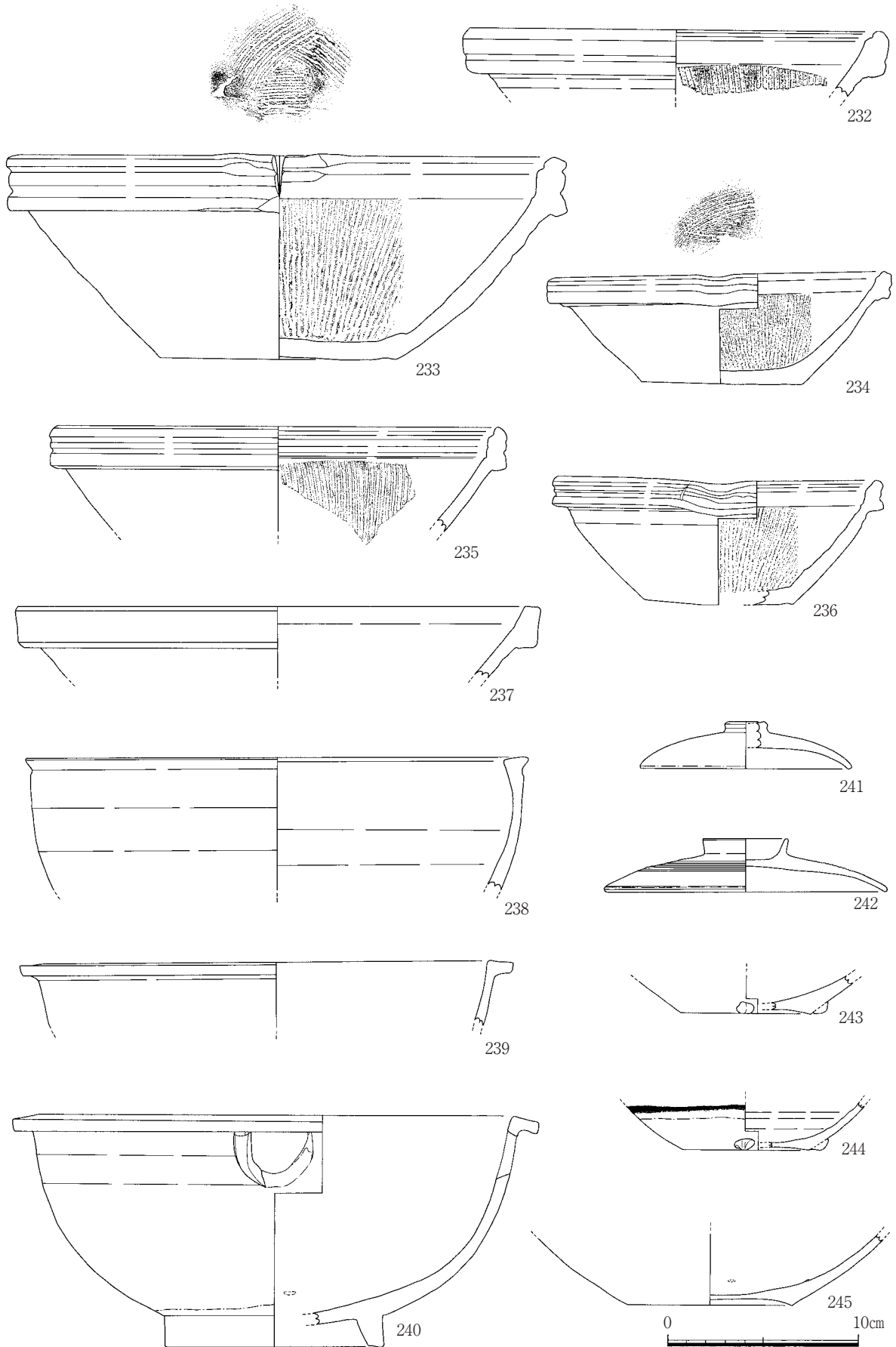


Fig.32 一括廃棄遺物実測図 (陶器3)

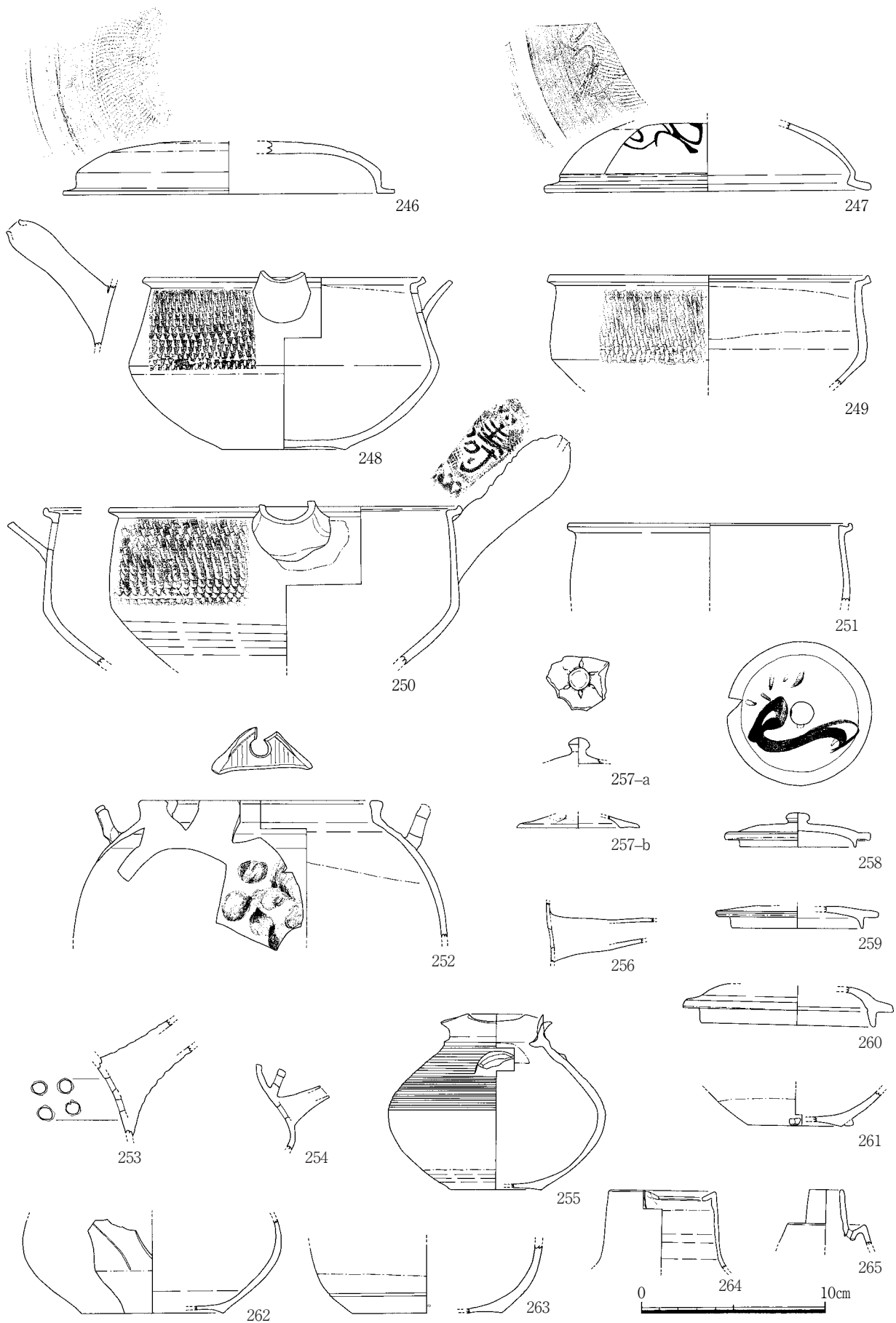


Fig.33 一括廃棄遺物実測図 (陶器4)

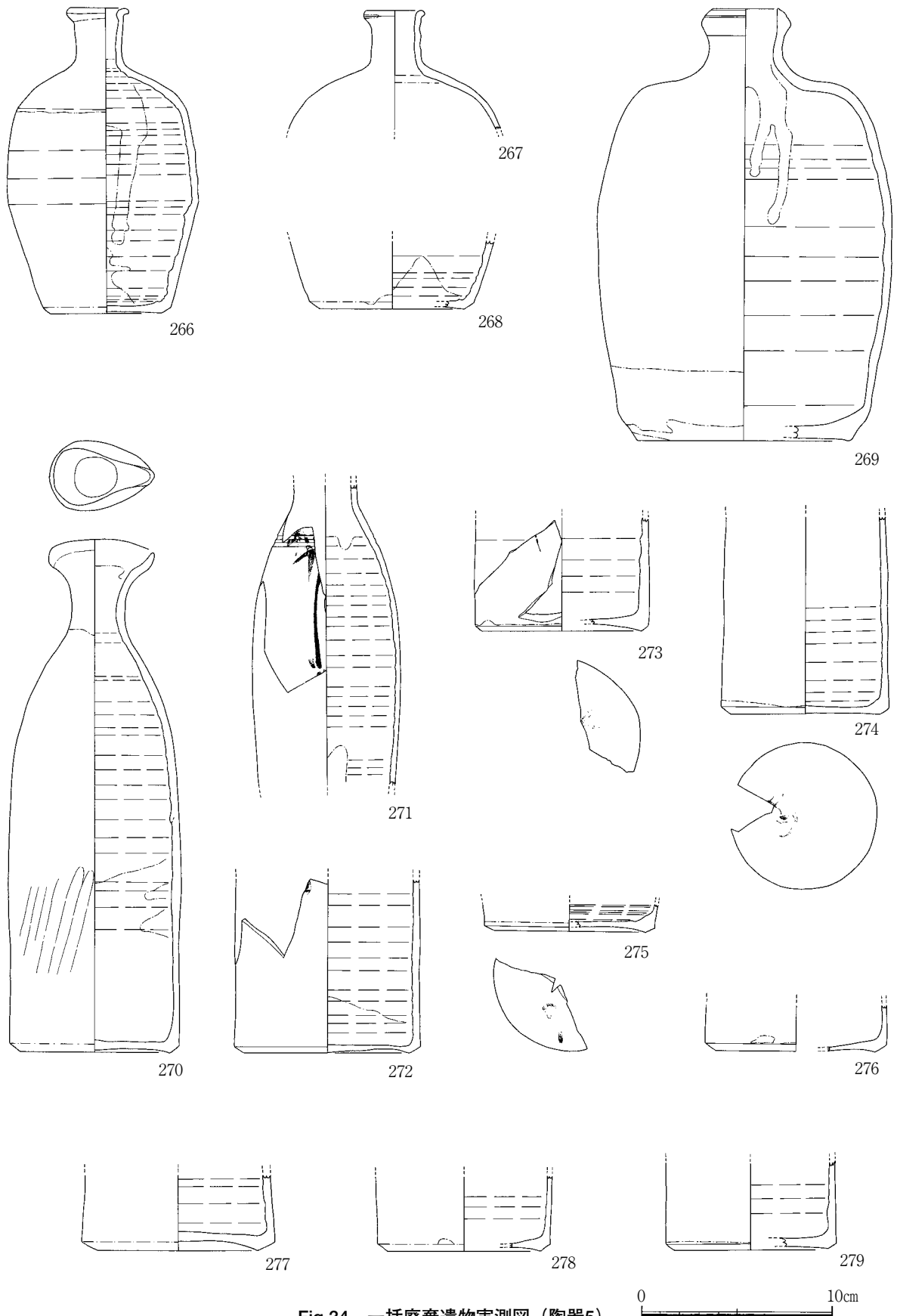


Fig.34 一括廃棄遺物実測図 (陶器5)

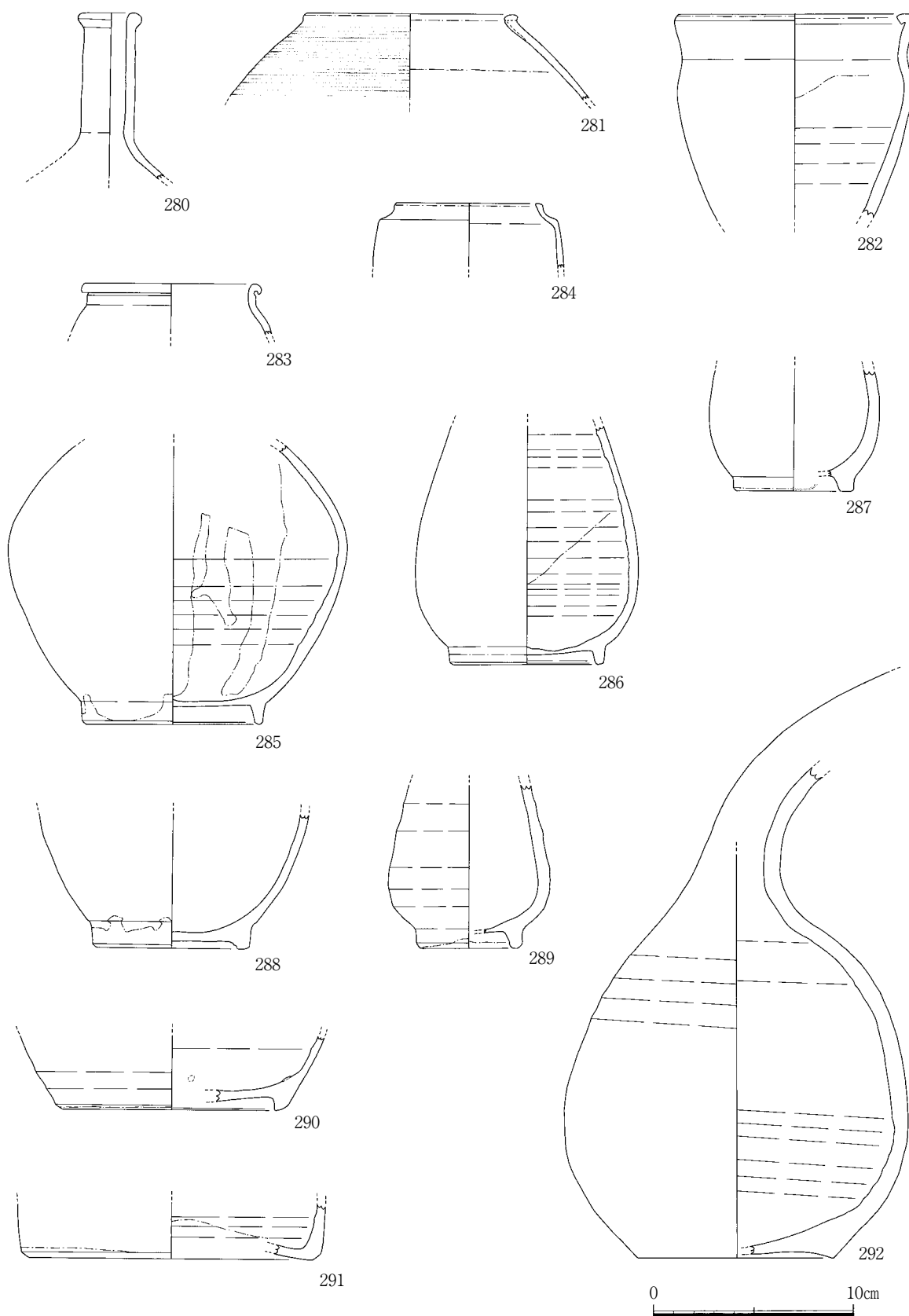


Fig.35 一括廃棄遺物実測図（陶器6）



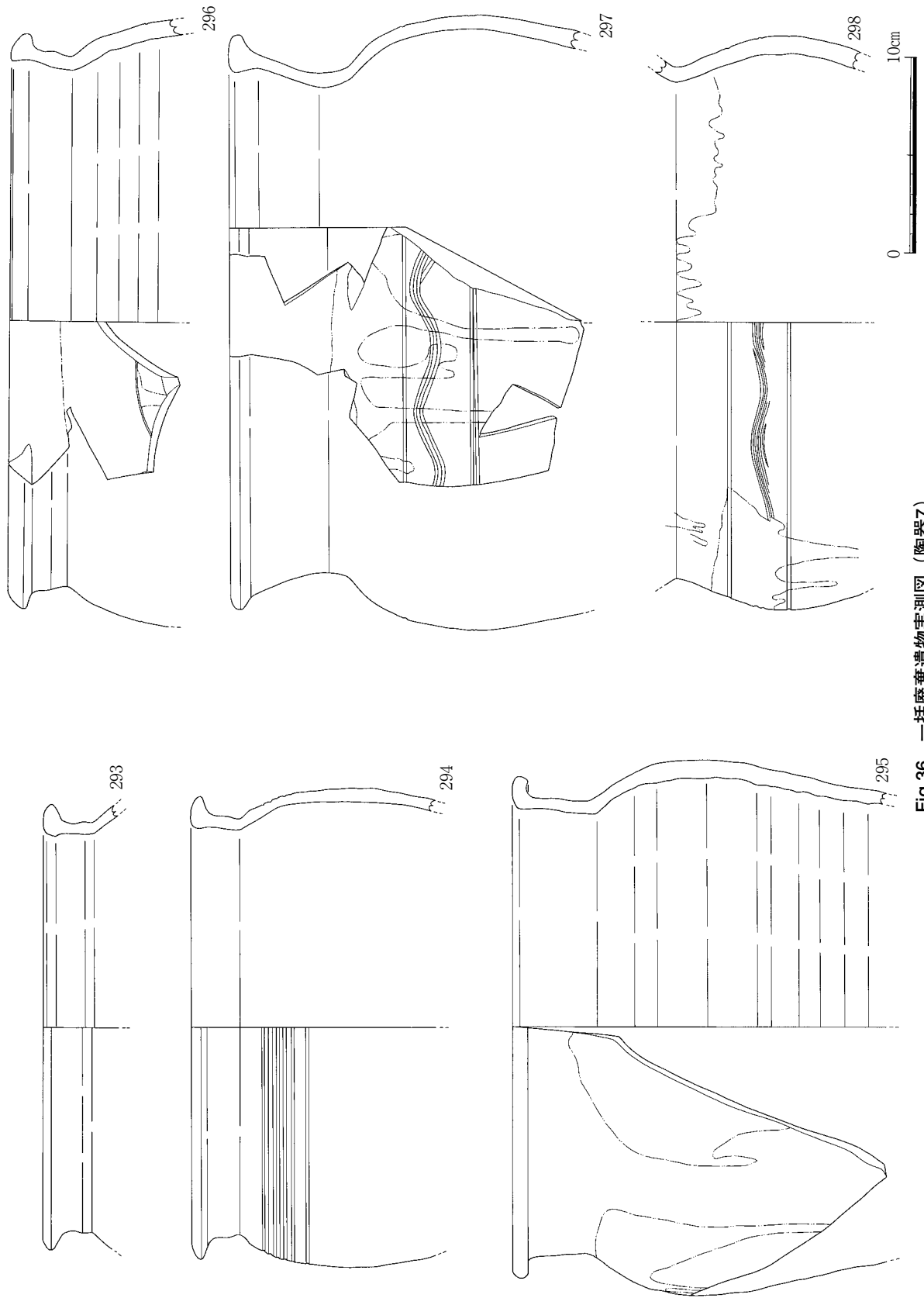


Fig.36 一括廃棄遺物実測図(陶器7)

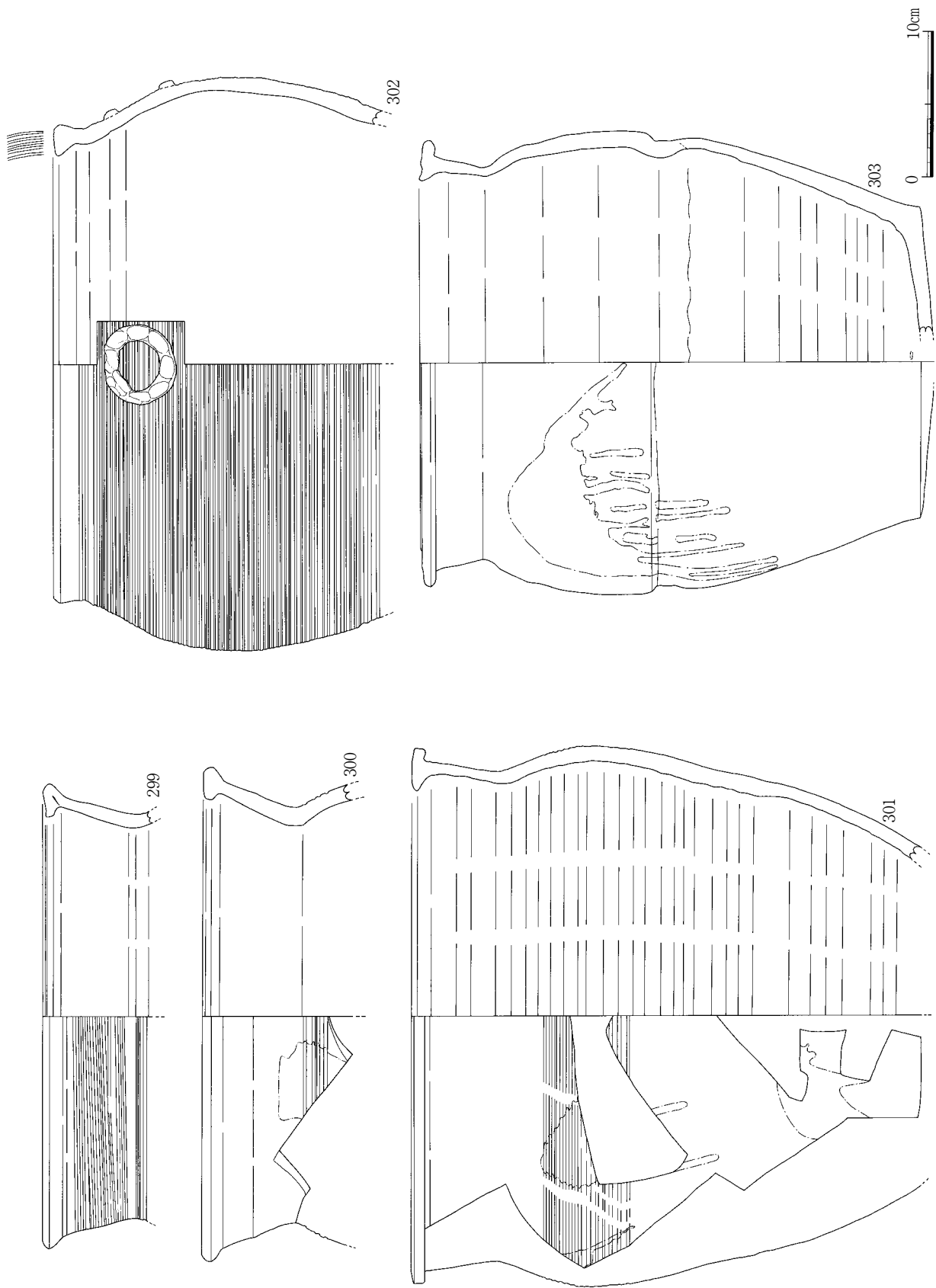


Fig.37 一括廃棄遺物実測図 (陶器8)

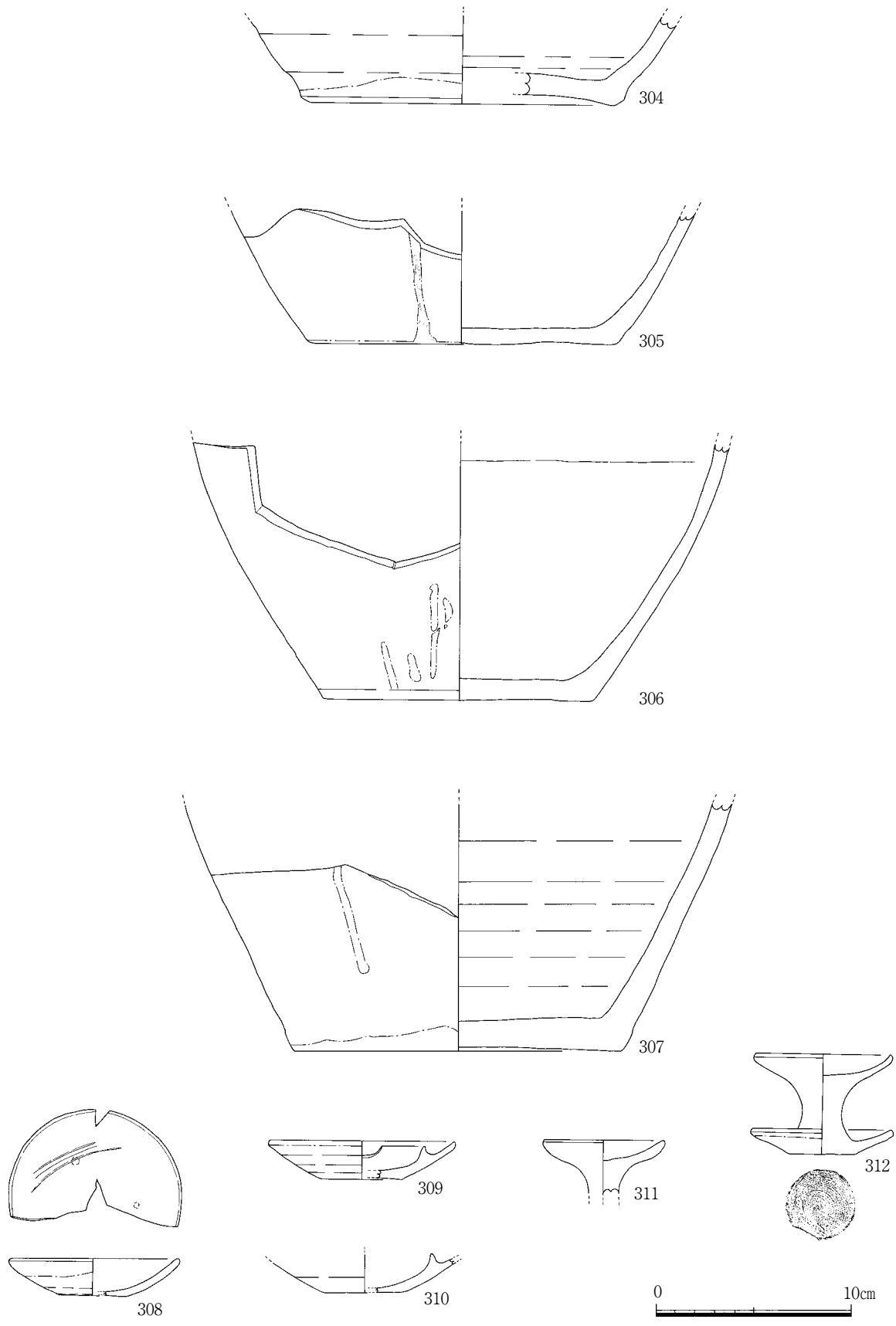


Fig.38 一括廃棄遺物実測図 (陶器9)

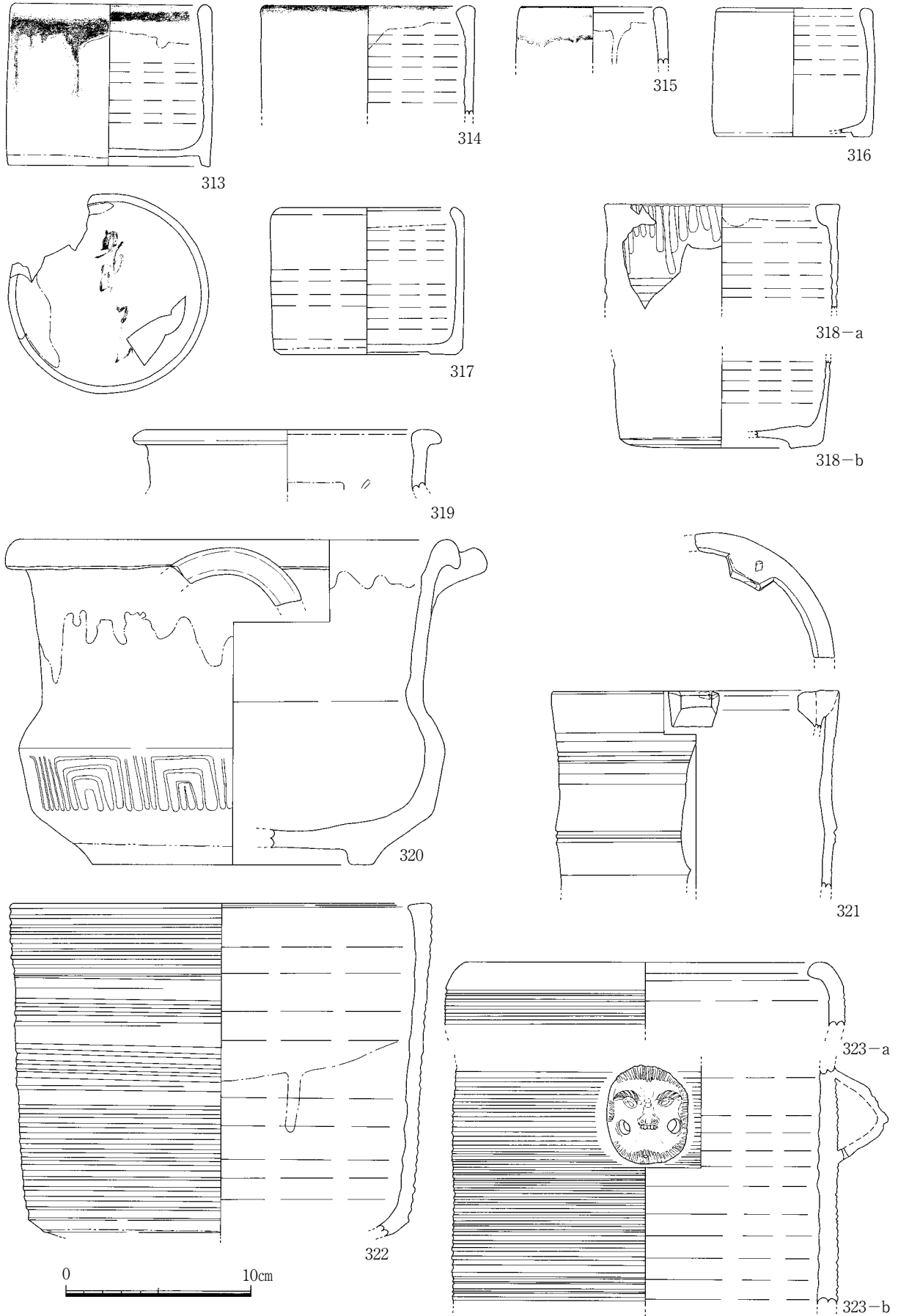


Fig.39 一括廃棄遺物実測図 (陶器10)

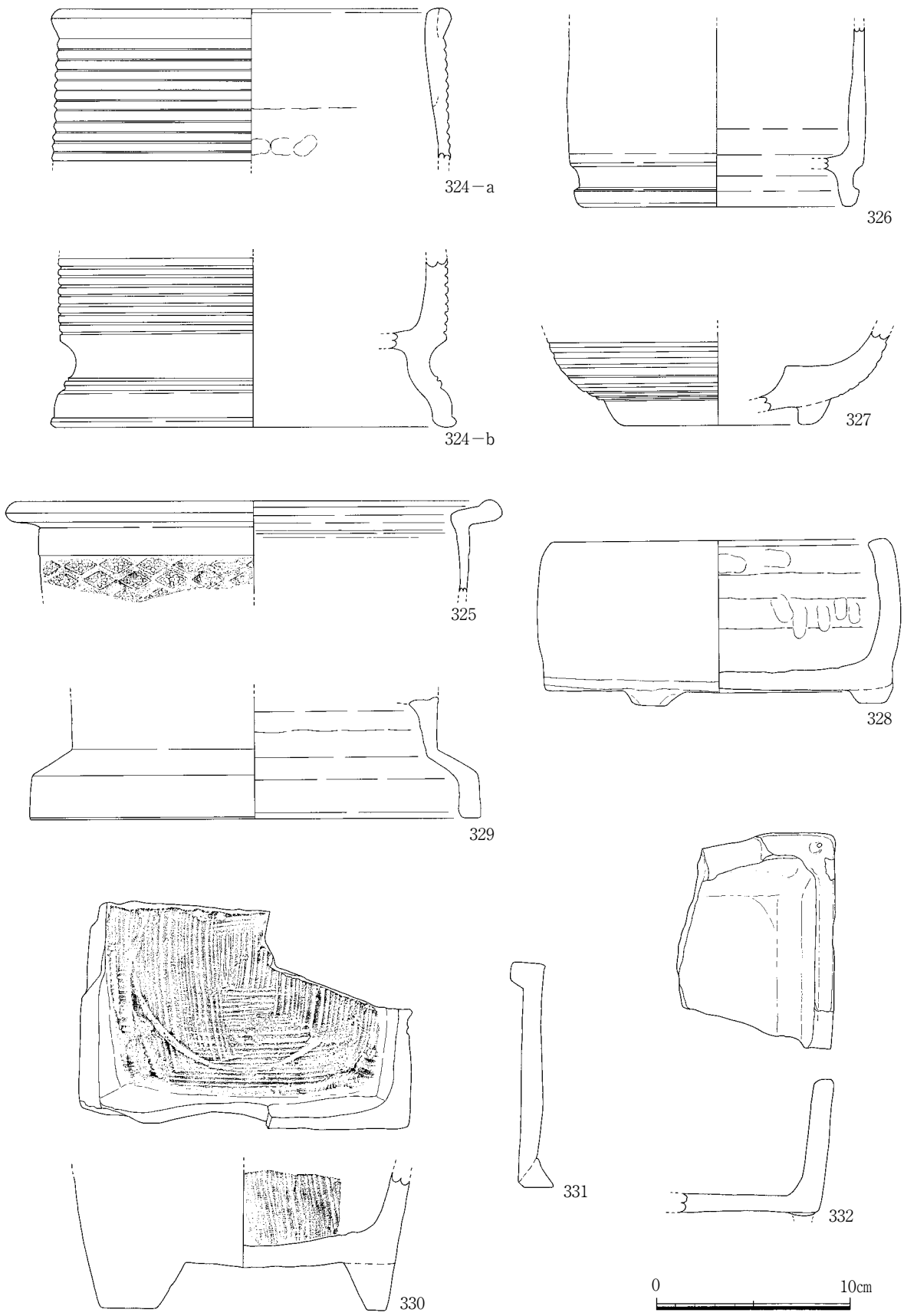


Fig.40 一括廃棄遺物実測図 (瓦質土器)

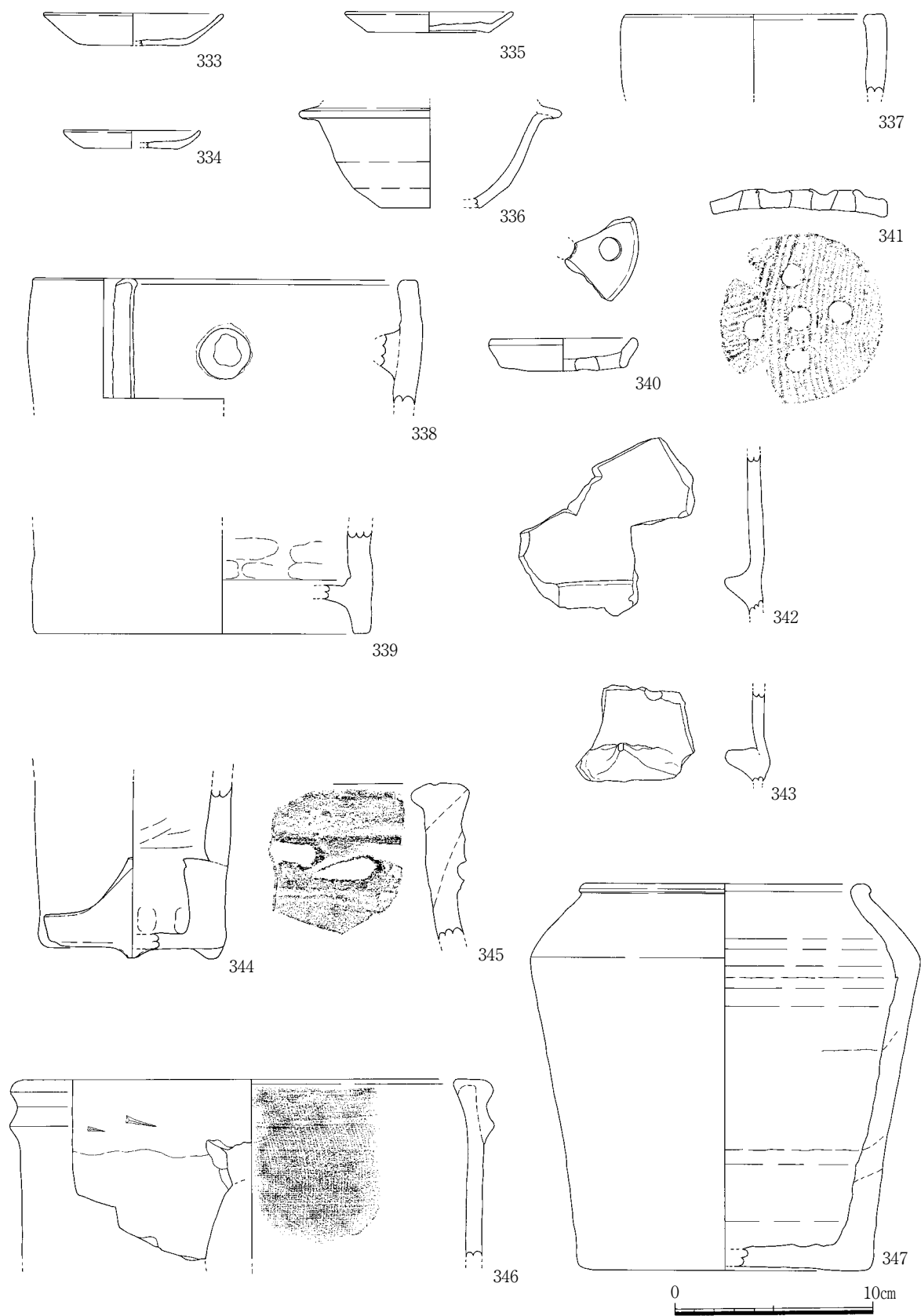


Fig.41 一括廃棄遺物実測図（土師質土器）

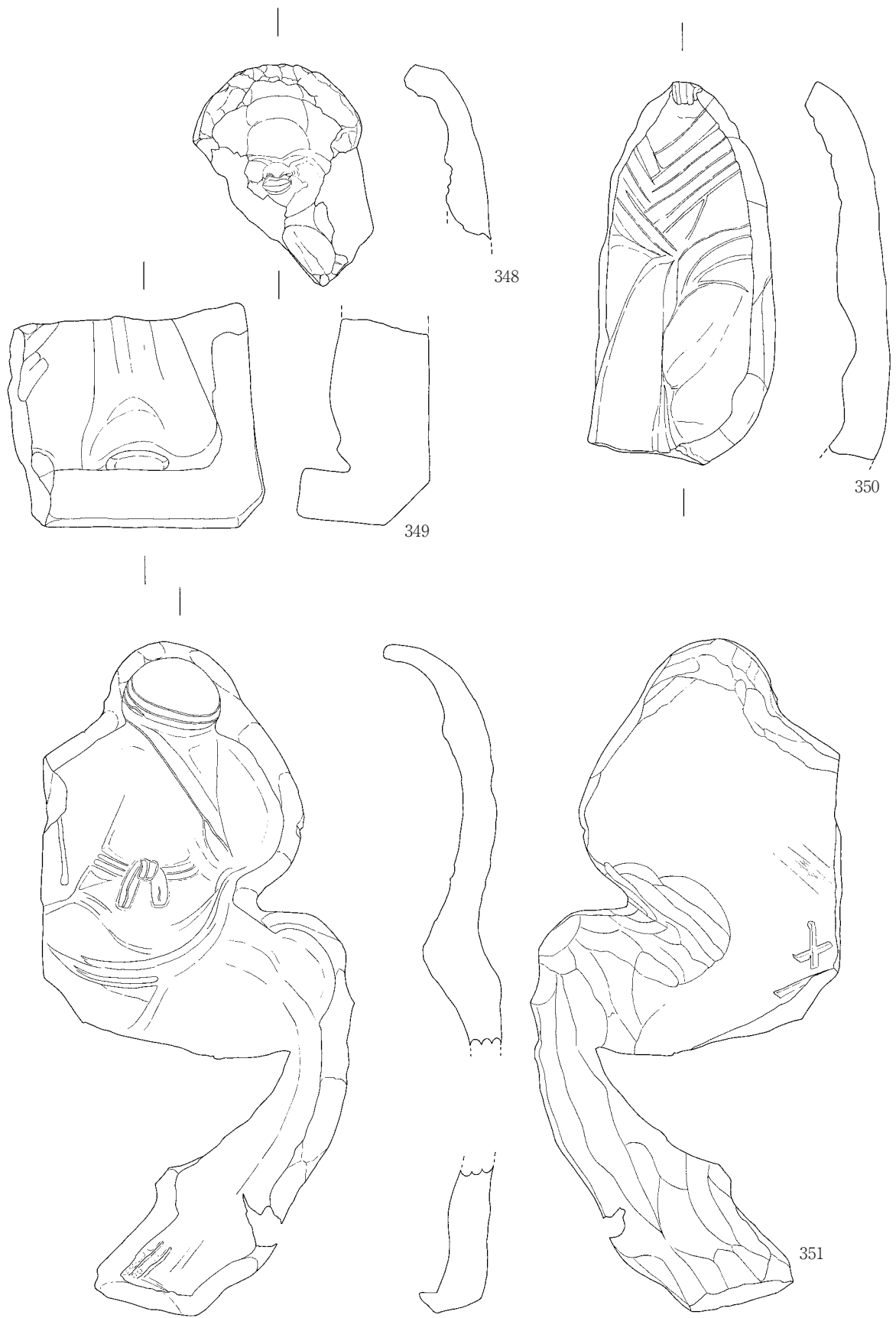


Fig.42 一括廃棄遺物実測図（土人形型1）

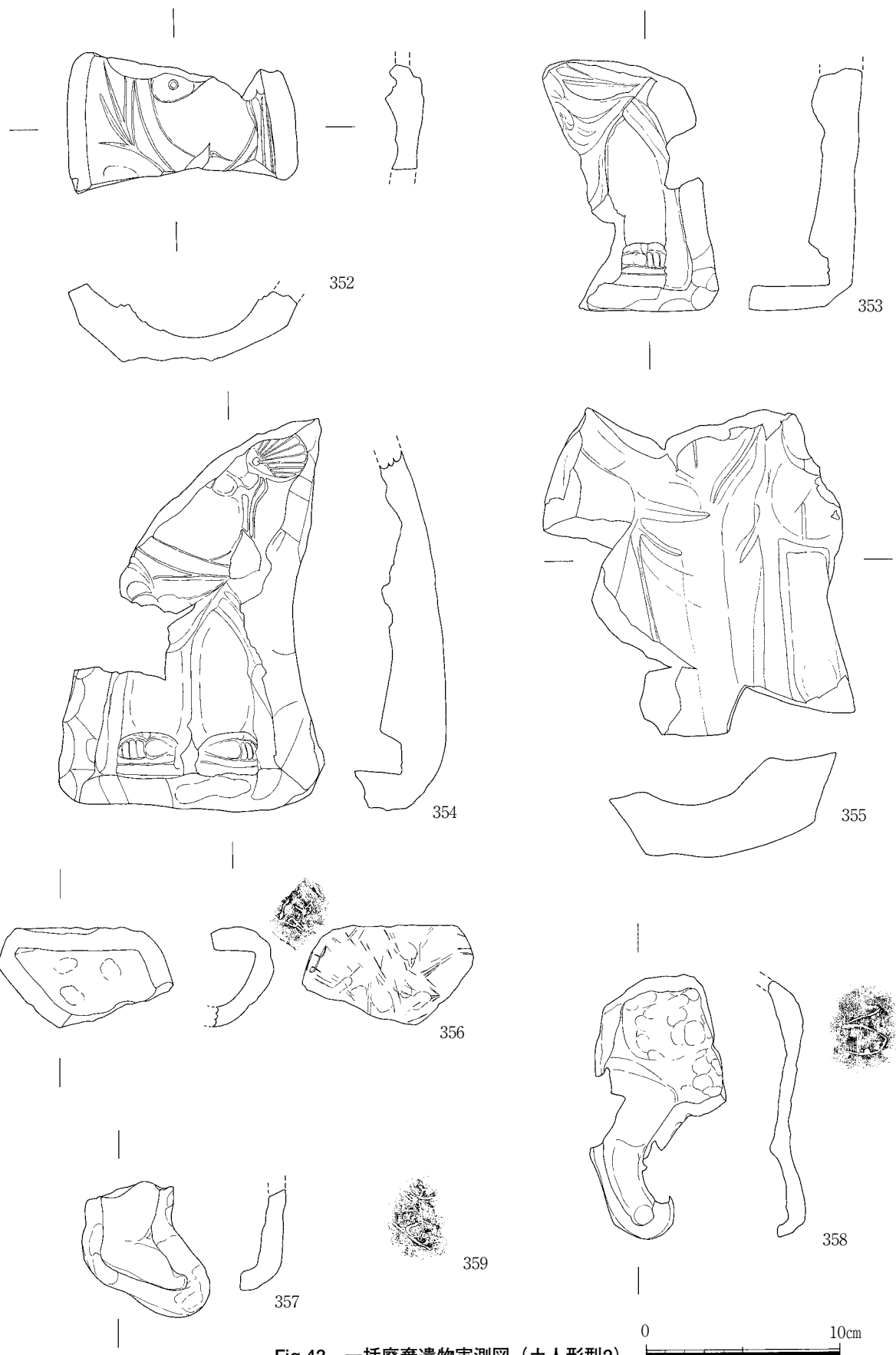


Fig.43 一括廃棄遺物実測図（土人形型2）



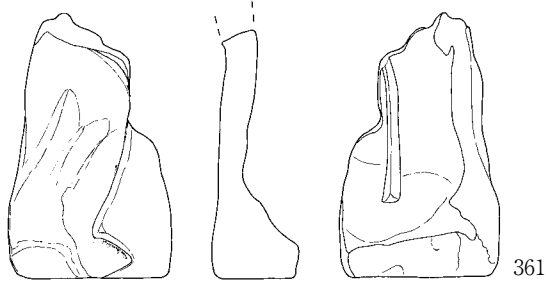
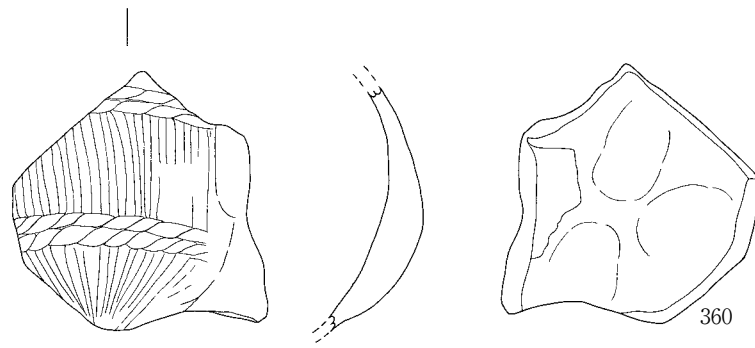
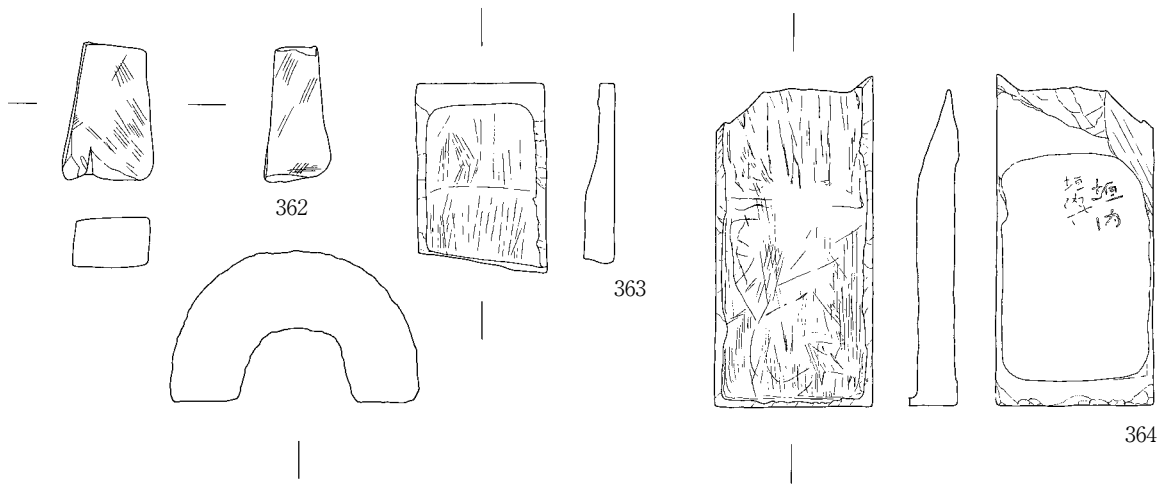
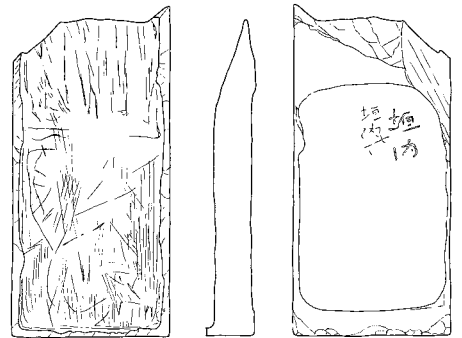


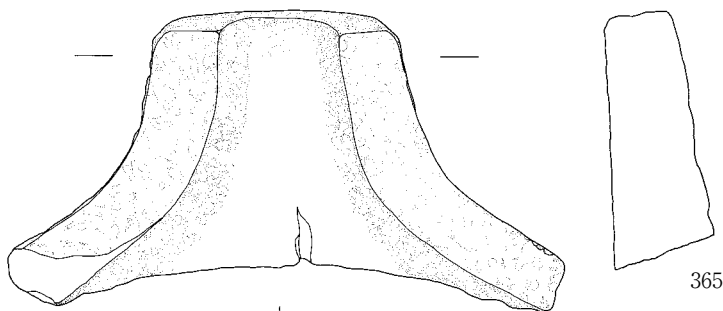
Fig.44 一括廃棄遺物実測図（土人形）（実寸）



363



364



365

Fig.45 一括廃棄遺物実測図（石製品）



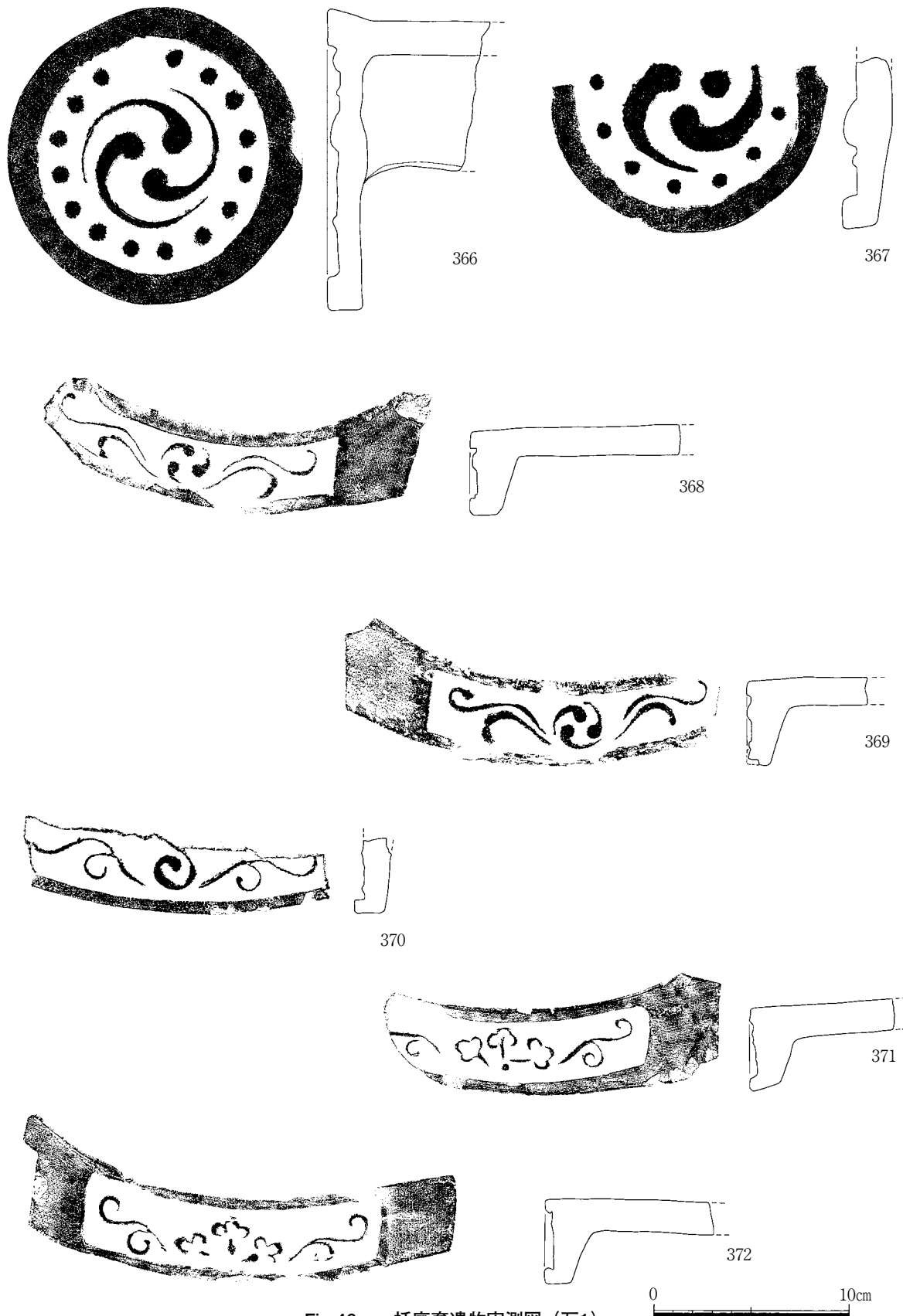


Fig.46 一括廃棄遺物実測図 (瓦1)

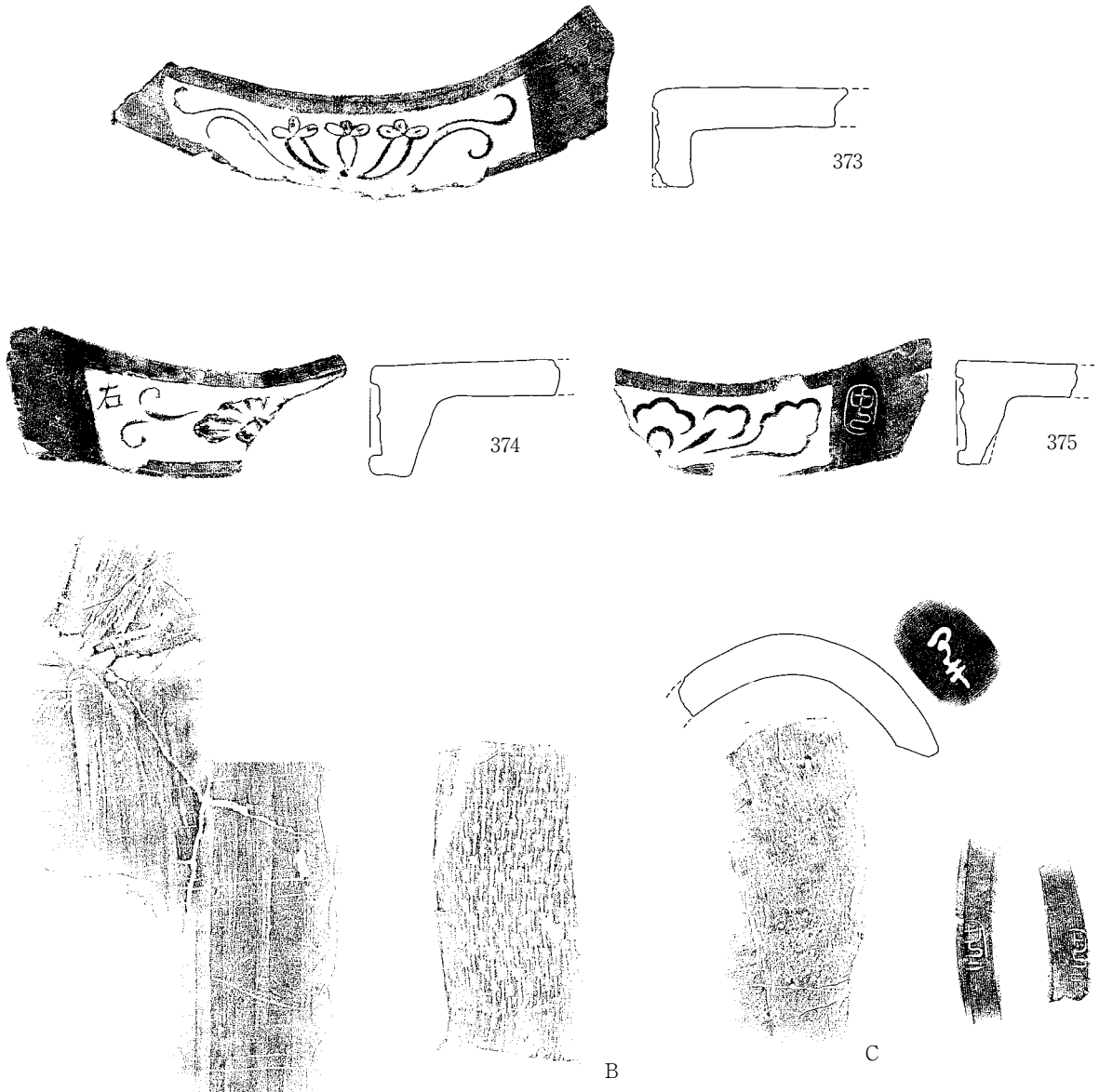


Fig.47 一括廃棄遺物実測図 (瓦2)

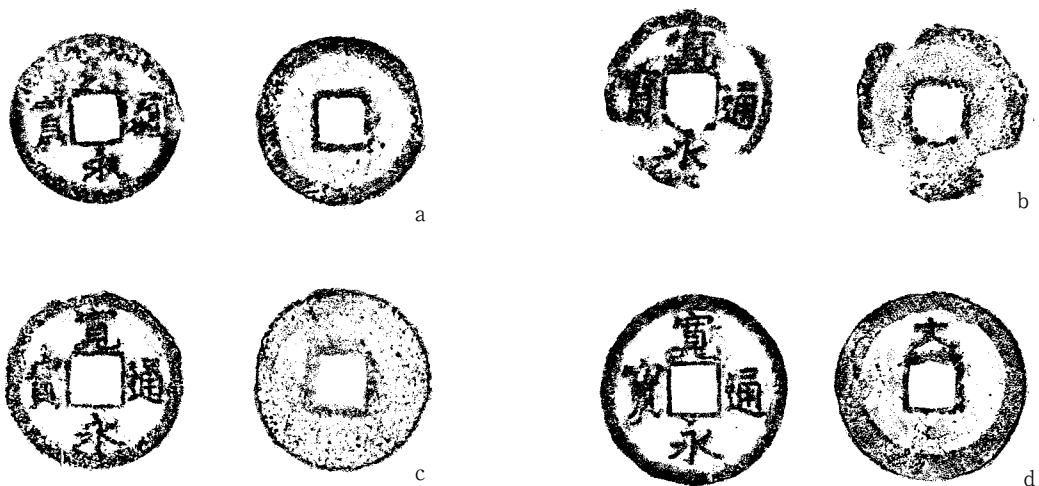


Fig.48 一括廃棄遺物 (古銭) (実寸)

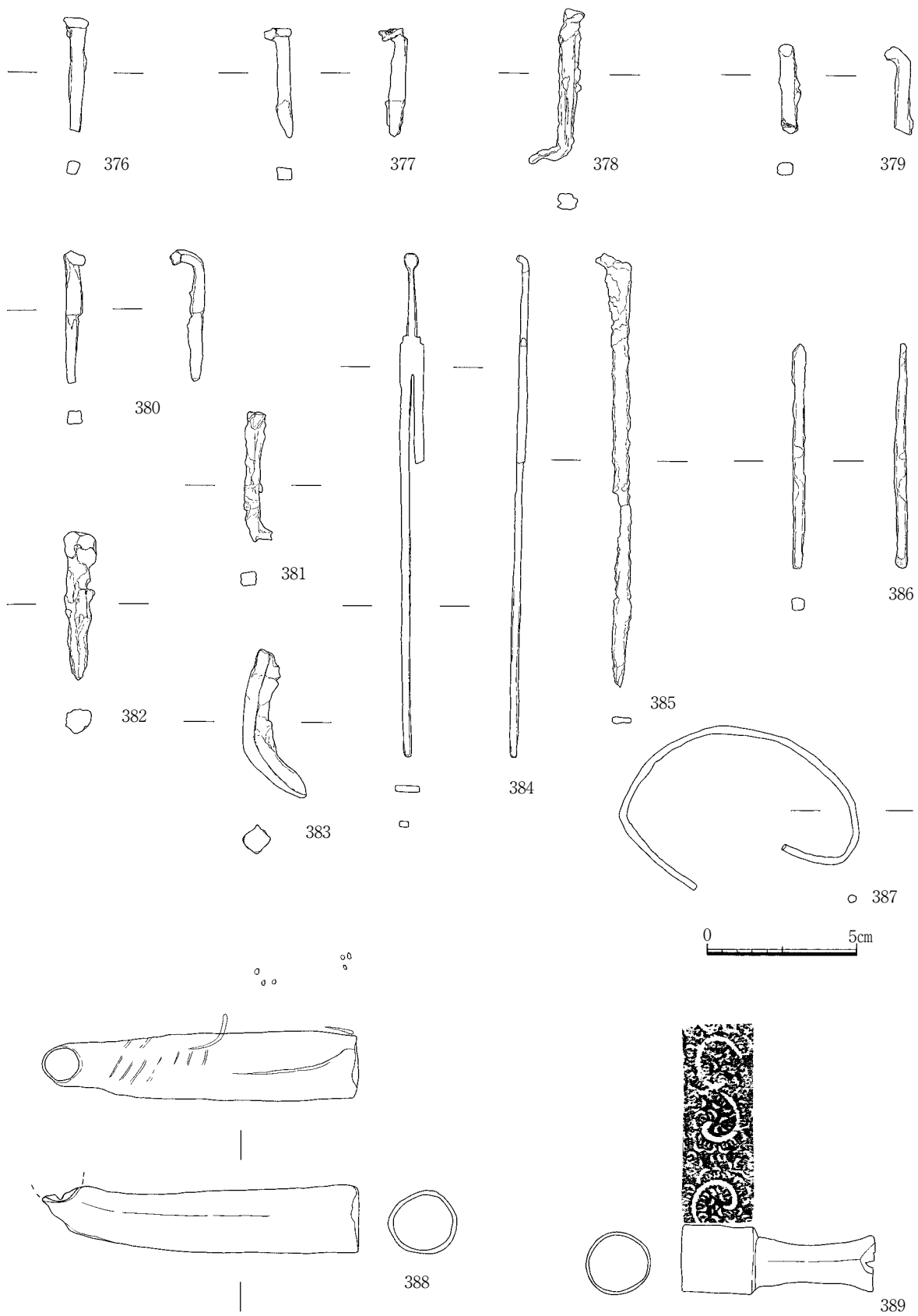


Fig.49 一括廃棄遺物実測図（金属製品）

## 2. Ⅱ区の調査

### (1) 基本層準 (Fig.50)

調査区の東壁で層準を観察した。基本的な層序は以下の通りである。

I層：耕作土（灰色土、Ⅱ区北は畑、南は水田である。）

Ⅱ層：赤褐灰色土（旧耕作土及び床土）

Ⅲ層：黒褐色粘質土（黒ボク）。調査区のはほぼ全面に認められるが、調査区北東部は削平を受け非常に薄い。弥生～中近世の遺物を疎らに包含している。

Ⅳ層：黒褐色火山灰土（黒ボク）調査区中央部に10～30cm前後の堆積が認められる。

Ⅴ層：赤黄色火山灰土（赤ホヤ）調査区中央部に10～20cm前後の堆積が認められる。

Ⅵ層：黒灰褐色粘質土

Ⅶ層：黄灰褐色粘砂土（地山。1～6cm大の砂岩礫を多量に含む）

Ⅷ層：基盤礫層。長岡台地を形成する更新世扇状地の層準である。拳大から人頭大の砂岩礫が主体を占める。

Ⅱ区では基盤礫層が北部で高く、中央部で落ち込み南部に向かってやや高さを増している。Ⅰ区からの基盤礫層の変化をみれば、小規模な起伏を持ちながら南北に続いており、Ⅱ区との境から急激に南に向かって落ち込んでいる。中央部のセクションをみるとⅥ層堆積以後のⅢ～Ⅳ層については、ほぼフラットに堆積している。Ⅱ区北東部及び南東部ではⅡ層以下が削平を強く受け耕作土直下に礫層が認められる。遺物包含層はⅢ層黒褐色粘質土であり、弥生土器・須恵器・土師質土器などの細片を疎らに包含している。遺構検出面は北部から中央部にかけてはⅤ層上面、南部はⅦ層上面である。検出遺構は溝跡2条・自然流路1条・ピット20個・土坑2基・集石遺構3基・性格不明遺構4基である。遺構検出面の標高は北部から中央部にかけては29.0m前後、南部は29.6m前後である。

### (2) 遺構と遺物

#### ① 検出遺構

##### SK5 (Fig.51)

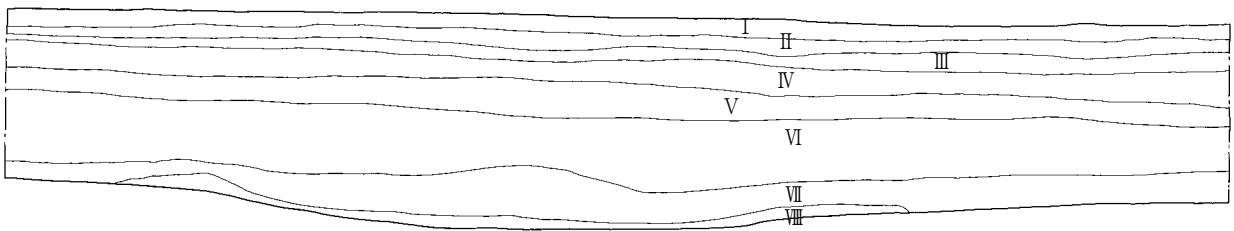
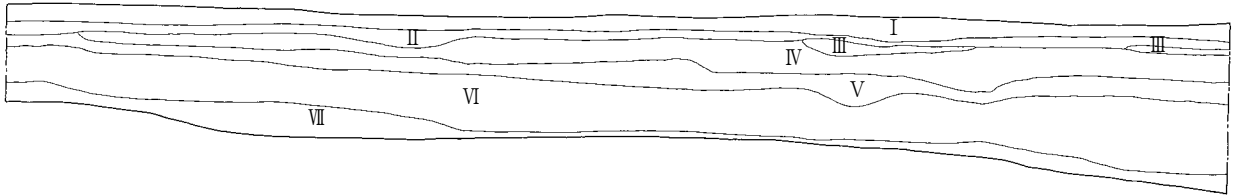
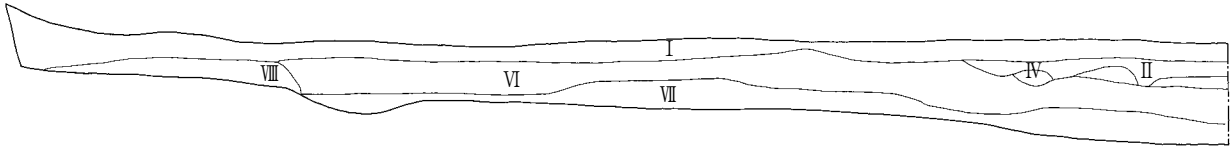
調査区の西部にあり、SD5を挟みSK6の東隣に位置する。平面形は直径1.6mの円形を呈し、深さは60cmを測る。断面形は箱形で、壁及び底部は厚さ5～6cmの黄色粘土で固めている。また、外周には拳大（10～15cm大）の円礫による環状の列石が認められる。埋土は黒灰色粘質土層と、下部に5～15cm大の円礫を含む暗灰色粘土層が認められる。出土遺物はない。

##### SK6 (Fig.51)

調査区の西部にあり、SK5に隣接する。平面形は直径2.0mの円形を呈し、深さは60cmを測る。断面形は箱形で、壁及び底部は厚さ5～6cmの黄色粘土で固めている。SK5とは異なり、外周には列石は認められない。埋土は第Ⅰ層が灰色粘質土、Ⅱ層以下には黄色粘土及び円礫が含まれる。特に、

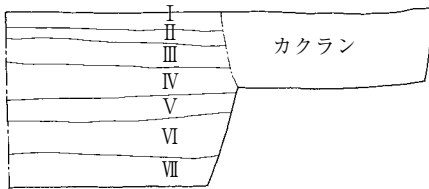
D.L.: 29.8m

II区東壁セクション (北部)



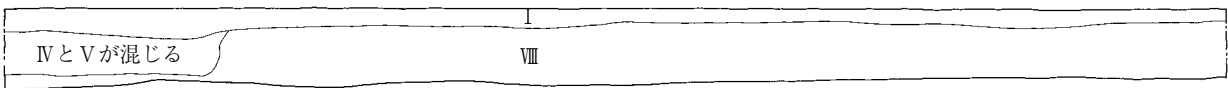
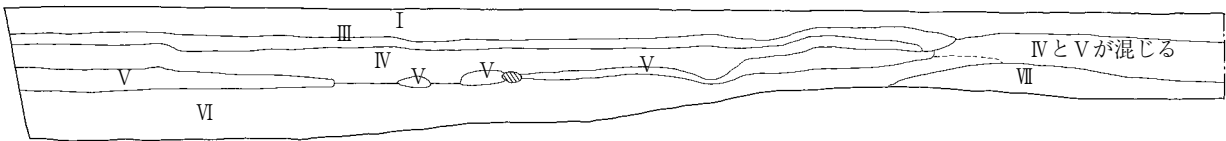
D.L.: 29.8m

- I層: 灰色土 (耕作土)
- II層: 赤褐灰色土 (旧耕作土及び床土)
- III層: 黒褐色粘質土 (黒ボク、包含層)
- IV層: 黒褐色火山灰土 (黒ボク)
- V層: 赤黄色火山灰土 (赤ホヤ)
- VI層: 黒灰褐色粘質土
- VII層: 黄灰褐色粘砂土 (地山。1~6cm大の砂岩礫を含む)
- VIII層: 基盤礫層



D.L.: 29.8m

II区東壁セクション (南部)



D.L.: 29.8m

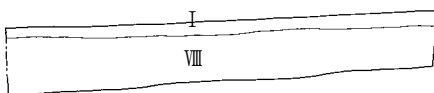


Fig.50 II区基本層準

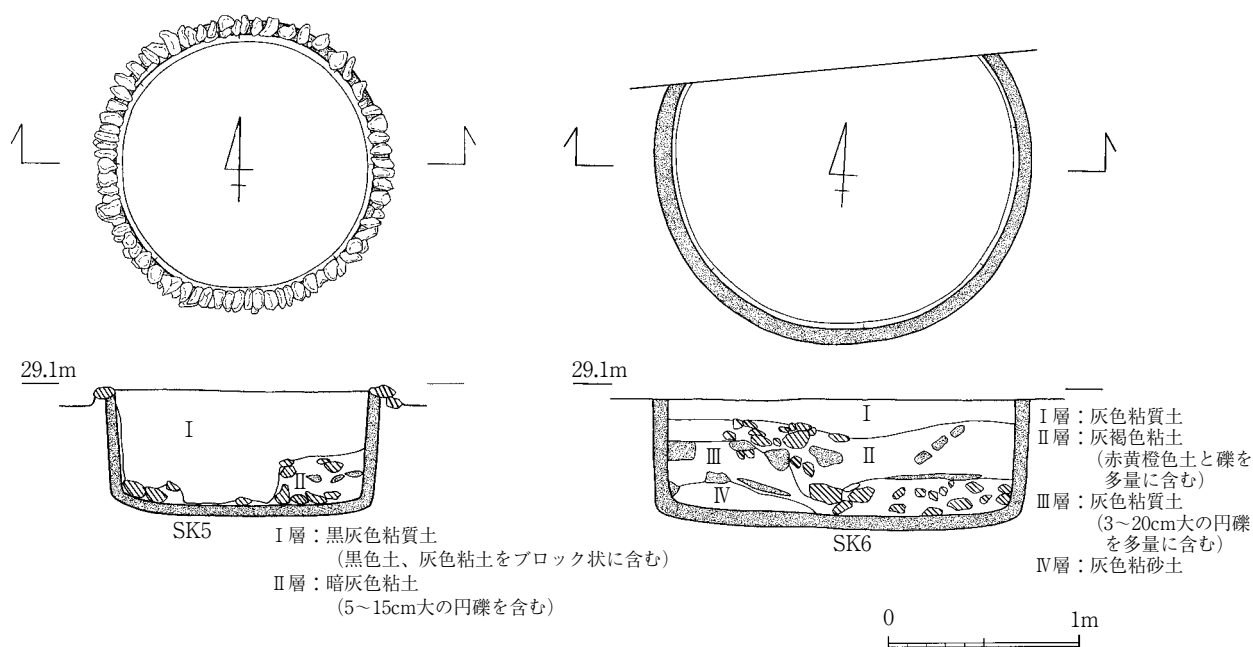


Fig.51 II区 SK5・6 平面図・セクション図

第II層灰褐色粘質土には黄色粘土が多く含まれており、上部が崩落して堆積したものである。出土遺物は近世磁器1点、瓦（平瓦）片4点である。

#### SD4 (Fig.52)

調査区北よりに位置し、東西方向に延びる溝である。SD4の西端部で現用水路とほぼ同じ位置・方向で流れている自然流路SR1に合流する。主軸方向はN-75°-Eであり、旧地形が東側から西側に向けて下がっていることから東から西へ流れていたものと考えられる。SD4の東部及び中央部で断面をみれば断面不定形ではありながらも北側は舟底状を呈する。埋土は、調査区のほぼ全域にわたり堆積が認められる黒褐色土（黒ボク）であり、やや粘性がある。南側は灰色から灰褐色を呈する砂礫層が認められ、ある一定の流れがあったものと考えられる。出土遺物は埋土II層中より、中国染付の皿 (Fig.54No.391) が1点出土している。また、SR1との合流部においては同じ磁器染付の碗 (Fig.54No.390) が出土している。No.391は外面に牡丹唐草が認められ小野正敏分類によるB1Ⅷ群の端反り皿である。15世紀後半から16世紀代の所産であることからこの段階まで溝として機能していた可能性がある。

#### SD5 (Fig.52)

調査区中央部西よりに位置し、南北方向に延びる溝である。南端は、陣山送信所跡を区画する溝によって削平されている。主軸方向はN-11°-Wであり、上端最大幅0.84m、深さ0.38m前後を測る。プランは北端と南端でやや開口し、中央部は幅0.46mと狭くなる。北端は現用水路下を流れているSR1に切られているものと考えられる。遺構埋土は黒褐色粘性土の単統一層である。出土遺物は弥生後期土器の細片が26点・須恵器4点が出土しているが図示し得るものはなかった。SD5の底部標高は南端で28.6m、北端で28.7を測り、ほぼフラットである。

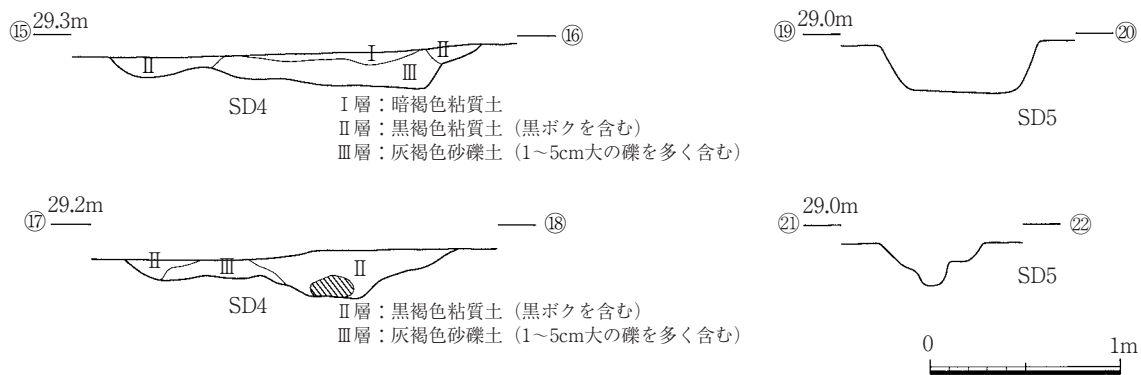


Fig.52 II区 SD4・5 セクション図・エレベーション図

### SX1 (Fig.53)

調査区中央部南よりに位置する。プランはほぼ円形であり、直径1.4mを測る。東半分は砂礫層が半円形状に認められ、西半分は黒褐色土（黒ボク）が同じく半円形状に認められる。断面形はU字形を呈し、深さは0.52mを測る。断面で見ると黒褐色土（黒ボク）が下層礫層の下に入り込み、礫層を隆起させている。倒木痕であると考えられる。出土遺物は皆無であった。

### SX2 (Fig.53)

SX1の東側に位置する。主軸方向は、N-45°-Eであり、プランは不整形で長軸1.5m、短軸1.35mを測る。SX1と同様、東半分は砂礫層が半円形状に認められ、西半分は黒褐色土（黒ボク）が同じく半円形状に認められる。断面形はU字形を呈し、深さは0.55mを測る。倒木痕であると考えられる。

### SX3 (Fig.53)

SX2の東側に位置する。プランは円形であり、直径1.5mを測る。西半分は砂礫層が半円形状に認められ、東半分は黒褐色土（黒ボク）が同じく半円形状に認められる。断面で観察すると、西半分はテラス状になっているが東半分の黒褐色土（黒ボク）が下層礫層の下に入り込み、礫層を隆起させているためである。前述したSX1・2と同様、倒木痕であると考えられる。

### SX4 (Fig.53)

SX2、SX3の南側に位置する。主軸方向は、N-45°-Eであり、プランは長楕円形で長軸2.2m、短軸1.2mを測る。北側に幅30cm前後のテラスがあり、テラス上端から最深部まで27cmを測る。断面形はU字形を呈し、深さ50cmを測る。

### SS2 (Fig.53)

SX1の北側に位置する。直径5～25cm前後の円礫をほぼ円形に敷き詰めている集石遺構である。石質は全て砂岩礫である。IV層の黒褐色土（黒ボク）上面に並べている。I区のSS1と同様であるが、集石の度合いや石の大きさが均一性に欠けている。性格は不明である。



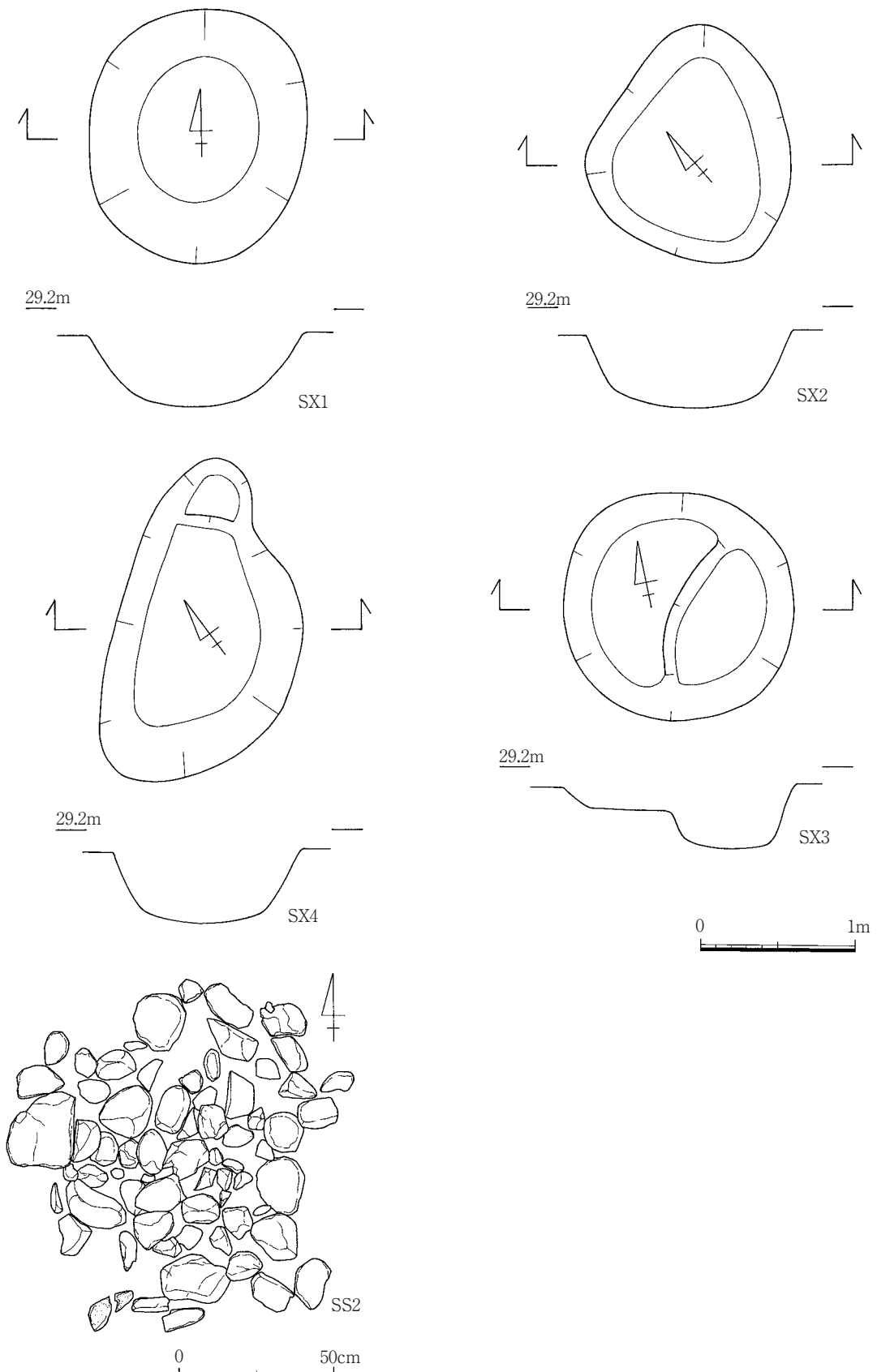


Fig.53 II区SX1~4 平面図・エレベーション図及びSS2集石図

## 陣山送信所跡遺構

Ⅱ区の南部は冒頭でも触れたとおり、第二次世界大戦中（1941年）に高知海軍航空隊に関連する送信所施設が建てられていた場所であり、発掘調査で施設を区画していたと思われる側溝及び施設に伴う柱跡（電柱）と思われる穴を検出した。施設を区画すると思われる溝跡は施設北東隅角部にあたり、調査区西端から東方向に29.8m延びた所で南へほぼ直角に曲がり、南方向に20.4m延びた所まで確認された。側溝部及び施設内の検出面上には多数の弾薬類が散乱していた。調査区北西側でトレンチを設定し確認を行った結果、施設内と考えられる調査区の南西部は、基底礫層まで削平し施設本体部を造成する段階で大きく削り取られており、終戦後の1945年の爆発事故の後、再度、埋め戻されているものと考えられる。埋め戻された土中には多数の弾薬類、（砲弾・機関砲の弾・信管など）が検出されている。出土した弾薬類については南国署を経由して陸上自衛隊爆発物処理班に送られた。

### 側溝（Fig.5）

Ⅱ区の中央部南よりに位置する。先述した送信所施設の北東部を区画する側溝である。調査区の東よりでほぼ直角に曲がる。東西方向29.8m、南北方向20.4mを検出した。幅は上端で1.2m前後を測る。検出面上で弾薬類が検出されたためトレンチ一部を掘って深さを確認するに留まった。深さは1.2m前後を測る。埋土は直径20cm前後の砂礫土が主であるが、埋土中には弾薬類（砲弾・機関砲の弾・棒火薬・信管）、施設廃材（煉瓦・ガラス片等）が含まれていた。

### 送信所柱穴（Fig.5）

Ⅱ区の中央部西よりに位置する。東西方向に長軸をもつ長方形の穴であり、長軸1.34m、短軸1.12mを測る。深さは75cmほど掘り下げたが、弾薬類が多量に認められたため途中で掘り下げを中止した。かなり地中深く掘り込まれているようである。埋土中には弾薬類（砲弾・機関砲の弾・棒火薬・信管）、施設廃材（煉瓦・ガラス片・木材等）が含まれていた。

送信所施設内については、危険が伴うため一部のトレンチ調査に留まった。トレンチでは図示した砲弾（Fig.54）を含め信管が抜かれている砲弾を合計3点検出した。その他弾薬類については、信管・機関砲の弾・薬莖・棒火薬などが認められた。また、施設の廃材である煉瓦や瓦、ガラス片・木材等も検出された。

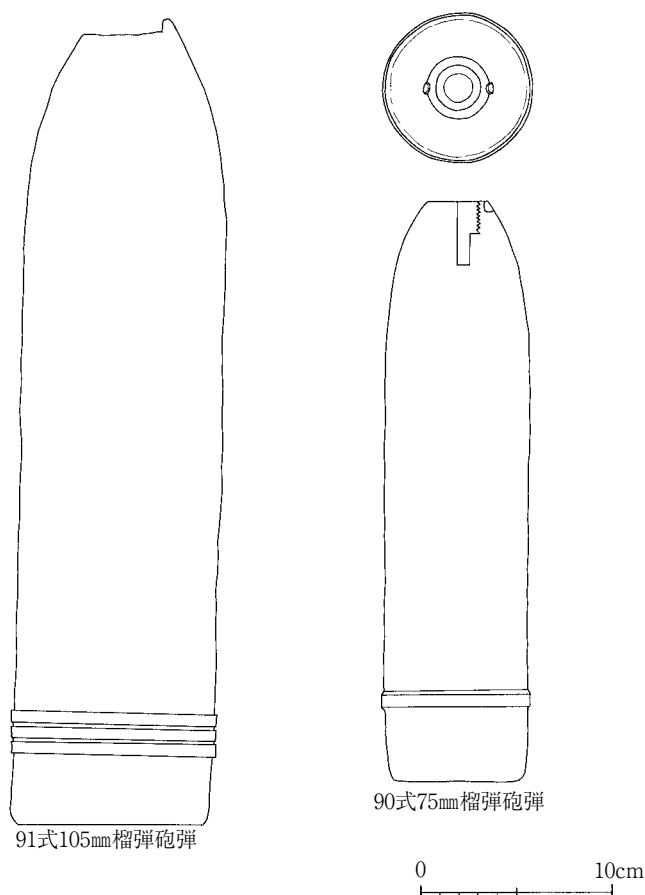


Fig.54 送信所跡出土遺物実測図

## ②出土遺物 (Fig.55)

Ⅱ区の出土遺物は細片を含めて総点数1,224点であり、その殆どが包含層Ⅱ層・Ⅲ層からの出土である。内訳は、弥生土器184点、石器1点、須恵器24点、土師質土器片728点、陶器123点、磁器96点、金属製品（鉄釘、煙管吸口等）69点である。遺構からの出土は僅少であったが比較的SR1ではまとまった出土がみられた。

390はSR1Ⅳ層からの出土である。中国産の磁器染付碗であり、外面に十字花文が施される。口縁部は僅かに外反する。391はSD4Ⅱ層からの出土である。中国産の磁器染付皿であり、外面には牡丹唐草が施される。端反器形の皿であり、口縁部は大きく外反する。392はSR1Ⅰ層からの出土である。白磁の皿であり、断面方形の削り高台である。高台内側に鋭い抉りがあり、高台は釉がかからない。内面見込には釉剥ぎは認められない。森田勉分類によるⅢ-2類に該当する。393はSR1上層からの出土である。青磁小皿であり、淡青色の透明感のある釉が施釉されている。内面見込は蛇の目状の釉剥ぎが施され、釉剥ぎ部に砂の付着が認められる。高台は削り高台であり、畳付けと内面に砂の付着が認められる。

以下に包含層出土遺物について記述する。

### 磁器

394はⅢ層からの出土である。磁器染付の輪花小皿であり、内面に圏線と花卉状の文様が施される。

見込には布目状の圧痕が認められる。高台畳付けに砂の付着が認められる。395はⅡ層包含層からの出土である。磁器染付の猪口であり、外面に雨降り文が施される。

### 陶器

396はⅢ層包含層からの出土である。陶器の溝縁皿であり、濁ったオリーブ色の灰釉が体部上半部に施釉される。397も陶器の灰釉溝縁皿であり、灰オリーブ色をした灰釉が施釉され貫入が認められる。398はⅢ層包含層からの出土である。天目茶碗であり、黒褐色の鉄釉が施されている。外面体部下半は無釉であり、胎土は灰白色を呈する。399は灰釉の陶器小皿である。底部はゴケ底であり、灰オリーブを呈した灰釉が内面及び外面体部上半部まで施釉される。内面見込に胎土目が認められる。400も灰釉陶器小皿である。高台が付く底部から腰部がはり、体部は斜上外方に立ち上がる。高台部は無釉である。内面見込及び高台内面に砂の付着が認められる。

### 土師質土器

401は土師質小皿である。平底の底部から外側に大きく開き立ち上がる。ロクロ成形、回転ナデ調整が施され見込にロクロ目が顕著である。器壁は分厚く口縁端部は丸味を帯びる。口縁の一部に煤の付着が認められ、灯明具として使われていた可能性がある。402は土師質土器の杯か皿の底部である。ロクロ成形、回転ナデ調整が施され、内面見込にはロクロ目が顕著である。底部外面には回転糸切り痕が認められる。403は土師質の土錘である。全長5.6cm、全幅1.8cmを測り、重量は15gである。円管状の形態であり、一部に煤の付着が認められる。

### 石器

404はⅢ層包含層出土のサヌカイト製の凹基式無茎石鏃である。三角形を呈し、全長2.8cm、全幅1.5cm、全厚0.4cmを測る。

### 銅製品

405は銅製の煙管吸口である。肩の部分は欠損しており、形態は不明である。側面に接合痕が認められる。406は釣り針状の形態を持つ銅製品である。上部に直径0.6cmの円形の穿孔が認められ、陰刻による三つ巴文が3つ認められる。用途は不明である。

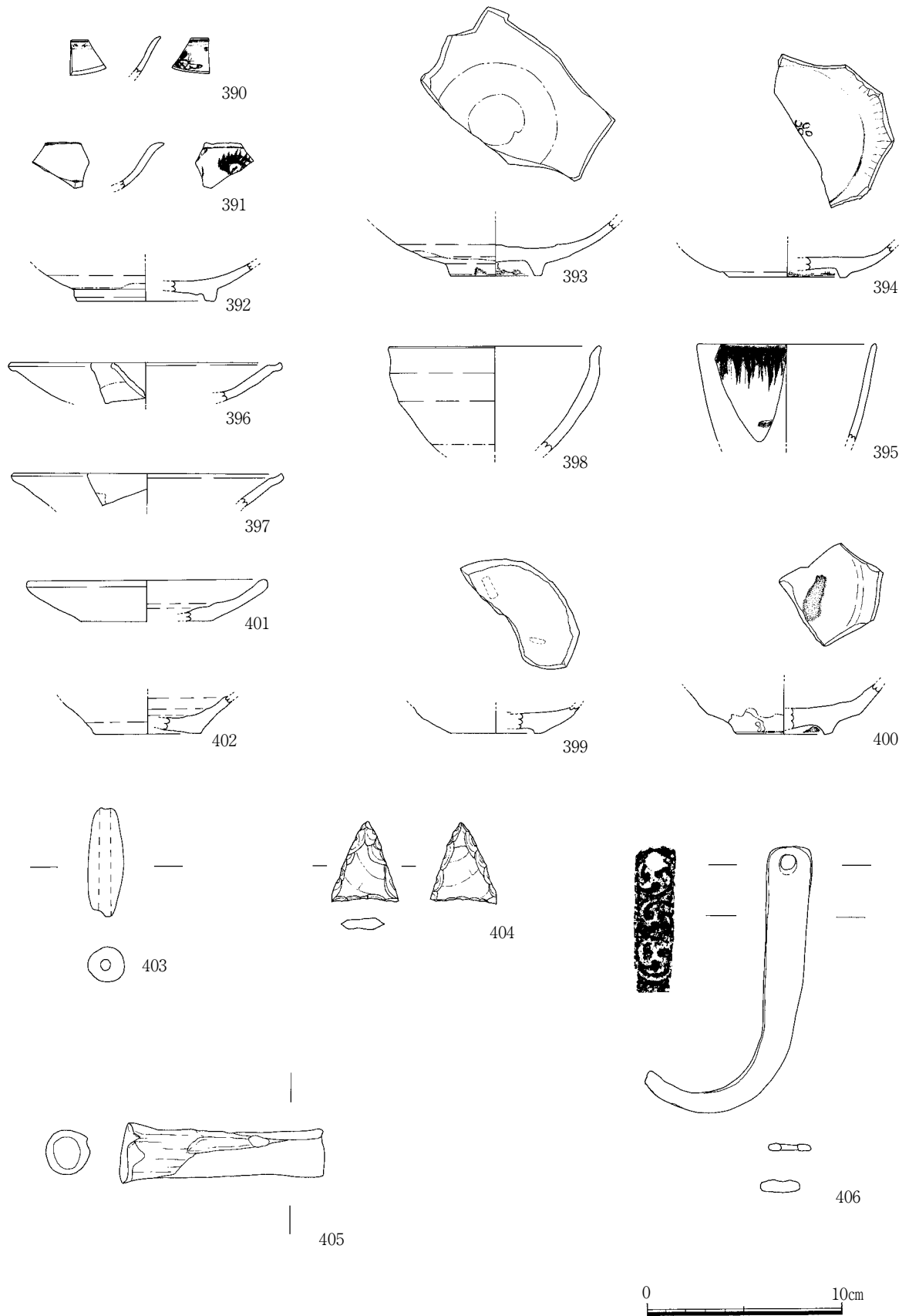


Fig.55 II区 SR1及び包含層出土遺物実測図 (404はS=1/2、405・406は実寸)

## 遺物観察表（調査Ⅰ区）

Fig. 挿図番号	出土 地点	種類	器種・ 器形	法量 (cm)				成形技法	釉葉・文様	特徴(成形・調整・釉調等)	胎土 (色・剥離面等)	生産地 生産年代	備考(銘・焼成技法・ 使用痕・他)
				口径	器高	胴径	底径						
F12-1	SD1 Ⅱ層	磁器 染付	中碗 広東形	12.0	—	—	—	ロクロ成形	(外) 草花文 (内) 二重圏線	呉須は青灰色に発色・ 外面上位に工具痕が残 る	白色・やや荒 い・円裂孔が存 在	肥前系	
〳 2	〳	〳	中碗 端反形	10.5	—	—	—	ロクロ成形	(外) 草花文 (内) 連弧文又は 波頭文の変化	呉須は酸化気味でオリ ーブ灰色に発色・透明 釉は部分的に白濁	灰白色・荒い	肥前系 1820～幕末	
〳 3	〳 Ⅲ層	〳	小碗 端反形	—	—	—	3.6	ロクロ成形 削り高台	(内) 草花文	薄手の作り・呉須は良 好な発色	白色・やや荒い	肥前系 19世紀前半 ～幕末	
〳 4	〳 Ⅱ層	磁器 白磁	小皿 菊花形	9.3	2.3	—	5.6	型打成形貼 付高台	型打による菊花 文様	花卉32弁・高台は楕円 形を呈する・釉は白濁 する	白色・荒い・円 裂孔が部分的に 存在	能茶山 1820～幕末	
〳 5	〳	磁器 染付	薄手 酒杯 端反形	5.9	—	—	—	ロクロ成形	(内) 網干・帆 掛船	薄手の作り・呉須は良 好な発色	白色・やや滑ら か	肥前系 19世紀前半 ～幕末	
〳 6	〳	陶器	香炉	8.4	—	—	—	ロクロ成形	透明釉 (灰釉)	やや灰色気味の透明の 釉・内面施釉・口唇部 釉ガキ	灰白色・やや滑 らか・石英細砂 を含む	関西系	
〳 7	〳 床	かわ らけ	小皿	5.8	0.7	—	3.9	ロクロ成形 回転糸切り	無釉	口縁部を摘み上げる	橙色・赤色風化 礫、砂岩その他 の砂粒を含む	在地	
〳 8	〳 Ⅱ層	〳	小皿	5.9	1.1	—	—	ロクロ成形 回転糸切り	無釉	口縁部を摘み上げる	橙色・赤色風化 礫、砂岩、長石 の砂粒を含む	在地	口縁の一部に煤が 強く付着
F15-9	SP1 Ⅲ層	磁器 染付	小皿 輪花形	9.0	2.5	—	5.0	型打成形削 り高台	(内) 梅花文・ 井桁文 (口) 口鏝	輪花12弁・透明釉は白 濁する	灰白色・荒い	能茶山 1820～幕末	
〳 10	〳	〳	小瓶	2.4	—	—	—	ロクロ成形	(外) 植物文	内面露胎	白色・剥離面は 滑らか	肥前 18世紀後半	
〳 11	〳	陶器	瓶蓋	笠部 径 6.3	2.5	かえり 径 4.1	—	ロクロ成形 貼付	鉛釉 (鉄釉)	かえりに粘土塊貼付・ 内面及びかえりは露胎	黄灰色・微細な 円孔が部分的に 入る	能茶山 1820～幕末	
〳 12	〳	〳	小杯 浅半球 形	6.6	3.0	—	2.6	ロクロ成形 削り高台	透明釉	高台は鋭角的な削り・ 釉はやや白濁し細かな 貫入が入る・高台無釉	鈍い黄橙色・石 英細砂を多量に 含む	能茶山 1820～幕末	[胎土分析資料J16]
F17-14	包含層 Ⅱ層	磁器 染付	中碗 端反形	10.4	—	—	—	ロクロ成形	(外) 花卉文 (内) 雷文	外面上位に工具痕が僅 かに残る・透明釉は乳 白気味	白色・荒い・気 孔は存在しない	能茶山 1820～幕末	
〳 15	〳	〳	中碗 端反形	10.4	—	—	—	ロクロ成形	(外) 窓絵・丸 内に花卉・縞と 唐草状の文様 (内) 雷文	透明釉は乳白気味	白色・荒い・小 規模な円・裂孔 が多く存在	能茶山 1820～幕末	
〳 16	〳	〳	中碗 端反形	10.4	—	—	—	ロクロ成形	(外) 窓絵・縞 と唐草状の文様 (内) 雷文		白色・荒い・裂 孔が僅かに存在	能茶山 1820～幕末	
〳 17	〳	〳	中碗 端反形	10.4	6.3	—	3.8	ロクロ成形 削り高台	(外) 丸に網目文 (内) 雷文 (見込) 宝文	透明釉は乳白気味	白色・やや荒 い・小規模な円 孔が存在	能茶山 1820～幕末	
〳 18	〳	〳	中碗 広東形	11.3	—	—	—	ロクロ成形 削り高台	(外) 菖蒲 (内) 二重圏線 (見込) 水に岩		白色・剥離面は やや荒い・小規 模な裂孔が存在	能茶山 1820～幕末	高台内「サ」銘有 り・見込陶器質の 足付ハマ跡有り・3 足
〳 19	〳	〳	中碗 端反形	—	—	—	4.4	ロクロ成形 削り高台	(外) 山水文 (内) 圏線 (見込) 水に岩	透明釉は厚掛けで水色 を帯び気泡を多く含 む・呉須は滲む	透明感を持つ白 色・滑らか	瀬戸・美濃 1820～幕末	
〳 20	〳	〳	中碗 広東形	—	—	—	6.1	ロクロ成形 削り高台	(外) 土坡の一部 (見込) 宝文	透明釉は乳白気味で細 かな貫入が入る	白色・荒い・ 円・裂孔が存在	能茶山 1820～幕末	高台内「サ」銘有 り・見込陶器質の 足付ハマ跡有り・3 足
〳 21	〳	〳	中碗 広東形	—	—	—	6.4	ロクロ成形 削り高台	(見込) 岩波又 は岩に植物	透明釉は細かな貫入が 入る	白色・荒い・小 規模な円孔が存 在	能茶山 1820～幕末	高台内「茶」銘有 り。
〳 22	〳	〳	中碗 広東形	12.0	—	—	—	ロクロ成形	(外) 山水文 (内) 二重圏線	外面のみに粗い貫入が 入る・呉須は藍から青 灰色に発色	白色・荒い・気 孔は存在しない	能茶山 1820～幕末	

Fig. 挿図番号	出土 地点	種類	器種・ 器形	法量 (cm)				成形技法	釉薬・文様	特徴(成形・調整・釉調等)	胎土 (色・剥離面等)	生産地 生産年代	備考(銘・焼成技法・ 使用痕・他)
				口径	器高	胴径	底径						
㊦ 23	包含層 II層	磁器 染付	中碗 広東形	-	-	-	6.0	ロクロ成形 削り高台	(外) 梅に鶯	呉須は淡い青色	白色・やや荒い	能茶山産の可 能性が高い	
㊦ 24	㊦	陶胎 染付	中碗	-	-	-	4.7	ロクロ成形 削り高台	白化粧土・呉 須・透明釉 (外) 山水系の 文様	呉須は青灰色・透明釉 は粗い貫入が入る	灰色・荒い・石 英細砂を僅かに 含む	肥前系 18世紀前半	
㊦ 25	㊦	磁器 染付	中碗 丸形	-	-	-	4.0	ロクロ成形 削り高台	(外) 土坡と植物 (見込) 草又は 山	焼成不良・透明釉は白 濁し呉須はオリブ黒 色に発色	白色・やや荒 い・裂孔が存在	肥前系 1820～幕末	畳付に砂付着
㊦ 26	㊦	㊦	小碗 腰張形	-	-	-	3.7	ロクロ成形 削り高台	(外) 土坡の一部 (見込) 不明		白色・やや荒 い・円孔が存在	能茶山 1820～幕末	高台内「サ」銘有 り。
㊦ 27	㊦	㊦	中碗	-	-	-	-	ロクロ成形 削り高台	(外) 山水文 (見込) 不明		白色・やや荒 い・円裂孔が存 在	能茶山 1820～幕末	
㊦ 28	㊦	磁器 色絵	小碗	-	-	-	4.0	ロクロ成形 削り高台	上絵付・顔料は 赤(外) 欄菌文 又は連弁文・草 花文(見込) 梅		透明感を持つ白 色・やや滑らか	関西系又は 瀬戸・美濃 系1820～幕 末	高台内「寿」銘有 り
㊦ 29	㊦	磁器 白磁	小杯 端反形	5.9	3.3	-	2.9	ロクロ成形 削り高台	透明釉	高台内兜巾状・外面 ロクロ目・釉はやや白濁 し貫入が入る・高台無 釉	白色・やや荒い	肥前 17世紀中葉	
F18- 30	㊦	磁器 染付	碗蓋	笠部 径 9.4	-	-	-	ロクロ成形	(外) 草花文 (内) 帯線 (見込) 菊花か	透明釉は細かな貫入が 入る	白色・荒い・小 規模な円孔を多 く・裂孔を疎ら に含む	能茶山 1820～幕末	
㊦ 31	㊦	㊦	碗蓋	笠部 径 9.7	-	-	-	ロクロ成形	(内外) 梅文	透明釉は細かな貫入が 入る	白色・荒い・裂 孔が部分的に存 在	能茶山産の 可能性が高い	
㊦ 32	㊦	㊦	猪口 補形 口縁部 輪花	8.7	8.7	-	6.8	ロクロ成形 削り高台	(外) 蛸唐草・ 連弁の変化 (内) 四方襷	畳付施釉・呉須は滲 む・透明釉は気泡を多 く含む	白色・やや滑ら か	肥前系 1780～1810 年代	高台内蛇の目釉剥 ぎ
㊦ 33	㊦	㊦	鉢8角 形	-	-	-	-	型打成形	(外) 窓に岩 滴・芭蕉 (内) 牡丹唐草	呉須は淡い青色・透明 釉はやや白濁	白色・やや荒い	肥前系 19世紀初頭 ～幕末	
㊦ 34	㊦	㊦	鉢 12角形 端反形	-	-	-	-	型打成形	(外) 菊唐草 (内) 雲割によ る区画内に疋繫 ぎ文・区画内に 牡丹唐草	透明釉は部分的に白濁	白色・やや荒い	肥前 1820～幕末	
㊦ 35	㊦	㊦	鉢 8角形 か	-	-	-	-	型打成形	(外) 草花文 (内) 牡丹と唐 草の変化	透明釉は部分的に白濁	白色・やや荒い	肥前 1820～幕末	
㊦ 36	㊦	㊦	小皿 丸形	9.1	2.6	-	4.0	ロクロ成形 削り高台	(内) 山水文系 の文様か	外面は工具痕が残る・ 透明釉は部分的に緑色 気味となる	白色・やや荒い	能茶山の可 能性が高い	見込蛇の目釉剥 ぎ
㊦ 37	㊦	㊦	小皿 輪花形	10.4	2.4	-	6.0	型打成形削 り高台	(内) 山水文東屋 (口) 口鑄	呉須は青灰色・透明釉 は白濁する	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	
㊦ 38	㊦	㊦	小皿 端反形 口縁部 輪花	12.0	2.8	-	6.6	ロクロ成形 削り高台	(外) 如意頭連 続唐草文 (内) 四方襷・ 矢羽根文		白色・やや滑ら か	肥前・有田 18世紀後半	
㊦ 39	㊦	㊦	大皿	25.0	4.8	-	14.4	ロクロ成形 削り高台	(外) 如意頭連 続唐草文 (内) 菊唐草文	外面上位に工具痕が僅 かに残る・透明釉は僅 かに緑灰色がかかる	白色・やや荒い	肥前・有田 18世紀第2 ～3四半期	
F19- 40	㊦	陶器	小皿	-	-	-	4.5	ロクロ成形 削り高台	灰釉「青唐津」	オリブ灰色を帯びた 透明の釉で細かな貫入 が入る・	灰白色・長石・ 石英の細砂が僅 かに見られる	肥前1600～ 1630年代	見込砂目・畳付に 砂付着
㊦ 41	㊦	㊦	香炉 又は 火入れ	-	-	-	7.9	ロクロ成形 削り高台	錆釉(鉄釉)	高台内は曲線的な作り ・内面施釉・高台無 釉	黒褐色・石英細 砂と長石礫を含 む	尾戸又は能 茶山	
㊦ 42	包含層 II層	㊦	小皿 端反形	11.9	4.5	-	4.3	ロクロ成形 削り高台	透明釉	高台内の削り込みが深 い・高台内僅かに兜巾 状・削り痕はナデ消 す・焼成不良・透明釉 は白濁する	鈍い橙色～明褐 灰色・石英細砂 を多量に含む・ 僅かに透明感をも つ	県東部系	見込蛇の目釉剥 ぎ後白化粧土を刷毛 塗り・[胎土分析 資料]17]
㊦ 43	㊦	㊦	小皿端 反形	12.2	4.4	-	4.5	ロクロ成形 削り高台	鉛釉(鉄釉)	外面下半工具による削 り痕顕著	橙色・N胎土・ 小規模な円孔あ り	能茶山 1820～幕末	見込蛇の目釉剥 ぎ後白化粧土を刷毛 塗り・[胎土分析 資料]1]

Fig. 挿図番号	出土 地点	種類	器種・ 器形	法量 (cm)				成形技法	釉薬・文様	特徴(成形・調整・釉調等)	胎土 (色・剥離面等)	生産地 生産年代	備考(銘・焼成技法・ 使用痕・他)
				口径	器高	胴径	底径						
Fig19-44	包含層Ⅲ層	陶器	中碗	—	—	—	4.6	ロクロ成形 削り高台	天目釉	高台内兜巾状・高台外 側に挟み入り	灰色・大規模な 円、裂孔が非常 に多く存在	瀬戸・美濃 系	
45	包含層Ⅱ層	〃	〃	—	—	—	4.1	ロクロ成形 削り高台	青磁釉	高台内兜巾状・釉は淡 い明緑灰色	白色・荒い・部 分的に酸化気味 となり橙色に発 色	肥前・波佐 見 18世紀	見込蛇の目釉剥ぎ
46	〃	〃	土瓶蓋	笠部 径 10.3	—	かえり 径 8.4	—	ロクロ成形	灰釉 (外) 鉄釉によ る文様	やや緑色がかった透明 の釉・粗い貫入が入る	灰白色・やや滑 らか・石英細砂 が僅かに見える	関西系	
47	〃	〃	急須蓋	笠部 径 6.7	3.3	かえり 径 4.0	摘み 径 1.4	ロクロ成形	灰釉(外) 白化 粧土イッチン掛 けによる文様	釉は灰オリーブ色・細 かな貫入が入る	灰白色・やや透 明感をもつ	関東部系か	
48	包含層 層不明	〃	蓋	笠部 径 7.2	2.3	—	—	ロクロ成形 摘み貼付	灰釉	釉は乳白気味で細かな 貫入が入る	灰白色・精選さ れた胎土・石英 細砂が僅かに認 められる・裂孔 と微細な円孔を 多く含む	尾戸	[胎土分析資料J22]
49	包含層Ⅱ層	〃	小碗	—	—	—	2.9	ロクロ成形 削り高台	灰釉	細かな貫入が入る	浅黄色・石英細 砂を多く含む・ 円孔が存在	能茶山 1820～幕末	
50	〃	〃	灯明皿 平形	8.7	1.8	—	3.6	ロクロ成形 底部削り	灰釉 (見込) 櫛目	オリーブかかる透明の 釉・細かな貫入が入る	灰白色・やや透 明感を持つ・滑 らか	関西系	
51	〃	〃	中皿	23.0	2.9	—	—	ロクロ成形	灰釉	釉は灰オリーブ色・細 かな貫入が入る	灰色・石英・長 石細砂を含む	産不明	
52	〃	〃	播鉢	31.2	—	—	—	ロクロ成形	無釉	摺り目は8条を一単位と する	赤褐色・長石他 の角礫を多く含 む・大規模な裂 孔あり	堺	
53	〃	〃	風炉か	—	—	—	—	ロクロ成形	呉須・灰釉	体部に窓あり・釉は乳 白気味の透明の釉	灰白色・石英細 砂を多く含む・ 円、裂孔あり	尾戸の可能性 あり	
54	〃	〃	焜炉か	—	—	—	14.2	足貼付	緑釉・うのふ 釉・透明釉・鉄 釉	底部は球状の足を貼付 し小孔あり・底部に鉄 釉刷毛塗り	灰白色・砂粒を 多く含む・大規 模な円、裂孔が 非常に多く存在	瀬戸・美濃 系 19世紀	
55	〃	磁器 白磁	中瓶	—	—	—	5.0	ロクロ成形 削り高台	白磁釉	内面ロクロ目顕著	灰白色・やや滑 らか	肥前系 18世紀末～ 幕末	
F20-57	SD2 SP1 Ⅱ層	〃	中碗 広東形	11.4	6.9	—	6.5	ロクロ成形 削り高台	(外) 草花文 (内) 圏線 (見込) 帆掛船		白色・荒い	能茶山 1820～幕末	高台内「サ」銘有 り・見込陶器質の 足付ハマ跡有り・3 足
58	SK7	〃	中碗 広東形	10.9	6.7	—	5.8	ロクロ成形 削り高台	(外) 蝶(草花 文に伴うもの) (内) 岩波	口縁部外面に工具痕が 残る・呉須は酸化気味 となり緑灰色に発色	白色・やや荒 い・大規模な裂 孔が部分的に存 在	能茶山 1820～幕末	高台内「サ」銘有 り・見込陶器質の 足付ハマ跡有り
59	SK9 SK12 SD2	〃	中碗 広東形	11.5	6.1	—	6.7	ロクロ成形 削り高台	(外) 葦に水鳥 (内) 圏線 (見込) 水に岩	体部外面に工具痕が残 る・畳付露胎部分が橙 色に発色	白色・やや滑 らか	能茶山 1820～幕末	高台内「茶」銘有 り・見込陶器質の 足付ハマ跡有り・4 足
60	SD2	〃	中碗 広東形	12.0	—	—	—	ロクロ成形	(外) 草花文 (内) 圏線	透明釉は乳白気味で細 かな貫入が入る	白色・荒い・円 孔が存在	能茶山 1820～幕末	
61	SP1	〃	中碗 広東形	11.4	—	—	—	ロクロ成形	(外) 蝶(草花 文に伴うもの) (内) 圏線	透明釉は気泡を含む	白色・やや荒い	能茶山 1820～幕末	
62	SK9 包含層 Ⅱ層	〃	中碗 広東形	12.3	7.0	—	6.6	ロクロ成形 削り高台	(外) 山水文 (内) 圏線 (見込) 岩波	内外面とも工具痕が残 る	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	
63	〃	〃	中碗 広東形	10.4	—	—	—	ロクロ成形	(外) 草花文 (内) 帯線・圏線		白色・やや荒い	能茶山 1820～幕末	
64	SK7	〃	中碗	10.0	—	—	—	ロクロ成形	(外) 蝶 (内) 圏線	呉須は厚く掛かる・透 明釉は気泡を多く含む	白色・やや荒い	肥前系 18世紀後半 ～19世紀初 頭	
65	SP1検 出面	〃	中碗	9.4	—	—	—	ロクロ成形	(外) 風水文 (内) 圏線	透明釉は貫入が入る	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	



Fig. 挿図番号	出土 地点	種類	器種・ 器形	法量 (cm)				成形技法	釉薬・文様	特徴(成形・調整・釉調等)	胎土 (色・剥離面等)	生産地 生産年代	備考(銘・焼成技法・ 使用痕・他)
				口径	器高	胴径	底径						
Fig20- 66	SK10	磁器 白磁	中碗 広東形	-	-	-	5.7	ロクロ成形 削り高台	(外) 草花文 (内) 圏線 (見込) 植物の 変化か	外面下半工具による削り 痕が残る・呉須は青 灰色	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	高台内「サ」銘有 り・見込陶器質の 足付ハマ跡有り
〳 67	SK13 床	〳	中碗 広東形	-	-	-	5.9	ロクロ成形 削り高台	(外) 山水文 (内) 圏線 (見込) 宝文	透明釉は細かな貫入が 入る	白色・荒い・円 孔が僅かに存在	能茶山 1820～幕末	高台内「茶」銘有 り
〳 68	SK13	〳	中碗 広東形	12.0	-	-	-	ロクロ成形	(外) 櫛歯文・ 網干に雁 (内) 圏線	呉須は暗青灰色・透明 釉は貫入が入る	灰白色・荒い	肥前系 1780～1840 年流行	
〳 69	SP1 検出面	〳	中碗 広東形	-	-	-	-	ロクロ成形	(外) 鶯 (梅に 伴うもの)	透明釉は貫入が入る	白色・荒い	能茶山産の可 能性が高い	
〳 70	SK13	〳	中碗 広東形	-	-	-	6.5	ロクロ成形 削り高台	(外) 土坡 (草 花文に伴うもの) (内) 圏線	外面下半削り痕が残 る・透明釉は気泡を多 く含む・畳付露胎部は 橙色に発色	白色・やや荒い	能茶山 1820～幕末	
〳 71	〳	〳	中碗 広東形	-	-	-	6.0	ロクロ成形 削り高台	(外) 扇 (内) 圏線 (見込) 宝文の 崩し	呉須は良好な発色・透 明釉は細かな貫入が 入る・畳付露胎部は 橙色に発色	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	
〳 72	包含層 II層 SX5	〳	中碗 広東形	12.1	-	-	-	ロクロ成形	(外) 梅に鶯	口縁部外面に工具痕が 残る・粗い貫入が入る	白色・やや荒い	能茶山産の 可能性が高い	
〳 73	〳	〳	中碗 広東形	-	-	-	5.4	ロクロ成形 削り高台	(外) 山水系の文様 (見込) 宝文の変化	透明釉は気泡を多く含 む	白色・やや荒い	能茶山 1820～幕末	見込陶器質の足付 ハマ跡有り
〳 74	〳	〳	中碗 広東形	11.0	7.1	-	5.4	ロクロ成形 削り高台	(外) 千芝福寿 文 (内) 二重圏線 (見込) 寿の崩 し	呉須は青灰色に発色	白色・やや滑ら か	肥前系 19世紀前半	
〳 75	SX5	〳	中碗	-	-	-	5.0	ロクロ成形 削り高台	(見込) 不明	呉須は良好に発色・透 明釉は貫入が入る	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	高台内「茶」銘有 り
F21- 76	SD1 SK1	磁器 染付	中碗 端反形	10.9	-	-	-	ロクロ成形 削り高台	(外) 松竹梅文 (内) 圏線 (見込) 帆掛船 か	透明釉は乳白気味・細 かな貫入が入る	白色・荒い・裂 孔が多く存在	能茶山 1820～幕末	高台内「茶」銘有 り・見込に陶器質 の足付ハマ跡有 り・ハマ3足
〳 77	包含層 II層 SD1	〳	中碗 端反形	10.6	6.1	-	4.6	ロクロ成形 削り高台	(外) 草花文 (見込) 宝文	透明釉は乳白気味・細 かな貫入が入る	白色・荒い・円 裂孔が存在	能茶山 1820～幕末	高台内「茶」銘有 り・見込に陶器質 の足付ハマ跡有 り
〳 78	SK9	〳	中碗 端反形	-	-	-	4.6	ロクロ成形 削り高台	(外) 花卉文 (見込) 宝文・ 芭蕉	透明釉は乳白気味・細 かな貫入が入る	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	高台内「茶」銘有 り
〳 79	SK7	〳	中碗 端反形	9.7	-	-	-	ロクロ成形	(外) 草花文 (内) 圏線	外面工具痕が残る・細 かな貫入が入る	白色・やや滑ら か	能茶山1820 ～幕末	
〳 80	SK7 SX5	〳	中碗 端反形	11.4	-	-	-	ロクロ成形	(外) 山水文・ 家屋 (内) 圏線	透明釉は乳白気味・細 かな貫入が入る	白色・荒い・小 規模な円孔が多 く存在	能茶山1820 ～幕末	
〳 81	SK1	〳	中碗 端反形	11.2	-	-	-	ロクロ成形	(外) 不明 (内) 圏線	透明釉は乳白気味・細 かな貫入が入る	白色・荒い	能茶山1820 ～幕末	
〳 82	SP1 II層	〳	中碗 端反形	12.2	-	-	-	ロクロ成形	(外) 山水文・ 人物	透明釉は白濁し貫入が 入る	白色・荒い・円 孔が存在	能茶山1820 ～幕末	
〳 83	SK13 床	〳	中碗 端反形	12.3	-	-	-	ロクロ成形	(外) 風水文 (内) 圏線	外面に工具痕が残る	白色・荒い・円 孔が存在	能茶山 1820～幕末	
〳 84	SK7 SK10 包含層 II層	〳	中碗 端反形	9.8	5.1	-	4.2	ロクロ成形 削り高台	(外) 圏線・唐 草文 (内) 圏線	呉須は暗緑灰色・透明 釉は乳白気味で貫入が 入る	白色・荒い	能茶山産の 可能性あり	
〳 85	SP1 II層	〳	中碗 端反形	10.4	-	-	-	ロクロ成形	(外) 丸に網目 文・窓に花卉文 (内) 雷文	透明釉は乳白気味・細 かな貫入が入る	白色・荒い・円 裂孔が疎らに存 在	能茶山 1820～幕末	
〳 86	SK9	〳	中碗 端反形	11.4	-	-	-	ロクロ成形	(外) 風水文か (内) 帯線・圏 線	透明釉は貫入が入る	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	
〳 87	SK7	〳	中碗 丸形	10.4	-	-	-	ロクロ成形 削り高台	(外) 区画内に 斜格子文 (内) 圏線	厚手の作り・呉須は酸 化気味で灰オリーブ 色に発色・透明釉は 黄ばむ	灰白色・やや荒 い	肥前系 18世紀末～ 19世紀前半	
〳 88	〳	〳	中碗 端反形	10.4	-	-	-	ロクロ成形	(外) 区画内に 格子文と唐草 (内) 雷文	透明釉は乳白気味・細 かな貫入が入る	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	

Fig. 挿入番号	出土地点	種類	器種・器形	法量 (cm)				成形技法	釉薬・文様	特徴(成形・調整・釉調等)	胎土(色・剥離面等)	生産地 生産年代	備考(銘・焼成技法・使用痕・他)
				口径	器高	胴径	底径						
Fig21-89	SD1 包含層 II層	磁器 染付	中碗 端反形	10.8	—	—	—	ロクロ成形	(外) 不明 (内) 圏線	外面に工具痕が残る・ 透明釉乳白気味で部分的 に貫入が入る	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	
◇ 90	SK9	◇	中碗 端反形	11.6	—	—	—	ロクロ成形	(外) 格子文	呉須は青灰色	灰白色・やや滑 らか	肥前系 1820～幕末	
◇ 91	SK7	◇	中碗 端反形	—	—	—	4.6	ロクロ成形 削り高台	(外) 格子・丸文 (内) 圏線	厚手の作り・体部下 半工具痕が残る	白色・荒い	能茶山?	
◇ 92	SK10	◇	中碗 端反形	10.6	—	—	—	ロクロ成形	(内) 帯線に白 抜き文様	墨弾き技法	白色・やや荒い	肥前系1820 ～幕末	
Fig.22-93	SK1	◇	中碗 端反形	10.2	6.0	—	3.6	ロクロ成形 削り高台	(外) 丸に草	透明釉は白濁する	灰白色・やや滑 らか	肥前系 1820～幕末	
◇ 94	SK8	◇	小碗 端反形	8.2	—	—	—	ロクロ成形	(外) 葵	薄手の作り	透明感をもつ白 色・非常に滑 らか	瀬戸・美濃 19世紀中葉	
◇ 95	SK1 SK9 SP1 II層	◇	中碗 端反形	10.3	6.1	—	4.2	ロクロ成形 削り高台	(外) 葵 (内) 列点状の 文様 (見込) 植物文 の崩しか	呉須は厚く施釉・透明 釉は気泡を多く含む	透明感をもつ白 色・非常に滑 らか	瀬戸・美濃 1820～幕末	
◇ 96	SK7	◇	中碗 端反形	8.8	—	—	—	ロクロ成形	(内外) 木賊文	透明釉は気泡を多く含 む	透明感をもつ白 色・非常に滑 らか	瀬戸・美濃 19世紀	
◇ 97	SD1	◇	中碗 端反形	10.0	—	—	—	ロクロ成形	(外) 草花文 (内) 帯線・圏 線		白色・やや荒い	産不明	
◇ 98	SK9	◇	中碗 端反形	10.1	—	—	—	ロクロ成形	(外) 草花文 (内) 帯線・圏 線	呉須は厚く施釉・透明 釉は気泡を多く含む	透明感をもつ白 色・非常に滑 らか	瀬戸・美濃 19世紀	
◇ 99	SK7	磁器 染付	小碗 腰張形	8.2	5.7	—	4.1	ロクロ成形 削り高台	(外) 不明 (内) 圏線	外面に工具痕が残る・ 呉須は青灰色	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	
◇ 100	◇	◇	小碗 腰張形	8.2	5.7	—	4.1	ロクロ成形 削り高台	(外) 水面 (内) 圏線	外面に工具痕が残る・ 呉須は青灰色	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	
◇ 101	SP1 II層	◇	小碗 腰張形	8.5	—	—	—	ロクロ成形	(外) 草(草花 文に伴うもの) (内) 圏線	透明釉は貫入が入る	白色・荒い・小 規模な裂孔が僅 かに存在	能茶山 1820～幕末	
◇ 102	SK7	◇	小碗 腰張形	8.0	5.5	—	4.0	ロクロ成形 削り高台	(外) 雁 (内) 圏線	外面に工具痕が残る・ 呉須は緑灰色	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	
◇ 103	SK12	◇	小碗腰 張形	8.4	5.6	—	3.7	ロクロ成形 削り高台	(外) 蝶・草花 文(内) 圏線 (見込) 水に岩 か	外面に工具痕が残る・ 呉須は滲む	白色・やや荒い	能茶山 1820～幕末	
◇ 104	SK9	◇	小碗 腰張形	8.5	5.2	—	3.6	ロクロ成形 削り高台	(外) 宝文・岩 に草 (内) 圏線 (見込) 宝文の 崩し	外面に工具痕が残る・ 呉須は青灰色	白色・やや荒い	能茶山1820 ～幕末	高台内「サ」銘有 り
◇ 105	SK13 SD2 SP1	◇	小碗 腰張形	8.2	—	—	—	ロクロ成形	(外) 蝶(草花 文に伴うもの) (内) 圏線	透明釉は粗い貫入が入 る	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	
◇ 106	SP1 II層	◇	小碗 腰張形	8.4	5.9	—	4.0	ロクロ成形 削り高台	(外) 草花文 (内) 圏線 (見込) 鶯	呉須は青灰色	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	高台内銘有り
◇ 107	SK13	◇	小碗 腰張形	8.0	4.5	—	3.8	ロクロ成形 削り高台	(外) 蝶・草花 文(内) 圏線 (見込) 植物か	外面下半に工具痕・釉 は酸化気味となり、呉 須は暗緑色・透明釉は 緑色を帯びる	白色・やや荒い	能茶山 1820～幕末	高台内「サ」銘有 り
◇ 108	◇	◇	小碗 腰張形	8.1	5.4	—	3.4	ロクロ成形 削り高台	(外) 蝶・草花 文(内) 圏線 (見込) 亀	透明釉は乳白気味で細 かな貫入が入る	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	高台内「サ」銘有 り
◇ 109	SP1 II層 III層	◇	小碗 腰張形	8.2	5.3	—	3.8	ロクロ成形 削り高台	(外) 雁・岩に 若松(内) 圏線 (見込) 不明	呉須は淡青色・透明釉 は貫入が入る	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	高台内「サ」銘有 り
Fig23-110	SK1 SP1 II層	磁器 色絵	小碗 端反形	7.8	3.5	—	3.3	ロクロ成形 削り高台	(内) 柳に馬上 絵付は赤・黄・ 黒の顔料	薄手の作り・透明釉は 僅かに白濁	白色・やや荒い	肥前 19世紀前半 ～幕末	見込に「辰」銘有 り・紅皿として転 用・内面に紅が著 しく付着する

Fig. 挿図番号	出土 地点	種類	器種・ 器形	法量 (cm)				成形技法	釉薬・文様	特徴(成形・調整・釉調等)	胎土 (色・剥離面等)	生産地 生産年代	備考(銘・焼成技法・ 使用痕・他)
				口径	器高	胴径	底径						
Fig.23- 111	SK7 SK9	磁器 色絵	小碗 端反形	7.9	3.5	—	3.2	ロクロ成形 削り高台	(内) 不明 上絵付は赤・ 黄・黒の顔料	薄手の作り	白色・やや荒い	肥前 18世紀末～ 幕末	
〃 112	SD2	〃	小碗 端反形	8.6	4.0	—	3.4	ロクロ成形 削り高台	(内) 不明 上絵付・色絵顔 料	薄手・高台内の削り込 みが深い	白色・やや滑ら か	関西系又は 肥前系 19世紀前半 ～幕末	顔料は赤以外は剥 離する
〃 113	〃	〃	小碗 端反形	7.3	3.0	—	3.3	ロクロ成形 削り高台	(内) 書物 上絵付・色絵顔 料	薄手の作り	白色・やや荒い	肥前系 19世紀前半 ～幕末	顔料は赤、黄以外 は剥離する
〃 114	〃	磁器 染付	薄手酒 杯 木盃形	8.2	2.5	—	2.8	ロクロ成形 削り高台	(内) 山水樓閣 文	薄手・呉須は良好な発 色	透明感をもつ白 色・滑らか	関西系 19世紀前半 ～幕末	
〃 115	SP1 II層	磁器 色絵	薄手酒 杯 木盃形	9.2	—	—	—	ロクロ成形 削り高台	(内) 鶴 上絵付・色絵顔 料	薄手	透明感をもつ白 色・滑らか	瀬戸・美濃 又は関西系 19世紀前半 ～幕末	見込に「雪原」銘 有り・顔料は剥離 する
〃 116	SP1 III層	〃	薄手酒 杯 木盃形	9.0	4.1	—	3.4	ロクロ成形 削り高台	(内) 桜 上絵付・色絵顔 料	薄手	透明感をもつ白 色・滑らか	瀬戸・美濃 又は関西系 19世紀前半 ～幕末	顔料は剥離する
〃 117	SK9	〃	小碗	—	—	—	2.9	ロクロ成形 削り高台	(内) 人物文 上絵付は緑・青・ 赤の顔料	薄手・透明釉は青色を 帯びる	白色・滑らか	肥前系 19世紀前半 ～幕末	
〃 118	SK13	磁器 白磁	小碗 端反形	8.4	4.8	—	3.4	ロクロ成形 削り高台	(外) 蛭手	透明釉は青色を帯びる	透明感をもつ白 色・滑らか	瀬戸・美濃 又は関西系 19世紀中葉 以降	
〃 119	SP1 II層	〃	小碗	7.5	4.6	—	3.5	ロクロ成形 削り高台	透明釉	高台内兜巾状・透明釉 は青色を帯びる	白色・やや荒い	肥前系 18世紀後半	畳付に砂が付着
〃 120	SD1 SD2	磁器 染付	小碗	—	—	—	3.6	ロクロ成形 削り高台	(外) 植物文・ 菊	薄手の作り・透明釉は 淡緑色を帯びる	白色・やや滑ら か	関西系 19世紀初頭 ～幕末	
〃 121	SK7	〃	小碗 端反形	7.5	3.9	—	3.2	ロクロ成形 削り高台	(外) 団扇 (内) 團線	呉須は淡青色	白色・やや荒い	能茶山 1820～幕末	高台内「サ」銘有 り
〃 122	SK1	磁器 白磁	小杯	—	—	—	2.8	ロクロ成形 削り高台	透明釉	高台内兜巾状	白色・やや滑ら か	肥前系 18世紀末～ 幕末	
〃 123	SD1 I層	〃	小杯 丸形	6.4	3.9	—	2.4	ロクロ成形 削り高台	透明釉	透明釉は淡緑色を帯び る	白色・やや荒い	肥前系 18世紀末～ 幕末	
〃 124	SP1 II層	磁器 染付	小杯	6.6	3.4	—	2.6	ロクロ成形 削り高台	(外) 笹文	呉須は暗青灰色・透明 釉は淡緑色を帯びる	白色・やや荒い	肥前 18世紀中葉 ～末	
〃 125	SK1	〃	薄手酒 杯 端反形	7.4	—	—	—	ロクロ成形	(内) 鋸歯文・ 植物文	薄手・呉須は良好な発 色	白色・やや滑ら か	肥前系又は 関西系 19世紀前半 ～中葉	
〃 126	SK9	〃	小杯 端反形	7.0	—	—	—	ロクロ成形	(内) 宝文	呉須は良好な発色	白色・非常に滑 らか	瀬戸・美濃 系又は関西 系 19世紀前半 ～中葉	
〃 127	〃	磁器 色絵	小碗	—	—	—	—	ロクロ成形	(外) 窓内に赤 の地埋め・白抜 きによる牡丹を 描き金彩を施す		白色・やや滑ら か	肥前	
Fig.24- 128	SK11	〃	小皿 丸形	10.1	2.8	—	3.9	ロクロ成形 削り高台	(内) 木・山 (見込) 不明	呉須は緑灰色に発色	白色・荒い	能茶山産の 可能性が高 い	見込蛇の目釉剥ぎ の後白化粧土刷毛 塗り
〃 129	〃	〃	小皿 丸形	10.0	3.1	—	4.2	ロクロ成形 削り高台	(内) 木・山 (見込) 不明	呉須は緑灰色に発色・ 透明釉は白濁	白色・荒い	能茶山産の 可能性が高 い	見込蛇の目釉剥ぎ の後白化粧土刷毛 塗り
〃 130	SK9	〃	小皿 丸形	9.6	2.9	—	4.0	ロクロ成形 削り高台	(内) 木・山 (見込) 不明	呉須は暗緑灰色に発 色・透明釉は青灰色を 帯びる	白色・やや荒い	能茶山産の 可能性が高 い	見込蛇の目釉剥ぎ の後白化粧土刷毛 塗り
〃 131	SD1 I層	〃	小皿	9.7	2.4	—	3.9	ロクロ成形 削り高台	(内) 格子文 (見込) 丸文	外面上半工具痕が残 る・透明釉は緑色を帯 びる	白色・荒い	肥前系 1820～幕末	見込蛇の目釉剥ぎ の後白化粧土刷毛 塗り
〃 132	SP1 II層	〃	小皿 輪花形	10.4	2.0	—	5.7	型打成形削 り高台	(内) 山水文・東屋 (口) 口錆	輪花16弁・透明釉は貫 入が入る	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	
〃 133	SK7	〃	小皿 輪花形	10.0	2.4	—	5.8	型打成形削 り高台	(内) 山水文・東屋 (口) 口錆	輪花数不明・透明釉は 外面のみ貫入が入る	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	

Fig. 挿図番号	出土地点	種類	器種・器形	法量 (cm)				成形技法	釉薬・文様	特徴(成形・調整・釉調等)	胎土 (色・剥離面等)	生産地 生産年代	備考(銘・焼成技法・使用痕・他)
				口径	器高	胴径	底径						
Fig.24-134	SP1 II層	磁器染付	小皿輪花形	9.0	2.4	—	5.0	型打成形削り高台	(内) 梅文・井桁文 (口) 口鏝	輪花数推定12弁・透明釉は白濁する	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	
〳 135	SK1	〳	小皿輪花形	—	—	—	5.7	型打成形削り高台	(内) 土坡に植物	透明釉は粗い貫入が入る・畳付露胎部は橙色に発色	白色・荒い	能茶山産の可能性が高い	
〳 136	SK7	〳	小皿端反形口縁部輪花	11.5	2.9	—	6.5	ロクロ成形削り高台	(外) 如意頭連続唐草文 (内) 四方襷・矢羽根文 (見込) 五弁花文		白色・やや滑らか	肥前・有田 18世紀後半	畳付に砂が付着
〳 137	SP1 II層	〳	小皿端反形口縁部輪花	11.6	2.8	—	6.4	ロクロ成形削り高台	(外) 如意頭連続唐草文 (内) 四方襷・矢羽根文		白色・やや滑らか	肥前・有田 18世紀後半	高台内銘有り・畳付に砂が付着
〳 138	SD1	〳	小皿端反形口縁部輪花	—	—	—	6.4	ロクロ成形削り高台	(外) 如意頭連続唐草文 (内) 四方襷・矢羽根文 (見込) 五弁花文	透明釉は気泡を多く含む	白色・やや滑らか	肥前・有田 18世紀後半	高台内「渦福」銘有り
〳 139	SK11	〳	小皿端反形口縁部輪花	11.3	—	—	—	ロクロ成形削り高台	(外) 如意頭連続唐草文 (内) 四方襷・矢羽根文		白色・やや滑らか	肥前・有田 18世紀後半	
〳 140	SK7	磁器白磁	小皿菊花形	9.4	2.3	—	5.8	型打成形高台貼付	(内) 型打による菊花文様	高台は楕円形に歪む・花卉32弁・釉は白濁し淡黄色を帯びる	白色・やや滑らか・裂孔が部分的に存在	能茶山1820～幕末	
〳 141	SK8 SK12	〳	五寸皿盤形	13.8	4.0	—	—	ロクロ成形削り高台	(外) 連続花唐草文 (内) 松文 (見込) 松竹梅円形文	呉須は良好な発色・畳付施釉	白色・やや滑らか	肥前 18世紀中葉～1780年代	蛇の目凹形高台
Fig.25-142	SP1 III層 包含層 II層	磁器染付	中皿盤形	21.2	2.4	—	14.9	ロクロ成形削り高台	(外) 如意頭連続唐草文 (内) 牡丹と葉、唐草を区画割りによって配する・文様帯を二重に配し内側に變形下波頭文を巡らす (見込) 松竹梅円形文	呉須は良好な発色	白色・やや滑らか	肥前・有田 18世紀後半	高台内ハリ支え跡有り
〳 143	SK7	〳	鉢端反形4角形	17.0	7.5	—	7.0	型打成形削り高台	(外) 芙蓉手の崩し・窓に花卉文 (内) 墨弾きによる七宝文・窓に「福寿」 (見込) 麒麟	呉須は良好な発色	白色・やや滑らか	肥前 19世紀前半	
〳 144	SK9	磁器白磁	鉢輪花形	16.0	—	—	—	陽刻型打成形削り高台	(内) 区画内に陽刻による唐草状文様		白色・滑らか	肥前・有田 18世紀第3四半期	
〳 145	SK1 SD1 SD2 SP1	磁器青磁	鉢菊花形	17.8	—	—	—	型打成形	青磁釉・口鏝		白色・やや滑らか	能茶山産の可能性が高い	
〳 146	SP1 II層 SK13	〳	鉢花形	12.1	4.8	—	5.2	陽刻型打成形削り高台	青磁釉 (内) 陽刻による植物文様	青磁釉を厚手に施釉し器表は滑らか	白色・滑らか	能茶山産の可能性が高い	
〳 147	SK10	〳	鉢	—	—	—	7.9	ロクロ成形削り高台	青磁釉		白色・やや荒い・裂孔が僅かに存在	産不明	
〳 148	SK9	磁器染付	鉢角形	—	—	—	88.0	型打成形削り高台	(外) 山水文・建物 (見込) 不明		白色・やや荒い	肥前系 18世紀末～19世紀前半	

Fig. 挿図番号	出土 地点	種類	器種・ 器形	法量 (cm)				成形技法	釉薬・文様	特徴(成形・調整・釉調等)	胎土 (色・剥離面等)	生産地 生産年代	備考(銘・焼成技法・ 使用痕・他)
				口径	器高	胴径	底径						
Fig.26- 149	SK1	磁器 染付	鉢 端反形	16.0	4.6	—	7.8	型打成形削 り高台	(外) 芙蓉手の 崩し・区画内に 窓絵と環珞文 (内) 芙蓉手・ 窓絵に人物と山 水文様 (見込) 植物文	口縁部18角・高台幅は 厚い・畳付施釉・高台 内釉剥き部分は橙色に 発色	灰白色・滑らか	肥前系 1820～幕末	蛇の目凹型高台
〃 150	SP1 II層	〃	鉢 端反形	13.2	—	—	6.6	型打成形削 り高台	(外) 芙蓉手の 崩し・区画内に 窓絵と環珞文 (内) 芙蓉手・ 窓に植物文・山 水文・環珞文 (見込) 岩に草 木	口縁部輪花16弁・高台 幅は薄い・畳付施釉	灰白色・滑らか	肥前	蛇の目凹型高台
〃 151	SP1 バンク	〃	鉢 旬干形	14.2	—	—	—	型打成形	(外) 波に千鳥 (内) 連続青海 波文	口縁部8角・呉須は滲む い	灰白色・やや荒 い	肥前系 19世紀初頭 ～幕末	
〃 152	SK8	〃	鉢	—	—	—	7.2	型打成形削 り高台	(外) 芙蓉手の 崩し (内) 芙蓉手・ 窓に山水文・環 珞文 (見込) 岩に草 木	畳付施釉	灰白色・やや滑 らか	肥前系 1820～幕末	蛇の目凹型高台
〃 153	SK1 SP1 II層 III層	〃	猪口 桶形	7.6	6.0	—	5.8	ロクロ成形	(外) 山水文・ 東屋 (口) 口錯	呉須は青灰色・透明釉 は白濁し粗い貫入が入 る	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	
〃 154	SP1	〃	猪口 桶形	6.8	—	—	—	ロクロ成形	(外) 山水文・ 東屋		白色・やや滑ら か	肥前 18世紀中葉	
〃 155	SK10	〃	猪口 桶形	8.6	—	—	—	ロクロ成形	(外) 山水文・東屋 (口) 口錯	呉須は青灰色・透明釉 は白濁する	白色・やや滑ら か	能茶山 1820～幕末	
〃 156	SD1 I層	〃	猪口 桶形	7.7	5.6	—	5.6	ロクロ成形 削り高台	(外) 格子文・ 四方襷文 (内) 四方襷 (見込) 不明	畳付施釉	白色・やや荒い	肥前系 1780～19世 紀前半	蛇の目凹型高台
〃 157	SK7 SK9	〃	猪口 桶形	8.8	7.5	—	7.0	ロクロ成形 削り高台	(外) 蛸唐草 文・連弁の変化 (内) 四方襷 (見込) 五弁花 文	口縁部輪花・畳付施 釉・呉須は滲む・透明 釉は淡緑色を帯びる	白色・やや滑ら か	肥前系 1780～1810 年代	蛇の目凹形高台
〃 158	SK11 包含層 II層	〃	盃台	—	—	—	6.4	ロクロ成形 削り高台	(外) 帯線	内面施釉	白色・やや滑ら か	肥前系 19世紀初頭 ～幕末	上部欠損後、剥離 面を研磨し他に転 用する
Fig.27- 159	SP1 II層 包含層 II層	〃	碗蓋	笠部 径9.0	2.6	—	摘み 径3.6	ロクロ成形 削り	(外) 格子文に 紅葉 (内) 帯線 (見込) 井桁文		白色・滑らか	肥前系 1860年代～ 幕末	
〃 160	SK1 SP1 II層	〃	碗蓋	笠部 径9.4	3.1	—	摘み 径4.2	ロクロ成形 削り	(外) 丸に網目 文・窓に花卉文 (内) 雷文 (見 込) 宝文・芭蕉	透明釉は乳白気味で貫 入が入る	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	高台内「茶」銘有 り
〃 161	SK8	〃	碗蓋	笠部 径10.0	—	—	—	ロクロ成形 削り	(外) 丸に網目 文・窓に花卉文 (内) 雷文 (見 込) 宝文	透明釉は乳白気味で貫 入が入る	白色・荒い・円 裂孔が存在	能茶山 1820～幕末	
〃 162	SK8 SX5	〃	碗蓋	笠部 径9.4	3.2	—	摘み 径4.2	ロクロ成形 削り	(外) 丸に網目 文・窓に花卉文 (内) 雷文 (見 込) 宝文	透明釉は乳白気味で貫 入が入る	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	
〃 163	SK1 SD1 II層	〃	碗蓋	笠部 径10.0	2.7	—	摘み 径5.8	ロクロ成形 削り	(外) 梅に鶯 (見込) 竹文		白色・やや荒 い・小規模な円 孔が多く裂孔が 疎らに存在	能茶山産の 可能性が高い	

Fig. 挿図番号	出土 地点	種類	器種・ 器形	法量 (cm)				成形技法	釉薬・文様	特徴(成形・調整・釉調等)	胎土 (色・剥離面等)	生産地 生産年代	備考(銘・焼成技法・ 使用痕・他)
				口径	器高	胴径	底径						
Fig.27- 164	SK9	磁器 染付	碗蓋	笠部 径 10.0	2.7	—	摘み 径 5.8	ロクロ成形 削り	(外) 梅に鶯 (見込) 竹文		白色・やや 荒い・小規模な 凹孔が多く裂孔が 疎らに存在	能茶山産の 可能性が高い	
〳	〳	〳	碗蓋	笠部 径 —	—	—	摘み 径 5.9	ロクロ成形 削り	(外) 梅に鶯 (見込) 竹文	外面に工具痕あり・透 明釉は水色を帯びる	白色・やや 荒い・小規模な 凹孔が多く裂孔が 疎らに存在	能茶山産の 可能性が高い	
〳	SK12	〳	碗蓋	笠部 径 10.0	2.7	—	摘み 径 5.7	ロクロ成形 削り	(外) 梅に鶯 (見込) 竹文	外面に工具痕あり・透 明釉は水色を帯びる	白色・やや 荒い・小規模な 凹孔が多く裂孔が 疎らに存在	能茶山産の 可能性が高い	
〳	SK1 SP1	〳	碗蓋	笠部 径 7.0	2.0	—	摘み 径 3.0	ロクロ成形 削り	(外) 波に魚 (内) 濃み線 (見込) 岩波 (摘み内) 宝文 の変化	呉須は良好な発色・透 明釉は貫入が入る	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	
〳	SP1 検出面	〳	碗蓋	笠部 径 7.0	2.0	—	摘み 径 2.9	ロクロ成形 削り	(外) 波に魚 (内) 濃み線 (見込) 不明 (摘み内) 宝文 の変化	呉須は良好な発色・透 明釉は貫入が入る	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	
〳	SK10	〳	碗蓋	笠部 径 7.0	1.9	—	摘み 径 3.0	ロクロ成形 削り	(外) 波に魚 (内) 濃み線 (見込) 岩波 (摘み内) 宝文 の変化	呉須は青灰色・透明釉 は貫入が入る	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	
〳	SK13	〳	碗蓋	笠部 径 7.1	1.9	—	摘み 径 3.0	ロクロ成形 削り	(外) 波に魚 (内) 濃み線 (見込) 岩波 (摘み内) 宝文 の変化	呉須は良好な発色・透 明釉は貫入が入る	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	
〳	SK7	〳	碗蓋	—	—	—	摘み 径 5.3	ロクロ成形 削り	(外) 帯線・草 花文 (見込) 植物文 様 (摘み内) 植物 文様	呉須は良好な発色	白色・やや荒い	能茶山産の 可能性が高い	
〳	SP1	〳	碗蓋	笠部 径 10.0	2.9	—	摘み 径 5.4	ロクロ成形 削り	(外) 松	焼成不良・呉須は暗青 灰色・透明釉は白濁す る	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	
Fig.28- 173	SK13 包含層 II層	〳	蓋物蓋	笠部 径 12.8	—	かえり 径 11.4	—	ロクロ成形 摘み貼付	(外) 宝珠 笠 文・隠れ糞・宝 珠文	呉須は良好な発色	白色・やや荒い	肥前系 1780～1840 年代	175の蓋
〳	SK11	〳	蓋物蓋	笠部 径 10.8	—	かえり 径 9.4	—	ロクロ成形 摘み貼付	(外) 若松に鶴	呉須は良好な発色	白色・やや滑ら か	肥前 19世紀第二 四半期	かえりに砂が
〳	SK7 SP1 II層	〳	蓋物身	—	—	—	—	ロクロ成形	(外) 宝珠文	口縁部内面無釉・呉須 は良好な発色	白色・やや荒い	肥前系	173の身
〳	SK11	〳	段重	7.2	2.9	—	4.6	ロクロ成形 削り高台	(外) 花木文	透明釉は水色を帯び、 貫入が入る	白色・荒い	能茶山産 1820～幕末	腰部に砂付着・177 と組
〳	SK10 包含層 II層	〳	段重	7.2	2.9	—	4.6	ロクロ成形 削り高台	(外) 花木文	透明釉は水色を帯び、 貫入が入る	白色・荒い	能茶山産 1820～幕末	腰部に砂付着・176 と組
〳	SK1	〳	合子蓋	笠部 径 4.9	—	—	—	ロクロ成形 削り高台	(外) 木の葉文 様		白色・滑らか	肥前系 18世紀末～ 幕末	
〳	SK1 SP1 II層	磁器 白磁	紅皿 菊花形	—	—	—	3.4	型打成形糸 切り細工	(内) 型打ちに よる菊花文様	楕円形の高台を貼付す る・推定花卉数28弁・ 畳付施釉	白色・やや荒い	肥前 18世紀前半 ～中葉	
〳	SK1	〳	紅皿 菊花形	5.0	1.6	—	1.7	型押し成形	(外) 型押しに よる放射状文	透明釉は青色を帯び る・外面無釉	白色・滑らか	肥前 18世紀末～ 幕末	
〳	SP1 II層	〳	紅皿 菊花形	4.8	1.5	—	1.4	型押し成形	(外) 型押しに よる放射状文	花卉72弁・白濁した 釉・外面無釉	白色・剥離面観 察不可能	肥前 18世紀末～ 幕末	口縁部外面に紅が 僅かに付着
〳	SD1 検出面	〳	紅皿 菊花形	4.8	1.4	—	1.4	型押し成形	(外) 型押しに よる放射状文	花卉48弁・外面下半無 釉	白色・剥離面観 察不可能	肥前 18世紀末～ 幕末	
〳	SK7	〳	紅皿 菊花形	4.8	1.3	—	1.4	型押し成形	(外) 型押しに よる放射状文	透明釉は青緑色を帯び る・外面無釉	白色・やや荒い	肥前19世紀	

Fig. 挿図番号	出土 地点	種類	器種・ 器形	法量 (cm)				成形技法	釉薬・文様	特徴(成形・調整・釉調等)	胎土 (色・剥離面等)	生産地 生産年代	備考(銘・焼成技法・ 使用痕・他)
				口径	器高	胴径	底径						
fig.28- 184	SK13	磁器 白磁	紅皿 菊花形	4.8	1.4	-	1.4	型押し成形	(外)型押しによる放射状文	花卉48弁・透明釉はやや白濁し青色を帯びる・外面無釉	白色・剥離面観察不可能	肥前 18世紀末～幕末	
〃 185	SP1 検出面	〃	紅皿 菊花形	4.7	1.4	-	1.4	型押し成形	(外)型押しによる放射状文	透明釉は青色を帯びる・外面無釉	白色・滑らか	肥前 18世紀末～幕末	
〃 186	SK12	〃	紅皿 菊花形	4.8	1.4	-	1.6	型押し成形	(外)型押しによる放射状文	白濁した釉・外面無釉	白色・やや荒い	肥前 18世紀末～幕末	
〃 187	SK9	〃	紅皿 菊花形	4.6	1.0	-	1.7	型押し成形	(外)型押しによる放射状文	推定花卉数50弁・透明釉は青色を帯びる・外面下半無釉	白色・やや荒い	肥前 19世紀	
〃 188	SK8	磁器 染付	髪油壺	-	-	-	5.0	ロクロ成形 削り高台	(外)折枝文	高台内兜巾状・外面下半削り痕が残る・呉須は酸化気味となり黒ずむ	灰白色・やや荒い	肥前 18世紀後半	畳付に砂が僅かに付着
〃 189	SK13	〃	小瓶	1.7	-	-	-	ロクロ成形	(外)草花文	透明釉はやや白濁する・呉須は青灰色に発色	白色・荒い	肥前系 18世紀後半～19世紀初頭	
〃 190	SD1 I層	〃	小瓶	1.8	-	-	-	ロクロ成形	透明釉	透明釉はやや白濁する	白色・やや滑らか	肥前系 18世紀後半～19世紀初頭	
〃 191	SK9	磁器 白磁	極小瓶	3.4	4.6	-	-	ロクロ成形 削り	透明釉	透明釉はやや青色を帯びる・露胎部分は橙色に発色	白色・やや滑らか・露胎部分は橙色に発色	肥前系	
〃 192	SK7 SK8	磁器 染付	小瓶	-	-	-	4.0	ロクロ成形 高台貼付	呉須・透明釉	透明釉は乳白気味となり貫入が入る	白色・荒い	能茶山 1820～幕末	高台内「サ」銘有り
〃 193	SD2 SP1 III層	〃	小瓶 辣蕪形	-	-	-	4.3	ロクロ成形 削り高台	(外)牡丹唐草	透明釉はやや淡緑色を帯びる	白色・やや滑らか	肥前 18世紀後半	
〃 194	SK10	〃	小瓶 辣蕪形	-	-	-	4.2	ロクロ成形 削り高台	(外)若松と梅	透明釉は淡緑色を帯びる・呉須は茶青灰色に発色	白色・やや滑らか	肥前系 18世紀後半～19世紀初頭	畳付に砂が付着
〃 195	SK9 SK12	〃	小瓶 辣蕪形	-	-	-	4.3	ロクロ成形 削り高台	(外)岩に草	焼成不良・透明釉は白濁する・呉須は暗緑色に発色	灰白色・やや荒い	肥前系 18世紀後半～19世紀初頭	
〃 196	SK7 包含層 II層	磁器 白磁	中瓶 端反辣蕪形	3.6	18.3	10.1	4.5	ロクロ成形 削り	(外)白磁釉	クリ底・釉は灰白色に発色	灰白色・やや荒い	肥前系 18世紀後半～19世紀前半	
〃 197	SK10	磁器 染付	中瓶	-	-	-	8.1	ロクロ成形 削り高台	呉須・透明釉	焼成不良・透明釉は白濁する	白色・やや荒い	肥前系	
〃 198	SK9	〃	瓶	-	-	-	5.4	ロクロ成形	(外)若松	内面及び底部露胎	透明感をもつ白色・非常に滑らか	瀬戸・美濃 産か	
Fig.30- 199	SK9 包含層 II層 SX5	〃	火入れ	10.8	10.0	-	10.1	ロクロ成形 削り高台	(外)花木文・格子文・下部は連弁の変化	内面下半露胎・釉は淡緑灰色に発色	白色・やや荒い	能茶山 1820～幕末	高台内「茶」銘有り・口唇部に煙管による打痕あり
〃 200	SP1 II層	〃	火入れ	-	-	-	9.9	ロクロ成形 削り高台	(外)丸内に花卉と青海波文	呉須は青灰色	白色・やや荒い	能茶山 1820～幕末	高台内「茶」銘有り
〃 201	SK10	〃	水滴	-	2.3	-	-	型押し成形 底部貼り合わせ技法	円孔周囲に型押し陽刻による菊文	隅に円孔あり・底部内外面布目圧痕・底部施釉・内面無釉	白色・やや荒い	肥前 18世紀後半～19世紀初頭	
〃 202	SK1 SP1 II層	〃	水滴	-	2.0	-	-	型押し成形 底部貼り合わせ技法	(外)型押し陽刻による青海波文	隅に円孔あり・底部内外面布目圧痕・底部施釉・内面及び片側面無釉	白色・やや荒い・裂孔が存在	肥前 18世紀後半～19世紀初頭	
〃 203	SK13	〃	水滴	-	3.0	-	-	型押し成形 底部貼り合わせ技法	白濁釉	隅に円孔あり・底部内外面布目圧痕・底部施釉・内面無釉	白色・やや滑らか・規模の大きな裂孔が存在	肥前系 18世紀後半～19世紀前半	
〃 204	SK7	〃	戸車	全長 5.0	全幅 1.0	-	円孔 径 1.2				白色・剥離面観察不可能	不明	片面にアルミナ砂付着・接地面が激しく摩耗する

Fig. 挿図番号	出土地点	種類	器種・器形	法量 (cm)				成形技法	釉葉・文様	特徴(成形・調整・釉調等)	胎土 (色・剥離面等)	生産地 生産年代	備考(銘・焼成技法・使用痕・他)
				口径	器高	胴径	底径						
Fig.30-205	SK13 包含層 II層	陶胎 胎染付	中碗 広東形	11.9	6.4	-	5.6	ロクロ成形 削り高台	白化粧土・呉須・透明釉 (外) 竹・植物文 (内) 圏線 (見込) コンニャク印	呉須は滲む・透明釉は貫入が入る	淡黄色・非常に荒い・気孔が多く存在	瀬戸・美濃 19世紀前半～幕末	
〳 206	P1	〳	中碗 広東形	11.4	6.5	-	5.8	ロクロ成形 削り高台	白化粧土・呉須・透明釉 (外) 菊花文 (内) 圏線 (見込) コンニャク印	呉須は暗青灰色に発色・透明釉は気泡を多く含む	淡黄色・非常に荒い・気孔が多く存在	瀬戸・美濃 19世紀前半～幕末	
〳 207	SK9	陶器	中碗 広東形	12.2	5.3	-	5.9	ロクロ成形 削り高台	灰釉	高台は細く高い・浅黄色を帯びる透明の釉で細かな貫入が入る。高台内施釉	淡黄色・N胎土	能茶山 1820～幕末	見込陶器質の足付ハマ跡有り。[胎土分析資料15]
〳 208	SP1 II層	〳	小碗 端反形	7.8	-	-	-	ロクロ成形	透明釉・緑釉	口縁から内外面上位に緑釉が流れる・透明釉は貫入が入る	灰白色・やや滑らか・円形粒石英細砂を僅かに含む・微細な円孔が僅かに存在	信楽	
〳 209	SK13	〳	小碗 端反形	9.8	-	-	-	ロクロ成形	透明釉・緑釉	口縁部内外面に緑釉が流れる・緑釉はオリエ茶褐色に発色・透明釉は貫入が入る	同上	信楽	
〳 210	SK12	〳	小碗 端反形	9.1	-	-	-	ロクロ成形	透明釉・緑釉	口縁部内外面に緑釉が流れる・透明釉は細かな貫入が入る	同上	信楽	
〳 211	SP1 II層 包含層 II層	〳	大皿 丸形	26.4	4.9	-	10.7	ロクロ成形 削り高台	透明釉・呉須 (内) 竹に雀	高台は丸味をもった作り・見込釉剥ぎ部分に白化粧土を薄く施釉・呉須は暗緑灰色・透明釉は細かな貫入が入る	鈍い橙色・僅かに透明感をもつ・透明な橙色粒と石英細砂を含む	県東部系の可能性が高い	蛇の目凹型高台・見込蛇の目釉剥ぎ・[胎土分析資料2]
Fig.31-212	SX5	〳	小皿	-	-	-	5.1	ロクロ成形 削り高台	鉄釉	豊付両脇を削り鋭角的作り・外面下半に削り痕顕著・外面下半無釉	黒褐色・N胎土	能茶山 1820～幕末	見込蛇の目釉剥ぎ後白化粧土を刷毛塗り・見込白化粧部分に墨書
〳 213	SK11	〳	小皿	-	-	-	4.8	ロクロ成形 削り高台	鉄釉・白化粧土	高台内の削り込みが深い・高台脇に抉りあり・外面底部付近無釉	鈍い赤褐色から褐灰色・N胎土	能茶山 1820～幕末	見込白化粧部分に墨書有り
〳 214	SK7	〳	小皿	-	-	-	4.8	ロクロ成形 削り高台	透明釉・白化粧土	高台内兜巾状・高台は鋭角的作り・透明釉は貫入が入る	淡黄色・N胎土	能茶山 1820～幕末	見込蛇の目釉剥ぎ後白化粧土を刷毛塗り
〳 215	SK9	〳	小皿	-	-	-	4.9	ロクロ成形 削り高台	鉄釉・白化粧土	高台断面三角形・釉は焼成不良・高台無釉	橙色・N胎土	能茶山 1820～幕末	見込蛇の目釉剥ぎ後白化粧土を刷毛塗り
〳 216	SK10	〳	小皿	-	-	-	5.1	ロクロ成形 削り高台	鉄釉・白化粧土	高台内の削り込みが深い・高台断面三角形・高台無釉	橙色・N胎土	能茶山 1820～幕末	見込蛇の目釉剥ぎ後白化粧土を刷毛塗り
〳 217	SP1 II層	〳	小皿	-	-	-	4.3	ロクロ成形 削り高台	鉄釉・白化粧土	豊付両脇に削りを施し断面三角形とする・高台無釉	褐灰色・N胎土	能茶山 1820～幕末	見込蛇の目釉剥ぎ後白化粧土を刷毛塗り
〳 218	SD1 包含層 II層	〳	小皿 端反形	12.5	3.8	-	4.5	ロクロ成形 削り高台	鉄釉	高台内の削り込みが深い・豊付両脇に削りを施し断面三角形とする・底部付近無釉	鈍い赤褐色から黒褐色・N胎土	能茶山 1820～幕末	見込の釉剥ぎなし
〳 219	SK13	〳	小皿	12.4	14.5	-	4.4	ロクロ成形 削り高台	鉄釉・白化粧土	外面工具痕顕著・高台内の削り込みが深い・高台断面三角形・高台無釉	褐灰色・N胎土	能茶山 1820～幕末	見込蛇の目釉剥ぎ後白化粧土を刷毛塗り
〳 220	SK7	〳	小皿 端反形	12.2	-	-	-	ロクロ成形	鉄釉・白化粧土	外面工具痕顕著・底部付近無釉	鈍い赤褐色・N胎土	能茶山 1820～幕末	見込蛇の目釉剥ぎ後白化粧土を刷毛塗り
〳 221	SK10	〳	小皿 丸形	13.2	-	-	-	ロクロ成形	鉄釉	外面工具痕顕著・中位に沈線が巡る・見込釉剥ぎ部分は露胎	鈍い赤褐色から褐灰色・N胎土	能茶山 1820～幕末	見込蛇の目釉剥ぎ
〳 222	SP1 III層	〳	小皿 丸形	13.0	-	-	-	ロクロ成形	鉄釉	外面工具痕顕著・中位に沈線が巡る・見込釉剥ぎ部分は露胎	明赤褐色・N胎土	能茶山 1820～幕末	見込蛇の目釉剥ぎ



Fig. 挿図番号	出土 地点	種類	器種・ 器形	法量 (cm)				成形技法	釉薬・文様	特徴(成形・調整・釉調等)	胎土 (色・剥離面等)	生産地 生産年代	備考(銘・焼成技法・ 使用痕・他)
				口径	器高	胴径	底径						
Fig.31- 223	SK9	陶器	小皿	—	—	—	5.2	ロクロ成形 削り高台	鉄釉・白化粧土	高台脇に挟りあり・高台は厚手の作り・壘付脇に削り・焼成不良	明赤褐色・N胎土	能茶山 1820～幕末	見込蛇の目釉剥ぎ後白化粧土を刷毛塗り
〃 224	SD1 I層	〃	小皿	—	—	—	5.0	ロクロ成形 削り高台	鉄釉・白化粧土	高台断面三角形・外面下位に沈線が巡る・底部付近無釉	鈍い赤褐色から褐灰色・N胎土・透明感をもつ橙色の砂粒を多く含む	能茶山 1820～幕末	見込蛇の目釉剥ぎ後白化粧土を刷毛塗り
〃 225	SP1 II層	〃	小皿 輪花形	8.8	1.4	—	5.3	型打成形	鉄釉 (内) 型打陽刻による亀文	薄手の作り・外面は鉄釉を刷毛塗り	赤褐色・精緻な胎土	産不明	
〃 226	SP1 検出面	〃	小皿 波縁形	8.8	2.1	—	3.5	ロクロ成形 削り高台	灰釉 (木灰が主体)	灰オリーブ色を帯びる透明の釉で、細かな貫入が入る・高台内施釉	灰色・やや透明感をもつ・僅かに円形粒石英細砂を含む	不明・県東部系か	
〃 227	SP1 II層	〃	餌鉢	5.0	2.2	—	3.8	ロクロ成形 摘み貼付	オリーブ褐色の釉	底部は削りを施す・釉はやや焼成不良で不透明・底部付近無釉	黄灰色・やや荒い・微細な円孔を含む	不明・県東部系か	
〃 228	SK9 SP1 II層	〃	餌鉢	4.5	2.5	—	3.8	ロクロ成形 回転糸切り 摘み貼付	灰釉 (木灰が主体)	底部糸切り痕顕著・釉は緑灰色を帯びる透明の釉で貫入が入る・底部無釉	灰色・やや透明感をもつ・やや滑らか・僅かに円形粒石英細砂を含む	能茶山・県東部系ともに可能性あり	[胎土分析資料]28]
〃 229	SP1 II層	〃	餌鉢	5.6	2.7	—	5.0	ロクロ成形 回転糸切り 摘み貼付	白濁釉	底部糸切り痕顕著・底部無釉	淡黄色・N胎土	能茶山 1820～幕末	底部墨書有り・ [胎土分析資料]18]
〃 230	SK9	〃	餌鉢	4.8	2.5	—	2.2	ロクロ成形 回転糸切り 摘み貼付	灰釉	底部糸切り痕顕著・釉は緑灰色を帯び白濁する。細かな貫入が入る・底部無釉	灰色から鈍い橙色・円形粒石英細砂を含む	不明	
〃 231	SK7	〃	餌鉢	6.1	—	—	—	ロクロ成形 回転糸切り 摘み貼付	灰釉	オリーブ灰色を帯びるガラス質透明の釉で貫入が入る	灰白色・他は同上	不明・県東部系か	
Fig.32- 232	SK8	〃	播鉢	11.2	—	—	—	ロクロ成形		1単位10条の播目を施す	赤褐色・角粒長石礫と角粒石英砂を多く含む・大規模な気孔が多く存在	堺	
〃 233	SK9 SP1 包含層	〃	播鉢	27.5	10.6	—	12.2	ロクロ成形		1単位8条の播目を施す・見込にウールマーク状の播目文様	同上	堺	
〃 234	SK13	〃	播鉢	17.8	5.8	—	8.2	ロクロ成形		1単位9条の播目を施す・見込に同上の播目文様	同上	堺	底部に砂が付着
〃 235	SK1	〃	播鉢	30.7	—	—	—	ロクロ成形		1単位8条の播目を施す・口縁部外面に釉が薄く掛かる	鈍い赤褐色・他は同上	堺	
〃 236	SK13	〃	播鉢	17.0	6.6	—	7.7	ロクロ成形		1単位7条の播目を施す	赤褐色・他は同上	堺	
〃 237	SP1 II層	〃	播鉢 又は こね鉢	36.2	—	—	—	ロクロ成形	自然釉	口縁内凸帯なし・口縁部内外面横位の強いロクロナア・口縁部下6cmの破片のため播目は確認できない・外面に自然釉が斑に掛かる、無釉部分は暗赤色に発色	灰黒色・角粒長石礫を疎らに石英・長石・透明感を持つ赤色の粗砂を多く含む	産不明・備前、信楽以外の地方窯	
〃 238	SD1 I層	〃	こね鉢	25.6	—	—	—	ロクロ成形	鉄釉	口縁拡張部は丸味をもった作り・内外面施釉・口唇部釉ガキ	灰色・やや透明感をもつ・円形粒石英細砂を含む	県東部系の可能性が高い	[胎土分析資料]6]
〃 239	SD1	〃	片口 又は こね鉢	24.4	—	—	—	ロクロ成形	鉄釉	口縁部を外折させる	暗灰色・N胎土	能茶山 1820～幕末	
〃 240	SD1 I層 包含層 II層	〃	片口	24.4	12.0	—	11.1	ロクロ成形 削り高台	鉄釉	口縁部を外折させる・鉄釉を刷毛塗り・高台無釉	黒褐色・N胎土	能茶山 1820～幕末	見込陶器質の足付ハマ跡有り・[胎土分析資料]5]
〃 241	SK7 SD1 I層	〃	蓋	笠部 径 10.6	2.4	—	摘み 径 2.2	ロクロ成形 天井部削り	鉄釉 (鉛釉)	外面削り痕顕著・内面無釉	橙色・N胎土・赤色礫を多く含む	能茶山 1820～幕末	[胎土分析資料]14]

Fig. 挿図番号	出土 地点	種類	器種・ 器形	法量 (cm)				成形技法	釉薬・文様	特徴(成形・調整・釉調等)	胎土 (色・剥離面等)	生産地 生産年代	備考(銘・焼成技法・ 使用痕・他)
				口径	器高	胴径	底径						
fig.32- 242	SK12 SD2	陶器	土鍋蓋	笠部 径 14.2	2.8	-	摘み 径 4.4	ロクロ成形 削り	灰釉 (外)沈線8条	オリープ色を帯びる透 明の釉で貫入が入る	灰色・やや透明 感をもつ・円形 粒石英細砂を含 む	県東部系の 可能性あり	口縁部に炭化物が 強く付着
〳 243	SK8	〳	土鍋	-	-	-	6.8	ロクロ成形 削り	鉄釉(柿釉)	外底部に粘土塊貼付3 足・内面施釉・外底部 無釉	鈍い橙色・N胎 土・赤色礫を僅 かに含む	能茶山 1820～幕末	底部外面に煤が強 く付着・見込陶器 質の足付ハマ跡有 り
〳 244	SK7 SD1 II層	〳	土鍋	-	-	-	6.4	ロクロ成形 削り	(外)灰釉(内)鉄釉	外底部に粘土塊貼付・ 内面施釉・外底部無釉	灰白色・やや透 明感をもつ・円 形粒石英細砂を 含む	不明・県東 部系か	
〳 245	SK10 SD2 SP1 III層	〳	土鍋	-	-	-	8.5	ロクロ成形 削り	(内)鉄釉	底部は鋭角な削り・ 外面下半無釉	灰色・微細な円 孔有り・N胎土	能茶山 1820～幕末	底部外面に煤が強 く付着・見込陶器 質の足付ハマ跡有 り・4足・[胎土分 析資料]4]
Fig.33- 246	SK13 包含層 II層	〳	行平蓋	笠部 径 17.7	-	-	-	ロクロ成形 削り	錆釉 (外)飛鉋	錆釉は刷毛塗り・ 天井部は飛鉋を蛇の目 状に施し露胎させる	赤褐色から黒褐 色・N胎土	能茶山 1820～幕末	
〳 247	SP1 II層	〳	行平蓋	笠部 径 17.2	-	-	-	ロクロ成形 削り	錆釉 (外)飛鉋・白化 粧土イッチン掛 け	錆釉刷毛塗り・天井部 は飛鉋を蛇の目状に施 し露胎させる・白化粧 土によるイッチン掛け	暗灰色から赤褐 色・N胎土	能茶山 1820～幕末	
〳 248	SD1 I層	〳	行平	14.8	9.3	-	6.6	ロクロ成形 削り 把手と注口 部は貼付	錆釉 (外)飛鉋	錆釉刷毛塗り・外面上 半は飛鉋を施す	赤褐色・N胎土	能茶山 1820～幕末	体部下半から底部 にかけて煤が強く 付着
〳 249	SK13	〳	行平	17.0	-	-	-	ロクロ成形 削り	錆釉 (外)飛鉋	錆釉刷毛塗り・外面上 半は飛鉋を施す	黒褐色・N胎土	能茶山 1820～幕末	底部外面に煤が僅 かに付着
〳 250	SK13	〳	行平鍋	18.9	-	-	-	ロクロ成形 削り	錆釉 (外)飛鉋 (把手)型押陽刻 による「寿」	錆釉刷毛塗り・外面上 半は飛鉋を施す	鈍い赤褐色・N 胎土	能茶山 1820～幕末	[胎土分析資料 ]3]
〳 251	SP1 II層 III層	〳	土鍋	15.2	-	-	-	ロクロ成形	灰釉	緑灰色を帯びるガラス 質透明の釉で貫入が入 る	灰白色・やや透 明感をもつ・円 形粒石英細砂を 含む	県東部系の 可能性	
〳 252	SK10S X5	〳	土瓶	12.8	-	-	-	ロクロ成形 把手貼付	透明釉・白化粧 土 (外)白化粧土に よる花文様・イ ッチン掛け	口唇部釉ガキ・透明釉 は貫入が入る	橙色・N胎土	能茶山 1820～幕末	口縁部と体部上半 に煤が付着・[胎土 分析資料]21]
〳 253	SD1- P1	〳	土瓶	-	-	-	-	ロクロ成形 注口部貼付	灰釉 (外)沈線	円孔4・注口部に深い沈 線を巡らす・不透明な オリープ灰色の釉	橙色から灰色・ N胎土	能茶山 1820～幕末	
〳 254	SK9	〳	急須	-	-	-	-	ロクロ成形 注口部・把 手貼付	灰釉	薄手の作り・灰オリー プ色を帯びる透明の釉 で貫入が入る	灰白色・やや透 明感をもつ・円 形粒石英細砂を 含む	県東部系の 可能性	
〳 255	SK12	〳	急須	-	-	-	4.8	ロクロ成形 底部削り 注口部貼付	灰釉	薄手の作り・口縁は波 線状・体部上位は沈線 を多条に巡らす・オリ ープ色を帯びる透明の 釉で細かな貫入が入る	灰色・やや透 明感をもつ・長 石・円形粒石英 細砂を含む	産不明	
〳 256	SD1	〳	土瓶 又は 急須	-	-	-	-	ロクロ成形 注口部貼付	灰釉(内)鉄釉	薄手の作り・オリープ 灰色を帯びる透明の釉 で細かな貫入が入る・ 内面上位鉄釉施釉	灰白色・やや透 明感をもつ・円 形粒石英細砂を 含む	県東部系か	
〳 257	SP1 III層	〳	急須蓋	笠部 径 6.6	-	-	-	ロクロ成形 削り	灰釉・白化粧土 (外)イッチン掛 けによる花卉を 摘み外周に巡ら す	灰オリープ色の不透明 釉・中央に白濁釉を施 す	赤褐色・N胎土	能茶山 1820～幕末	
〳 258	SK7	〳	急須 又は 土瓶蓋	笠部 径 7.8	1.9	かえり 6.2	摘み 径 1.3	ロクロ成形 削り	灰釉 (外)鉄絵・白化 粧土イッチン掛 け	透明釉は乳白気味・天 井部に鉄絵と白化粧土 イッチン掛けを施す	透明感をもつ灰 白色・滑らか・ 黒色細砂を含 む・円孔が存在	関西系 18世紀後半 ～幕末	

Fig. 挿図番号	出土 地点	種類	器種・ 器形	法量 (cm)				成形技法	釉薬・文様	特徴(成形・調整・釉調等)	胎土 (色・剥離面等)	生産地 生産年代	備考(銘・焼成技法・ 使用痕・他)
				口径	器高	胴径	底径						
〳 259	SK7	陶器	急須 又は 土瓶蓋	笠部 径 8.7	—	かえり 径 7.0	—	ロクロ成形	透明釉	透明釉は青色を帯び粗 い貫入が入る	透明感をもつ白色・ 滑らか・黒色細砂・円形 石英細砂を含む・大規 模な円孔が存在	関西系	[胎土分析資料]32]
〳 260	SK13	〳	急須 又は 土瓶蓋	笠部 径 10.2	—	かえり 径 8.2	—	ロクロ成形	灰釉 (外) 鉄絵	黄緑色を帯びる透明な 釉で細かな貫入が入る	透明感をもつ白色・ 滑らか・長石・円形石 英細砂を含む	関西系	
〳 261	SP1 II層	〳	土瓶	—	—	—	5.0	ロクロ成形 底部削り	灰釉	オリーブ黄色を帯びる ガラス質透明の釉・外 面下半無釉・底部脇に 粘土塊貼付	灰白色・やや透明感 をもつ・円形石英細砂 を含む	関東部系か	
〳 262	SK9S K10	〳	急須 又は 土瓶	—	—	—	7.6	ロクロ成形 底部削り	灰釉	薄手の作り・オリーブ 灰色を帯びる透明の釉 で細かな貫入が入る・ 外面下半無釉・内面鉄 釉施釉	灰白色・やや透明感 をもつ・円形石英細砂 を含む	関東部系か	
〳 263	SD1	〳	土瓶	—	—	—	8.0	ロクロ成形 底部削り	鉄釉	内外面に鉄釉施釉・外 面下半無釉	鈍い黄橙色～褐 灰色・N胎土	能茶山産 1820～幕末	底部内面陶器質の 足付ハマ跡有り・ 底部に煤が強く付 着
〳 264	SD1 SP1 III層	〳	水注	5.5	—	—	—	ロクロ成形	灰釉	薄手の作り・内面ロク ロ目顕著・釉は灰オリ ーブ色で細かな貫入が 入る・内面無釉	灰白色・やや透明感 をもつ・円形石英細砂 を含む	産不明	
〳 265	SK9	〳	水注	18.0	—	—	—	ロクロ成形	乳白色の釉	釉は細かな貫入が入る	浅黄橙色・N胎 土	能茶山 1820～幕末	
Fig.34- 266	SK13 SD2	〳	德利	2.8	15.9	9.6	5.8	ロクロ成形 削り	土灰釉か	内面ロクロ目顕著・オ リーブ褐色の不透明な 釉・内面無釉	橙色・N胎土	能茶山 1820～幕末	[胎土分析資料]7]
〳 267	SK13	〳	德利	2.8	—	—	—	ロクロ成形 削り	土灰釉か	内面ロクロ目顕著・オ リーブ褐色の不透明な 釉・内面無釉	橙色から黒褐 色・N胎土	能茶山 1820～幕末	
〳 268	SK13 SD2 包含層 II層	〳	德利	—	—	—	7.5	ロクロ成形 削り	土灰釉か	内面ロクロ目顕著・オ リーブ褐色の不透明な 釉・内面無釉	橙色・N胎土	能茶山 1820～幕末	
〳 269	SK13	〳	德利 舟德利 形	3.4	22.5	15.2	10.8	ロクロ成形 削り	灰釉	内面ロクロ目顕著・釉 はオリーブ黄色に発色	灰色・石英他の 砂礫を含む・規模の 大きな裂孔が多く存 在	瀬戸・美濃	
〳 270	〳	〳	爛德利	5.5	26.3	8.8	7.7	ロクロ成形 分割成形 削り	(外) 灰釉 (内底) 鉄釉	内面ロクロ目顕著・内 面体部中に粘土接合 痕が残る・外面体部下 半に叩き痕有り・釉は オリーブ黄色を帯びる	灰色から浅黄色 に発色・僅かに透 明感をもつ	能茶山・東 部系ともに可能性 あり	[胎土分析資料]30]
〳 271	SD2 SP1 III層 包含層	〳	爛德利	—	—	7.7	—	ロクロ成形 削り	(外) 灰釉・呉 須による竹文 (内底) 鉄釉	内面ロクロ目顕著・内 面中に接合痕あり・ 肩に沈線2条を巡らす・ 灰釉は細かな貫入が 入る	灰白色・精選さ れた胎土	能茶山又は 尾戸	[胎土分析資料]24]
〳 272	SK9 SD1 包含層 II層	〳	爛德利	—	—	—	8.5	ロクロ成形 削り	(外) 灰釉・白 化粧土による花 弁状の文様 (内底) 鉄釉	内面ロクロ目顕著・釉 は灰オリーブ色に発色 し貫入が入る	灰色・長石・石 英細砂を含む	産不明・東 部系の可能性有 り	
〳 273	SK9 包含層 II層	〳	爛德利	—	—	—	8.2	ロクロ成形 削り	灰釉 (外) 鉄絵	内面ロクロ目顕著・淡 緑灰色の透明な釉で細 かな貫入が入る	灰白色・やや滑 らか・石英細砂を 含む・規模の 大きな裂孔が存 在	関西系	底部に墨書有り・ [胎土分析資料]27]
〳 274	SK11 SP1 II層	〳	爛德利	—	—	—	7.6	ロクロ成形 削り	灰釉	内面ロクロ目顕著・黄 色を帯びるガラス質の 透明な釉で細かな貫入 が入る	灰白色・やや滑 らか・透明感 をもつ・円形石 英細砂が僅かに 存在	関西系	底部に墨書有り・ [胎土分析資料]29]
〳 275	SK8 SK12	〳	爛德利	—	—	—	7.8	ロクロ成形 削り	(外) 鉄釉	内面ロクロ目顕著・内 面無釉	同上	関西系	底部に墨書有り
〳 276	SK1	〳	爛德利	—	—	—	8.2	ロクロ成形 削り	(外) 灰釉	内面ロクロ目顕著・釉 は灰オリーブ色に発色 し貫入が入る	灰白色・荒い・ 円形石英細砂 が存在	在地産・尾 戸系又は東 部系	

Fig. 挿図番号	出土地点	種類	器種・器形	法量 (cm)				成形技法	釉薬・文様	特徴(成形・調整・釉調等)	胎土 (色・剥離面等)	生産地 生産年代	備考(銘・焼成技法・使用痕・他)
				口径	器高	胴径	底径						
◇ 277	SK7・8	陶器	爛徳利	-	-	-	8.2	ロクロ成形削り	(外) 灰釉・白化粧土による弁状の文様(内底) 鉄釉	内面ロクロ目・釉は灰オリーブ色に発色し貫入が入る	灰色・石英・長石の細砂を含む	産不明	
◇ 278	SK9	◇	爛徳利	-	-	-	7.9	ロクロ成形削り	(外) 灰釉(内底) 鉄釉	薄手の作り・内面ロクロ目・灰オリーブ色の不透明な釉で細かな貫入が入る	黄橙色～灰色・N胎土	能茶山産 1820～幕末	[胎土分析資料J25]
Fig.34-279	SK13	◇	爛徳利	-	-	-	7.9	ロクロ成形削り	(外) 灰釉	内面ロクロ目・透明の釉で貫入が入る	灰白色・やや滑らか・透明感をもつ・長石砂が存在	関西系	
Fig.35-280	SP1 II層	◇	中瓶 鶴首逆燕形	2.6	-	-	-	ロクロ成形	鉄釉	頸部内面施釉	暗灰色・N胎土だが	能茶山 1820～幕末	
◇ 281	SK12	◇	器種不明 蓋物か	10.2	-	-	-	ロクロ成形	(外) 灰釉	灰オリーブ色を帯びるガラス質透明の釉	鈍い黄色	不明	
◇ 282	SP1 II層	◇	小甕	11.5	-	-	-	ロクロ成形削り	鉄釉	口縁を内折させる・内外面施釉・口唇部釉剥き	灰白色・N胎土	能茶山の可能性有り	
◇ 283	SK1	◇	小甕	8.0	-	-	-	ロクロ成形	鉄釉	釉は黒色から褐色に発色・内外面施釉	灰色・円形状石英細砂を含む・N胎土	能茶山産 1820～幕末	[胎土分析資料J26]
◇ 284	SX5	◇	香炉か	7.2	-	-	-	ロクロ成形	鉄釉	内外面施釉・口唇部釉ガキ	灰白色・やや透明感をもつ・やや滑らか	関西系	
◇ 285	SK11 SP1 II層	◇	中瓶	-	-	-	8.9	ロクロ成形削り高台	(外) 鉄釉	高台は高く鋭角的・釉は黒褐色～暗オリーブ色に発色	赤褐色・N胎土	能茶山 1820～幕末	[胎土分析資料J8]
◇ 286	SK9	◇	中瓶	-	-	-	7.6	ロクロ成形削り高台	(外) 白濁釉	内面ロクロ目顕著・高台は鋭角的な削り	灰白色～淡黄色・長石礫と石英・赤色風化微砂を僅かに含む・N胎土(精選されたもの)	能茶山 1820～幕末	[胎土分析資料J20]
◇ 287	SP1 II層	◇	小瓶	-	-	-	5.6	ロクロ成形削り高台	(外) 鉄釉	釉は黒色に発色・高台内施釉・畳付釉ガキ	赤褐色・N胎土だが気孔が多い	能茶山産 1820～幕末	畳付周辺に砂付着
◇ 288	SK8 SK10 SK12 包含層 II層	◇	小瓶	-	-	-	7.8	ロクロ成形削り高台	(外) オリーブ褐色の釉 (内) 鉄釉	高台内は浅く畳付幅が広い・高台脇に抉りあり	黒褐色～赤褐色・N胎土	能茶山 1820～幕末	
◇ 289	SK7	◇	小瓶	-	-	-	5.2	ロクロ成形削り高台	(外) 鉄釉	厚手の作り・外面ロクロ目顕著・高台は厚く丸みをもった作り・高台内施釉	灰色・N胎土・赤色砂を含む・微細な気孔が部分的に存在	能茶山 1820～幕末	内面に鉄が付着
◇ 290	SP1	◇	大瓶	-	-	-	10.8	ロクロ成形削り高台	灰釉	クリ底・釉はオリーブ褐色に発色	黒褐色～赤褐色・N胎土	能茶山 1820～幕末	見込陶器質の足付ハマ跡有り
◇ 291	SK7	◇	瓶	-	-	-	14.0	ロクロ成形削り	(外) 鉄釉 (内底) 鉄釉	釉は黒褐色に発色	橙色・N胎土	能茶山 1820～幕末	
◇ 292	SK9	◇	罎塙	-	-	17.3	9.7	ロクロ成形削り	鉄釉(錆釉)	体部を破損するため窓は確認不可能・頸部は長く伸び下方へ湾曲する	黒褐色・N胎土	能茶山 1820～幕末	内面体部下半に赤色顔料(べんがら)が著しく付着し、赤色～赤黒色に発色
F36-293	SK7	◇	甕	21.4	-	-	-	ロクロ成形	鉄釉	口縁は外折させ丸く収める・釉は極暗赤褐色に発色	黒色に近い暗灰色・部分的に気孔が入る・N胎土	能茶山 1820～幕末	
◇ 294	SK9 SP1 II層	◇	甕	23.2	-	24.0	-	ロクロ成形	鉄釉	口縁は外折させ丸く収める・体部上位に5条の沈線を巡らす	黒色・N胎土・大規模な裂孔が存在	能茶山 1820～幕末	[胎土分析資料J9]
◇ 295	SK13	◇	甕	24.5	-	26.9	-	ロクロ成形積み成形	鉄釉(柿釉)	口縁は外折させる・体部上位に黒色の鉄釉を流し掛ける	灰白色・大規模な円孔を多く含む	関西系	
◇ 296	SK8	◇	甕	27.0	-	-	-	ロクロ成形	鉄釉(柿釉)	口縁は外折させ丸く収める・体部上位に黒色の鉄釉を流し掛ける	灰黄色・赤色風化礫を僅かに含む・N胎土	能茶山 1820～幕末	

Fig. 挿図番号	出土 地点	種類	器種・ 器形	法量 (cm)				成形技法	釉薬・文様	特徴(成形・調整・釉調等)	胎土 (色・剥離面等)	生産地 生産年代	備考(銘・焼成技法・ 使用痕・他)
				口径	器高	胴径	底径						
Fig.36- 297	SK9 包含層 II層	陶器	甕	27.5	—	30.8	—	ロクロ成形	鉄釉(柿釉)・ 薬灰釉(うのふ 釉)	口縁は外方へ拡張させ る・体部上位に2条の沈 線と櫛描き波状文を巡 らす	灰色・やや透明 感をもつ・石英 砂粒を多く含 む・大規模な裂 孔が存在	産不明	
〃 298	SK9 SP1	〃	甕	—	—	28.8	—	ロクロ成形	鉄釉(柿釉)・ 薬灰釉(うのふ 釉)	体部上位に2条の沈線と 櫛描き波状文を巡らす	褐灰色・N胎土 か	能茶山産の 可能性が高 い	
Fig.37- 299	SK7	〃	甕	30.8	—	—	—	ロクロ成形	鉄釉	口縁は内接させる・頸 部に櫛描き文と沈線を 巡らす・	鈍い赤褐色・球 状の石英微砂と 透明感を持つ橙 色粒を多く含む	産不明	
〃 300	SK7 SK8 SD1	〃	甕	33.0	—	—	—	ロクロ成形	鉄釉(柿釉)	口縁は内接させる・体 部上位に5条の沈線を巡 らせ黒色の鉄釉を流し 掛けする	鈍い橙色・透明 感を持つ橙色粒 を多く含む	産不明	
〃 301	SK9 SD1 SP1 SD1 II層 包含層 II層	〃	甕	36.6	—	37.1	—	ロクロ輪積 み成形 削り	鉄釉	口縁は内外に拡張させ る・体部上位に多条の 沈線を巡らせ黒色の鉄 釉を流し掛けする	灰白色・やや滑 らか・石英細砂 を含む・規模の 大きな裂孔が存 在	関西系	
〃 302	SP1 II層	〃	甕	29.0	—	39.4	—	ロクロ輪積 み成形	鉄釉系	口縁は内方に拡張させ る・口唇部に櫛目あり ・外面に多条の沈線 を巡らせる・輪状の双 耳を貼付	褐灰色・石英・ 長石の砂粒を多 く含む・大規模 な円裂孔が存在	産不明	302と同一個体・ [胎土分析資料]23]
〃 303	SK7 SK9 SD1 SD1 包含層 II層	〃	甕	30.8	35.3	31.9	21.4	ロクロ輪積 み成形 削り	鉄釉	内面体部上位に接合痕 有り・ロクロ撫で調 整・上位に黒色の鉄釉 を流し掛け	黒褐色・N胎土	能茶山産 1820～幕末	[胎土分析資料]10]
Fig.38- 304	SK10	〃	甕	—	—	—	15.3	ロクロ輪積 み成形 削り	鉄釉	釉は黒褐色に発色	灰黄褐色・やや 透明感をもつ・ 石英砂粒を多く 含む	産不明	
〃 305	SP1 II層	〃	甕	—	—	—	15.6	ロクロ輪積 み成形 削り	鉄釉(柿釉)	外面黒色の鉄釉を流し 掛け・内面柿釉を刷毛 塗り	灰白色・やや滑 らか・石英粒を 多く含む・大規 模な円孔が多く 存在	関西系	
〃 306	SK1 SP1	〃	甕	—	—	—	18.4	ロクロ成形 削り	鉄釉	釉は赤褐色から灰色に 発色・	褐灰色・石英・ 長石の砂粒を多 く含む・大規模 な円裂孔が存在	産不明	302と同一個体
〃 307	SK9 SD1 包含層 II層	〃	甕	—	—	—	16.4	ロクロ成形 削り	鉄釉	釉は黒褐色に発色	鈍い橙色・透明 感を持つ橙色粒 を多く含む	産不明	底部内面に陶器質 の足付ハマ跡有 り・6足
〃 308	SK12	〃	灯明皿	8.5	1.9	—	3.4	ロクロ成形 削り	灰釉 見込に櫛目有り	釉は細かな貫入が入 る・外面下半無釉	灰白色・透明感 をもつ・やや滑 らか・円形状石 英・長石細砂を 含む	関西系	見込陶器質の足付 ハマ跡有り・3足・ 見込に煤が付着
〃 309	SK13	〃	灯明皿	5.2	2.0	—	4.0	ロクロ成形 削り	灰釉	オリブ黄色を帯びる 透明の釉・釉は細かな 貫入が入る	同上	関西系	
〃 310	SK8 SD1	〃	灯明皿	—	—	—	3.9	ロクロ成形 削り	灰釉	灰オリブ色を帯びる 透明の釉・釉は細かな 貫入が入る	同上	関西系	
〃 311	SP1	〃	台付灯 明皿	6.0	—	—	—	ロクロ成形 削り	灰釉	透明の釉・細かな貫入 が入る	灰白色・N胎土	能茶山 1820～幕末	口縁部に煤が強く 付着
〃 312	SK7	〃	台付灯 明皿	6.7	5.1	—	3.5	ロクロ成形 底部回転 削り	灰釉	釉は白濁し灰白色に発 色	淡黄色・赤色風 化礫の微砂を僅 かに含む・N胎 土	能茶山 1820～幕末	[胎土分析資料]19]

Fig. 挿図番号	出土 地点	種類	器種・ 器形	法量 (cm)				成形技法	釉薬・文様	特徴(成形・調整・釉調等)	胎土 (色・剥離面等)	生産地 生産年代	備考(銘・焼成技法・ 使用痕・他)
				口径	器高	胴径	底径						
Fig.39- 313	SK13	陶器	火入れ 半筒形	10.0	8.6	—	10.5	ロクロ成形 削り高台	灰釉・緑釉	灰釉は灰オリープ色を 帯び貫入が入る・口縁 部に緑釉を流し掛けし 一部赤色に発色	灰色・やや透明 感をもつ・裂孔 が存在	県東部系の 可能性有り	高台内墨書有り・ 口唇部煙管による 打痕顕著
〳 314	SK7	〳	火入れ 半筒形	10.8	—	—	—	ロクロ成形	白化粧土・灰 釉・緑釉	白化粧土施釉の後灰釉 施釉・釉はガラス化し 貫入が入る	灰色・やや透明 感をもつ・部分 的に気孔が存在	県東部系の 可能性有り	口唇部煙管による 打痕顕著
〳 315	〳	〳	火入れ 半筒形	7.4	—	—	—	ロクロ成形	灰釉・緑釉	釉は透明で貫入が入 る・緑釉は部分的に赤 色に発色	灰色・部分的に 細かな気孔が存 在	産不明	口唇部煙管による 打痕顕著
〳 316	SK7 SK8	〳	火入れ 半筒形	7.8	6.8	—	8.0	ロクロ成形 削り高台	白化粧土・灰釉	体部に白化粧土・口唇 部に赤色の釉を施釉の 後灰釉施釉・灰釉は貫 入が入りオリープ黄色 を帯びる	灰白色・石英・ 長石の微砂を含 む・僅かに透明 感をもつ	能茶山・県 東部系とも に可能性あり	口唇部煙管による 打痕顕著・[胎土 分析資料J31]
〳 317	SK13 SD1 SP1 II層	〳	火入れ 半筒形	9.2	7.8	—	9.2	ロクロ成形 削り高台	鉄釉 (褐釉)	口縁は内傾させる・内 面ロクロ目顕著・内面 施釉	赤褐色・N胎土 に酷似	能茶山産の 可能性が高い	[胎土分析資料J11]
〳 318	SK12	〳	火入れ 半筒形	12.2	—	—	9.7	ロクロ成形 削り高台	鉄釉 (外) 沈線 状の文様	口縁は内方に拡張させ る	赤褐色・N胎土 だが砂粒は少ない	能茶山 の可能性有り	
〳 319	SK13	〳	火入れ	16.1	—	—	—	ロクロ成形 削り高台	透明釉・緑釉・ うのふ釉	口縁部内外面に緑釉と うのふ釉を流し掛け	灰白色・大規模 な円裂孔が非常 に多く存在	瀬戸・美濃 系	口唇部煙管による 打痕顕著
〳 320	SP1 II層	〳	火鉢	22.2	17.5	22.6	15.0	ロクロ成形 削り高台	淡黄色かかる透明 の釉・緑釉・ うのふ釉 (外) 柵目繫ぎ	双耳は貼付・体部下 半に沈線状の柵目繫ぎ 文様を巡らす	淡黄色・大規模 な円裂孔が非常 に多く存在	瀬戸・美濃 系	口唇部煙管による 打痕顕著
〳 321	SP1 II層	〳	涼炉	15.3	—	—	—	ロクロ成形 五徳を貼付	緑釉 (外) 竹を模倣	外面に沈線を巡らし竹 を模倣させる・	淡黄色・精選さ れた緻密な胎 土・砂粒を含ま ない	産不明	さな受け部は欠損 する・口縁部内面 に煤が付着
〳 322	SK11S K13	〳	火鉢	22.1	—	—	—	ロクロ成形 削り高台	鉛釉	外面に多条の沈線を巡 らす	灰色・大規模な 裂孔が多く存 在・N胎土	能茶山 1820～幕末	[胎土分析資料J12]
〳 323	SP1	〳	火鉢	19.0	—	—	—	ロクロ成 形・耳は型 押成形のも のを貼付	鉄釉 (柿釉)・ 獸面双耳	口縁は内傾させる・外 面に多条の沈線を巡ら す・型押しによる獸面 を貼付	灰黄色・部分的 に裂孔を含む・ N胎土	能茶山産 1820～幕末	[胎土分析資料J13]
Fig.40- 324	SK8 SK11	瓦質 土器	火鉢	20.4	—	—	20.1	ロクロ輪積 み成形		内面指頭による押圧と 横位のナデ・外面工具 による凸条の文様を施 す・丁寧な磨き	橙色・長石・砂 岩・赤色風化礫 他の砂礫を多量 に含む	在地産	内面に煤が付着
〳 325	SP1 II層 III層	〳	火鉢	34.0	—	—	—	ロクロ成形	(外) 花菱文・ 赤色の顔料	体部上位に型押しによる 文様帯を巡らし赤色顔 料塗布・他は磨き・器 面灰黒色	鈍い橙色・砂岩 その他の砂礫を 含む	在地産	
〳 326	SP1 検出面	〳	器種不 明 火具	—	—	—	13.2	ロクロ輪積 み成形 削り高台		口縁部磨き・外面粒状	灰色	産不明	
〳 327	SK9	〳	器種不 明	—	—	—	9.8	ロクロ成形 高台貼付		外面に多条の沈線を巡 らす・高台は貼付	浅黄色・石英砂 を多く含む・円 孔が多く存在	産不明	
〳 328	SK11	〳	火鉢 丸形	17.2	8.4	—	17.5	ロクロ輪積 み成形 脚は貼付		足は3足を貼付・内面指 頭による押圧と横位の ナデ・外面工具による 不定方向のナデ・器面 は暗灰色	灰白色・石英・ 砂岩他の砂礫を 含む	在地産	
〳 329	SP1 II層	〳	七輪	—	—	—	23.1	ロクロ輪積 み成形		内面横位のナデ・外面 磨き・器表は黒色	鈍い橙色・砂 岩・赤色風化礫 他の砂礫を含む	在地産	接合部で剥離

Fig. 挿図番号	出土 地点	種類	器種・ 器形	法量 (cm)				成形技法	釉薬・文様	特徴(成形・調整・釉調等)	胎土 (色・剥離面等)	生産地 生産年代	備考(銘・焼成技法・ 使用痕・他)
				口径	器高	胴径	底径						
Fig.40- 330	SK13	瓦質 土器	火鉢 箱形	—	—	—	—	粘土板成形 脚は貼付		内面櫛目・外面磨き・ 外面黒色	灰白色・石英・ 砂岩他の砂礫を 含む	在地産	
〃 331	SD1	〃	火鉢 箱形	—	—	—	—	粘土板成形		口縁部鐳有り・外面ナ デと磨き・内面横位の 刷毛調整	鈍い橙色・長 石、砂岩、礫赤 色風化礫他の砂 礫を含む	在地産	
〃 332	SP1 II層	〃	火鉢 箱形	—	—	—	—	粘土板成形 脚は貼付		内面コーナー部は篋状 工具による強い横ナデ、 部分的に指押さえ・器 表は灰黒色	灰白色・砂礫を 多く含む・横方 向の規模の大き な裂孔が存在	在地産	口縁部内面が著し く摩耗する
Fig.41- 333	SD1 I層	土質 土器	小皿	8.9	1.6	—	5.4	ロクロ成形 底部回転糸 切り	無釉	体部は直線的に開く・ 見込ロクロ目	橙色・精選され た胎土	在地産	
〃 334	SK13	〃	小皿	6.3	0.9	—	4.6	ロクロ成形 底部回転糸 切り	無釉	体部はやや内湾気味に 外側へ開く・口縁部は 揃み上げる	橙色・赤色風化 礫、砂岩、長石 の砂粒を含む	在地産	
〃 335	SK11	〃	小皿	8.4	1.0	—	6.0	ロクロ成形 底部回転糸 切り	無釉	体部は直線的に開く・ 見込ロクロ目	橙色・精選され た胎土	在地産	
〃 336	SK9	〃	不明	13.0	—	—	5.0	ロクロ成形 削り	無釉	口縁部は折り返し・外 面ロクロ目、底部付近 削り	橙色・精選され た胎土	産不明	内外面に煤が付着 するが、見込が著 しい
〃 337	SK10	〃	匣鉢か	12.7	—	—	—	ロクロ輪積 み成形	無釉	内外面ロクロナデ調整	灰色～橙色		
〃 338	SK11	〃	焜炉	19.1	—	—	—	ロクロ輪積 み成形・さ な受けは貼 付か	無釉	口縁部から体部につ けて開口部を設ける・外 面横位のナデ・弁柄を 刷毛塗り・	鈍い黄橙色・砂 岩、礫赤色風化 礫他の砂礫を含 む	在地産	口縁部に煤が付着
〃 339	SK8	〃	七輪か	—	—	—	16.4	ロクロ輪積 み成形	無釉	内面指頭圧痕顕著・外 面ロクロナデ調整	鈍い黄橙色・砂 岩、礫赤色風化 礫他の砂礫を含 む	在地産	
〃 340	SK1	〃	七輪 さな	さな 径 7.0	穿孔 径 1.1	—	—	ロクロ成形 底部回転糸 切り	無釉	焼成前穿孔7～8孔	灰白色・砂岩、 礫赤色風化礫他 の砂礫を含む	在地産	器面の剥離が激し く使用痕の観察不 可能
〃 341	SK11 SP1 II層	〃	七輪 さな	さな 径 9.9	穿孔 径 1.0	—	—	たたらし成形	無釉	焼成前穿孔5孔・器面刷 毛調整	灰黄褐色・大粒 の石英、長石礫、 及び礫赤色風化 礫その他の砂礫 を多く含む	産不明	片面に煤が付着
〃 342	SK7 SD1	〃	七輪 又は 焜炉	—	—	—	—	ロクロ輪積 み成形	無釉	円孔有り・内外面ロク ロナデ調整	橙色・長石、赤 色風化礫、雲母 他の砂礫を多く 含む	産不明	
〃 343	SD1 I層	〃	焜炉	—	—	—	—	ロクロ輪積 み成形 さな受けは 貼付	無釉	円孔有り・内面横位の ナデ・外面未調整	鈍い橙色・砂岩 その他の砂礫を 含む・焼成は軟 質	在地産	さな受け下側に煤 が強く付着
〃 344	SK9	〃	小型の 焜炉か	—	—	—	9.2	ロクロ輪積 み成形 脚は貼付	無釉	底部から上方に向かい 開口部あり・内面指頭 による押圧とナデ	橙色・長石、砂 岩その他の砂礫 を含む	在地産	
〃 345	SP1 II層	〃	不明	—	—	—	—	ロクロ輪積 み成形	無釉・口縁部下 に列点文を施 す・口唇部十字 文	粘土紐接合痕が明瞭に 残る・内外面ロクロナ デ調整	鈍い褐色・長 石、砂岩、赤色 風化礫、雲母他 の砂礫を多く含 む	産不明	
〃 346	SK8	〃	七輪	32.2	—	—	—	叩き成形か	無釉	胴部に窓有り・内面布 目圧痕顕著・口縁部に 粘土帯を貼付しロクロ ナデ・突帯と口唇部拡 張部を設ける・	鈍い橙色・長 石、チャート他 の砂礫を多量に 含む・気孔が多 く存在	在地産	五徳は欠損する・ 内面及び開口部に 煤が強く付着・口 縁部外面から体部 にかけて煮溢れ痕 有り

Fig. 挿図番号	出土地点	種類	器種・器形	法量 (cm)				成形技法	釉薬・文様	特徴(成形・調整・軸調等)	胎土 (色・剥離面等)	生産地 生産年代	備考(銘・焼成技法・使用痕・他)
				口径	器高	胴径	底径						
Fig.41-347	SP1 II層 III層	土師土器	火消し壺	14.1	19.3	19.6	14.7	ロクロ輪積み成形	無釉	外面ナデ・体部断面に接合痕あり	橙色・石英・長石・赤色風化礫の砂粒を含む	在地産	内面に煤が激しく付着する
Fig.42-348	SK9	土師質	土人形型	-	-	-	-	型打成形	お多福(頭部)	外面篋削り後ナデ	浅黄橙色・精選された胎土・僅かに赤色風化礫・砂岩その他の微砂を含む	産不明	内面に雲母粉が付着
〃 349	SD2	〃	土人形型	-	-	-	-	型打成形	人物(衣服の裾部分)	内外面丁寧なナデ・外面隅に面取りを施す	橙色・長石・石英他の砂粒(角粒)を多く含む	産不明	内面に雲母粉が付着
〃 350	〃	〃	土人形型	-	-	-	-	型打成形	人物(衣服)	型打の後細部を篋状工具で成形・内面ナデ・外面篋削りと指頭による押圧	浅黄橙色・精選された胎土	産不明	内面に雲母粉が付着
〃 351	SK10 SD2 SP1 III層	〃	土人形型	-	-	-	-	型打成形	馬に乗った童子(背面)	内面指ナデ・外面篋による削り後ナデ	浅黄橙色・精選された胎土	産不明	内面に雲母粉が付着・外面に陰刻文字の一部「土」が見られる
Fig.43-352	SD2 SP1 III層	〃	土人形型	-	-	-	-	型打成形	布袋(胸部)	内面指ナデ・外面篋削り後ナデ	浅黄橙色・精選された胎土・砂粒を殆ど含まない	産不明	内面に雲母粉が付着
〃 353	SK10 SD2	〃	土人形型	-	-	-	-	型打成形	童子	内面指ナデ・外面篋削り後ナデ	浅黄橙色・精選された胎土・砂粒を殆ど含まない	産不明	内面に雲母粉が付着
〃 354	SK10 SD2 SP1 II層	〃	土人形型	-	-	-	-	型打成形	童子と团扇	内面指ナデ・外面指頭による押圧後指ナデ	浅黄橙色・精選された胎土・砂粒を殆ど含まない	産不明	内面に雲母粉が付着
〃 355	SK9 SK10	〃	土人形型	-	-	-	-	型打成形	人物(衣服)	内面指ナデ・外面篋削り後ナデ	浅黄橙色・砂岩・長石・赤色風化礫その他の砂粒を含む	産不明	内面に雲母粉が付着・外面下部に陰刻文字の一部が認められる
〃 356	SP1 III層	〃	土人形型	-	-	-	-	型打成形	足	内面絞り目・外面篋によるナデ及び指頭による押圧とナデ	鈍い橙色・チャート・石英・長石・砂岩その他の砂礫を含む	在地産	内面に雲母粉が付着・外面に篋による刻み文字「は」有り
〃 357	SP1 III層	〃	土人形型	-	-	-	-	型打成形	人物(足)	内面絞り目・外面指頭による押圧と篋ナデ・やや雑な作り	橙色・内面黒色・チャート・石英・長石・砂岩その他の砂礫を含む	在地産	内面に雲母粉が付着
〃 358	SK1 SP1 III層	〃	土人形型	-	-	-	-	型打成形	動物(後ろ脚)	内面絞り目と指頭圧痕顕著・外面指による押圧	鈍い橙色・チャート・石英・長石・砂岩その他の砂礫を含む	在地産	内面に雲母粉が付着
〃 359	SK9	〃	土人形型	-	-	-	-	型打成形	不明	内面絞り目と指頭圧痕顕著・外面指による押圧	鈍い橙色・チャート・石英・長石・砂岩その他の砂礫を含む	在地産	内面に雲母粉が付着・外面に篋による刻み文字の一部「八・は」有り
Fig.45-360	SD2	〃	土人形	-	-	-	-	型押成形	米俵	内面指頭圧痕顕著	鈍い橙色・長石・砂岩その他の砂粒を多く含む	陣山	外面に雲母粉が付着
〃 361	SD1 II層	〃	土人形	-	-	-	-	型押成形	人物(衣服部分)	内面に指頭圧痕と棒状工具による押圧痕あり	鈍い黄橙色・長石・砂岩・赤色風化礫他の砂粒を多く含む	陣山	外面に赤色顔料が付着・外面に雲母粉付着

### 遺物観察表 (調査Ⅱ区)

Fig. 挿図番号	出土地点	種類	器種・器形	法量 (cm)				成形技法	釉薬・文様	特徴(成形・調整・軸調等)	胎土 (色・剥離面等)	生産地 生産年代	備考(銘・焼成技法・使用痕・他)
				口径	器高	胴径	底径						
Fig.55-390	SR1 IV層	磁器染付	碗	-	-	-	-	ロクロ成形	(外) 十字花文	呉須は青から藍色に発色・透明釉は緑色がかかり気泡を多く含む	白色・やや荒い・小規模な凹孔が存在	中国 16世紀	
〃 391	SD4 II層	〃	小皿 端反形	-	-	-	-	ロクロ成形	(外) 牡丹唐草(口) 圏線	呉須は青色・透明釉は気泡を多く含む	白色・やや荒い・裂孔が存在	中国 15世紀後半～16世紀	B1Ⅶ群



Fig. 挿図番号	出土地点	種類	器種・器形	法量 (cm)				成形技法	釉薬・文様	特徴(成形・調整・釉調等)	胎土 (色・剥離面等)	生産地 生産年代	備考(銘・焼成技法・使用痕・他)
				口径	器高	胴径	底径						
Fig.44-392	SR1 I層	磁器白磁	小皿	—	—	—	7.0	ロクロ成形削り高台	白磁釉	高台内側に鋭い抉りあり・高台無釉	白色・やや滑らか	中国 12世紀後半	白磁Ⅲ-2類(重ね焼きの最上部に置かれたもので見込釉剥ぎがないもの)
〃 393	SR1 上層	磁器青磁	小皿	—	—	—	4.6	ロクロ成形削り高台	青磁釉	淡青色を帯びる透明の釉・高台無釉	白色・荒い・露胎部は橙色に発色	肥前・波佐見 17世紀後半～18世紀前半	見込蛇の目釉剥ぎ・釉剥ぎ部に砂付着・畳付と高台内面に砂付着・体部に漆つき跡あり
〃 394	包含層Ⅲ層	磁器染付	小皿輪花形	—	—	—	6.0	型打成形削り成形	(内) 圏線・花弁状の文様	見込布目圧痕・呉須は淡い青色・乳白色の釉	白色・やや荒い・釉表のピン孔周辺は窯変し橙色に発色	肥前 1630～1640年代	畳付に砂付着
〃 395	包含層Ⅱ層	〃	猪口	9.0	—	—	—	ロクロ成形	(外) 雨降り文	透明釉は気泡が多く白濁する	白色・やや荒い	肥前 18世紀前半	
〃 396	包含層Ⅲ層	陶器	小皿溝緑皿	13.9	—	—	—	ロクロ成形	灰釉(木灰釉)	焼成不良・釉は白濁しオリーブ色を帯びる・体部下半無釉	灰色・荒い・長石、石英他の砂粒を含む	肥前 1600～1630年代	
〃 397	〃	〃	小皿溝緑皿	13.9	—	—	—	ロクロ成形	灰釉(木灰釉)	灰オリーブ色を帯びる透明の釉で貫入が入る	灰色・荒い・長石、石英他の砂粒を含む	肥前 1600～1630年代	
〃 398	〃	〃	中碗天目形	10.6	—	—	—	ロクロ成形	鉄釉(黒天目)	外面ロクロ目・外面体部下半無釉	灰白色・非常に荒い胎土・大規模な裂孔が多く存在	瀬戸・美濃 17世紀	
〃 399	〃	〃	小皿	—	—	—	4.6	ロクロ成形削り高台	灰釉(木灰釉)	クリ底・灰オリーブ色を帯びる透明の釉・外面下半無釉	灰色・荒い・大規模な裂孔が多く存在	肥前 1590～1610年代	見込胎土目
〃 400	〃	〃	小皿	—	—	—	5.0	ロクロ成形削り高台	灰釉	焼成不良・釉は白濁する・高台無釉	灰色～橙色・荒い・長石、石英他の砂粒を含む	肥前 1600～1630年代	見込砂目・高台内砂付着
〃 401	〃	土質	小皿	12.0	2.1	—	6.5	ロクロ成形	無釉	底部は摩耗し観察不可能・器壁は厚い・体部は外側へ大きく開く・見込ロクロ目	橙色・砂岩、長石他の砂粒を含む	在地	口縁の一部に煤が強く付着
〃 402	包含層Ⅱ層	〃	杯又は小皿	—	—	—	5.4	ロクロ成形回転系切り	無釉	回転ナデ調整・内面ロクロ目顕著	鈍い橙色・砂岩その他の砂粒を含む・焼成は軟質	在地	
〃 403	包含層Ⅲ層	〃	土錘	全長 5.6	全幅 1.8	全厚 1.8	重量 15g	手捏ね	無釉	円筒状の形態・外面ナデ	橙色・砂岩、赤色風化礫他の砂粒を含む	在地	煤が付着

## 石製品・石器観察表

Fig. 挿図番号	出土地点	器種・器形	全長	全幅	全厚	重量	特 徴	材 質・備 考
Fig.15-13	SP1 Ⅲ層	砥石箱形	14.2	6.3	2.5	409g	主研面左下と片側面に唐草文様が刻まれる・片側面に刻み文字有り・人物名「?子」	凝灰岩又は頁岩製・硬質・浅黄色
Fig.19-56	I区 包含層Ⅱ層	硯	—	6.0	2.4	168g	厚手で直線的な作り・陸部中央は著しく摩耗・縦方向の擦痕有り・海部に墨が付着	凝灰岩製・軟質・淡黄色
Fig.45-362	SD1 I層	砥石	—	3.5	2.5	68g	中央部で破損・主研面はよく使い込まれ弓なりに摩耗する・主研面端部は深い溝状の砥ぎ痕あり・裏面、両側面とも使用痕あり	凝灰岩製・軟質・灰白色
〃 363	SK7	硯	—	5.0	1.1	73g	中央部で破損・薄手で小型の作り・海部は浅い・陸部中央に縦方向の擦痕あり・陸部は僅かに摩耗する	粘板岩製
〃 364	SP1 Ⅱ層	硯	—	6.1	1.8	263g	海部の縁を欠損する・平面形は長方形で直線的な作り・裏面に隅丸方形の凹みあり・陸部には左下から右上方向への擦痕が残る・落潮から海部に向かい縦方向の刃物状のものによる砥痕が残る(破損後砥石として転用したものか)・裏面に「垣内」の釘書きあり	粘板岩製
〃 365	〃	石臼	—	—	—	1200g	石臼の下臼部分・体部を欠損する	砂岩製
Fig.55-404	II区 包含層Ⅲ層	石鏝	2.8	1.5	0.4	2.1g	凹基式無茎岩鏝	サヌカイト製 弥生時代

## 近世瓦観察表

Fig-挿図番号	出土地点	器種・器形	瓦当径	文様区径	瓦当厚	周縁高	特 徴
F46-366	SP1	軒丸瓦	15.0	11.8	1.8	0.6	連珠三つ巴文・珠文数16個・巴長は半周弱・巴は頭から尾へ向けて左回り、尾は細く断面三角形・瓦当は燻しによる銀化が僅かに認められる
〃 367	SK9	軒丸瓦	13.9	11.0	1.9	0.8	連珠三つ巴文・推定珠文数12個・巴長は半周強・巴は頭から尾へ向けて左回り、尾は太く断面形ドーム状・瓦当は燻しによる銀化が僅かに認められる
			垂れ長	文様区径	下周縁幅	周縁高	
〃 368	SK1	軒平瓦	4.2	2.4	0.8	0.3	中心に三つ巴文を描き、両側は均整唐草文を配する・唐草は先端が肥大し花卉状を呈する
〃 369	SK11	軒平瓦	4.2	2.7	—	0.2	中心飾りは三つ巴文からなり、両側は均整唐草文を配する・唐草は先端が花卉状を呈する
〃 370	SP1	軒平瓦	—	—	0.7	0.5	中心飾りは巴文からなり、両側は均整唐草文を配する
〃 371	SK13	軒平瓦	4.2	2.6	0.7	0.4	中心飾りは茎付の花3本からなり、両側は均整唐草文を配する・唐草は巻きが強い
〃 372	SP1	軒平瓦	4.3	3.0	0.8	0.5	下幅21.9cm文様区幅14.7cm右周縁4.0cm左周縁2.7cm・中心飾りは茎付の花3本からなり、両側に均整唐草文を配する
〃 373	〃	軒平瓦	4.0	2.5	0.9	0.4	中心飾りは太い茎付の花3本からなり、両側に均整唐草文を配する・唐草は巻きが強い
〃 374	SK13	軒平瓦	—	—	—	—	花文に均整唐草文上下2反転を配する・文様区右端に「右」字を描く
〃 375	〃	軒平瓦	—	2.8	0.8	0.3	花卉の左右に幅広の葉を配する・左周縁に「中」銘を刻印する

## 金属製品観察表

Fig-挿図番号	出土地点	器種・器形	頭部幅	全長	全幅	全厚	重量	特 徴	材質・備考
Fig.49-376	SK9	釘	0.8	確認長 3.9	0.5	0.5	2.1g	頭部をもつ・先端部を破損するが、中型のタイプ・断面四角形	鉄製
〃 377	SD1	〃	0.8	確認長 3.7	0.5	0.5	0.9g	頭部をもつ・頭部を平らに打ち潰した後一方へ直角に曲げている・先端部を破損する・断面四角形	鉄製
〃 378	SK11	〃	—	5.3	0.6	0.6	3.7	腐蝕が激しく観察困難であるが頭部をもつもの・大型のタイプ・断面形不明	鉄製
〃 379	SK9	〃	—	確認長 3.0	0.5	0.4	1.6g	頭部を直角に曲げる・先端部を欠損・断面四角形	鉄製
〃 380	SD1	〃	—	確認長 4.5	0.5	0.4	0.9g	頭部を直角に曲げる・先端部を欠損するが中型のタイプ・断面四角形	鉄製
〃 381	SK9	〃	—	確認長 4.4	0.5	0.5	2.4	頭部を持たない・先端部を欠損するが中型のタイプ・断面四角形	鉄製
〃 382	SK11	〃	—	5.1	0.8	0.8	4.7g	腐蝕が激しく頭部と断面形態の観察困難・大型のタイプ	鉄製
〃 383	SK13	〃	—	5.1	0.9	0.9	6.4	頭部を持たない・大型のタイプ・断面四角形	鉄製
〃 384	SP1	簪	—	17.1	0.8	0.2	5.0	脚の一部を欠く・耳かき状の頭部を持つ	銅製
〃 385	SK13	〃	—	確認長 14.8	0.5	0.2	5.3g	脚の一方を欠損する	銅製
〃 386	〃	〃	—	確認長 7.7	0.4	0.4	4.3g	断面四角形	銅製
〃 387	SP1	銅線	—	確認長 18.0	2.0	2.0	3.6g	用途不明	銅製
〃 388	〃	煙管雁首	—	確認長 5.3	1.1	—	9.1g	火皿を欠損する・脂返しは僅かに湾曲する・器表の腐蝕が激しく観察困難であるが、陰刻による唐草と花文様の一部が確認でき、花には赤色の顔料が、器表には金彩が認められる・脂返し上面には使用時の打痕が顕著	銅製 小泉編年V期・ 18世紀後半
〃 389	〃	煙管吸口	—	3.	1.0	—	5.0g	肩付のもの・狭義の吸口に向かい一度窄まった後、僅かに開く・肩には陰刻による唐草文様が巡らされる	銅製年代不明
Fig.55-405	Ⅱ区 包含層 Ⅲ層	〃	—	確認長 3.5	0.8	—	3.7g	肩の部分に欠損する・側面に接合痕あり	銅製 小泉編年Ⅲ期以降・ 17世紀後半以降
〃 406	〃	不明	—	—	0.7	0.2	2.9g	釣り針状の形態をもつ・上部に陰刻による三つ巴文を施す	銅製

## 第2節 陣山北三区遺跡

### 1. 調査区の概要と基本層準

#### (1) 概要

陣山北三区遺跡は、平成7年度に本調査を実施した陣山遺跡の北隣りに位置する。遺構の範囲及び、遺物の分布密度等を把握するため試掘調査を実施した結果、中世から近世にかけての遺構・遺物が確認されており、遺跡の北側への広がりも確認されている。今回の本調査では、溝10条が確認されたが、遺物が皆無若しくは僅少であるため、時期・性格等を特定することはできない。また、遺構外からの主な遺物としては、古銭をはじめ、弥生時代から近世にかけての土器片や陶磁器類が出土している。

平成7年度に実施された陣山遺跡の本調査や、同北三区遺跡の試掘調査の結果、今年度の調査に大きな期待がかけられたが、今回の調査では遺構や遺物が極めて少ないため、遺跡の全容については不明な点が多い。

#### (2) 基本層準 (Fig.56)

基本層準は、Ⅰ区は北壁の東西セクションと北西壁の南北セクション、Ⅱ区は北壁の東西セクションで観察した。基本的な層準は以下のとおりである。

Ⅰ区北壁 Ⅰ層：耕作土。

Ⅱ層：明茶褐色粘質土で客土である。三和土によく似たブロックを含む。

Ⅲ層：灰色粘質土で旧耕作土である。下方に層厚1～2cmの床土（橙色）を含む。

Ⅲa部は床土が厚めに堆積する。

Ⅳ層：暗茶色粘質土。SD1の埋土である。

Ⅴ層：黒ボク。

Ⅵ層：音地混じり粘質土。

Ⅶ層：暗灰茶色粘質土。

Ⅷ層：明茶褐色粘質土。

Ⅸ層：暗茶褐色粘質土。

Ⅹ層：明灰茶色粘質土。黒褐色・橙色のブロックを含む。

Ⅱ区北西壁 Ⅰ層：耕作土。

Ⅱ層：旧耕作土。明確な床土はない。

Ⅲ層：灰色土で旧耕作土である。

Ⅳ層：明茶褐色粘質土で床土である。

Ⅴ層：灰茶色粘質土。

Ⅵ層：暗灰茶色粘質土。

Ⅶ層：灰黒色粘質土。

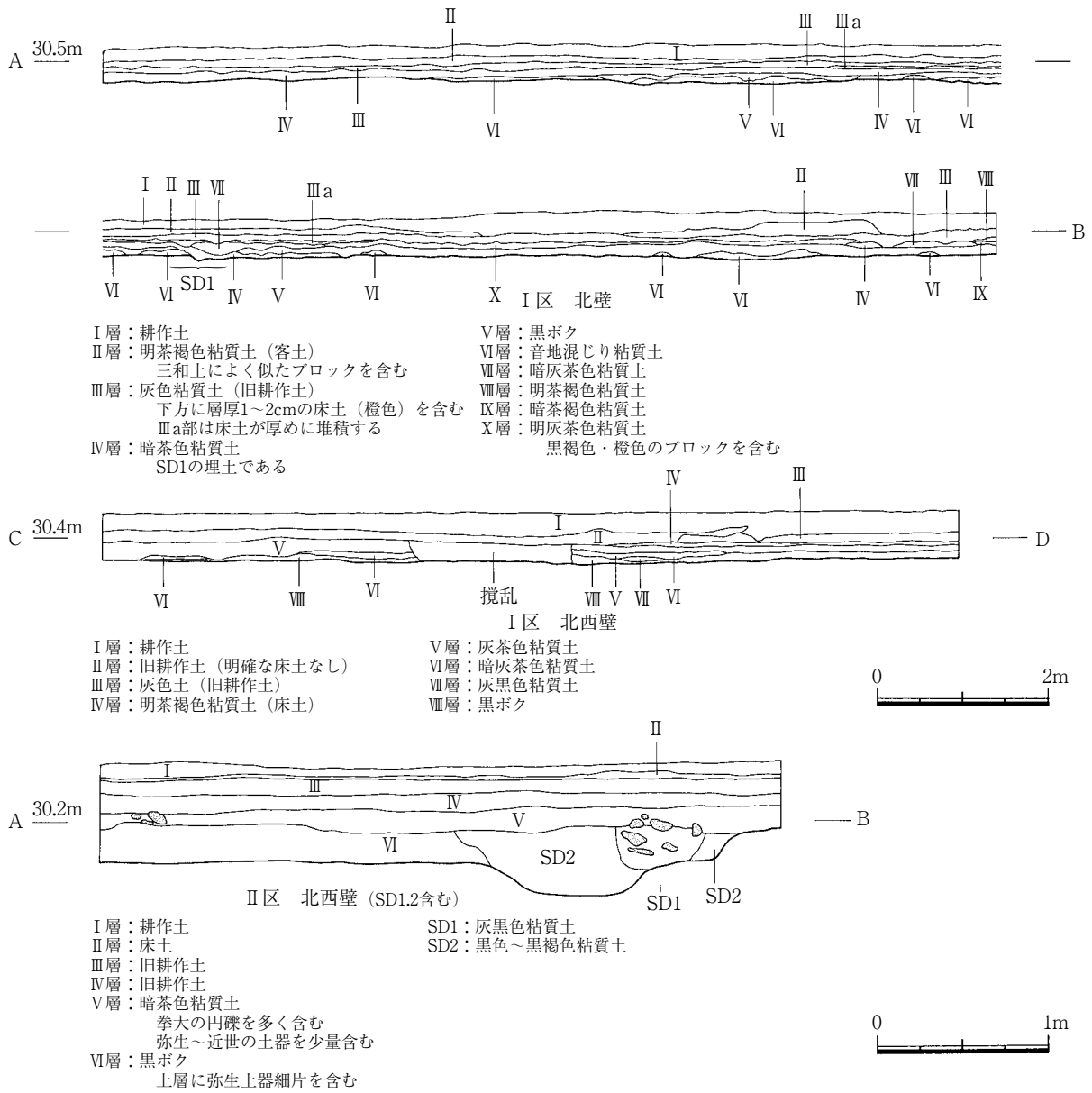


Fig.56 基本層準

- VIII 層**：黒ボク。
- II 区北壁**
- I 層**：耕作土。
- II 層**：床土。
- III 層**：旧耕作土。
- IV 層**： 〃
- V 層**：暗茶色粘質土（拳大の円礫を多く含む）。弥生~近世の土器を少量含む。
- VI 層**：黒ボク。上層に弥生後期土器細片を含む。

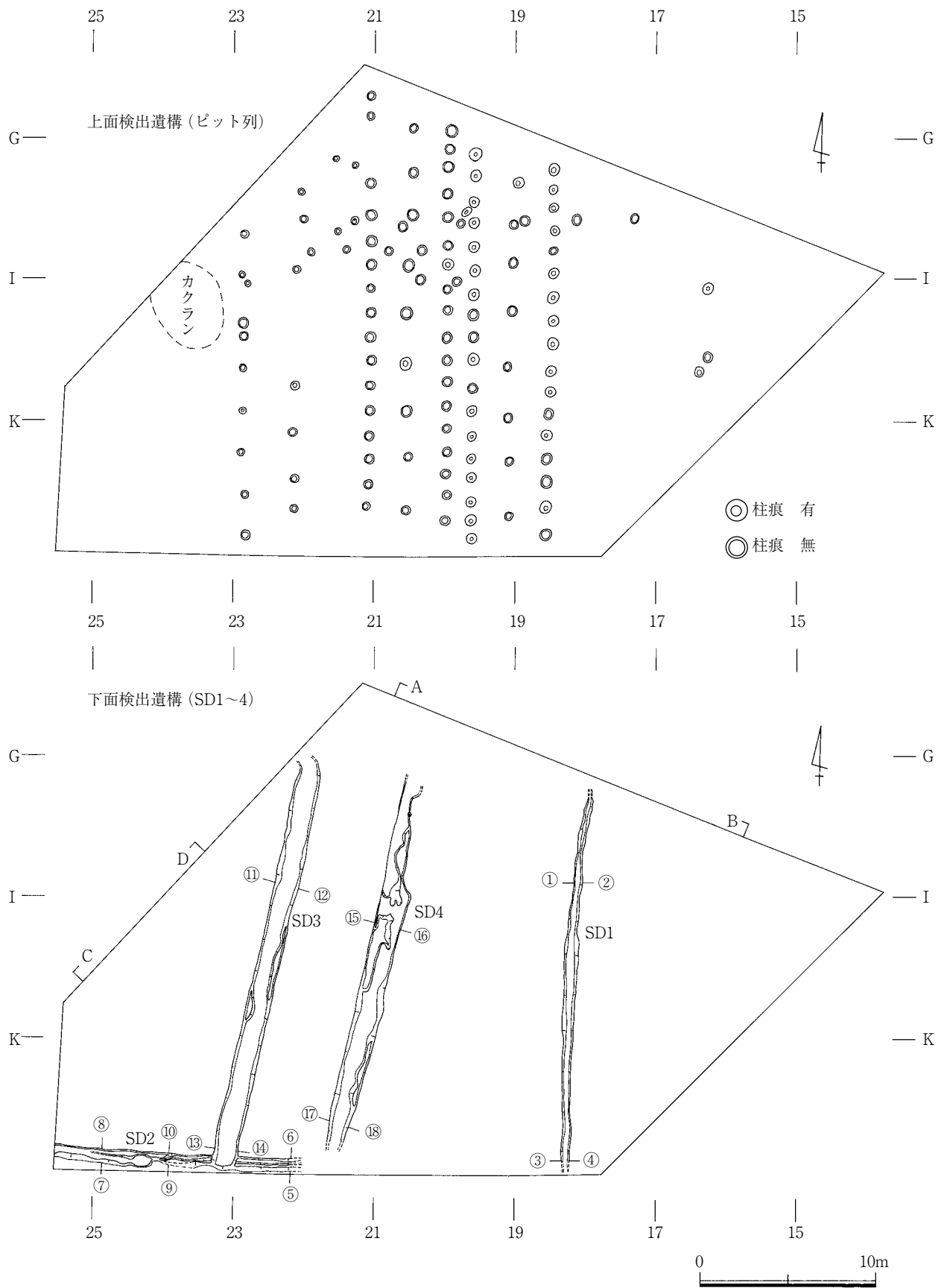


Fig.57 I区検出遺構全体図

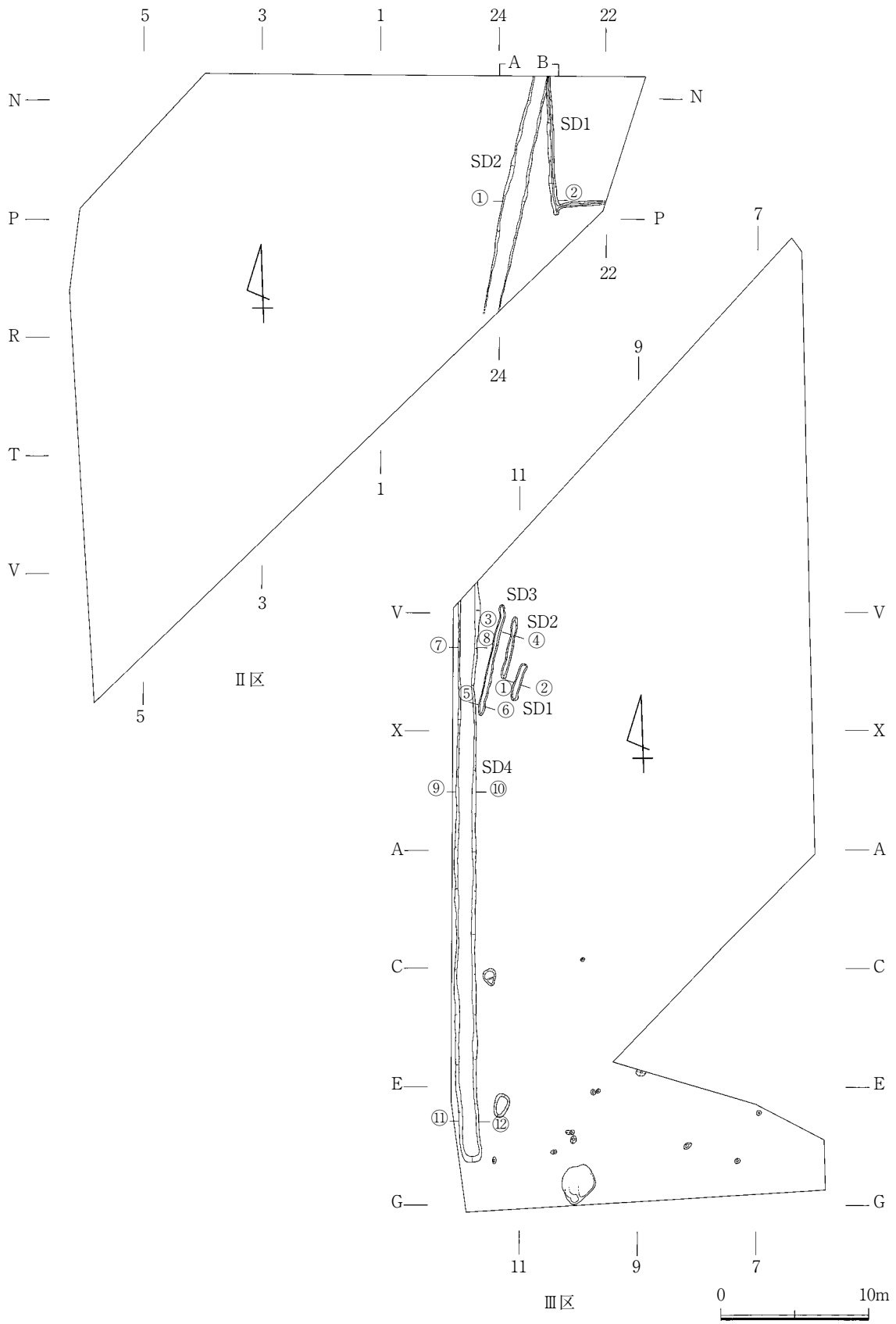


Fig.58 II・III区検出遺構全体図

## 2. 検出遺構と遺物

### (1) I 区

#### SD1 (Fig.57・59)

調査区の東部で検出された南北の溝である。延長21.26m、幅28～30cm、深さ9～22cmを測るが、両端部は明らかでない。埋土は暗茶色粘質土である。南端部に投棄されたものと思われる拳大から人頭大の河原石が十数個存在する。出土遺物は弥生土器細片・土師器・須恵器等十数点であるが、図示できるものはない。

#### SD2 (Fig.57・59)

調査区の南西端で検出された東西の溝である。調査区南壁に隣接する現在の水路に平行に切られ、中央部東寄りでは北肩部をSD3南端部に切られて存在する。西部は調査区外に続いており、東部は検出不能であった。SD2は上段の溝aと下段の溝bの2条からなる。aはbを僅かに切り、幅24～36cm、深さ13～21cmの浅いU字形をなす。埋土は明茶色粘質土で、出土遺物は須恵器細片1点のみであり、図示できない。bはaに肩部を切られ、現在の水路の方に深く落ち込んでおり、検出面から底部までの深さは35～60cm前後を測る。底部には拳大から人頭大の河原石が多数散在している。aが上述のとおり、SD3南端部に切られてbに合流していることから、bはSD3の排水溝的な機能を有し、過去に生活用水路として機能していたものと思われる。現況で南側は水路ですでに削平されているため全容は不明であるが、2時期にわたって機能していたものと思われる。埋土はⅠ層：灰色粘質土（礫層）、Ⅱ層：暗灰色粘質土、Ⅲ層：暗茶色粘質土（黒色土混）であり、出土遺物はⅢ層より土師質土器細片1点、須恵器細片1点が出土しているが、図示できるものはない。

#### SD3 (Fig.57・59)

調査区の西部で検出された南北の溝である。延長23m、幅1.2～1.4m、深さ9～28cmを測る。北端部は北西壁に隔されるが、北西へ続くものと思われる。南端部はSD2上段の溝を切り、下段の溝へ落ち込むような形でSD2に合流する。埋土はⅠ層：黒色土、Ⅱ層：黒褐色土、Ⅲ層：黒褐色土（黒色土ブロック混）であり、出土遺物は皆無である。

#### SD4 (Fig.57・59)

調査区の中央部で検出された南北の溝である。延長21m、幅60～170cm、深さ2～36cmを測る。南北両端部は明らかではない。埋土はⅠ層：黒色土、Ⅱ層：黒褐色土であり、出土遺物は皆無である。

#### ピット列 (Fig.57)

調査区の中央部に幅広く南北に並列して連なる69個のピット列を主に、その中間及び周囲で多数検出された。ピット列は幅4～4.5m、長さ21～22mにわたって前後1.2～1.3m間隔で並んでいる。ピットは直径20～30cm、深さ14～20cmであり、柱痕が残存するものも多い。柱痕は径9～11cm、深さ30～32cmを測る。検出面はⅤ層：黒ボクであり、埋土は暗褐色土である。大半は出土遺物は皆無である。土師質土器片・近世陶磁器片・瓦片出土のピットもあるが、ビニール片を伴っていることから、性格は不明である。近・現代のものと思われる。

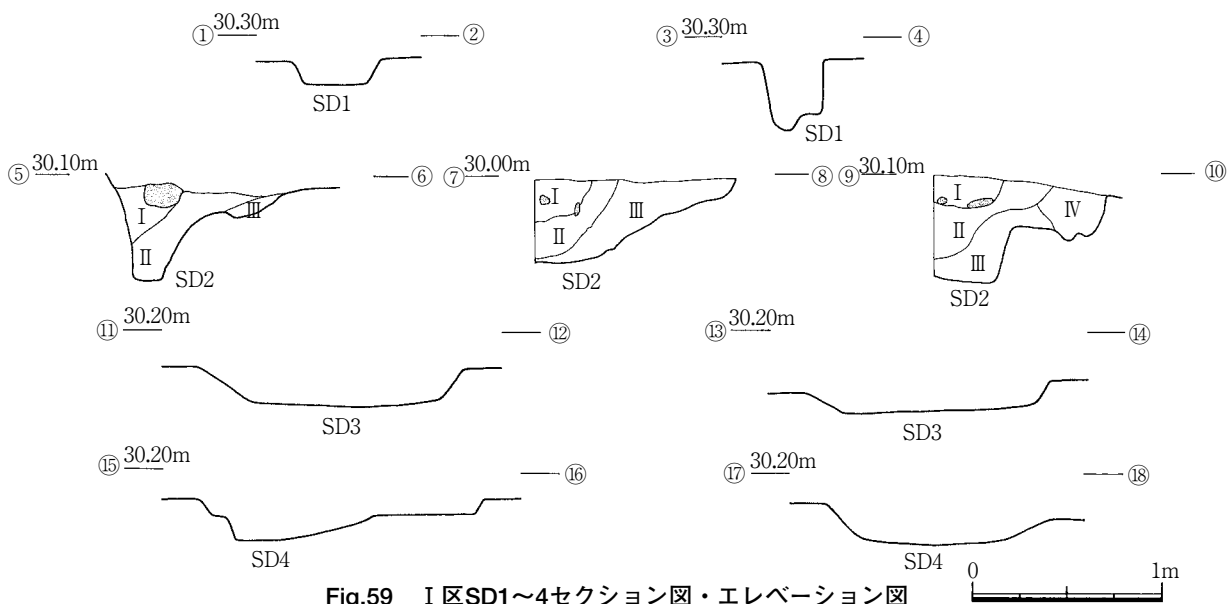


Fig.59 I区SD1~4セクション図・エレベーション図

### 包含層 (Fig.60)

V層からⅧ層にかけて遺物が包含されており、弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・近世陶磁器等が出土している。

1~4は須恵器の甕である。1は口縁部は外反し、端部は僅かに肥厚する。内外面とも回転ナデ調整であり、一部に自然釉が残る。2・3は口縁部は外反し、端部は僅かに肥厚して面をなす。4は口縁部は外反し、外面は上下に肥厚して面は僅かに凹む。5は須恵器の杯蓋である。天井部は欠損しているが、口縁部はまっすぐに下り、端部は丸く仕上げる。内外面とも回転ナデ調整である。6は須恵器の細頸壺である。口頸部は胴部から屈曲し、外上方へのびる。外面には一条の凹線が施される。内外面とも回転ナデ調整である。7は陶器の折縁皿、8は磁器碗、9は蛇の目釉剥ぎの白磁皿、10は磁器の染付碗である。11は双耳壺又は四耳壺の可能性があり。肩部には2条の浅い凹線が入った把手が付く。12は陶器瓶類底部であり、13・14は土師質の円管状土錘である。

### 銭貨 (Fig.60)

3塊からなる銹着銭であり、計24枚を数える。銭貨は穿孔部にしゅろと思われるちぎれたような形跡の残る緡紐が通された銭緡状態で出土した。うち1塊が、緡紐から抜け落ちたかのような状態であったことから一緡であったものと思われる。銭種は寛永13(1636)年初鑄の古寛永通宝が大半と思われるが、8枚の銹着銭は両端面とも銭文がないため不明である。また、洪武通宝が1枚含まれているが、背面に「治」の1字が鑄出されており16世紀末から18世紀初頭にかけて国内で鑄造された模鑄銭と思われる。

破損の恐れがあるため、銹着銭の両端 (Fig.60①~③) と自然剥離 (Fig.60④~⑥) の分のみの拓本である。

### 参考文献

- (1) 田中真貴他「白鷗」おおがい都立学校遺跡調査会 1990年
- (2) 櫻木晋一他「京町遺跡 3」北九州市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室 1994年



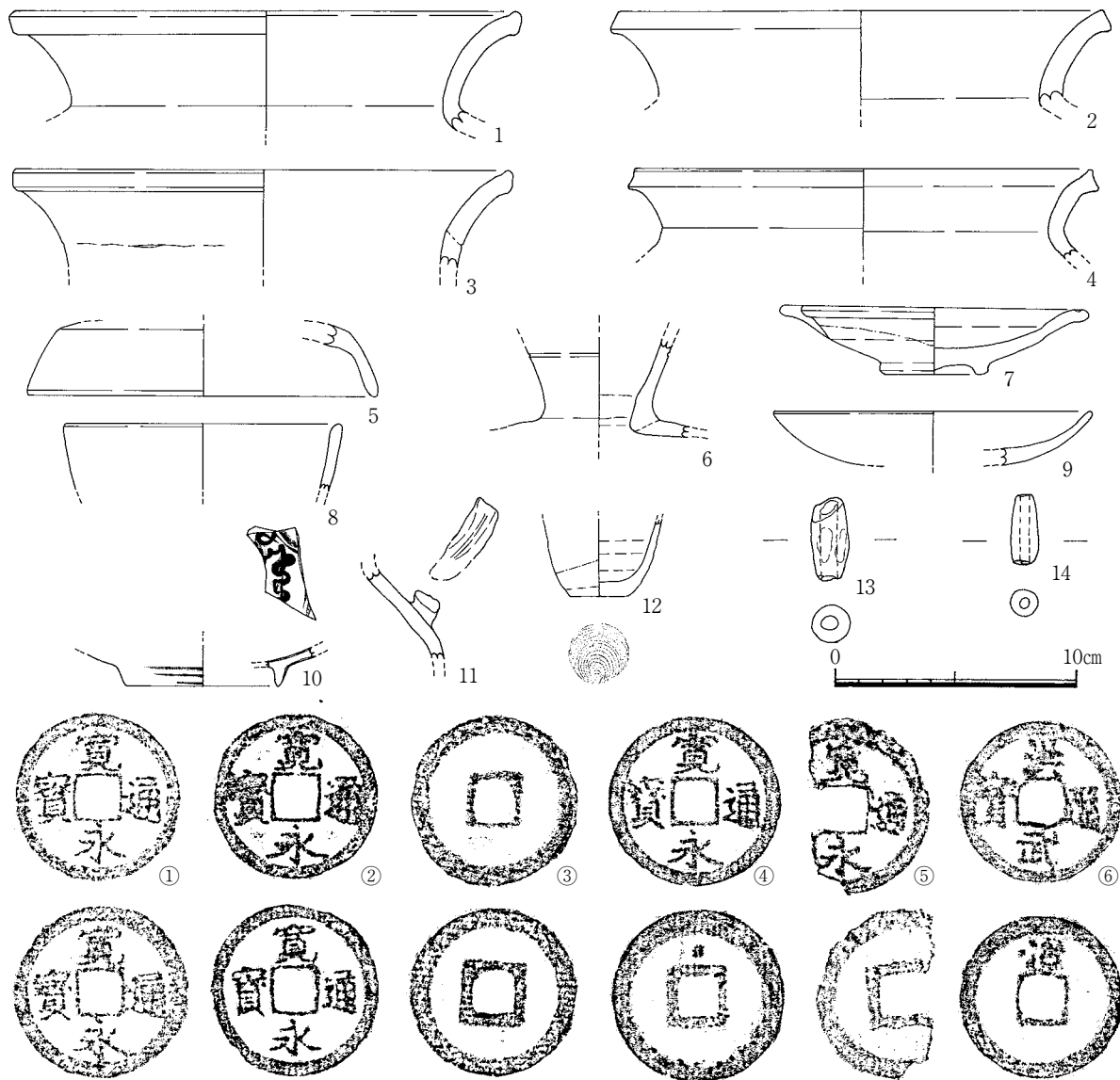


Fig.60 I区包含層出土遺物実測図 (古銭は実大の拓本)

(2) II区

SD1 (Fig.58・61)

調査区の北東端で検出された。北端部でSD2東部分を切っている。L字状の溝で、東端部は調査区外に続くものとみられる。延長12m、幅20～50cm、深さ5～18cmを測る。埋土は灰黒色粘質土であり、拳大の円礫を多く含む。出土遺物は皆無である。

SD2 (Fig.58・61)

調査区の北東端で検出された南北の溝である。南端部は明らかではない。北端部は調査区外に続くものとみられ、東部分をSD1に切られる。明らかではないが、I区SD2に合流する可能性がある。延長15.4m、幅1.1～1.6m、深さ4～23cmを測る。埋土は黒褐色粘質土（黒色土混）であり、出土遺物は皆無である。

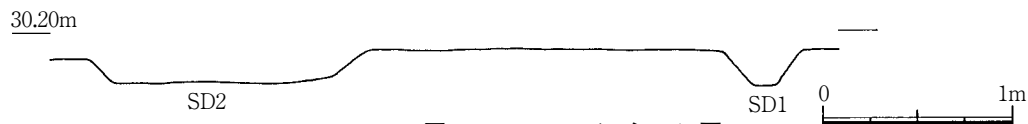


Fig.61 II区SD1・2エレベーション図

### 包含層 (Fig.62)

V層からVI層にかけて遺物が包含されており、弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・近世陶磁器等が出土している。

15は須恵器の甕である。口縁部は外反し、端部は面をなす。内外面ともナデ調整を施す。16は肥前系灰釉陶器の段皿である。内面と口縁端部に鉄釉の絵模様を施す。17は堺産の陶器播鉢、18は陶器の小壺である。球形の胴部に短く外傾する口縁部が付き、端部は玉縁をなす。19は肥前系の陶器段皿である。20は土師器の羽釜である。内湾する口縁部外面に断面台形状の鏝が付くが、端部は欠損する。口縁端部は上外方に上がるが、僅かに欠損する。内外面ともナデ調整を施す。21は須恵器の台付き壺である。高台は「ハ」の字状に開き、内端で接地する。端部は外傾して肥厚し、面は僅かに凹む。体部は斜上外方へ直線的に立ち上がる。内外面ともナデ調整を施す。22は景德鎮窯産の染付碗である。

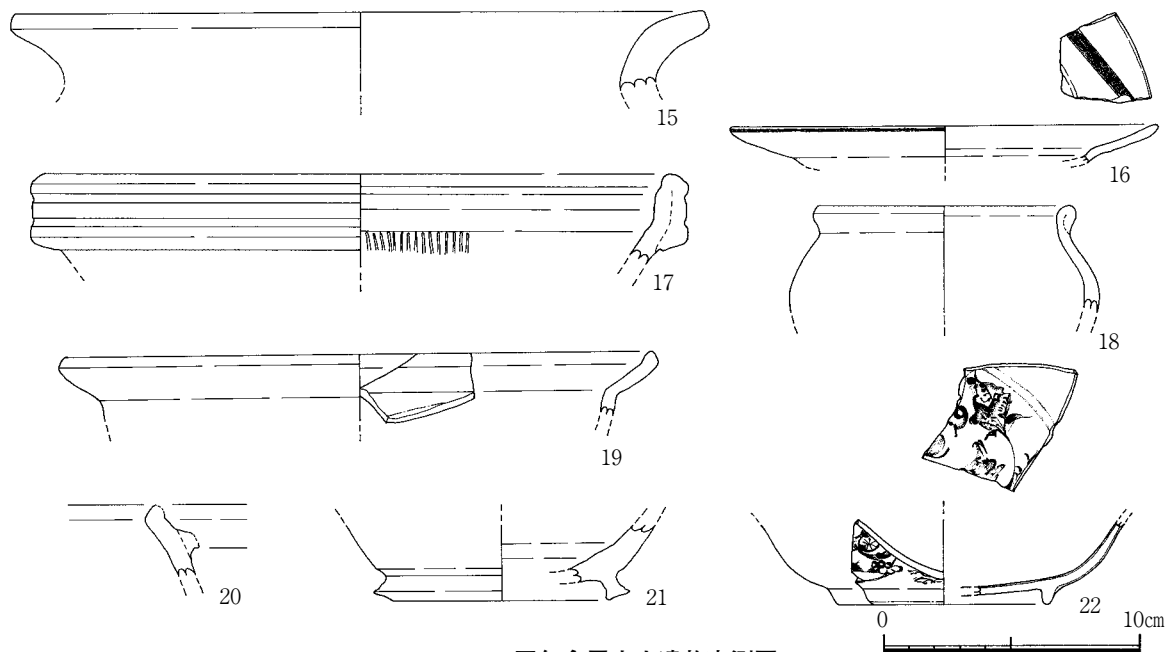


Fig.62 II区包含層出土遺物実測図

### (3) III区

#### SD1 (Fig.58・63)

調査区西部で南北の溝が4条検出されたが、そのうちの東端に位置する溝である。延長2.56m、幅36~40cm、深さ4~12cmを測る。出土遺物は皆無である。

#### SD2 (Fig.58・63)

SD1の西側に平行して検出された溝である。延長4.24m、幅26~40cm、深さ3~18cmを測る。出土遺物は皆無である。

SD3 (Fig.58・63)

SD2の西側に平行して検出された溝である。延長7.6m、幅28~36cm、深さ4~10cmを測る。出土遺物は皆無である。

SD4 (Fig.58・63・64)

調査区の西側で検出された南北の溝である。延長40m、幅1.06~1.46m、深さ23~38cmを測る。埋土はⅠ層：濃茶褐色粘質土、Ⅱ層：灰色粘質土、Ⅲ層：暗灰色粘質土（黒色粘質土ブロック混）、Ⅳ層：黒褐色粘質土、Ⅴ層：濃茶色粘質土である。出土遺物は須恵器2点である。23は甕であり、口縁部は頸部より屈曲して僅かに外反する。0.5~3.0mmの砂粒を多く含み、内外面とも回転ナデ調整を施す。24は台付壺である。底部外端に「ハ」の字形の高台が付き、体部は直線的に立ち上がる。内面は回転ナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。体部外面は丹念なナデ調整を施し、底部外面一部には布目圧痕が残る。

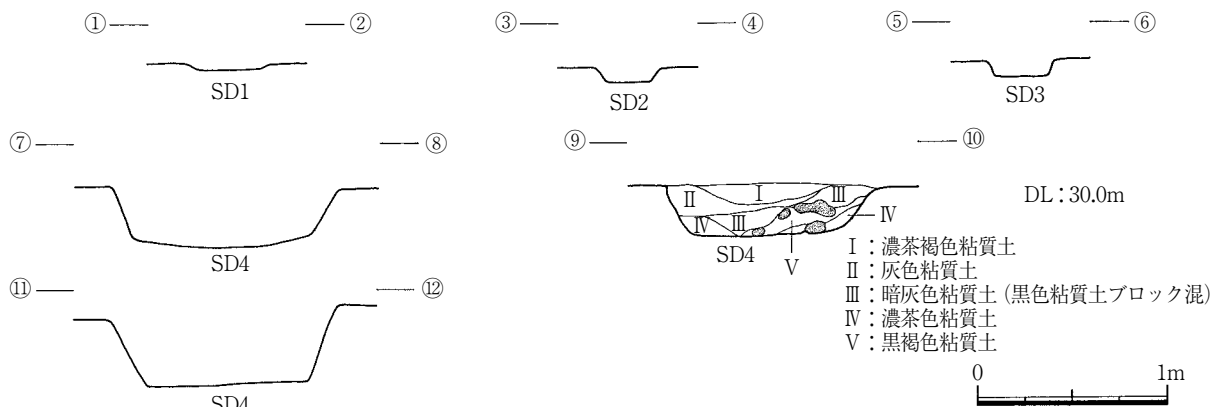


Fig.63 Ⅲ区SD1~4セクション図・エレベーション図

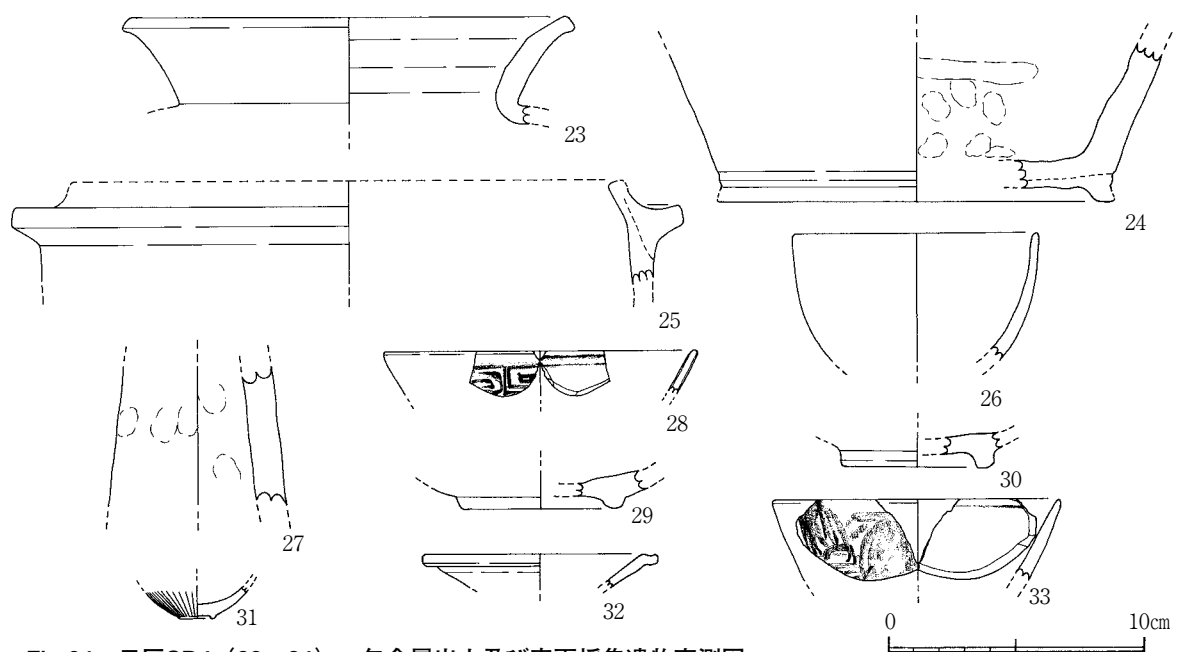


Fig.64 Ⅲ区SD4 (23・24)・包含層出土及び表面採集遺物実測図

### 包含層 (Fig.64)

V層からVI層にかけて遺物が包含されており、弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・近世陶磁器等が出土している。

25は土師器の羽釜である。断面台形の鏝を有し、端部は面をなす。口縁端部は僅かに内傾し、口唇部は欠損する。0.5～3.0mmの砂粒を多く含む。内外面ともナデ調整を施す。26は肥前系の陶器碗、27は須恵器の高杯脚台部であり、直線的に下方に下る。28は景德鎮窯産の染付碗である。29は土師器の碗である。断面半円形の輪高台を有し、体部は斜上外方に立ち上がる。30は青磁碗、31は肥前系の磁器紅皿である。

## (4) IV区

トレンチを設定して調査を行ったが、遺構は確認もできず、遺物が極めて少なかったので割愛させていただく。

## 3. 表面採集遺物 (Fig.64)

32は肥前系の陶器溝縁皿である。33は陶胎染付の碗であり、口縁端部内面には一重圈線を施す。

## 4. 小結

概要でも述べたように、今回の調査では遺構や遺物が極めて少ないため、遺跡の全容については不明な点が多いが、遺跡の変遷を知るうえでも出土した遺物の分類を行ってみると弥生土器213点、土師器・土師質土器1,203点、須恵器165点、陶磁器84点、瓦質土器3点、瓦片3点であり、古代から中世・近世にかけての時期にピークがあるものと思われる。また、流れ込みとみられる弥生土器片の点数が多いことから、近隣に弥生後期の遺跡の存在も考えられる。

次に、発掘調査終了後聞き取り調査を実施した。聞き取り調査は、当遺跡に隣接して在住する岩原巖氏（80歳）に協力して頂いた。御尊父からの伝え聞きである話を総合すると、当遺跡を東西に横切る水路は、明治時代までは「悪水」とよばれる付近の水田の排水路であったようである。以後、埋め立て・改修が行われ、曾ての悪水は埋め立て跡の一部に僅かにその面影を留めることができる。この水路が「悪水」として利用されていた時期には、「泥舟」とよばれる小舟の往来があり、舟入川水系等を利用して高知市方面に当地の特産物等でも出荷していたのであろうか、帰路には農作業時に不可欠であったし尿を買い取って舟荷としていたようである。又、「悪水」埋め立て跡の延長線上にI区SD2が検出されており、さらにその延長線上である当遺跡東方には「野せんち」とよばれる下肥貯留槽が設置されていた場所が存在する。これらのことから、「悪水」に引き込まれた泥舟はこの野せんちまで積み荷であるし尿を運搬していた可能性が高い。

今回の発掘調査及び聞き取り調査に於いて、I区SD2-bが曾ての「悪水」の一部であったことが明らかとなったことから当地の農業生産体系に重要な役割を果たしていたものと思われる。

表1 遺物観察表

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特徴	備考
				口径	器高	低径	胴径		
60	1	I区 包含層	須恵器 甕	20.8				内外面とも回転ナデ調整。	内外面の一部に自然釉が残る。
〃	2	〃	〃	20.2				〃	
〃	3	〃	〃	20.6				〃	外面に自然釉が残る。
〃	4	〃	〃	19.6				〃	
〃	5	〃	須恵器 杯蓋	14.4				〃	天井部は欠損する。
〃	6	〃	須恵器 細頸壺					内外面とも回転ナデ調整。外面に1条の凹線。	
〃	7	〃	陶器 折縁皿	12.6	2.8	4.5		内外面鉛釉。	17世紀。
〃	8	〃	磁器 碗	11.4				内外面とも緑灰釉。	
〃	9	〃	磁器 皿	13.2				見込みに蛇の目釉剥ぎ。	
〃	10	〃	磁器 染付碗			3.2			
〃	11	〃	青磁 不明					肩部に2条の浅い凹線が入った把手が付く。	
〃	12	〃	陶器 瓶			5.0		内面は露胎、外面は鉄釉。 底部外面は回転糸切り痕。	
〃	13	〃	土鐘	全長 3.5	最大径 1.6	孔径 0.7	重量 6.2g	土師質。	
〃	14	〃	〃	全長 3.0	最大径 1.2	孔径 0.4	重量 3.6g	〃	
62	15	II区 包含層	須恵器 甕	27.0				外面に強いナデ調整。	
〃	16	〃	陶器 段皿	16.6				内外面とも灰釉。口縁端部及び内面に鉄釉の 絵模様。	肥前系。
〃	17	〃	陶器 播鉢	24.8					堺産。
〃	18	〃	陶器 小壺	9.8			12.1	内外面とも褐釉。	端部は玉縁をなす。
〃	19	〃	陶器 段皿	23.0				内面は白土刷毛塗り。外面は緑灰釉。	肥前系。18世紀。
〃	20	〃	土師器 羽釜					内外面ともナデ調整。	口縁部外面に断面台形状の鐫。
〃	21	〃	須恵器 台付壺			4.4		「ハ」の字状に開く高台。内外面もナデ調整。	
〃	22	〃	磁器 染付碗			8.2			景德鎮窯。
64	23	III区 SD4	須恵器 甕	17.0				内外面とも回転ナデ調整。	
〃	24	〃	須恵器 台付壺			15.6		「ハ」の字状に開く高台。内面はナデ調整。	内面に指頭圧痕が残る。
〃	25	III区 包含層	土師器 羽釜					内外面ともナデ調整。	口縁端部外面に断面台形状の鐫。
〃	26	〃	陶器 碗	9.5				呉器型。	肥前系。18世紀。
〃	27	〃	須恵器 高杯						脚台部。

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特徴	備考
				口径	器高	低径	胴径		
64	28	Ⅲ区 包含層	磁器 染付碗	12.2				口縁端部外面に雷文。	景德鎮窯。
〃	29	〃	土師器 椀			6.0		断面半円形の輪高台。	
〃	30	〃	青磁 碗			5.8			
〃	31	〃	磁器 紅皿			1.3		型打ち成形。	肥前系。
〃	32	表採	陶器 皿	9.2				溝縁皿。内外面とも灰釉。	肥前系。17世紀。
〃	33	〃	陶胎染付 碗	11.2				口縁端部内面一重圈線。	

### 古銭計測表

Fig. No.	挿図番号	出土地点	銭種	分類	初鑄年次	銭径 (cm)		量目 (cm)	備考
						直径	孔径		
60	①	Ⅰ区 包含層	寛永通宝	古寛永	1636	2.4	0.65	20.4	6枚錆着
〃	②	〃	〃	〃	〃	2.4	0.6	24.1	7枚錆着
〃	③	〃	不明	不明		2.4	0.6	26.2	8枚錆着
〃	④	〃	寛永通宝	古寛永	1636	2.45	0.6	3.8	背上星
〃	⑤	〃	〃	〃	〃	2.45	0.6	1.5	半分欠損
〃	⑥	〃	洪武通宝			2.3	0.6	2.3	模鑄銭 背上「治」

## 第Ⅳ章 考 察

### 第1節 陣山遺跡、所有者の推定と性格

#### 1. はじめに

陣山遺跡Ⅰ調査区からは数基の土坑、溝、池等の遺構とともに多くの廃棄遺物が出土している。これら一群の遺構から出土した多量の遺物中には多くの瓦、当時高級品であった色絵磁器や有田産染付等が含まれており、一定の経済力をもった屋敷地の関連遺物であると捉えられる。残念ながら、当調査区では建物跡は検出されず、その規模を確認出来なかったが、引水溝SD1が、調査区西方向へ延長することから、屋敷地が西に存在した可能性が高い。

現地陣山地区では、この調査区から西側一帯に幕末前後まで郷土屋敷が存在していたと伝承されており、屋敷名に由来して当地を「細木屋敷」と呼び今に至っている。明治22年の長岡村成立時に記録された地籍図には字名をすでに「鍵山」と改められ、「細木屋敷」の所在を確認できる資料は残っていない。この様に記録資料が不足する状況の中から所有者を特定することは困難であるが、ここでは一つの手掛かりである伝承名「細木屋敷」を元に、現地での聞き取り調査、文献資料、発掘調査成果を照合させることから、所有者の特定・その性格の解明へと近づきたい。

#### 2. 文献にみる西野地郷土と細木氏

##### ①郷土細木氏の出現とその位置付け

西野地村は寛永年間の中井川引水に伴いそれまで不毛の地とされた長岡台地の新田開発に伴って成立した村であり、その開発の原動力の役を勤めたものが郷土であった。これは野中兼山の経済政策の一つとして、中世長曾我部氏の旧臣であった土着の武士層（一領具足）を郷土として取り上げたもので、常に未開拓地の開墾と新田開発の中心的役割を担っていた。その後は、地方への商品経済の波及に伴い、貧困・病気等の理由から郷土株を売り渡す者も出て、経済力を得た裕福な農民層が新たに郷土株を購入し譲り受け郷土として加えられている。

文政年間（1818～1829）の編纂とされる『郷土根根居帳』<sup>(1)</sup>には西野地村に住居を構える16名の郷土が記されている。ここには、稲垣・池知・猪野・池上・細木・細川・土居・岡・上島・田所・間島・松崎・坂本・島田の姓が掲載されているが、その中に細木幾之丞の名を見ることができる。この『郷土根根居帳』によると細木幾之丞は西野地村に住居を構え、その領地高は21石271合、領地は西野地の他に衣笠、秦泉寺に所在すると記されている。

細木氏に関してはこの他、『山之内家史料』に収められる『郷土年譜』<sup>(2)</sup>の8巻4号にもその記載が見られるため、以下その内容の一部を引用しておきたい。

資料1・『郷土年譜』「先祖書差出」

「先祖書差出・・・（略）・・・

細木佐源次

長岡郡西野地村住居

元祖 細木左傳次重義 … (略) …

右者細木弥三兵衛重次二男ニ而正徳二辰年格別ニ讓受郷士ニ被召出二十九ケ年相勤元文五申年善之進江生相続被仰付之 … (略) …

第二 善之進重直 … (略) …

- 一、元文五申年 月日不詳 生相続被仰付之
- 一、寛政九巳年迄在職五十八年相勤同六月廿三日病死仕ル

第三 幾之丞重胤

- 一、寛政九巳年八月父跡式無相違相続被仰付之
- 一、太守様比江村 御止宿被遊候節 御殿廻り火之守方度々被仰付之
- 一、国分川筋洪水之節散乱之御材木改方被仰付 年曆月日不詳
- 一、文政四巳年八月二十三日病死仕ル在職二十五ケ年相勤ル

第四 辰四郎重保

- 一、文政四巳年十月廿日父跡式無相違相続被仰付之
- 一、太守様比江村御止宿被遊候節 御殿廻火之守被仰付之
- 一、国分川筋洪水之節散乱之御材木改方被仰付之 年曆月日不詳
- 一、天保元寅年正月六日病死仕ル在職十ケ年相勤ル

第五 佐源次重之 … (略) …

一、天保元寅年閏三月七日父跡式無相違相続被仰付 同八日国分川筋洪水之節散乱之御材木改方父勤来之通被仰付之

- 一、私勤事当年迄九ケ年ニ相成申候

右之通ニ御座候以上

天保九戌年 正月廿六日

細木佐源次

御取次方役人所

」

これによれば、細木氏は正徳2年（1712）細木左傳次の代に財力をもって郷士株を譲り受けた譲り受け郷士であったものと分かる。この郷士株譲り受けにどの程度の金銭・資格が必要であったかは、詳細が掴めないが平尾道雄氏の『土佐藩郷士記録』によれば「一領具足以来主として家系ある農民」が主としてその資格をもつとされる。このことから細木氏は18世紀中葉には当地域である程度の経済力・信頼を得た地域の指導者であったものと見られる。又、その業務に関して幾之丞重胤・辰四郎重保の項に太守（藩主山之内公）が比江に来訪宿泊の折、「御殿廻火之守」（灯火の見張り役・警備役）を勤めたとの記載が認められる。又、国分川の洪水時には散乱した材木の回収を度々仰せつけられている。この様に、郷士としての細木氏の職務は藩主来訪その他の諸時の警備や災害時をはじめとする地域保全の指導者としての役目を担っていたものと見られる。又、その他の庶務に関する記載が認められないが、領地よりの収入、農業その他から得る収益によってその財力を維持していたものと思われる。



## ②幕末期前後にみる文献資料と細木氏

幕末期に近づくと、郷土細木氏の名を再び文献上に認めることができる。引用したものは弘化海防の兵賦を記した弘化5年（1848、嘉永と改元）の『弘化駆付郷土名簿』<sup>(3)</sup>である。この海防兵賦とは外国船舶に対する沿岸部の防備であり、又、駆付郷土とは非常時の知らせにより指定守備要地に参集する郷士を指したものである。これによると当時742名の郷士の他、地下浪人・足軽・筒役等が警備役に当てられたという。そしてこのうち「固場新井田」の部署に配された郷土名簿に「松崎七右衛門・細木哲馬・細川只弥・西村金三郎・山本猪三郎・池知団助・佐竹弥三郎・稲垣文之助・横堀文内・山崎源平・坂本庄平・上田達次」ら西野地村在住郷士の12名の名が記載されている。ここにある細木哲馬が文献上に確認できた最後の人物となる。

これ以降、郷土細木氏に関する文献資料は見出すことができない。明治2年の版籍奉還、同4年の廃藩置県を経て、明治22年には西野地村を改め長岡村が成立する。この時に記録された地籍図では先に触れたように細木氏の氏名は調査区近辺には全く認められず、調査Ⅰ区とその西側もすでに他の所有者名に改められている。調査Ⅰ区と西側地点が細木屋敷所在地であったと仮定し、文献から得られる根拠を元にその移転時期を想定すると、文献上最後に確認し得た1848年以降から明治22年の間に置くことができる。

## 3. 発掘成果からみる所有者の推定と遺構廃絶時期の特定

ここでは、本次調査で得られた発掘成果を元に、遺構の廃絶年代を特定し、所有者の移転時期の特定、所有者推定を行う。

陣山遺跡Ⅰ調査区からは数基の土坑、溝、池その他の遺構とともに多くの廃棄遺物が出土している。これら一群の遺構から出土した多量の遺物中には多くの瓦、当時高級品であった色絵磁器や有田産染付等が含まれており、一定の経済力をもった所有者の関連遺物であると捉えられる。残念ながら、当調査区では建物跡は検出されず、その規模を確認することが出来なかったが、先に触れた様に引水溝SD1が調査区西方向へ延長することから、屋敷地は西に存在していた可能性が高い。これらの遺構検出状況は、調査前に行われた地域での伝承の聞き取り調査とも一致している。地域伝承にどの程度までの信頼性を置けるかは疑問の余地を残すが、遺構・遺物の検出状況は伝承を裏付ける結果となっている。

又、一括廃棄遺物中で綿密な編年が確立している肥前系・肥前産磁器に注目し、各々の生産年代を調査したところ、最も古いもので18世紀後半代の肥前産磁器が、又、最も新しいもので19世紀中葉～幕末期に流行・生産された肥前系磁器が含まれていることが明らかとなった。これらの遺物資料から、遺構廃絶の上限年代を19世紀中葉に求めることが出来る。又、多量の磁器が出土したにも関わらず合成コバルトを用いた明治初年以降の染付類が1点も含まれないことから明治初年以前迄には遺構廃絶が行われていた可能性が高い。

19世紀中葉～明治初年の間に多量の遺物廃棄を想定できる背景としては、災害（1859年、安政の大地震等）による家屋の崩壊・住居地移転に伴う片付け跡等様々な理由が考えられる。しかし、生活の生命線ともなる引水溝や貯水施設等の遺構を埋め戻し廃絶する形で遺物廃棄がなされている事か

ら、ここでは後者を想定し居住地の移転と捉えたい。又、併せて聞き取り・文献・発掘資料全ての根拠を照合すれば、当遺跡を、幕末期の体制転換等の様々な社会変化を背景とした、幕末前後における郷土細木氏居住地の移転に伴う片付け跡として捉えることが最も妥当であると考えられる。

#### 4. 所有者の経済的背景と副業

今回の出土遺物からは、色絵磁器、有田産の染付や陽刻白磁、金彩を施した煙管、簪や化粧具等の服飾品等に遺跡所有者の比較的裕福な暮らしぶりが見出されるが、その経済的基盤はどのようなものであったのだろうか。郷土は領地から得る収益の他に自分自身も農業に従事し、半土半農的性格をもったとされるが<sup>4)</sup>、今回得られた一括廃棄遺物中の土人形製作関連の遺物群にもその経済的方策を垣間見ることができる。

当遺跡における土人形製作を裏付けるものは、一括廃棄遺物中に見られた土人形型と土人形の未完成品破片及び坩堝（るつば）と匣鉢である。型は別個体と確認できるもので14個体、識別不可能な細片も含むと破片26点。未完成品は素焼きされた状態の破片4点である。又、併せて出土した陶器製坩堝は内面に赤色～黒色に発色する赤色顔料と結晶が著しく付着している。高知県工業技術センターの山本順氏に依頼したEPMA分析の結果、付着した結晶は酸化第二鉄（弁柄）であることが明らかとなった。酸化第二鉄は、硫酸鉄（硫化鉄鉱を自然酸化し得られる）を一水塩としたものを陶製の容器に入れて窯に積み、約650～700℃の適温で加熱し（適温で赤に発色し、高すぎると黒色を帯びる。）精製するという。こうした一連の作業を坩堝を用いて行い弁柄を精製したと考えられるが、同様の弁柄は共伴する土人形未完成品の破片に塗布されている。又、型は婦人や童子、布袋などを型どったものがあるが、精選された胎土をもつ非常に精緻な作りのものと、胎土特徴から現地で模倣し製作したと見られる粗製の型があり、後者には「ろ」「は」他の窠文字が記されている。この他に、関連する工具類を精査したが、全長約10cmの鉋状の鉄製品と同様の鉋状鉄製品破片数点が見られる他には、何れも腐敗が著しく観察不可能なものばかりであった。

長岡台地周辺部での人形製作を伺わせる発掘調査例は現在までのところ類例がない。当遺跡の土人形製作がどのような規模で行われたものか、又、どの程度まで商品化され流通したのか、今回の出土遺物のみでは明らかにし得ないが、道具類の出土量からもおそらくは家内手工業的な小規模なものであり、農業経営と並行する副業として行われたものと予想される。ここにも、遺跡所有者のその柔軟な経済的手腕の一端が見られ、興味深い。

#### 註・引用文献

- 1) 平尾道雄『長岡村史』長岡村史編纂委員会昭和30年
- 2) 高知県立図書館蔵の山之内家史料『郷土年譜』より引用
- 3) 平尾道雄『土佐藩郷土記録』高知市市民図書館昭和39年
- 4) 同上

## 第2節 陣山遺跡出土陶器の生産窯推定

—近世能茶山窯製品の抽出とその胎土特性—

### 1. はじめに

近世、土佐における磁器の生産は、文政3年（1820）の能茶山磁器窯の開窯に始まる。能茶山磁器窯は現在の高知市鴨部能茶山に立地し、文政3年の開窯から明治3年（1870）の藩窯廃止に至るまでの約50年間、藩窯としての磁器生産活動を続けている。藩窯の赤字経営を解消するための方策として、天保7年（1836）以降は日用雑器を主体とする生産体制へと経営の方向転換がなされ品質の低下がみられたものの、それ以前の作品には、在地の薊野陶石を用いた品格の高い釉調に加えて熟練した画工の巧みな絵付が施されたものが多く、数々の名品が生まれている。この能茶山窯の研究は丸山和夫・伊東正統諸氏による研究<sup>(1)</sup>が著名で、文献史料の解説・現地探索から能茶山陶磁器窯の操業経過・職人・製作技術・遺品等の実態が明らかにされている。このうち、能茶山窯陶器生産に関しては、天保10年（1839）に記された『陶山紀事』に、当時、山の北斜面に九内の窯、南斜面に樋口寅吉・足達専次の組合窯が存在し、日用雑器を中心とした陶器製作が行われていたことが記されているが、その操業に関する詳細は明らかではない。

この能茶山陶器窯の発掘調査としては、新助・九内の近世陶器窯が所在したと思われる能茶山北側斜面の調査が森田尚宏・松田直則両氏により平成4年度に行われている。<sup>(2)</sup> 明治以降の操業に伴う窯の改修によって近世窯の原型は殆ど失われていたものの、この調査によって、陶器窯が明治10年以降西和田窯<sup>(3)</sup>として操業された最盛期（明治40年頃）の連房式登窯が確認され、同時にトチン・ハマ・サヤなどの窯道具、陶器片等の遺物が多数得られている。この他、平成7年度には松田直則・竹村三菜両氏により、近世から明治に至る県内の各陶器窯の調査が行われている。この調査により奈半利窯・加古窯・平田窯の表採資料が得られ、県内における近世陶器窯の実態が明らかになりつつある。

しかし、能茶山窯陶器資料については、唯一西和田窯跡調査で得られた出土資料のみで基準となる資料に乏しく、近世陶器の器種・器形には今だに不明な点が多く残されている。丸山和夫氏の研究の成果により、能茶山窯磁器が銘や特徴のある釉調・磁器質から識別がある程度まで可能であるのに対して、陶器は識別が殆ど不可能な状態である。又、在地製品は陶器・磁器共に編年が確立しておらず、近世遺構の時期比定は専ら緻密な編年が確立している肥前系陶磁器や瀬戸美濃系陶磁器などの搬入品に頼らざるを得ない状況である。

今回得られた陣山遺跡Ⅰ区の一括廃棄遺物中には口縁部数195点、個体数<sup>(4)</sup>にして146点余りの陶器片が含まれており、肥前、瀬戸・美濃、信楽、関西等の生産地よりもたらされる県外製品<sup>(5)</sup>を除けばその殆どが在地製品であることが予想される。これらの遺物は共伴する肥前系磁器により廃棄時期を19世紀中頃から幕末期に位置付けられ、文献資料よりの裏付けからも幕末期の郷土屋敷地の変更に伴う片付け跡の一括廃棄遺物として捉えることができる。そこで、今回、これらの資料を用いて在地産陶器群の中から能茶山窯陶器を抽出することができれば、近世能茶山窯陶器の今後の編年研究及び普及実態解明の手掛かりが得られるものと考えられる。

以上の理由から、本稿では、陣山遺跡出土一括廃棄遺物中よりの能茶山産陶片の抽出とその胎土特質の解明を試みる。各陶器片の生産窯を決定する一つの手がかりとしては、組成分析の方法を用いる。具体的には、蛍光X線分析を用いて陣山遺跡出土陶器片の主成分元素の定量を行い、その生産窯の推定を試みるものである。又、併せて、X線回析による能茶山水簸粘土の鉱物組成分析、ノルム計算法による各陶器片の鉱物組成の解明も行う。これら複数の方法を用いることにより、生産窯推定結果にさらに確実性を加えられるものと考えられる。

## 2. 組成分析による陶片の生産窯推定

### (1) 分析資料

#### ①特徴的な胎土グループの抜き出し

陣山遺跡の一括廃棄資料の中には個体数にして146点の陶器片が含まれている。これらの陶器片各々について20倍率ルーペを用いて陶器剥離面の胎土観察を行ったところ、胎土中に含まれる鉱物粒子に一定の特徴をもつグループが認められた。観察上の胎土特徴は次の通りである。

○剥離面 粗い。胎土内の気孔は殆ど認められないが、稀に規模の大きな裂孔が認められる。

○胎土中の鉱物粒子<sup>(6)</sup> 胎土は固く焼き締まっているが、含有鉱物の砂粒原体が確認できる。0.05mm以下の円形粒石英細砂が密集して認められる。約0.05mm～0.1mm大の角粒石英細砂（およそ角粒であるが角がやや丸味をもつ）が疎らに含まれる。約0.5mm～0.2mm大の角粒長石粗砂が稀に混じる。それ以上の大きさの礫は殆ど認められない。その他、疎らに赤色風化礫の細砂が混じるが、各陶器片ごとに個体差があり、その量が非常に多いものと殆ど認められないものとに分れる。

○焼成後の発色 aタイプ～還元焼成状態で暗灰色から灰色、酸化焼成状態で明赤褐色から橙色に発色する。あるいは一個体中で暗灰色系～明赤褐色系に部分的に変化する。bタイプ～還元焼成で灰白色、酸化焼成で淡黄色に発色する。

aタイプは焼成後の発色の様子から鉄の含有量がかなり多い胎土、bタイプはやや少ない胎土であると予想される。<sup>(7)</sup> 酸化・還元という各々の焼成状態の違いから発色が異なるが、何れも胎土中に含まれる鉱物粒子の状態に共通性が認められ（ただし、N-bタイプでは赤色風化礫の微細砂は殆ど認められない）、さらにこのグループに属する陶器片が陣山遺跡出土遺物中にかなりの点数含まれている。これらのグループの胎土特徴は西和田窯跡出土資料の胎土とも酷似していることから、能茶山窯産である可能性が最も高いグループであるといえる。以下、これらの胎土特徴を持つグループを「Nタイプ」として分類し、発色差により「N-aタイプ」「N-bタイプ」に細分する。

#### ②分析資料（陣山遺跡出土資料）

以上のことをふまえ、各器種間のバランスも考慮に入れながらNタイプに属する陶片を中心に選出しを行い32サンプル（J1～J32）を提示した。これらは県外産の陶器の抜き出しを行った後の在地産陶器の一群から選出したものであるが、この内のJ23・J32は胎土特徴及び形態から明らかに県外産と捉えられるものであり在地製品の成分組成の特徴をつかむ上での対比グループとして参考までに加えたものである。各資料の形態・調整・釉・胎土等の特徴は表1に示している。

③対比資料（窯出土資料）

対比資料としては、平成4年度の西和田窯跡発掘調査時に得られた出土資料を用いる。西和田窯跡出土資料は窯跡周辺の掘り込み跡から得られたもので、陶土の残土・焼土の堆積等と共に、窯道具、焼き損ない溶着した重ね焼きの小皿類、多数の陶器破片が出土したものである。これらの遺物中には合成コバルトを用いた陶胎染付等の西和田窯に伴う明治以降の遺物を含むが、合わせて近世磁器の溶着した窯道具・近世磁器も多く出土しており、西和田窯に先行する近世新助窯の遺物が混入している可能性が高い。対比資料として用いるに当たり時期の不明確さという点で多少の不安が残るものの、粘土採取地はほぼ同じである可能性が高く、胎土成分の比較の上では支障がないものと思われる。西和田窯跡資料陶器片も胎土発色の大きく異なるものが存在し、黒褐色系から赤褐色系に発色するaグループと灰白色系から淡黄色系に発色するbグループに大別されるため、この2グループ各々から資料を選び出した。能茶山窯資料として取り上げた陶片は17点（N1～N17）である。

他に、これまで能茶山窯陶器のみを問題とし検討してきたが、出土陶器片の生産窯推定に当たっては県内の他窯資料との比較も行う必要があると考え、陣山遺跡一括廃棄遺物中に含まれる可能性を持ち且つ分析資料が得られた3窯の陶片13点も取り上げる。資料の取り上げを行ったのは尾戸窯<sup>⑧</sup>・奈半利窯<sup>⑨</sup>・平田窯<sup>⑩</sup>である。その他の窯については未調査、その他の事情から分析資料が得られていない。各窯出土資料の特徴は表2に示している。

図1 高知県で近世～明治中頃迄に操業した陶磁器窯 位置図と操業時期<sup>(11)</sup>

- ①平田窯・明治初年頃開窯。
- ②能茶山磁器窯・文政3年（1820）開窯。  
陶器窯もこれに伴って開窯。
- ③尾戸窯・承応2年（1653）開窯。  
文政5年（1822年）廃窯。  
陶工は能茶山に移転。  
明治初年には尾戸焼の森田・山崎窯が能茶山にて再開。
- ④加古窯・明治5年（1872）頃から陶器製造開始。  
明治10年（1877）から磁器製造に変更。閉窯時期は不明だが明治18・19年以降か。
- ⑤赤野窯・明治15年（1881）開窯。
- ⑥内原野窯・文政12年（1829）開窯。
- ⑦安田窯・宝暦年間（1751～1763）には開窯していたが、詳細は不明。
- ⑧田野窯・文政4年（1821）開窯。幕末頃には閉窯。
- ⑨奈半利窯・安政5年（1858）開窯。



※製品が陣山遺跡一括廃棄遺物中に含まれる可能性を持つ窯は②③⑥⑦⑧⑨である。<sup>(12)</sup> その内、⑦⑧は窯跡出土資料が得られておらず、陣山遺跡出土資料との照合確認が出来ていない。⑥は窯資料の観察確認が出来たが今回の分析には至らなかった。①は明治初年のものだが廃棄遺物に入る可能性を僅かに含むため分析資料に加えた。

表1 陣山遺跡出土分析資料観察表

資料番号	図版番号	器種	特 徴
J1	43	小皿	端反形。見込蛇の目釉剥ぎの後白化粧土を刷毛塗り。鉛釉（鉄釉）を施釉し高台及び体部下半は露胎。胎土は橙色で石英と長石の細砂を多く含む。小規模な円孔が存在。Nタイプ。酸化焼成。
J2	211	大皿	見込蛇の目釉剥ぎ。竹・雀文を呉須で描き透明釉を施釉。蛇の目凹方高台。畳付けは丸みをもち高台の作りが他と異なる。胎土は鈍い橙色で僅かに透明感をもつ。橙色の透明な砂粒を多く含む。酸化焼成。
J3	250	行平鍋	把手に型押陽刻による「寿」文字有り。外面上半には飛鉋を施す。下半は削り痕顕著。釉は錆釉を刷毛塗り。胎土は鈍い赤褐色でNタイプ。還元焼成。
J4	245	土鍋	内面柿釉、外面下半露胎。底部は鋭角的な削り。胎土は灰色で石英・長石の微砂を含む。微細な円孔あり。Nタイプ。還元焼成。
J5	240	片口	口縁部を外折させる。内外面に鉄釉を刷毛塗り。高台無釉。見込に陶器質の足付ハマ跡有り。胎土は黒褐色でNタイプ。還元焼成。
J6	238	こね鉢	鉄釉施釉。口唇部釉ガキ。胎土は灰色で僅かに透明感をもつ。良く焼き締まるが、大粒の石英砂を多く含む。還元焼成。
J7	266	徳利	オリブ褐色の不透明釉（土灰釉）を施釉。内面ロクロ目顕著。胎土は橙色で長石・石英砂を多く含む。Nタイプ。酸化焼成。
J8	285	瓶	鉄釉。内面ロクロ目顕著。高台は鋭角的な削り。胎土は赤褐色で石英・長石の細砂を多く含む。Nタイプ。酸化焼成。
J9	294	甕	鉄釉。肩部に5条の沈線を巡らす。胎土は黒褐色でNタイプ。規模の大きな裂孔が存在。還元焼成。
J10	303	甕	鉄釉。体部上位に黒色の鉄釉を流し掛けする。内面体部上位に接合痕あり。胎土は黒褐色でNタイプ。還元焼成。
J11	317	火入れ	筒形。内面ロクロ目顕著。外面褐釉、内面露胎。胎土は赤褐色でNタイプ。酸化焼成。
J12	322	火鉢	外面に多条の沈線を巡らす。内面ロクロ目顕著。鉛釉施釉。胎土は灰色で石英・長石の細砂を含む。大規模な裂孔と小規模な円孔を含む。Nタイプ。還元焼成。
J13	323	火鉢	円筒形。外面に多条の沈線を巡らし、型押しによる獣面の双耳を貼付する。柿釉施釉。胎土は灰黄色でNタイプ。還元焼成。
J14	241	蓋	外面に削り痕あり。内面ロクロ目。鉛釉施釉、内面露胎。胎土は橙色で石英・長石の細砂及び赤色砂礫を多く含む。小規模な円孔が存在。Nタイプ。酸化焼成。
J15	207	中碗	広東形。釉は浅黄色を帯びる透明の釉で細かな貫入が入る。高台内施釉。見込に陶器質の足付ハマ跡有り。胎土は淡黄色でNタイプ。酸化焼成。
J16	12	小杯	浅半球形。高台は鋭角的な削り。釉はやや白濁した透明釉で細かな貫入が入る。胎土は鈍い黄橙色。石英細砂を多量に、黒色微砂を少量含む。Nタイプ。酸化焼成。
J17	42	小皿	高台内兜巾状。削り痕はナデ消す。見込蛇の目釉剥ぎ後白化粧土を刷毛塗り。焼成不良のため釉は白濁し、外面下半及び高台露胎。胎土は鈍い橙色～明褐色に発色し僅かに透明感をもつ。石英細砂を多量に含む。
J18	229	餌鉢	摘みは貼付による。底部糸切り痕顕著。透明釉は白濁する。胎土は淡黄色でNタイプ。酸化焼成。
J19	312	台付灯明皿	底部回転糸切り。釉は白濁し細かな貫入が入る。底部付近露胎。胎土は淡黄色で軟質。僅かに赤色風化礫の細砂を含む。Nタイプ。酸化焼成。
J20	286	瓶	内面ロクロ目顕著。高台は鋭角的削り。白濁釉を施釉し、高台及び内面無釉。胎土は灰白色から淡黄色に部分的に変化する。長石・石英細砂、赤色風化礫を僅かに含む。良く焼き締まり円裂孔は殆ど存在しない。Nタイプだが精製品か。
J21	252	土瓶	把手は貼付による。外面に白化粧土と同イッチン掛けによる植物文様を描き、透明釉施釉。胎土は鈍い黄橙色で石英細砂と長石・赤色礫を多量に含む。Nタイプ。酸化焼成。
J22	48	蓋	摘みは貼付による。灰釉施釉。釉は乳白色で細かな貫入が入る。灰白色で精選された胎土。石英細砂が僅かに認められる。裂孔と微細な円孔を多く含む。還元焼成。
J23	302	甕	口縁部は内方に拡張させる。口唇部に筒目有り。体部外面に多条の沈線を巡らす。輪状の双耳を貼付。鉄釉系の釉を施釉するが、釉は赤褐色から灰色に発色。胎土は褐色で、石英・長石の砂粒を多く含む。大規模な円・裂孔が存在。
J24	271	徳利	肩に2条の沈線を巡らす。内面中位に接合痕有り。竹文を呉須で描く。透明釉は貫入が入る。内底には鉄釉施釉。胎土は精選され、灰白色。還元焼成。
J25	278	徳利	薄手の作り。内面ロクロ目顕著。灰オリブ色の不透明な釉で、細かな貫入が入る。胎土は黄橙色～灰色に発色し、Nタイプ。還元焼成だが酸化気味。
J26	283	小甕	鉄釉は黒色から褐色に発色。胎土は灰色で円形状の石英細砂を含む。部分的に微細な円孔が入る。Nタイプか。還元焼成
J27	273	徳利	薄手の作り。内面ロクロ目顕著。鉄絵を描く。淡緑灰色の透明な釉で細かな貫入が入る。胎土は灰白色で剥離面はやや滑らか。石英細砂を含む。規模の大きな裂孔が存在。還元焼成。
J28	228	餌鉢	底部回転糸切り。摘みは貼付による。釉は緑灰色を帯びた透明の灰釉で貫入が入る。底部露胎。胎土は灰色で剥離面はやや滑らか。よく焼け締まるが球形の石英細砂を僅かに含む。還元焼成。
J29	274	徳利	薄手の作り。釉は黄色を帯びる透明釉で細かな貫入が入る。胎土は灰白色で僅かに透明感をもつ。良く焼け締まるが球形の石英細砂が僅かに存在する。円孔は存在しない。還元焼成。

資料番号	図版番号	器種	特 徴
J30	270	徳利	薄手の作り。外面下部に叩き目が僅かに残る。内面中位に接合痕が残る。灰釉施釉の後、口縁部から緑釉を流す。胎土は灰色から浅黄色に発色し僅かに透明感をもつ。還元焼成。
J31	316	火入れ	体部に白化粧土、口縁部に赤色の釉を施した後、灰釉を施釉。灰釉はオリブ黄色を帯びる透明の釉で貫入が入る。胎土は灰白色で石英・長石細砂を含む。僅かに透明感をもつ。還元焼成。
J32	82	蓋	透明釉は青色気味で粗い貫入が入る。胎土は白色で、剥離面滑らか。黒色の細砂・石英の円形粒が僅かに認められる。規模の大きな気孔が存在。還元焼成。関西系陶器。

表2 窯跡出土分析資料観察表

資料番号	窯名	器種	特 徴
N-1	能茶山窯	小皿	端反形。高台の削り込みが深く鋭い削り痕。鉄釉施釉外面下半露胎。見込蛇の目釉剥ぎの後白化粧土刷毛塗り。胎土は灰色。Nタイプ。還元焼成。
N-2	能茶山窯	瓶	クリ底。高台は鋭い削り痕。内面ロクロ目顕著。釉は白色で高台内施釉、内面露胎。胎土は暗赤灰色で小規模な凹孔が多く存在。Nタイプ。還元焼成。
N-3	能茶山窯	こね鉢	口縁は外折させる。釉はオリブ褐色に発色し、外面下半露胎。口唇部は釉ガキの後白化粧土を刷毛塗り。胎土は明赤褐色で小規模な凹孔が多く存在。Nタイプ。酸化焼成。
N-4	能茶山窯	搦鉢	摺目は14条を1単位とし浅く目が細かい。外面に柿釉を施釉。胎土は暗灰色で円・裂孔を疎らに含む。Nタイプ。還元焼成。
N-5	能茶山窯	甕	体部細片。内外面に柿釉を施釉。胎土は褐灰色で小規模な凹孔と大規模な裂孔が多く存在。Nタイプ。還元焼成。
N-6	能茶山窯	甕	体部細片。内外面に柿釉を施釉し、外面は黒色の鉄釉を流し掛け。胎土は褐灰色で小規模な凹孔が多く存在。Nタイプ。還元焼成。
N-7	能茶山窯	行平鍋	体部外面に飛鉋を施す。鉄釉は黒褐色に発色。口縁部露胎。胎土は浅黄橙色で小規模な凹孔が存在。Nタイプ。酸化焼成。
N-8	能茶山窯	台付灯明皿	底部回転糸切り。鉄釉は暗オリブ褐色に発色。胎土は部分的に灰黒色から明褐色に変化。Nタイプ。還元焼成。
N-9	能茶山窯	甕	口縁は外方へ肥厚させ丸く収める。釉は柿釉。胎土は黒褐色で小規模な凹孔が疎らに存在。Nタイプ。還元焼成。
N-10	能茶山窯	徳利	薄手の作り。内面ロクロ目顕著。釉はオリブ灰色の不透明な釉で細かな貫入が入る。内面底部付近に鉄釉施釉、他は露胎。胎土は灰色で緻密。微細な凹孔が僅かに存在する。精選された胎土。還元焼成。
N-11	能茶山窯	小皿	外面下半削り痕顕著。高台は断面三角形で高台脇に挟りあり。高台内僅かに兜巾状。見込に陶器質の足付ハマ跡あり。透明釉は細かな貫入が入る。高台無釉。胎土は浅黄色。Nタイプ。酸化焼成。
N-12	能茶山窯	土鍋蓋	鐔は鋭角な削り。透明釉はやや白濁し細かな貫入が入る。内外面施釉、鐔は無釉。胎土は浅黄橙色で微細な凹孔が存在。Nタイプだが、胎土は精選され砂粒は少ない。赤色細砂を僅かに含む。酸化焼成。
N-13	能茶山窯	土鍋	体部上位に白化粧土刷毛塗り。透明釉は細かな貫入が入る。内外面施釉、受け部と外面下半無釉。胎土は淡黄色。微細な凹孔が存在。Nタイプだが、精選され砂粒は少ない。酸化焼成。
N-14	能茶山窯	土鍋蓋	天井部に削り痕が残る。天井部に鉄絵による植物文様を描く。内面鉄釉。胎土は灰白色で微細な凹孔が存在。Nタイプ。酸化焼成。
N-15	能茶山窯	おろし皿	おろし目8条。おろし目は棒状工具を両側から突き刺し成形。透明釉は細かな貫入が入り僅かに白濁する。見込陶器質の足付ハマ跡4足有り。浅黄色。Nタイプ。赤色細砂を含む。酸化焼成。
N-16	能茶山窯	餌鉢	底部糸切り痕顕著。灰色を帯びる透明の釉で僅かに白濁。灰色。Nタイプ。黒色細砂を含む。還元焼成。
N-17	能茶山窯	中皿	丁寧な作りで工具痕は残さない。高台は丸味をもった作り。透明釉は気泡を多く含み貫入が入る。高台内無釉、量付け施釉。灰白色。Nタイプ。黒色細砂を僅かに含む。
O-1	尾戸窯	碗又は小皿	高台内は曲線的に削り出す。見込陶器質の足付ハマ跡有り。灰釉。焼成不良で釉は白濁。高台無釉。胎土は灰白色から黄橙色に変化。Nタイプ。規模の大きな裂孔と微細な凹孔を多く含む。還元～酸化焼成。
O-2	尾戸窯	碗	呉器形。高台内は曲線的に削り出す。高台内兜巾状。見込陶器質の足付ハマ跡有り。3足。灰釉。釉は乳白で細かな貫入が入る。高台無釉。胎土は淡黄色で規模の大きな裂孔と微細な凹孔を多く含む。Nタイプ。赤色細砂を疎らに含む。酸化焼成。
O-3	尾戸窯	碗	呉器形。高台内は曲線的に削り出し削り込みが深い。灰釉。釉はオリブ色の透明な釉で粗い貫入が入る。高台内施釉。胎土は灰黄色で規模の大きな裂孔と微細な凹孔を多く含む。Nタイプ。赤褐色細砂を含む。酸化焼成気味。
O-4	尾戸窯	碗	灰釉。釉は乳白で、非常に細かな貫入が入る。胎土は灰白色だが釉表面のピン孔周辺は淡い橙色に窯変する。微細な凹孔が多く存在。Nタイプだが精選され大粒の砂粒は含まない。還元焼成。
O-5	尾戸窯	小皿	高台内は曲線的に削り出し削り込みが深い。見込足付ハマ跡有り。灰釉。釉は乳白気味の透明な釉で細かな貫入が入る。高台内施釉。胎土は灰黄色で微細な凹孔を含む。Nタイプだが、精選され大粒の砂は含まない。赤褐色細砂を含む。還元焼成気味。

資料番号	窯名	器種	特徴
NA-1	奈半利窯	こね鉢	口縁部を外方へ拡張させるが丸味をもった作り。釉は暗褐色からオリーブ褐色に発色口唇部釉ガキ。胎土は灰色でやや透明感をもつ。還元焼成。
NA-2	奈半利窯	土鍋	外面工具による削り痕明瞭。外底に粘土塊貼付。釉は灰釉、焼成不良。底部と内面無釉。胎土は黄橙色でやや透明感をもつ。裂孔を疎らに、円孔を多く含む。石英を多く赤色及び黒色の細砂を疎らに含む。酸化焼成。
NA-3	奈半利窯	不明	外面工具による削りの後、飛鉋を施す。釉は灰オリーブ色を帯びた透明釉（灰釉）で、微細な貫入が入る。胎土は灰色でやや透明感を持つ。石英の円形粒細砂を含む。微細な円孔が僅かに存在。還元焼成。
NA-4	奈半利窯	壺	体部上半に飛鉋を施す。高台は鋭角的な削り。体部下半は鉄釉を刷毛塗り、上半飛鉋部分は透明釉施釉。高台及び内面無釉。胎土は鈍い黄橙色でやや透明感を持つ。酸化焼成。
NA-5	奈半利窯	細片	形態不明。灰色でやや透明感を持つ。還元焼成。
NA-6	奈半利窯	土鍋	底部は浅いクリ底。不透明な緑青色の釉（粘青磁）を施釉。外面下半と内面無釉。胎土は鈍い黄橙色から灰色で透明感をもち緻密。酸化焼成気味。
NA-7	奈半利窯	徳利	薄手の作り。底部は鋭い削り。灰釉。焼成不良。底部内面鉄釉施釉。胎土は灰色から黄灰色でやや透明感をもち緻密。還元焼成だが酸化気味。
H-1	平田窯	播鉢	高台外側及び内面にロクロ調整痕。高台は内湾気味で丸味をもった作り。摺目は深く鋭角で摺目12条を1単位とする。内外面に鉄釉を施釉し、高台は露胎。胎土は黄橙色でチャート・長石の砂礫を含む。部分的に大規模な円・裂孔が存在。酸化焼成。

## （2）分析の目的と方法

今回の分析の目的は、陣山遺跡出土陶器片のうちNタイプの観察上の特徴を持つ陶片資料の元素組成を明らかにし、西和田窯跡資料の元素組成との間に共通性が見出されるかどうかを検討することである。さらに、合わせて該当期の在地窯から出土した陶片資料の元素組成上の特徴も明らかにし、陣山遺跡出土資料の中に共通する特徴をもつ陶片が含まれているかを比較検討する。

今次調査に先立ち、各陶器片の組成の傾向を掴むために各窯資料を含めた約20点の陶片についてオーダー分析による事前の蛍光X線分析を行ったところ、主成分7元素の定量結果に各窯陶片の差が認められ、この方法が十分に有効であることが明らかになった。さらに、試料がサンプリング誤差の大きい陶片であることから、分析値にある程度のばらつきが生じることを予想した上で、生産地側資料の分析値の範囲を掴むために多数の試料の分析を必要としている。以上の理由から、迅速に多元素を定量でき且つ主成分元素の定量に関しては有効な分析結果が得られる蛍光X線分析法を第1の方法として選んだ。更に、陶片試料のより正確な元素組成値を求め、今回の蛍光X線分析の測定誤差の範囲を掴むために、各グループから抽出した4サンプルについて湿式分析法（プラズマ発光分光分析・原子吸光分析）<sup>(13)</sup>を、併せて行っている。

蛍光X線分析・ICP分析・原子吸光分析、及び後に示すX線回析は、高知県下の粘土資源に関して多くの調査試験データを蓄積しておられる高知県工業技術センター技術第1部の山本順氏に依頼した。なお、X線分析のサンプル作成と測定の一部は山本氏の指導のもとに浜田が行った。サンプルの作成方法及び分析条件は以下に記す通りである。



(A) 蛍光X線分析

①試料作成条件○採取した陶片は釉の影響の及ばない中心部分まで削り込みを行い約5~10gの陶器片を得、その後超音波洗浄30分間と乾燥を行う。○陶片は5mm以下に砕いた後、メノウ製の自動乳鉢で約10分間粉碎する。これを磁性るつばに入れて電気炉で1000℃3時間加熱処理し、鉄分を酸化し、結晶水を除く。その後再度粉碎し試料ビンに保存○ホウ酸リチウム5.00gと試料0.400gを化学天秤で秤取し、白金るつばで混合する。その後ビードサンプラー装置（理学電気工業製）を用いて1200℃で7分間加熱溶融し、上下を反対にして再溶融する。

②分析条件○分析装置は理学電気工業製全自動蛍光X線分析装置（形式：波長分散型。X線管球はロジウム。出力：50kv×50mA=2.5kw）を用いた。○測定はピーク値で40秒、バックグラウンドで20秒測定した。○定量法としては検量線法を用いる。○標準試料は事前調査での組成データを元に組成を決定し、同センターにて独自の試料を作成している。標準試料の組成値は湿式分析で求めた。

(B) 湿式分析

SiO<sub>2</sub>：試料を炭酸ナトリウムでアルカリ溶融し、塩酸に溶解。ろ過し、ろ紙を焼成して残分を秤量。ろ液中のケイ素をICP（プラズマ発光分光分析装置）で定量し、残分値と合計する。Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、MgO、CaO、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>：ろ液中のAl、Mg、Ca、FeをICPで定量する。Na<sub>2</sub>O、K<sub>2</sub>O：試料をフッ化水素と塩酸で溶解し、加熱乾固後塩酸を加えて再溶解する。溶液中のNa、Kを原子吸光分析装置（ゼーマン原子吸光光度計）で定量する。

表3 蛍光X線分析条件と標準化試料

蛍光X線の定量範囲

SiO <sub>2</sub>	50 ~ 80 %
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	10 ~ 30
Na <sub>2</sub> O	0 ~ 3
K <sub>2</sub> O	0 ~ 7
MgO	0 ~ 3
CaO	0 ~ 3
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0 ~ 8

蛍光X線の元素条件

格納条件	Peak		BG1		BG2		PHA	分光結晶	97.6 検量線 (ax <sup>2</sup> +bx+c)			標準化値 ×10 <sup>5</sup>
	deg	sec	deg	sec	deg	sec			a	b	c	
Si Si10	32.24	40	29.73	20	29.73	20	100-300	TAP	-0.20049E+1	0.32102E+2	-0.18355E+2	3.2936
Al Al10	144.63	40	143.61	20	145.99	20	110-300	PET	0.23835E+1	0.59334E-1	0.59334E-1	9.3517
Na Na10	55.22	40	54.00	20	56.52	20	100-300	TAP	0.21301E+2	-0.49672E-1	-0.49672E-1	0.0485
K K 10	50.66	40	49.33	20	52.00	20	100-300	PET	0.50278E+0	0.76646E-3	0.76646E-3	7.8641
Mg Mg10	45.30	40	44.00	20	46.70	20	100-300	TAP	0.73160E+1	-0.17056E-1	-0.17056E-1	0.2036
Ca Ca10	45.19	40	44.29	20	46.00	20	100-300	PET	0.33990E+0	0.55573E-1	0.55573E-1	2.7553
Fe Fe10	57.51	40	46.93	20	58.10	20	90-350	LiF1	0.17472E+0	-0.24236E-1	-0.24236E-1	26.2180

(注) 検量線の Eはすべて+002の形式で表されている。

グループ名 CERA

標準化試料 CER3

	CER1	CER2	CER3	CER4	CER5	CER6
SiO <sub>2</sub>	56.53	61.05	65.56	70.07	74.42	78.75
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	27.50	25.01	22.38	20.03	17.54	15.25
Na <sub>2</sub> O	0.04	0.56	1.00	1.50	2.01	2.52
K <sub>2</sub> O	5.92	4.88	3.98	2.96	1.98	1.00
MgO	2.44	1.96	1.47	0.96	0.48	0.00
CaO	0.03	0.56	0.99	1.47	1.97	2.47
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	7.54	5.98	4.62	3.01	1.60	0.01
total	100	100	100	100	100	100

表4 ICP分析・原子吸光分析と蛍光X線分析の結果対比

	0-1		0-2		J-5		J-10	
	湿式	蛍光X線	湿式	蛍光X線	湿式	蛍光X線	湿式	蛍光X線
SiO <sub>2</sub> (%)	70.57	71.42	76.34	76.63	65.94	66.38	69.48	69.82
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	22.07	22.00	18.08	18.27	22.99	22.92	19.38	19.40
Na <sub>2</sub> O	0.16	0.13	0.14	0.10	0.15	0.07	0.21	0.14
K <sub>2</sub> O	3.84	3.64	2.85	2.69	4.55	4.34	2.75	2.62
MgO	0.94	0.88	0.52	0.54	0.94	0.92	1.42	1.50
CaO	0.21	0.17	0.12	0.10	0.17	0.14	0.33	0.33
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	1.65	1.59	1.15	1.21	4.44	4.60	5.76	6.06
Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.01		0.01		0.01		0.05	
MnO	0.005		0.003		0.019		0.028	
SrO	0.005		0.003		0.005		0.006	
total	99.45	99.83	99.21	99.54	99.19	99.37	99.38	99.87

### (3) 分析結果

窯跡出土の対比試料の分析結果は表5に、陣山遺跡出土試料の分析結果は表6に示す。元素存在量はいずれも酸化物の形で、7主成分を示している。又、各主成分の測定誤差は各々測定値の±1%以内であると捉え、分析結果は主成分の割合比(%)を3桁までにとどめ表記した。

なお、陶片の胎土は粘土鉱物中に礫・砂などの形で様々な鉱物が混ざり込んだ複雑な混合物であり、同一採集地の胎土であっても鉱物の含有量等にばらつきが見られ、磁器胎土に比較すると個体差が大きく現れる。又、同一個体内においても、サンプルを採取する部位によって組成上のばらつきが生じる。このような陶片試料のもつサンプリング誤差と蛍光X線分析の測定誤差を考慮にいたした上で、以下、数値の検討を慎重に行いたい。

#### ①対比試料の分析結果と組成上の特徴

各窯跡出土試料は組成上の特徴から、a・能茶山窯、b・尾戸窯、c・奈半利窯、d・平田窯の4グループに大別された。

##### a・能茶山窯試料(N1~N17)

N1~N17までの各々の試料は珪酸が65.2~74.4%の間に分布し散らばりをみせているが、尾戸窯・奈半利窯と比較して全体にやや少ない傾向がみられる。又、酸化アルミニウムは19.0~27.3%の間で分布し、奈半利窯に比較してやや多い。

しかし酸化鉄に注目すると、N-aタイプに該当するN1~N10は3.18~5.14%と突出して多く他窯とは際立った違いを見せているが、それに対して、N-bタイプに該当するN11~N17は1.34~2.99%とやや少なく他窯との大きな差はみられない。このことから、当初の予想通りN-aタイプは鉄3が非常に多いグループ、N-bタイプは鉄が比較的少ないグループであり、先に述べた発色上の違いも鉄の含有量の違いによるものと捉えることができる。又、N1~N17の酸化鉄にさらに注目すると、1.34~5.14%の間で酸化鉄の含有比率が大きく動いている。これは、個体間に認められる他の主成分含有率の散らばりと比較しても非常に大きい比率変化であり、能茶山試料の特徴として挙げる事ができる。

表5 窯跡出土試料の蛍光X線分析、分析結果 (%)

試料No	資料名	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	MgO	CaO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Total
N-1	能茶山窯	69.7	20.9	0.73	3.59	0.96	0.15	4.06	100.09
N-2	能茶山窯	66.3	23.6	0.14	3.36	0.88	0.16	5.14	99.58
N-3	能茶山窯	69.9	20.6	0.39	3.01	0.76	0.16	4.72	99.54
N-4	能茶山窯	69.0	21.6	0.50	3.58	0.90	0.15	4.08	99.81
N-5	能茶山窯	66.4	23.7	0.13	3.45	0.75	0.15	4.97	99.55
N-6	能茶山窯	69.4	21.3	0.31	3.55	0.85	0.15	3.94	99.50
N-7	能茶山窯	70.7	21.2	0.23	3.60	0.96	0.14	3.18	100.01
N-8	能茶山窯	69.1	21.7	0.19	3.48	0.88	0.14	3.89	99.38
N-9	能茶山窯	69.7	21.5	0.16	3.46	0.88	0.15	3.84	99.69
N-10	能茶山窯	68.3	23.3	0.43	3.63	0.79	0.18	3.18	99.81
N-11	能茶山窯	71.9	22.0	0.03	2.95	0.62	0.12	1.97	99.59
N-12	能茶山窯	70.6	21.9	0.00	3.22	0.73	0.20	2.31	98.96
N-13	能茶山窯	65.2	27.3	0.03	3.02	0.73	0.19	2.99	99.46
N-14	能茶山窯	69.9	21.5	0.00	3.42	1.01	0.14	2.97	98.94
N-15	能茶山窯	74.4	19.0	0.23	3.28	0.65	0.13	1.95	99.64
N-16	能茶山窯	65.6	26.8	0.00	3.43	0.74	0.23	2.80	99.60
N-17	能茶山窯	66.6	27.3	0.26	3.01	0.56	0.17	1.34	99.24
O-1	尾戸窯	70.8	21.9	0.08	3.64	0.79	0.18	1.58	98.97
O-2	尾戸窯	76.1	18.2	0.00	2.67	0.45	0.10	1.21	98.73
O-3	尾戸窯	72.0	21.7	0.16	2.59	0.30	0.16	1.91	98.82
O-4	尾戸窯	71.3	21.3	0.00	3.71	0.76	0.13	1.76	98.96
O-5	尾戸窯	71.2	21.1	0.00	3.43	0.69	0.15	2.56	99.13
NA-1	奈半利窯	76.3	16.4	0.99	2.99	0.61	0.17	1.72	99.18
NA-2	奈半利窯	75.0	17.3	1.25	3.18	0.62	0.17	1.75	99.27
NA-3	奈半利窯	72.9	18.7	1.09	3.34	0.70	0.20	1.95	98.88
NA-4	奈半利窯	72.9	18.8	1.21	3.30	0.77	0.18	1.93	99.09
NA-5	奈半利窯	73.8	18.3	1.16	3.30	1.70	0.19	1.89	100.34
NA-6	奈半利窯	73.3	18.4	1.21	3.25	0.72	0.19	1.93	99.00
NA-7	奈半利窯	73.0	18.5	1.20	3.27	0.67	0.21	1.96	98.81
H-1	平田窯	67.5	24.4	0.15	2.84	0.49	0.12	3.56	99.06

## b・尾戸窯試料 (O1~O5)

珪酸は70.8~76.1%の間に分布しており、同じ能茶山採取粘土でありながら、能茶山窯試料に比較するとやや多い。この他、酸化鉄が1.21~2.56%の間に分布しやN-bタイプと同程度であることに気付くが、他の成分に関しては能茶山試料とほぼ共通している。

## c・奈半利窯試料 (NA1~NA7)

珪酸が72.9~76.3%と能茶山試料に比較して多く、酸化アルミニウムは16.4~18.8と少ない。又、酸化ナトリウムが他窯に突出して多く、ほぼ1%を越えるという特徴を持っている。酸化鉄は1.72~1.96%の間に分布し2%を越すものはない。

## d・平田窯試料 (H1)

珪酸が67.5%とやや少なく、酸化アルミニウム24.4%とやや多いが、サンプル数が1点であることから主成分組成値の分布範囲を掴むことは困難である。しかし、能茶山粘土にやや近い主成分組成の傾向を認めることができる。

表6 陣山遺跡出土試料の蛍光X線分析、分析結果 (%)

試料No	資料名	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	MgO	CaO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Total
J-1	小皿 (43)	67.8	22.7	0.12	3.93	0.86	0.15	4.34	99.90
J-2	大皿 (211)	73.5	18.1	1.54	3.92	0.63	0.26	1.78	99.73
J-3	行平 (250)	69.3	21.4	0.20	3.51	0.97	0.14	3.97	99.49
J-4	土鍋 (245)	72.1	20.9	0.32	2.38	0.54	0.23	2.82	99.29
J-5	片口 (240)	66.1	22.9	0.08	4.35	0.98	0.14	4.60	99.15
J-6	こね鉢 (238)	72.5	18.6	1.41	3.37	0.64	0.24	2.56	99.32
J-7	德利 (266)	69.6	21.4	0.23	3.49	1.05	0.12	3.46	99.35
J-8	瓶 (285)	66.8	22.5	0.16	3.70	0.94	0.17	4.82	99.09
J-9	甕 (294)	69.6	20.0	0.11	3.60	0.82	0.16	5.00	99.29
J-10	甕 (303)	69.7	19.3	0.13	2.60	1.46	0.33	6.04	99.56
J-11	火入れ (317)	70.3	19.2	1.10	3.06	0.66	0.32	4.53	99.17
J-12	火鉢 (322)	72.5	19.4	0.19	3.43	0.87	0.15	3.01	99.55
J-13	火鉢 (323)	71.5	20.7	0.09	3.31	0.87	0.13	3.01	99.61
J-14	蓋 (241)	72.5	19.5	0.22	3.12	0.76	0.14	3.48	99.72
J-15	碗 (207)	73.6	21.1	0.03	2.02	0.68	0.12	1.95	99.50
J-16	小杯 (12)	76.4	17.6	0.33	3.24	0.62	0.13	1.74	100.06
J-17	小皿 (42)	74.3	17.9	1.31	2.54	0.66	0.24	2.23	99.18
J-18	餌鉢 (229)	77.9	16.7	0.09	2.44	0.41	0.12	1.42	99.08
J-19	灯明皿 (312)	72.8	21.0	0.25	2.50	0.80	0.14	2.25	99.74
J-20	瓶 (286)	71.5	23.4	0.05	2.20	0.61	0.11	1.52	99.39
J-21	土瓶 (252)	72.5	21.0	0.34	2.41	0.52	0.24	2.83	99.84
J-22 ※	蓋 (48)	70.2	23.5	0.36	3.66	1.09	0.16	1.93	100.90
J-23	甕 (302)	75.4	17.6	0.33	2.39	0.53	0.29	3.05	99.59
J-24	德利 (271)	68.5	23.0	0.17	4.05	0.96	0.25	2.46	99.39
J-25	德利 (278)	74.5	19.0	0.45	2.43	0.77	0.11	2.47	99.73
J-26 ※	小甕 (283)	71.6	20.3	0.36	3.02	0.84	0.13	3.49	99.74
J-27	德利 (273)	63.8	28.8	0.80	4.06	0.25	0.34	1.51	99.56
J-28	餌鉢 (228)	75.4	18.3	0.79	2.89	0.61	0.14	1.50	99.63
J-29	德利 (274)	68.3	25.9	0.71	4.03	0.21	0.26	1.03	100.44
J-30	德利 (270)	74.2	19.3	0.62	2.59	0.63	0.15	2.17	99.66
J-31	火入れ (316)	73.8	19.5	0.75	2.70	0.85	0.15	2.70	100.45
J-32	蓋 (259)	65.6	27.8	1.63	3.24	0.24	0.28	1.54	100.33

(※J-22とJ-26のみガラスビード作成状態が良好でなかったために測定誤差5%以内となっている)

## ②陣山遺跡出土試料の分析結果との対比

ここでは、まず特徴の現れた珪酸・酸化アルミニウム・酸化ナトリウム・酸化鉄・酸化マグネシウムに注目して能茶山窯陶器の可能性が高いサンプルの選び出しを行う。

J32は酸化鉄が少なく、且つ、酸化アルミニウム・酸化ナトリウムが在地の他窯に突出して大きい値を示す。又、県内試料グループの酸化マグネシウム値が尾戸窯の一部を除いて約0.5~1.0と一様に高い値を示すのに対してJ32は0.24と低い。このJ32は器形・胎土ともに関西系陶器として位置付けられたもので、県外産である。在地陶器との対比上から参考までに取り上げたものであるが、その特異性が成分組成上にも現れている。又、酸化マグネシウム値に注目すればJ27・J29も県外産として位置付けることが可能である。次にJ2・J6・J17がやや異なる組成を示す。これらは珪酸・酸化アルミニウム・酸化ナトリウムの値が奈半利窯の胎土グループに類似している。又、J28・J30・J31も特異性を示す。しかし、これらの組成値が奈半利窯グループの分布範囲にはいるものか、県外産のものなのか現時点では判定できない。

これらの確実に県外産と認識できるグループ (J27・29・32) ・奈半利窯試料に共通するグループ

(J2・6・11・17)・特異性を示すが判定し難いグループ(J28・30・31)を除くと残る一群が最も能茶山産(能茶山粘土を用いた尾戸製品も含む可能性もある)である可能性が高い。

J1・J3~5・J7~16・J18~26の酸化アルミニウム・酸化ナトリウムの値に注目すると、酸化アルミニウムが16~23%、酸化ナトリウムが0.03~1.1%の間に存在しており、能茶山西和田窯跡資料と比較すると、全体に似通った割合を示しているものの、一部の値にちらばりが見られる。さらにJ1・J3・J5・J7・J8~10・J12~14・J26の酸化鉄含有量に注目すると、やはり個体ごとのばらつきが見られるが一樣に鉄が多い。各々の酸化鉄含有量の違いに注目すると、多いものでJ9の5.00%とJ10の6.04%、少ないものでJ12・13の3.01%と、その比率にかなりの幅が見られており、発色も含有量の多少により暗灰色から灰色、赤褐色から橙色へと微妙な違いを見せている。しかし、他窯に比較すればこれらは一樣に酸化鉄の多いグループとして捉えることが出来る。そこでここでは、J1・J3~5・J7~16・J18~26を能茶山産(尾戸窯も含む)の可能性が最も高いグループとして認識しておく。

### ③クラスター分析

以上、珪酸・酸化アルミニウム・酸化ナトリウム・酸化鉄・酸化マグネシウムの5主成分に注目し、各サンプルごとの特徴や対比資料との共通性について触れた。しかし不純物を多く含む能茶山粘土は各組成値の個体差が非常に大きく、そのサンプリング誤差による数値のばらつきを考慮すれば、限られた数値データによる対比・分類はやや信頼性を欠く。このため、生産窯推定結果にさらに確実性を加えるために以下、クラスター分析を試みる。

分析は東京学芸大学化学教室の二宮修治氏に依頼した。窯跡出土試料と陣山遺跡出土試料を合わせた62試料のクラスター分析結果は 図2~4に示している。クラスター分析の変数には7主成分元素の数値を用い、又、非類似度を表す間隔尺度としては標準化ユークリッド距離を、クラスタリングの方法にはウォード法を用いている。なお、図2~4に示した併合距離は類似性の尺度であり、併合距離が大きい程、類似度が小さいことを示している。

クラスター分析の結果では、大きく6つのグループに細分化された。Fグループは関西産陶器の一群に対応し、Bグループは奈半利窯の一群をなす。又、D・Eグループは能茶山窯・尾戸窯に対応させることが可能であるが、結果は、不純物の少ない良質粘土からなるDグループと不純物(鉄等)の多いEグループの2クラスターを形成した。Aグループについては、Bグループにより近いが、その位置付けは困難である。又、Cグループについても同様で、試料の個体差に原因するものなのか別グループに属するものなのか現時点では判断出来ない。

以上の結果によれば、J1・3・5・7~9・12~16・18~20・22・24~26・28・30・31が能茶山産の可能性をもつものに分類され、その内J15・16・18~20・25・28・30・31が能茶山良質粘土グループに分類される。又、J2・6・17は先の推定通り奈半利窯グループに、J27・29・32は関西系のグループに分類された。この内、先の推定で最後まで能茶山系か奈半利窯系かの判定がつかなかったJ28・30・31は、クラスター分析では能茶山産資料と同一のクラスターを形成するとの結果が出た。

図2 クラスタ分析の結果 (1) — 窯跡出土30試料

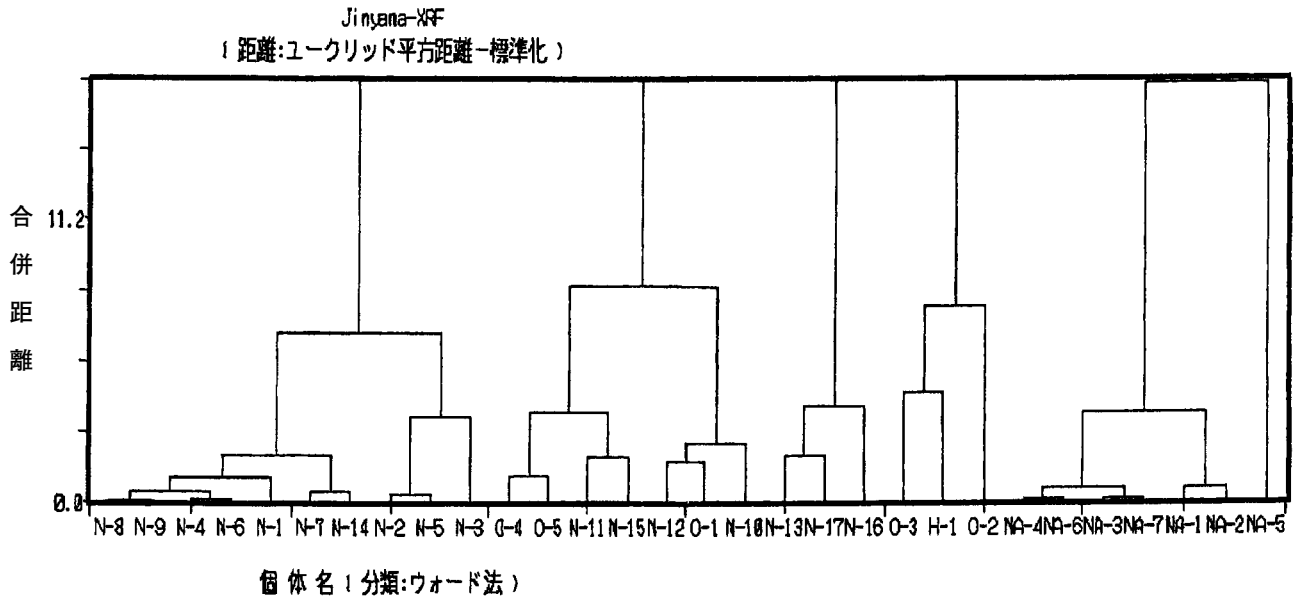


図3 クラスタ分析の結果 (2) — 陣山遺跡出土32試料

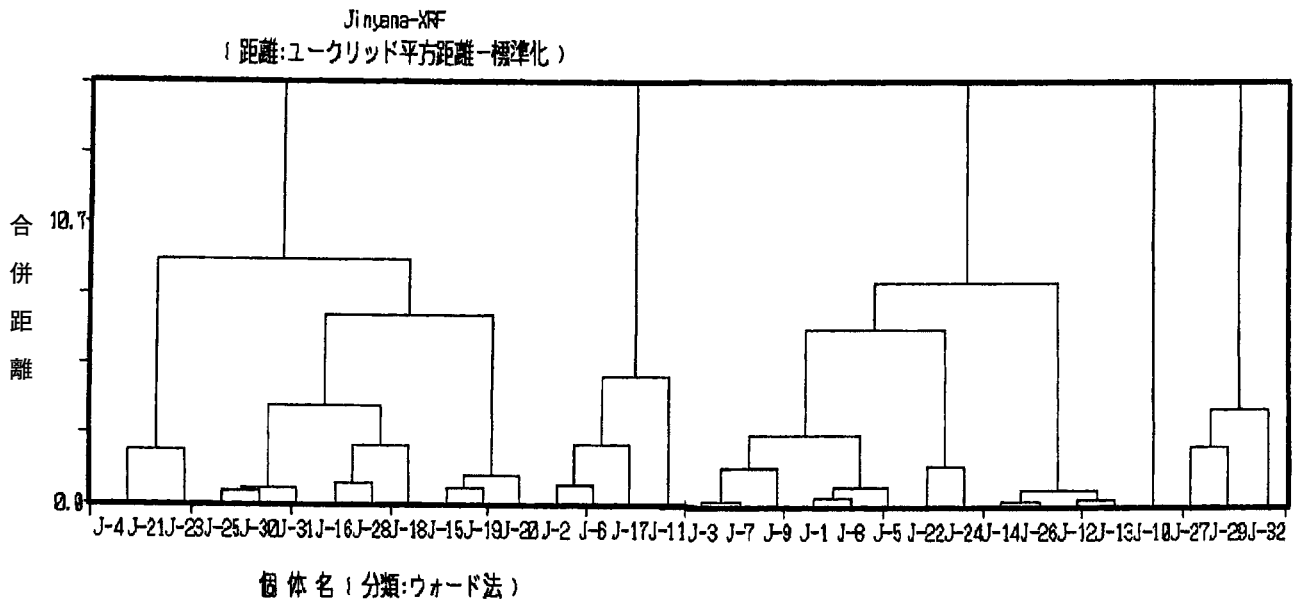
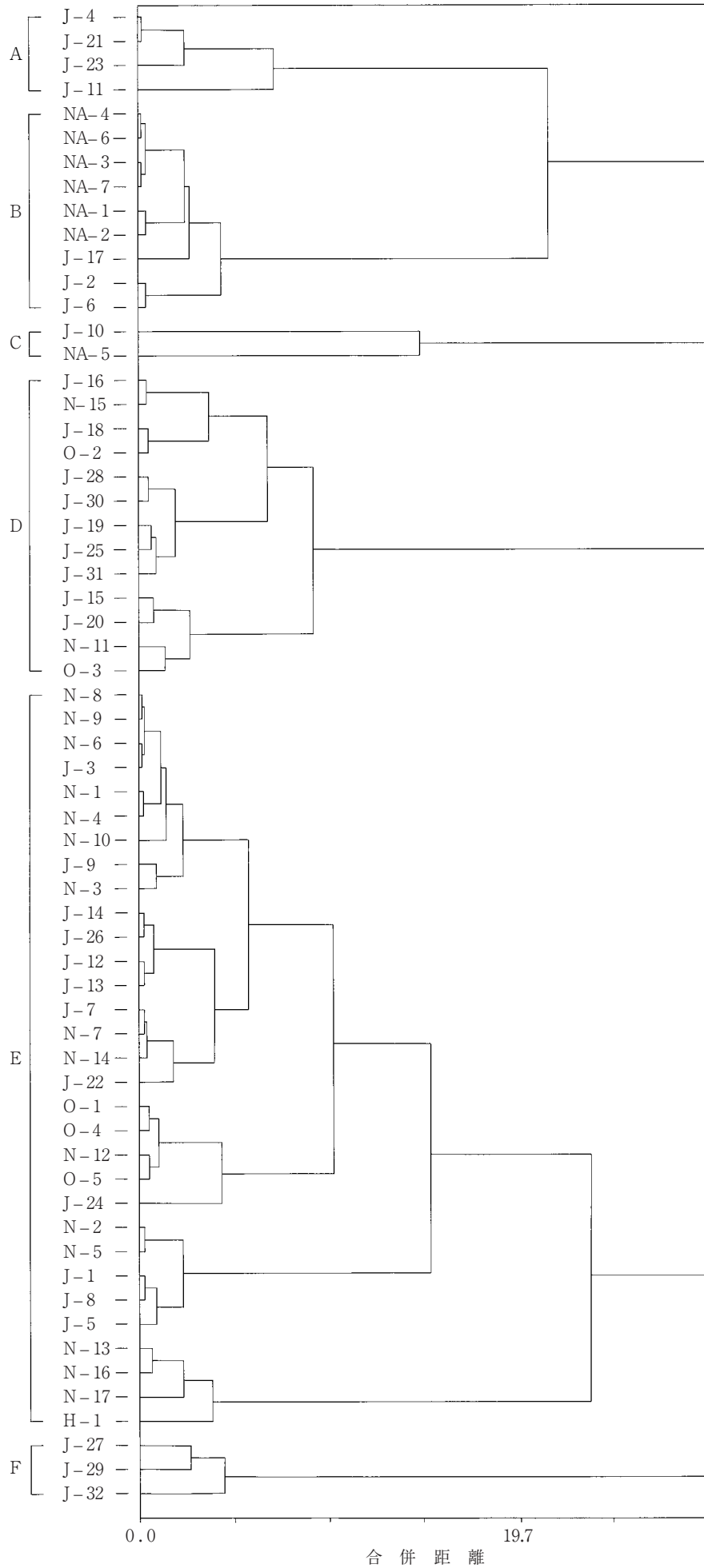


図4 クラスター分析の結果 (3) — 窯跡・陣山遺跡出土62試料



第IV章 考察

#### ④能茶山粘土のX線回析とノルム計算法

ここではさらに、先の蛍光X線分析結果を元にしたノルム計算を試みる。この計算法を用いることにより、元素組成から各試料を構成する鉱物組成を知ることができ、生産窯推定のための新たな情報が得られるものとする。

まず、構成鉱物を明確にするために、能茶山より採取し水簸した粘土を用い、X線回析法による鉱物組成の特定を行っている。その結果、能茶山粘土は石英・粘土鉱物（カオリナイト）・長石類（正長石が主体）が主体を占めることが明らかとなった。そこで、ここではX線回析から結果を得たカオリナイト（ $\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{SiO}_2 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$ ）・石英（ $\text{SiO}_2$ ）と元素組成値から存在が予想される正長石（ $\text{K}_2\text{O} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 6\text{SiO}_2$ ）・曹長石（ $\text{Na}_2\text{O} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 6\text{SiO}_2$ ）・灰長石（ $\text{CaO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3 \cdot 2\text{SiO}_2$ ）・赤鉄鉱（ $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ）・マグネシア（ $\text{MgO}$ ）を構成鉱物として想定し<sup>(14)</sup>、ノルム計算を行った。

なお、粘土は能茶山北側裾に位置する現能茶山谷製陶所周辺の粘土層から採取したものである。粘土層は赤褐色粘土層から白色粘土層にわたる多層からなり、長石礫及び石英砂を多量に含んでいる。試料にはこの内やや良質の白色粘土を用いた。数回の水簸を行う中で粘土中に薄片状の黒色細粒が認められており、これは尾戸窯製品胎土中にしばしば認められるものと同様のものである。

ノルム計算の結果は表7・8に、X線回析データは文末の図6に示す。

表7・8の中でマグネシア値に注目すると、県外産と判定されたJ27・29・32は0.2～0.3%と低いが、それ以外の在地製品は一様に高く例外的なO3を含めても0.3～1.7%の間に分布する。このマグネシア値の高さは高知県中央部の鉱床とも関連した在地産粘土の特質とも考えられ、今後の在地産陶器推定の有効な手掛かりとなり得る。又、奈半利窯試料の一様に高い $\text{Na}_2\text{O}$ 値は曹長石に由来することが明らかとなった。曹長石値は奈半利窯グループに分類されたものでは一様に高く8.4～13.1%の間に分布しており、一方、能茶山窯グループでは全体に低く、例外的なN1を含めても0.04～6.3%の間に分布する。この他、カオリナイトは奈半利窯グループでは23.7～28.5%、能茶山窯グループでは29.0～51.3%の間に分布する。

以上の様な鉱物組成値の分布範囲を概観すると、先にその判定が困難であったJ28・30・31とJ4・10・11・21・23の3鉱物組成値は、ノルム計算の結果では共に能茶山胎土グループの分布範囲内に入る。しかし、釉調・形態等は、J28・30・31は県東部系のものにより類似しており、今後形態分類上の視点をも踏まえた検討が必要であると思われる。これらの結果を踏まえつつ、今後さらに在地産陶器に関する分析値を積み重ね、理化学的・型式学的な多側面からの検討を重ねてゆくことが必要であると考えられる。



表7 ノルム計算結果 窯跡出土分析試料の主要鉱物組成

試料No	カオリナイト	正長石	曹長石	灰長石	長石類・計	石英	赤鉄鉱	マグネシア
N-1	34.5	21.6	6.3	0.8	28.6	33.7	2.2	1.0
N-2	42.5	19.9	1.2	0.8	21.9	29.5	5.2	0.9
N-3	35.9	17.9	3.3	0.8	22.0	36.6	4.7	0.8
N-4	36.3	21.2	4.2	0.7	26.2	32.5	4.1	0.9
N-5	42.6	20.5	1.1	0.7	22.3	29.3	5.0	0.8
N-6	36.5	21.1	2.6	0.7	24.5	34.2	4.0	0.9
N-7	36.0	21.1	1.9	0.7	23.7	35.4	3.9	1.0
N-8	38.1	20.7	1.6	0.7	23.0	34.1	3.9	0.9
N-9	37.6	20.5	1.4	0.7	22.6	35.0	3.9	0.9
N-10	40.0	21.5	3.6	0.9	26.0	30.0	3.2	0.8
N-11	40.6	17.5	0.3	0.6	18.4	38.5	2.0	0.6
N-12	39.7	19.2	0.0	1.0	20.2	37.0	2.3	0.7
N-13	51.3	17.9	0.3	0.9	19.2	25.3	3.0	0.7
N-14	38.6	20.4	0.0	0.7	21.1	36.2	3.0	1.0
N-15	32.4	19.5	2.0	0.6	22.1	42.9	2.0	0.7
N-16	49.6	20.4	0.0	1.1	21.5	25.4	2.8	0.7
N-17	51.2	17.9	2.2	0.8	21.0	25.9	1.4	0.6
O-1	38.5	21.7	0.7	0.9	23.3	35.8	1.6	0.8
O-2	33.4	16.0	0.0	0.5	16.5	48.5	1.2	0.5
O-3	40.4	15.5	1.4	0.8	17.7	39.7	1.9	0.3
O-4	37.5	22.2	0.0	0.7	22.8	37.1	1.8	0.8
O-5	37.6	20.5	0.0	0.8	21.2	37.9	2.6	0.7
NA-1	24.7	17.8	8.4	0.9	27.1	45.9	1.7	0.6
NA-2	25.2	18.9	10.7	0.8	30.4	42.0	1.8	0.6
NA-3	28.5	20.0	9.3	1.0	30.3	38.5	2.0	0.7
NA-4	28.4	19.7	10.3	0.9	30.9	38.0	1.9	0.8
NA-5	27.1	19.4	9.8	0.9	30.2	39.2	1.9	1.7
NA-6	27.6	19.4	10.3	1.0	30.7	39.0	1.9	0.7
NA-7	27.8	19.6	10.3	1.1	30.9	38.7	2.0	0.7
H-1	45.9	19.6	1.3	0.6	18.8	31.2	3.6	0.5

### 3. 能茶山陶器窯製品の特特定と、その胎土特質

前項までの組成分析の結果から、陣山遺跡出土Nタイプ陶片は当初の予想通り、成分組成に能茶山西和田窯跡出土陶片との共通点が見られることが明らかになった。このNタイプの胎土特徴をもつグループは、鉄釉を中心とした施釉上の特徴にも西和田窯跡資料との共通性を持ち、中には同じ形態を持つ器種も多く含まれている。こうしたことから能茶山窯産である可能性が最も強いものといえる。

しかし、製品が陣山遺跡に廃棄された可能性を僅かでも含む県内の陶器窯には、今回対比資料としてサンプルが得られなかったものがある。これらのデータが欠けているため、Nタイプの元素組成上の特徴が能茶山粘土独自のものかどうかは、今回の分析結果のみでは断定できない。そのため、ここではさらに文献や地質研究成果の側面にも触れながら、能茶山粘土の特徴・特異性を明らかにし、Nタイプの胎土特徴が能茶山独自のものなのかについて再検討し、補足したい。

ここではまず、陣山遺跡出土陶器群と時期的に一致する可能性を持ち且つ分析試料が得られなかった赤野窯・内原野窯・安田窯・田野窯について、その胎土や陶器製作上の特徴に触れ、Nタイプ陶器との共通性を持つものがないか比較検討する。これらの窯のうち田野窯は「上手」の製品を製作していたことが文献上<sup>(15)</sup>にも記録されており、日用雑器で占めるN-a陶器群とはやや性質が異なるものと思われる。対して内原野窯・安田窯は日用雑器を主に製作していたもので、これらの分析サンプルが得られなかったことが惜しまれる。ただ、今回高知県工業技術センターの協力により、現在の内原

表8 ノルム計算結果 陣山遺跡出土分析試料の主要鉱物組成

試料No	カオリンナイト	正長石	曹長石	灰長石	長石類・計	石英	赤鉄鉱	マグネシア
J-1	39.2	23.3	1.0	0.7	25.0	30.6	4.3	0.9
J-2	23.7	23.2	13.1	1.3	37.6	36.3	1.8	0.6
J-3	37.3	20.9	1.7	0.7	23.3	34.5	4.0	1.0
J-4	38.1	14.2	2.7	1.1	18.0	40.4	2.8	0.5
J-5	39.1	25.9	0.7	0.7	27.3	27.9	4.6	1.0
J-6	26.7	20.1	12.0	1.2	33.3	36.8	2.6	0.6
J-7	37.3	20.8	2.0	0.6	23.3	34.8	3.5	1.1
J-8	39.4	22.1	1.4	0.9	24.3	30.5	4.9	0.9
J-9	34.3	21.4	0.9	0.8	23.2	36.7	5.0	0.8
J-10	34.3	15.4	1.1	1.6	18.2	40.0	6.0	1.5
J-11	29.6	18.2	9.4	1.6	29.2	35.9	4.6	0.7
J-12	33.0	20.4	1.6	0.7	22.7	40.3	3.0	0.9
J-13	36.6	19.6	0.8	0.6	21.1	38.5	3.0	0.9
J-14	33.9	18.5	1.9	0.7	21.1	40.8	3.5	0.8
J-15	40.8	12.0	0.3	0.6	12.9	43.7	2.0	0.7
J-16	29.0	19.1	2.8	0.6	22.6	46.1	1.7	0.6
J-17	27.6	15.1	11.2	1.2	27.5	42.0	2.2	0.7
J-18	30.1	14.6	0.8	0.6	15.9	52.1	1.4	0.4
J-19	38.5	14.8	2.1	0.7	17.6	40.8	2.3	0.8
J-20	45.4	13.1	0.4	0.5	14.1	38.4	1.5	0.6
J-21	38.0	14.3	2.9	1.2	18.3	40.3	2.8	0.5
J-22	40.3	21.4	3.0	0.8	25.2	31.5	1.9	1.1
J-23	30.5	14.2	2.8	1.4	18.4	47.5	3.1	0.5
J-24	39.2	24.1	1.4	1.2	26.8	30.6	2.5	1.0
J-25	33.7	14.4	3.8	0.5	18.8	44.3	2.5	0.8
J-26	35.7	18.1	3.0	0.7	21.9	39.2	2.4	0.9
J-27	49.2	24.1	6.8	1.7	32.6	16.5	1.5	0.3
J-28	29.8	17.1	6.7	0.7	24.6	43.6	1.5	0.6
J-29	43.2	23.7	6.0	1.3	31.0	24.6	1.0	0.2
J-30	33.2	15.4	5.3	0.7	21.4	42.6	2.2	0.6
J-31	32.7	15.9	6.3	0.7	22.9	40.8	2.7	0.8
J-32	45.8	19.1	13.7	1.4	34.2	18.2	1.5	0.2

野窯周辺と安田地区近辺の粘土の成分組成データ（16）が得られたので、これらの資料を文末に提示し、赤野・内原野・安田各窯の胎土特徴の傾向を知る手がかりとしたい。又、分析試料は得られなかったものの、安芸市立歴史民俗資料館所蔵の内原野窯陶片の胎土観察を行うことが出来た。各陶片は僅かに透明感をもつ灰白色～黄灰色の胎土で、剥離面の様子や含有鉱物の種類・形状ともに奈半利窯陶器の胎土と酷似している。以上のことから、内原野から奈半利一帯の県東部窯の製品胎土は観察上の特徴・成分組成ともに共通するグループにまとめることができる。他に内原野窯製品の製作上の特徴として、鉄釉の蛇の目釉剥ぎ小皿・台付灯明皿等の器種に能茶山陶器と類似したものが見られるが、口縁部形態・高台の作り等に能茶山窯との違いが認められる。

次に能茶山窯関係の文献史料について見ると、この能茶山の土石について、『陶山紀事』（17）に「黄なる小石に微赤を孕みたるあり、能茶山土の間より出るを上とす、細末にして水飛し、土焼の器に塗て焼けばさび色となる、古備前焼にも劣らぬ色あり、」との記載があり、当時能茶山から得られる鉄分の多い石を釉として利用していたことがわかる。この様に、能茶山には粘土層に鉄分の多い石が含まれていたことが文献にも記されており、成分組成上の鉄含有量の多さを能茶山粘土の特徴として、文献史料からも裏付けることが出来る。

この能茶山を地質面から検討すると次のようになる。<sup>(18)</sup> 「○地質 基盤は古生層で、砂岩・珪岩より構成される。山の東西両端にわずかに露出する。更新世形成層はほぼ水平成層し、石英・長石

類の砂及び砂質粘土よりなる。○鉢床 能茶山は高さ約23m面積57000m<sup>2</sup>の小丘で、粘土層は最下部が濃い灰色層、その上層が灰色層、最上部に淡褐色層があり、何れも砂質である。最上部は大粒の礫を含む。かつては尾戸焼の土として使用されたが、現在は良質の粘土は殆ど採掘され、現在使用している粘土は礫が多いものである。」このように粘土層が鉄を多く含んだ灰色層であること、石英・長石を含む砂質粘土であることなどがN-a胎土の特徴と一致している。

さらに能茶山の地質図<sup>(19)</sup>を見ると、粘土は山のスポットにより良質粘土と不良粘土に分かれている。この様に、能茶山には多種粘土採取地点があったことが、地質面からも読み取れる。おそらく、尾戸窯陶器やN-bタイプ能茶山窯陶器の胎土に良質粘土が使用されたのに対して、N-aタイプの陶器群は鉄分が多い不良粘土を用い、雑器製作に充てたものと予想される。

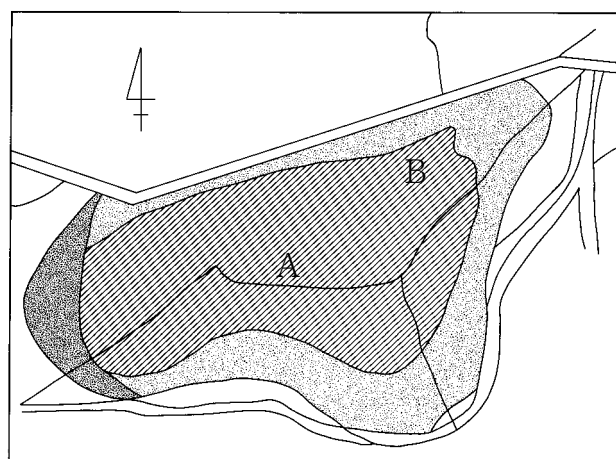


図5 高知市鴨部能茶山付近の地質

- 古生層 (砂岩・珪岩)
- ▨ 良質砂質粘土
- ░ 不良質砂質粘土

このように、Nタイプの胎土特徴が能茶山の地質とも一致し、又、能茶山粘土の特質が県内の他地域と比較しても特異性を示すことが窺われる。以上の点から、Nタイプの胎土特徴を示す遺物群を能茶山窯産としてほぼ特定してよいものとする。

最後に、能茶山窯産であるとほぼ特定出来た陶器片の図版番号と器種を表9に示す。実測可能な陶器片中、胎土分析・胎土観察によりNタイプの能茶山窯産陶器として特定されたものは54点である。

表9 陣山遺跡一括廃棄遺物中に見るNタイプ陶器の器種と図版番号

1.供膳具	中碗 207	小皿 212~224	・図版なし3点		
2.調理具	行平鍋 246~250	・図版なし3点	土鍋 243・245	・図版なし2点	
	片口・こね鉢 239・240	・図版なし2点	土瓶・急須 252・253・257・263	爛徳利 271・278	
3.貯蔵具	瓶 280・285~291	水注 265	徳利 266~268	壺・甕 283・293・294・296・303	・図版なし2点
4.火具	火鉢 322・323				
5.灯火具	台付灯明皿 311・312				
6.その他	火入れ 317・318	餌鉢 229	・図版なし2点	蓋 241 埴塙 292 器種不明 図版なし2点	
				計 71点	

実測図として挙げられなかったものの点数を加えるとNタイプ陶器の個体数は合計71点となり、陣山遺跡一括廃棄遺物・陶器の全個体数146点のうちに占める割合は49%になる。今回判定を保留した能茶山産の可能性を含む陶器の点数も考慮するとその比率はさらに高まるものと考えられる。

併せて、今回の分析により明らかとなった能茶山陶片の胎土特質についても若干触れておきたい。今次分析結果では、能茶山陶器に認められる胎土観察上の著しい個体差、すなわち発色上の違いは能茶山粘土層の採取地点間の鉄含有量の違いによるものであることが明らかとなった。又、この他にこれらの胎土に一定して認められる石英及び長石砂粒の形状及び著しい砂粒含有量も能茶山窯陶器の胎土を特徴付けるものとして位置付けることが出来た。これらの特徴は、粘土採取地を同一にしながらも鉄含有率が低く含有鉄物量の少ない尾戸窯製品とは非常に対照的である。これは、尾戸製品においては非常に厳密な粘土の精選と水簸が行われたことを示しているが、ここからも両製品のもつ性格的な違いが見てとれる。こうした能茶山窯陶器の胎土特徴は、日用雑器窯としての性格を強くもつ能茶山窯の生産者が、土佐領内の市場において19世紀以前まで優位を占めてきた他国製品との競合に勝つ一つの手段として、より安価な製品の生産を目指し、粘土資源の効率的利用・生産工程の簡略化による徹底した低コスト化・大量生産を実現させた結果とも捉えることが出来る。

さらに、同一の能茶山窯製品中においても、鉄分の多い不良粘土による製品と鉄分の少ない良質粘土を用いた製品とを比較すると、成形・調整・装飾技法ともに後者がやや上質であり、原料による意図的な製品のランク付けがあったものと予想される。この様に、能茶山諸窯では製品ランクに応じて原料の選択から生産に至るまでの全工程が二元化されており、終始、目的（販売対象・器種の性格等）に応じた生産工程が組み立てられていたものと考えられる。

なお、以上の諸特徴を踏まえながら、参考までに19世紀中葉段階での能茶山の各窯の位置関係について触れておきたい。伊東正統・丸山和夫諸氏の研究を元に、幕末までに能茶山で操業された各窯の位置を図2に加えておく。図の上では、A地点に藩の磁器窯と陶器窯が、又、B地点に当たる山の北斜面は文政4年に開窯した新助・九内の陶器窯が位置していたが、安政年間には足達専次が引き継いでいる。陣山遺跡出土の能茶山陶器群の生産には、このうち北側の足達専次の窯と藩の陶器窯が関わっていたものと考えられる。

#### 4. おわりに

今回の報告においては、陶片素地の生産地推定において近年著しい研究成果を挙げている化学分析の手法を用いて、これまでに課題が山積されていた能茶山陶器窯の製品抽出を試みた。資料数の不足から今回その位置付けを保留せざるを得なかった数点の資料が残されたが、製品の用途・性格に応じて多様な外観をみせる能茶山製品の胎土特質を考慮すれば、今後、分析データをさらに蓄積すると共に、併せて考古学的見地からの系統的な分析を積み重ねることが必要と考えられる。又現在、県内の各遺跡より出土する陶片には、旧来より京焼き風陶器として注目されてきた尾戸窯製品を初めとして、出自不明な多くの在地陶器窯製品が混在しており、在地陶器窯製品の特定と編年の研究において多くの課題を残している。今後の、自然科学的手法・考古学的手法を含む多側面よりの研究の集積が望まれる。

## 謝辞

今回の報告に際しては、県外産陶磁器の鑑識について大橋康二（佐賀県教育庁文化財課）・中野泰裕（愛知県立陶磁資料館）、在地窯の調査について門田由紀（安芸市立歴史民俗資料館）・西村昇（宿毛市平田）・土居庄次（能茶山土居陶器製造所）・谷安雄（能茶山谷製陶所）、組成分析について白石純（岡山理科大学自然科学研究所）諸氏より数々の御教示を頂いた。又、今回の組成分析及び組成分析値の解析に当たられた、山本順（高知県工業技術センター）・二宮修治（東京学芸大学化学教室）両氏よりは、貴重な時間をさいての多くの援助・御教示を賜った。以上の方々の御厚意に対し記して感謝の意を表したい。

## 註

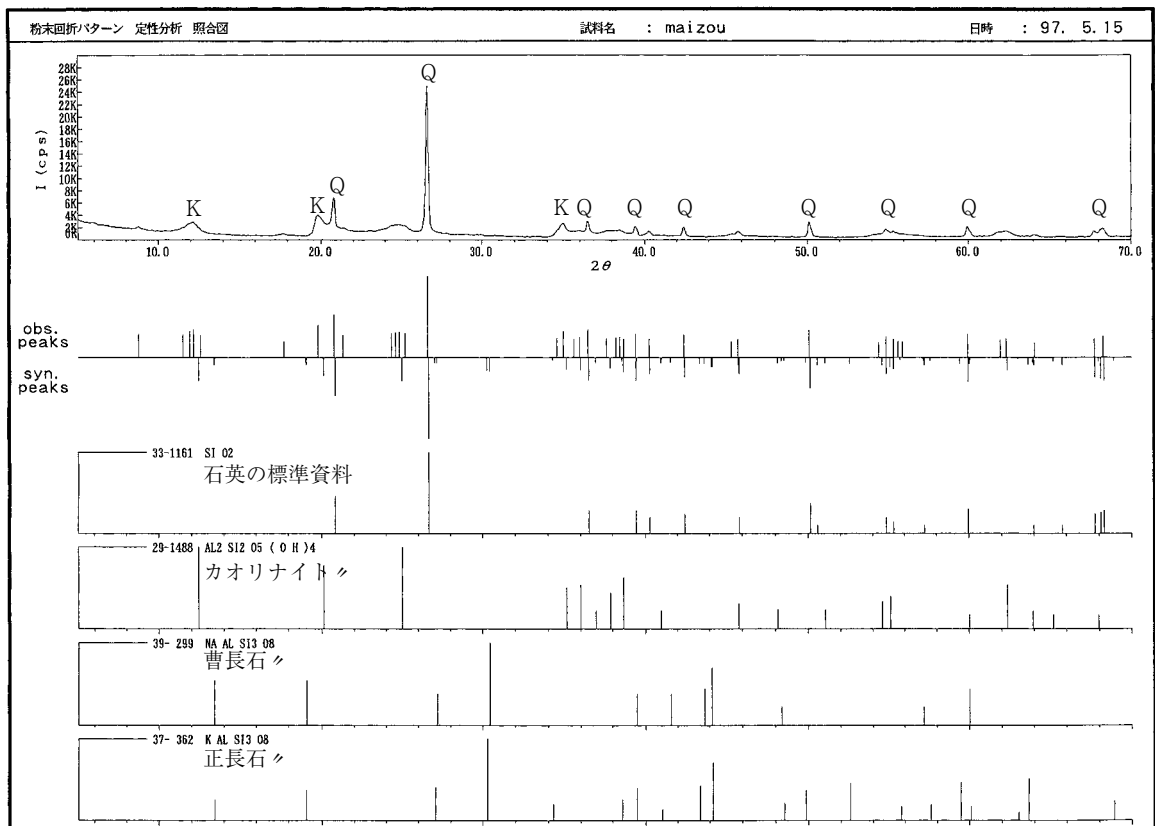
- 1) 丸山和夫『土佐の陶磁』1973年・伊東正統『能茶山と土佐の陶工たち』1973年他
- 2) 森田尚宏・松田直則『能茶山遺跡概報』1992年高知県埋蔵文化財センター
- 3) ※西和田窯は、西和田久三郎(大正12年没)が操業したものである。久三郎は当初大津の加古陶器窯に従事していたが、明治10年の加古窯の磁器製造開始に伴って能茶山に移り、土居窯に従事している。久三郎はその後独立して西和田窯を開いており、明治末から大正頃には窯数12を数え、最盛期を迎えている。
- 4) 個体数は、基本的には口縁部点数から算出する方法を採用した。しかし、本遺跡の一括廃棄遺物では、特に甕・瓶・鍋等の大型製品を意図的に細かく碎き廃棄した傾向が見られており、従来の口縁部計測法では各器種間の算定条件を一定にすることが出来ない。このため、複数の口縁部破片でも形態・釉調・調整痕・胎土特徴等から同一個体と特定できるものは1個体として数えた。
- 5) 県外産陶器の抽出については大橋康二氏（佐賀県教育庁文化財課）、中野泰裕氏（愛知県立陶磁資料館）に鑑識を依頼した。
- 6) 鉱物の粒度区分は土壌学区分によっており、1mm以上を礫、200 $\mu$ m～2mmを粗砂、20 $\mu$ m～200 $\mu$ mを細砂、2 $\mu$ m～20 $\mu$ mをシルト、2 $\mu$ m以下を粘土と表記した。
- 7) 素木洋一『陶芸のための科学』1973年  
※酸化焼成の場合、焼成色の白い粘土は酸化第二鉄の含有量が1%以下、淡黄色から黄色に発色する粘土では1%から4%、赤色に発色する粘土では4%から7%の間になる。還元焼成の場合、酸化第二鉄が4%以上含まれると暗灰色から青色になる。粘土の焼成色に影響を与えるものには、酸化鉄の他に酸化チタンがあるが、陣山遺跡出土資料・能茶山窯資料とも酸化チタンが0.01%未満であった。
- 8) 丸山和夫氏寄贈。尾戸窯跡表採資料。
- 9) 奈半利町教育委員会寄贈。奈半利窯跡表採資料。
- 10) 西村昇氏寄贈。河川工事の折に、平田窯に面する川底から窯道具と共にまとまって出土したという陶器群の内の1点を寄贈頂いた。窯道具はトチン・足付ハマ・タコハマである。
- 11) 各窯の操業時期は伊東正統氏の「土佐尾戸・能茶山年譜」『能茶山と土佐の陶工たち』を参考とした。
- 12) 加古窯は合成コバルトを用いた陶胎染付が代表的であるが、当遺跡一括資料には磁器・陶器ともに合成コバルトを用いた遺物は1点も含まれていない。
- 13) 従来から元素組成値の定量に用いられてきた方法で、定量値の精度に優れている。一方、測定には多くの時間を要するため、今回は測定試料点数を限定させている。

- 14) MgOより想定される岩石・鉱物には、輝石・かんらん石・蛇紋岩・緑泥岩・黒雲母等が挙げられるが、今回のX線回析ではそれらに直接関連するデータが得られなかったため、マグネシアとして取り扱っている。なお、高知県中央部の鉱床には蛇紋岩が存在しておりそれに関連する風化鉱物が粘土層中に混入している可能性が高い。
- 又、本来ならば奈半利窯他のX線回析も併せて行わなければならない所だが、これまでに集積された県内の粘土データからカオリナイトその他の鉱物想定で問題がないと捉え、同条件でのノルム計算を行っている。
- 15) ※『燧袋』に「文政五年六月十一日、田野陶器細工見物、是は当浦みとり屋松丞存立て、上方の細工人やとひ入、土焼を拵る、甚だ見事也、安田焼は甚だ下手也」とあり、当時の作風が窺われる。(丸山和夫『土佐の陶磁』より引用)
- 16) 『高知県工業試験場研究報告第2号』1968年高知県工業試験場  
 ※今回窯跡資料が得られなかったもののうち、内原野窯については、工業技術センターによって内原野付近の粘土の科学組成データが得られている。その組成は次の通りである。〔原土〕SiO<sub>2</sub>:75.54%、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>:14.02%、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>:3.48%、CaO:1.00%、MgO:0.51%、I<sub>gloss</sub>:4.78% 〔水簸粘土〕SiO<sub>2</sub>:64.02%、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>:19.58%、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>:3.24%、CaO:0.43%、MgO:0.63%、I<sub>gloss</sub>:9.97%
- 17) 『陶山紀事』天保10年(1839)(丸山和夫『土佐の陶磁』より引用)
- 18) 今井清方 編「高知県の粘土資源について」『高知県工業試験場研究報告第2号』1968年高知県工業試験場
- 19) 同上より引用した図に、今回一部を加筆したものである。そのため周辺の道路事情等が現在と若干異なっている。

#### 参考文献

- 伊東正統『能茶山と土佐の陶工たち』1973年高知高専研究報告第1号
- 丸山和夫『土佐の陶磁』1973年雄山閣出版
- 丸山和夫「近世土佐の茶道と焼物」『高知の研究4』清文堂出版
- 宅間一之・岡本健児・伊東正統『鹿児島窯跡』1981年高知市教育委員会
- 岡本健児「奈半利焼」『奈半利町史』奈半利町教育委員会
- 竹村三菜「高知県の近世陶磁器について」1995年高知県埋蔵文化財センター 未発表
- 二宮修二・那須悦子・高橋孝一郎・網干守・大橋康二・佐藤浩司  
 「放射化分析による京町遺跡出土陶磁器の生産地推定」『京町遺跡3』1994年北九州市埋蔵文化財調査室
- 今井清方 編「高知県の粘土資源について」『高知県工業試験場研究報告第2号』1968年高知県工業試験場
- 山本順 他『日本の窯業原料』1992年工業技術連絡会議窯業連合部会
- 東村武信『考古学と物理化学』1990年学生社
- 井上克弘「粘土鉱物分析法」『第四紀試料分析法』1993年東京大学出版会
- 成瀬敏郎「石英粒子表面分析法」同上
- 芳村俊一『陶土の探求』1988年光芸出版
- 大西政太郎『陶工の技術』1988年理工学社
- 素木洋一『陶芸のための科学』1973年 建設総合資料社

図6 能茶山水簾粘土のX線回折



(註) 図中のKはカオリナイトのピークを、Qは石英のピークを示す。

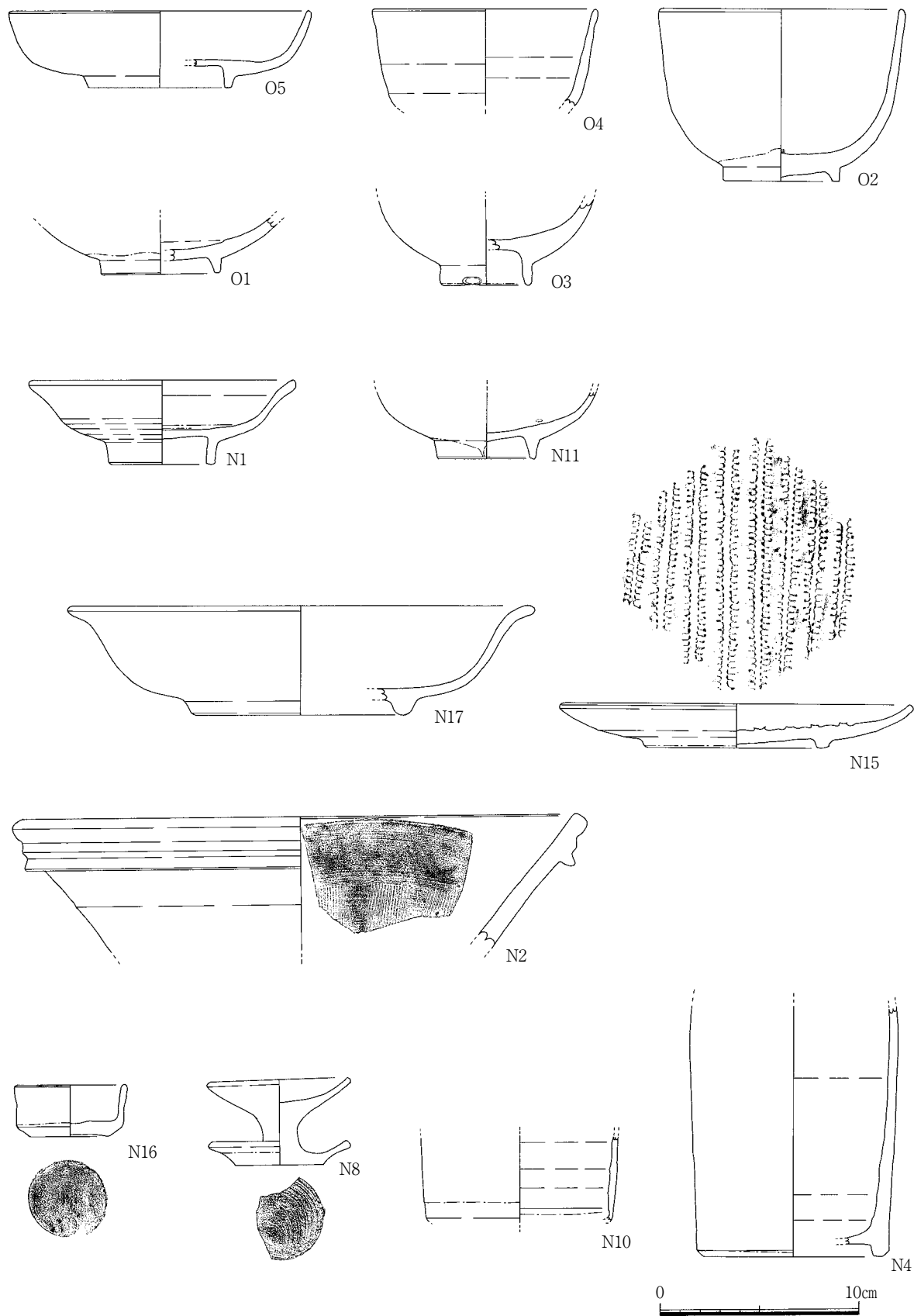


Fig.65 窯跡出土資料実測図 (1)



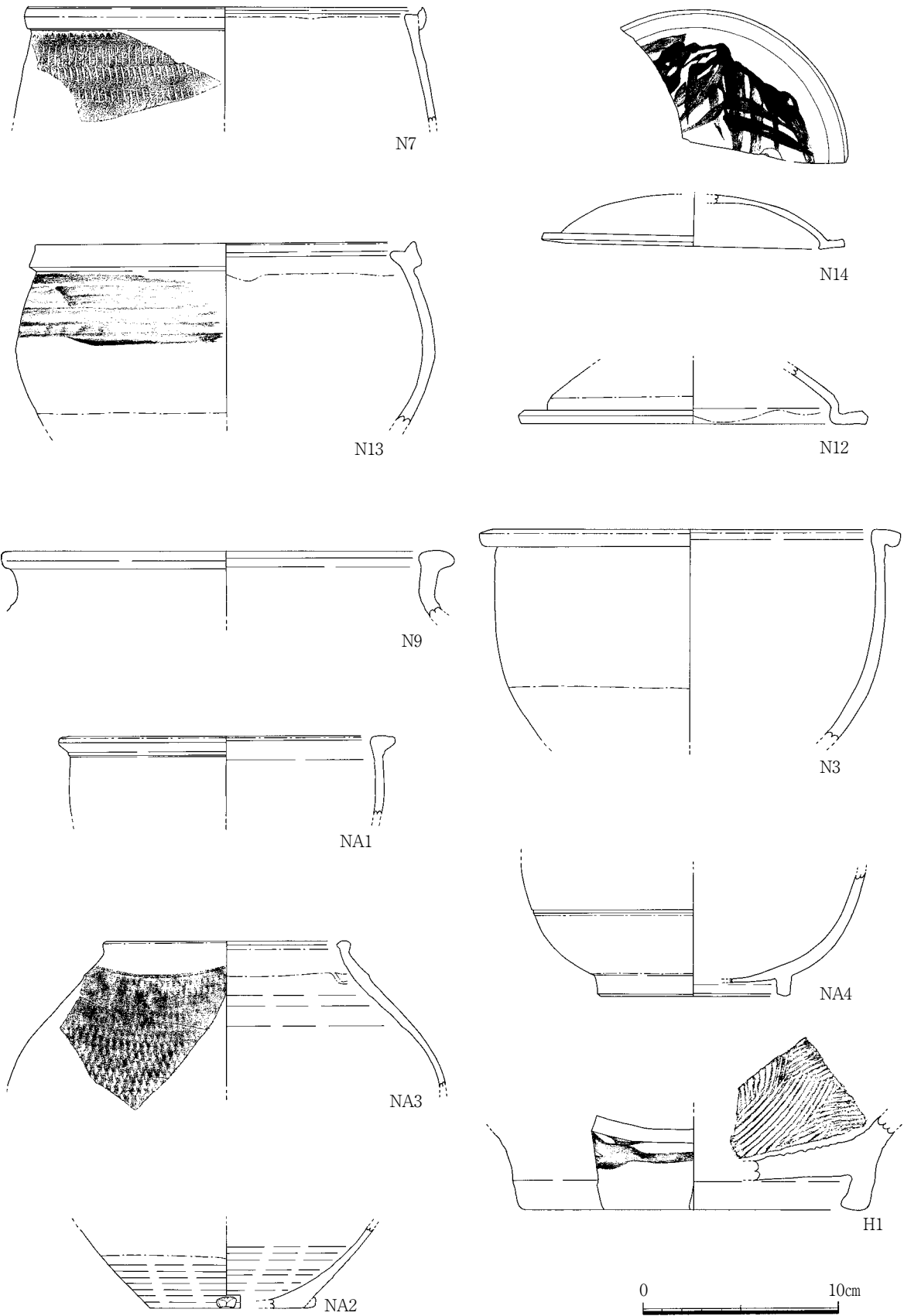


Fig.66 窯跡出土資料実測図 (2)

### 第3節 陣山遺跡出土近世陶磁器の検討

—土佐、地方郷土階級の陶磁器消費実態と在地製品の普及—

#### 1. はじめに

今回の陣山遺跡Ⅰ区の調査では、7基の廃棄土坑及び遺構廃棄に伴い埋め戻された土坑・池・溝から口縁部点数にして483点の近世陶磁器を含む多数の遺物が出土した。これらはすでに触れたように、当調査区の西に接した郷土屋敷の移転・片付け跡に伴う一括廃棄遺物<sup>①</sup>として位置付けられるものであり、当時の地方郷土の生活実態を伝える貴重な遺物資料である。そこで本論では、まず、先の組成分析によって在地能茶山窯の胎土特徴もつとされた陶器群を中心に、在地産陶器の形式学的分類と器種組成の検討を行う。さらには、商品流通を含めた総合的視点から、地方郷土階級の陶磁器消費の実態、及び19世紀中葉段階における長岡地域での陶磁器普及の一側面について若干の歴史的考察を試みたい。

#### 2. 在地産陶器にみる形態的特徴と形態分類

ここでは、検討対象を陣山遺跡Ⅰ区的全遺構及び包含層Ⅱ層・Ⅲ層にまで広げ、出土陶器の形態分類を行う。長岡地域に普及した近世後期の陶磁器類についてはすでに小籠遺跡出土一括廃棄資料の詳細な形態分類(藤方1997)が為されているため、重複する部分を割愛し、特に今日まで不明な点の多かった在地産陶器、なかでも今回一定の出土点数が得られた供膳具・調理具の内から皿・鉢に注目した。分類においては前項での自然科学的手法から得られた生産窯推定結果も加味しながら述べていくこととする。

##### (1) 皿の形態分類

供膳具では、陶器碗・皿が出土しているが、瀬戸・美濃産の陶胎染付広東形碗(205・206)、灰釉に緑釉を流し掛けする信楽産の端反形小碗(208~210)を除けば、残る在地産陶器碗の出土数は灰釉広東形碗(207)1点と非常に少ない。そのため、ここでは比較的多くの出土が見られた皿を取り上げ、その形態分類を行う。一括廃棄遺物中には生産地不明の鉄釉陽刻輪花形小皿・灰釉波縁小皿が出土しているが、その他は在地産として位置付けられるものである。これら在地産陶器皿の諸特徴を法量ごとに述べると次のようになる。

A) 陶器大皿・・・出土したものは211のみである。

口径26.4cm。口縁部に向かい丸みをもちながら外上方に立ち上がる。高台は蛇の目凹方高台となる。高台は断面四角形を呈し、畳付はほぼ平坦であるが畳付両隅が丸味をもつ。成形後は全面に丁寧なナデを施し工具による削り痕を残さない。見込は蛇の目釉剥ぎ。内面に呉須による文様を描き、内外面に透明釉を施釉する。高台は蛇の目凹型高台の形態をとり、高台内及び畳付は無釉である。

B) 陶器小皿・・・口径は5cm前後。鉄釉を施釉するものが主体をなすが、一部、透明釉のもの(42・214)も存在する。高台及び外面下半は無釉。見込は蛇の目釉剥ぎし、白化粧土を刷毛塗りするものが一般的である。調整痕に関して見ると、その殆どが外面下半に鉋状工具によるとみられる鋭

い削り痕を残し、削り成形後のナデ調整は認められない。しかし、42についてのみ唯一器面のナデが認められ高台は滑らかな印象となる。

能茶山磁器が共伴する1820年代以降の各集落遺跡ではこの釉剥ぎ小皿が一様にかんりの出土数をみせており<sup>(2)</sup>、このことから、このタイプの小皿が当時全階層に広く普及していたものと捉えられる。そこで、以下、この蛇の目釉剥ぎ小皿に注目しその形態分類を行いたい。蛇の目釉剥ぎ小皿は形態により、以下の3種に分類される。

A類・丸味をもつ体部から、口縁が上方へ立ち上がるもの (221・222)

B類・僅かに外反気味の気配をみせながらも、およそ外上方へ直線的に立ち上がるもの (42・43・219)

C類・口縁の外反の傾向が強まり、端反形の形態をとるもの (218・220)

又、高台の形態も以下の3種に分類される。

a類・畳付幅が広く断面四角形を呈するもの (223)

b類・畳付幅が狭く断面三角形を呈するもの (42・43・214・215・216・219・224)

c類・断面四角形であるが断面幅が狭く且つ畳付両隅を鋭く削り取り接地面を小さくするもの (212・213・217・218)

この他、高台内の削り込みに関しては、高台内側の削り込みが外側よりも深いもの・浅いもの又は、さらに高台内の形状では兜巾状になるもの・平らであるものなどの諸特徴が見られる。又、A・B類口縁を呈するものには中位に沈線を巡らすもの (221・222) もみられる。

以下、蛇の目釉剥ぎ小皿の出土が認められる包含層Ⅱ層出土遺物・遺構出土一括廃棄遺物中の形態別出土点数を表1に示す。それによると今次資料においては、各口縁部形態毎にA類16%・B類58%・C類26%、高台形態においてはa類6%・b類65%・c類29%の出土比率をみせている。又、本遺跡では完形に近い破片の出土数は僅かで口縁部と高台の形態の組み合わせを掴むことは困難であるが、表1の結果からはB類口縁にb類高台が、C類口縁にc類高台が組み合わさる傾向がみられる。又、A類口縁は出土数が少なくその高台形態を確認出来なかったが、A・B類口縁を呈するものの中位に一条の沈線を巡らす例が多い。

以上、皿の形態・手法について述べたが、この内42と211は先の化学分析の結果、能茶山窯以外の在地窯（県東部の可能性あり）の胎土特徴を示したものであり、先に述べた様に高台形態や調整痕等に特異性を示している。一方、その他は何れも能茶山産の胎土特徴をもつものであった。

表1 一括破棄遺物及び包含層Ⅱ層出土遺物にみる蛇の目釉剥ぎ小皿の形態別出土点数  
(点数は接合前出土口縁部点数と高台数・括弧内は沈線を巡らすタイプの点数)

底部\口縁部	A類	B類	C類	口縁部無し	計
a類				1	1
b類		3		8	11
c類			1	4	5
底部無し	3	8	4		13
計	3 (3)	11 (5)	5 (0)	13	

## (2) 鉢

調理具は先の小皿の様な一定量の出土数が得られていないが、調理用鉢（こね鉢・片口鉢）は口縁部形態による一定のグループ分けが可能であったため、簡単に提示しておきたい。

I類・口縁部がほぼ直角に外折するもので、口縁の断面形態は四角形を呈するもの。

II類・口唇部を外方へ拡張させたもので、口縁の断面形態は全体に丸味をもつもの。

何れも内外面に鉄釉を施釉するが、II類には口唇部を釉剥ぎするものもある。両者に関してFig.66の窯出土資料を参照すると、能茶山窯出土の鉢（N3）がI類に、奈半利窯出土の鉢（NA1）がII類に一致している。（今回図示できなかった他の窯出土鉢に関しても同様である。）又、先の胎土分析結果を参照しても、やはりI類が能茶山窯産、II類が県東部系との同様の結果を示している。

以上、不十分ではあるが、在地産陶器2器種についてその形態・手法上の特徴を提示した。明治期以降にみられる他遺跡出土の蛇の目釉剥ぎ小皿は口縁部の端反度がさらに強まる傾向が認められるため、今回分類されたものも各形態間の時間的な推移を追いそうであったが、出土状況・資料数の不足等の理由から、現時点での出土状況を示すに留める。今後の良好な出土資料の蓄積を待ちたい。

## 3. 一括廃棄遺物中にみる器種組成と地方郷土階級の陶磁器消費実態

以上、出土陶器の形態上の諸特徴と時間的位置付けについて述べてきた。ここからは、一括廃棄遺物中に含まれる陶磁器類の器種組成を明らかにし、19世紀における地方郷土階級の陶磁器消費実態に触れたい。

まず、得られた結果を元に以下検討するに当たり、まずはこれら遺物群の持つ社会的・経済的背景について再確認しておく必要があると思われる。これら遺物の所有者である郷土細木氏は18世紀後半に郷土株を買い受けた「譲り受け郷土」であり、当時比較的高い経済力を備えていた階層として位置付けることが出来る。又、出土遺物中に当時高級品であったとされる有田産染付や色絵磁器が数多く散見されることからその高い経済力が伺われる。一方、社会的位置付けにおいては郷土としての勤務の他に一方で農業及び副業としての土人形生産にも従事しており、半土半農的性格を持ち合わせた層といえる。この様に、所有者が経済的制約を受けずに多くの陶磁器類を購入することができる経済層であり、且つ農民としての一面も持ち合わせていることから、遺物組成中には農民層から武士層・経済層にわたる需要及び当時の長岡郡農村部における流通市場が幅広く反映されているものと期待される。

以下、一括廃棄遺物中にみられる磁器・陶器・瓦質土器・土師質土器の組成比<sup>(3)</sup>、及び器種毎の出土点数を表2に、用途別出土点数<sup>(4)</sup>を表3に提示する。

2・3からも分かるように、陣山遺跡一括廃棄遺物中には衣・食・住・その他に関わる多種多様な器種が出土している。これらの出土傾向は、ほぼ同時代における長岡郡の近世集落遺跡とはやや異なっており、郷土屋敷関連遺物という本資料の背景が遺物組成中に反映されたものと見られる。そのため以下はさらに陶磁器の器種組成に注目し、表2・3のデータより求められた陶磁器組成をグラフ化し、小籠遺跡廃棄土坑出土遺物データ<sup>(5)</sup>と比較検討する。

表2 一括破棄遺物にみる陶磁器・土器の器種別出土点数と組成比

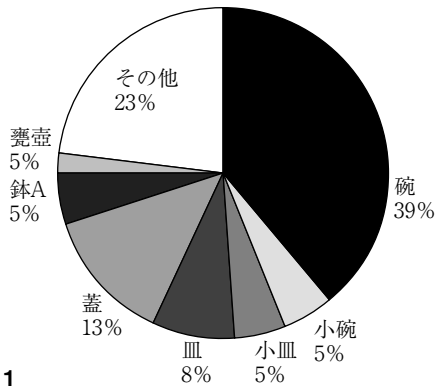
(点数は推定個体数・括弧内は接合前出土口縁部点数)

	磁器	陶器	陶磁器計	陶磁器中の比率	瓦質土器	土師質土器	陶磁器・土器計	陶磁器・土器中の比率
碗	95 (149)	9 (22)	104	31.6%			104	28.3%
中碗	64 (103)	4 (12)						
小碗	11 (20)	4 (9)						
小杯	20 (26)	1 (1)						
皿	17 (46)	23 (24)	40	12.1%		12(31)	52	14.1%
小皿	15 (42)	22 (17)				12(31)		
五寸皿	1 (1)							
大皿	1 (3)	1 (4)						
鉢	11 (22)		11	3.3%			11	2.9%
猪口	7 (13)		7	2.1%			7	1.9%
蓋	16 (19)	8 (9)	24	7.2%			24	6.5%
盃台	1 (0)		1	0.3%			1	0.2%
播鉢		7 (16)	7	2.1%			7	1.9%
こね鉢・片口		5 (13)	5	1.5%			5	1.3%
鍋(行平・土鍋・焙烙)		10 (33)	10	3.0%		3(14)	13	3.5%
急須・土瓶・水注		9 (3)	9	2.7%			9	2.4%
瓶(徳利・その他)	12 (9)	24 (10)	36	10.9%			36	9.8%
壺・甕		23 (25)	23	6.9%			23	6.2%
涼炉・焜炉・七輪・火消し壺		1 (3)	1	0.3%	1(1)	10(18)	12	3.2%
灯明皿		7 (7)	7	2.1%			7	1.9%
火鉢		4 (8)	4	1.2%	6(7)		10	2.7%
香炉		1 (1)	1	0.3%			1	0.2%
火入れ	2 (5)	7 (12)	9	2.7%			9	2.4%
紅皿	12 (17)		12	3.6%			12	3.2%
合子・段重	6 (8)		6	1.8%			6	1.6%
水滴	3 (0)		3	0.9%			3	0.8%
餌鉢		8 (9)	8	2.4%			8	2.1%
その他	1 (0)		1	0.3%	2(4)	4 (5)	7	1.9%
計(点)	183 (288)	146 (195)	329(483)	99.3%	9(12)	29(68)	367	99.0%
陶磁器・土器中の比率	49.8%	39.7%			2.4%	7.9%		

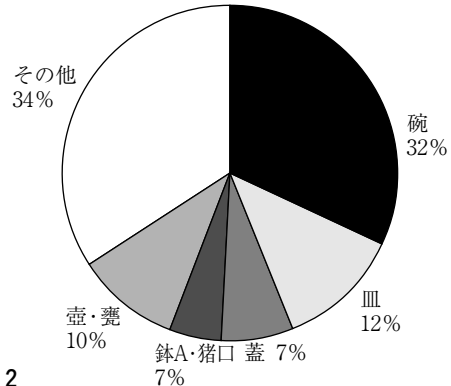
表3 一括破棄遺物にみる陶磁器・土器の用途別出土点数と組成比

(点数は推定個体数)

	磁器	陶器	陶磁器計	陶磁器中の比率	瓦質土器	土師質土器	陶磁器・土器計	陶磁器・土器中の比率
供膳具	147	32	179	54.4%			179	48.7%
調理具		49	49	14.8%		3	52	14.2%
貯蔵具	9	36	45	13.6%	6		51	13.9%
火具		1	1	0.3%	1	10	12	3.3%
暖房具		4	4	1.2%			4	1.1%
灯明具		7	7	2.1%		4	11	3.0%
化粧具	15		15	4.6%			15	4.1%
神仏具	6	1	7	2.1%			7	1.9%
文房具	3		3	0.9%			3	0.8%
飼育具		8	8	2.4%			8	2.4%
喫煙具	2	7	9	2.7%			9	2.5%
その他	1	1	2	0.6%	2	12	16	4.3%
計	183	146	329	99.7%	9	29	367	100.2%



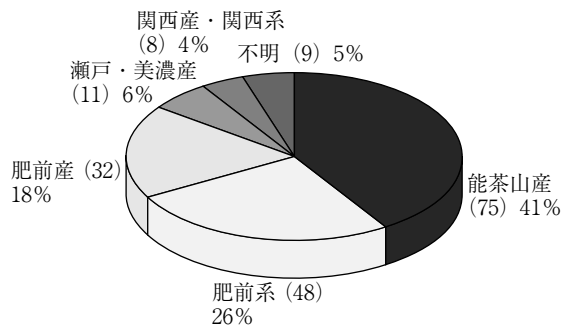
グラフ1  
小籠遺跡廃棄土坑出土の陶磁器器種別組成



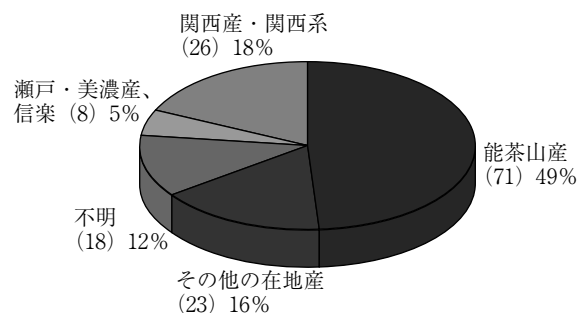
グラフ2  
陣山遺跡一括廃棄遺物中の陶磁器器種別組成

(※グラフ1は口縁部点数より算出した数値、グラフ2は推定個体数より算出した数値である。)

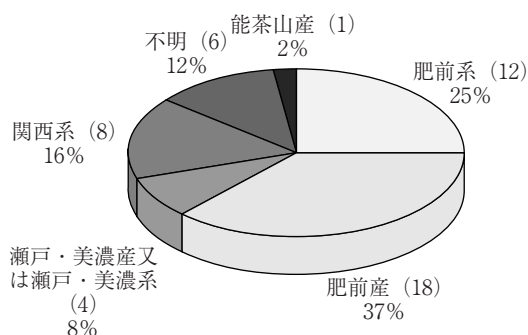
グラフ1・2を比較すると、小籠遺跡出土資料においては碗・皿・鉢・碗蓋等の供膳具が全体の約7割を占める。(藤方1997) 一方、陣山遺跡では、やはり供膳具が突出するものの他に多種多様な用途の陶磁器類が認められており、これらの違いは、先に触れた様に遺物所有者の経済力や業務の特殊性からくるものと考えられる。具体的には、供膳具の一部(薄手酒杯・盃台等の酒宴・接待用の器)、文房具(水滴)、化粧具(紅皿・髪油壺・段重)、神仏具(神酒徳利・香炉)等を指しており、これらは当地域の一般集落への普及率が低い器種(A群)として位置付けられる。これに対して碗・皿・鉢・碗蓋等の供膳具、調理具(鉢・鍋・播鉢)、貯蔵具(瓶・壺・甕)、火具(風炉・焜炉・七輪・火消し壺)、その他灯明具・暖房具・喫煙具・飼育具等のA群以外の残る用途・器種は両遺跡ともに一定の出土数を見せており、当地域の全階層に広く普及する用途・器種(B群)と捉えられる。これら各用途・器種のもつ特質を踏まえ、以下、陣山遺跡一括廃棄遺物にみる磁器・陶器の生産地別組成(グラフ3・4)、特にその用途毎の生産地別分化が著しい磁器のA群・B群毎の生産地別組成(グラフ5・6)、陶磁器全体にみるB群器種の生産地別組成(グラフ7)を示す。<sup>(6) (7)</sup> それによると、陣山遺跡一括廃棄資料B群の器種においては在地産陶磁器が75%を占め、日用品的性格をもつ器種に在地産陶磁器がかなりの率で購入されたことが分かる。一方、磁器A群器種では肥前産37%、肥前系25%、瀬戸・美濃産8%、関西系16%、在地産2%、産不明12%であり、肥前をはじめとする主要生産地の製品が買い求められている。



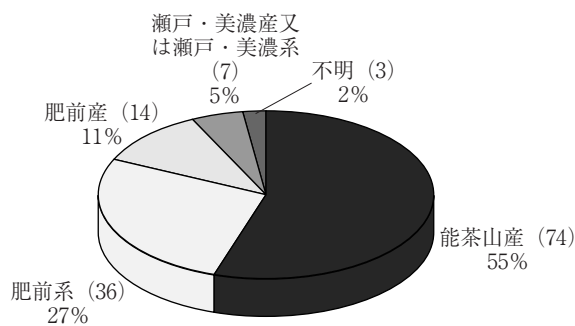
グラフ3 磁器の生産地別組成



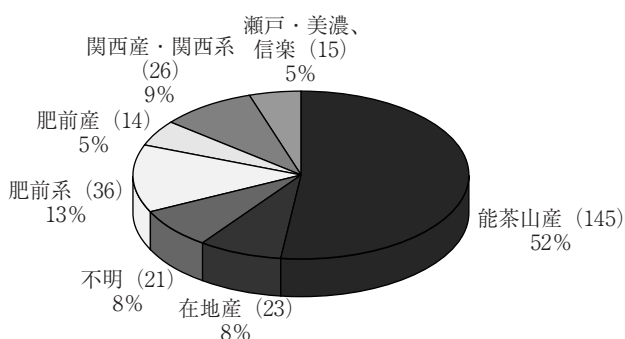
グラフ4 陶器の生産地別組成



グラフ5 磁器A群にみる生産地別組成  
(酒宴用供膳具・化粧具・神仏具)



グラフ6 磁器B群にみる生産地別組成  
(供膳具・貯蔵具・喫煙具)



グラフ7 陶磁器のB群にみる生産地別組成

(※グラフ3～7括弧内は推定個体数)

以上、地方郷土という半土半農の多様な側面をもつ一階層の、陶磁器消費実態と各生産地別製品の購入傾向を提示した。土佐の近世陶磁器生産は、1653年開窯の尾戸窯や宝暦年間には操業していたという安田窯の操業を経て、その後陶磁器の需要がさらに高まる19世紀以降には、1820年の能茶山磁器窯、それに続く能茶山陶器窯、県東部の田野窯・内原野窯・奈半利窯と各地での開窯が相次ぐ。陣山遺跡においても、17世紀台の遺物が主体を占める包含層Ⅲ層（Ⅱ区も含めたもの）と、18世紀後半以降の遺物を含む包含層Ⅱ層、19世紀の遺物が主体となる一括廃棄遺物の陶磁器の生産地別出土傾向を比較すれば、19世紀以降の在地製品の商品普及率の成長は顕著である。この様な18世紀までの陶磁器普及の状況を一変させる程の高い在地製品の浸透を達成させるためには、肥前、瀬戸・美濃を始めとする主要生産地との激しい競合、土佐における消費市場の陶磁器需要傾向等、様々な要因が複雑に関わっていたものと予想される。以下の項では、視点を消費者側から生産者側へと移し、能茶山陶磁器窯を中心に、その操業をみる19世紀第二四半期～中葉の土佐の在地商品普及の実態と生産体制について言及していく。

#### 4. 能茶山窯製品の普及と土佐の陶磁器流通実態

19世紀以降の高い在地製品普及の一つの背景として、1830年代以降の磁器藩窯の大幅な経営の方向転換が挙げられる。『三谷氏廻文控』によれば1836年には天草陶石の使用を在地の幡多石へと改め生産品目を日用品へと転向し、1837年には窯銘を記入して他製品との区別をさせ安価に売り捌いた

とされる。<sup>(8)</sup> 又、1841年には他国焼物船の入港解禁、窯銘制度実施による窯業保護政策の修正を行ったとあり<sup>(9)</sup>、それ以前から能茶山製品の国内普及を狙う様々な窯業保護の施策がとられていたことが伺われる。では、実際にその生産品目はどのようなものであっただろうか。ここでは再び、陣山一括廃棄資料を用い、能茶山製品と確認できたものの器種組成を見ていく。<sup>(10)</sup>

表4 陣山遺跡一括廃棄遺物にみる能茶山産磁器・陶器の器種組成

磁器	個体数	%	陶器	個体数	%
碗	43	57.3%	碗	1	1.4%
皿	12	16.0%	皿	16	22.5%
鉢	2	2.7%	鉢・鍋	16	22.5%
猪口	2	2.7%	瓶・水注	19	26.7%
碗蓋	13	17.3%	壺・甕	7	9.9%
瓶	1	1.3%	火鉢	2	2.8%
火入れ	2	2.7%	灯明皿	2	2.8%
計	75	100%	火入れ	2	2.8%
			餌鉢	3	4.2%
			蓋	1	1.4%
			器種不明	2	2.8%
			計	71	99.8%

提示された器種をみれば、磁器では碗・皿・鉢・猪口等の供膳具を、陶器ではこね鉢・片口等の調理具や瓶・壺・甕等の貯蔵具が主体を占めている。このことから能茶山窯の生産品目が日用雑器を主体とし、土佐国内の一般庶民層を購買層として販売ターゲットを絞り生産を行っていたことは明らかであり、文献上の記載とも一致している。

又、磁器では、その生産比率が最も高い中碗についてみると、その形態が確認できたもので広東形碗48%（口縁部点数24点）、端反形碗52%（同26点）の比率を占める。中でも広東形碗は高台内に銘を施したものが多く認められ、銘の施行が1837年以降という文献上の記載から裏付けると19世紀第二四半期以降も多くの広東形碗が生産されたこととなる。これは、肥前産磁器碗の生産及び主要都市圏での需要の主流が19世紀段階にはすでに端反形碗へと移行していることと比較すれば、かなりのずれをみせる。このことから、肥前磁器の影響を強く受け技術・形態を踏襲・模倣する中から経営を開始した能茶山磁器窯が、1830年代以降には、土佐国内の需要・消費に応じた独自の磁器生産を行っていたものとよみとられる。

一方、陶器に関してみると、日用雑器としての性格を強く持ちながらも、在地製品が土佐国内市場に浸透できなかった器種も存在する。中でも播鉢はその顕著な例として挙げることが出来る。今回の遺物中には生産地不明の播鉢が1点存在する他は全て堺産播鉢（口縁部点数15点、推定個体数6点）であった。これは、ほぼ同時期の一括廃棄資料としておさえられる小籠遺跡SX1・2の遺物群においても同様で、以上のことから播鉢に関しては、当時、調理具としての機能性に優れ且つ強力な流通基盤を備えた堺産播鉢が在地製品を一掃していたものと考えられる。又、堺産播鉢と在地製品との価格差に関しても、経済力を持たない農村集落遺跡においても同様に広く普及していることから、在地製



品に匹敵するほどの安価な価格を実現させていたものと予想される。

この様な堺産播鉢のような主要生産地よりもたらされる製品との競合に勝つ手段として、機能性・価格面においても様々な窯業経営上の工夫がなされたものと予想される。陶器に関して言えば、前節で示されたように、原料粘土や釉薬の選定にあたっては、やや上ランクの製品には不純物の少ない良質粘土を用い主に透明釉を施釉する、雑器ランクの製品には鉄分の多い不良粘土を用い、鉄釉を施釉するなどの使い分けを行っている。又、成形においても、やや上ランクの製品はナデ調整で仕上げ削り痕を残さない(252・257等)のに対して、雑器ランクの製品は体部下半に工具による鋭い削り痕を残し、未調整のままである。このように用途に応じた製品のランク付けを行った上で、雑器製品には徹底したコストダウンと生産工程の簡略化を行い、底価格の実現と大量生産を狙ったものと思われる。

以上の能茶山陶器に関する諸特徴を整理すると、その高い普及率の要因として様々な経営上の方策が挙げられる。すなわち、販売対象を土佐国内の一般階層に絞り、最も需要の多い器種(日用品)に生産品目を限定させる。販売対象・器種に応じた製品のランク付けを行い、原料選定から製作に至る全生産工程を二元化する。雑器ランクの製品に関しては徹底した生産工程の簡略化を行い生産コストを削減、大量生産する。等である。この他にも、藩による在地製品保護政策の実施等その他様々な方策が文献調査から明らかとされている。この他に、土佐国内での流通網(特に舟入れ川を中心とする水路網)の充実は、地方農村部への能茶山製品の普及を考える上で重要な要素になると考えられるが、今後の研究課題へと残したい。

地方での磁器需要が高まる19世紀前半代、各地で新たな磁器窯が数多く開窯しているが、経営上の困難点から、その多くが短期間のうちに閉窯に至っている。瀬戸・肥前の様な豊富な資源・優れた流通基盤を持ち得ない能茶山磁器窯が、幕末の藩窯廃止に至るまでの約50年間経営存続を果たし得たことは非常に注目すべき点であるが、その背景には、陶器窯も含めた工人・経営者らの窯業経営上の様々な方策があったことを見逃すことは出来ない。能茶山の土質を有効に活用し、幕末期に向かう経済社会の大きな変化に柔軟に対応し得た、経営体制の元の実現化されたものといえる。

## 5. おわりに

今回の陣山遺跡一括廃棄資料では19世紀第二四半期以降、在地の能茶山陶磁器製品が城下から東約20キロの地点にある長岡地域の農村部にまでかなりの普及率をみせていることが明らかとなった。この時期の能茶山製品の浸透は多くの文献学的研究の成果により以前から明らかにされていたことであるが、その普及の具体的数値、器種組成を明らかにし得たことは今次調査の成果といえるだろう。現在、能茶山製品に関してはその製品の識別が完全ではなく、生産体制にも多くの不明な点を残している。又、今回その実態数を明らかにし得なかった県東部の在地各窯の製品も今次資料では確実にその普及をみせてきている。こうした現状を踏まえ、今後の発掘調査分野での良好な出土資料の蓄積と研究に期待したい。

註

- 1) まず、遺物の検討を行う前に、当一括資料の性格と廃棄年代とを再確認することが必要と思われる。廃棄年代について言えば具体的には、共伴する肥前産磁器に19世紀中葉以降の製品を含むことから、遺構廃棄の上限年代を19世紀中葉として捉え、又遺物中に合成コバルトを用いた染付類が1点も含まれないことから明治初年頃を遺構廃棄の下限年代として捉えている。又、遺物所有者であった細木氏は18世紀後半から幕末にかけての間、当地域に屋敷地を構えたことが文献上に記されており、該当する約100年間の土器・陶磁器類が一括遺物中に含まれる可能性をもつ。しかし、肥前産の一部の磁器に18世紀後半のものが散見される以外には、実際には生産年代19世紀以降とおさえられる陶磁器類が圧倒的多数を占めている。
- 2) 陶器蛇の目釉剥ぎ小皿は小籠遺跡SX1・2の一括廃棄遺物においても同様の出土傾向をみせる。(藤方・1997)
- 3) 出土陶磁器・土器の定量化の方法としては、従来、口縁部計測法や破片総数による個体数の推定算出法等が多く採用されている。しかし、当遺跡の遺物群については、廃棄に際して全ての器種を一辺3～5cm程度の細片になるまで意図的に打ち砕いているため、小杯・紅皿等の小型製品は1個体から約1～2点の口縁部が、中碗等の中型の製品では1個体から約5～10点が、鍋・甕等の大型製品では10以上の口縁部破片が出ている。又、破片数に至るとその差はさらに増大し、1個体に対する破片数比は小型・中型・大型製品間で2対5対20～30程度にまで広がってしまう。このように、遺物廃棄上の特質及び各器種の形態差から今次遺物資料が従来の方法では各器種間の正確な組成比を求めることが出来ないこと、又、総口縁部点数が400点程度と全破片の特徴を担当者が個別に把握しやすい範囲内の破片量であったことから、ここでは、1点1点の破片の形態・調整痕・釉調・胎土等の比較・観察を行い、同一個体と見られる複数の口縁部を1個体と見なして個体数を算出している。個体数の算出に当たっては複数の計測者による慎重な検討を行い計測者の判断による誤差を最小限に留める様配慮した。なお、各器種間の組成比は以上の方法による個体数を元に割り出したものを掲載したが、一部、参考までに出土破片総数及び口縁部点数（共に接合以前のもの）も合わせて示している。

以上の様に、今回は各器種間の出土比率を求める場合には、原則として上記の方法により算出された個体数を用いる。又、同一器種間における出土比率を求める場合には、従来通りの方法でも特に支障がないとみて、口縁部計測法を採用させて頂く。
- 4) このうちかわらけについては、煤の付着が認められる4点を灯明具として分類したが、使用痕跡の認められない8点は用途特定が困難であるためその他の項に分類している。又、用途別分類を行う際の具体的な器種・器形の内容は次のようである。①供膳具～碗・皿・鉢・猪口・碗蓋・盃台 ②調理具～鉢（片口・こね鉢）・搗鉢・鍋（土鍋・行平・焙烙）・瓶（急須・土瓶・爛德利） ③貯蔵具～瓶（瓶・德利・水注）・壺・甕・蓋物 ④火具～涼炉・焜炉・七輪・火消し壺 ⑤暖房具～火鉢 ⑥灯明具～灯明皿 ⑦化粧具～紅皿・髪油壺・段重 ⑧神仏具～瓶（神酒德利）・香炉 ⑨文房具～水滴 ⑩飼育具～餌鉢 ⑪喫煙具～火入れ ⑫その他～戸車・埴塙・かわらけ（使用痕なし）・匣鉢 ※土人形型は今回の組成表から除いている
- 5) グラフ1は藤方正治「小籠遺跡出土の近世陶磁器について」『小籠遺跡Ⅲ』1997年より引用
- 6) 在地製品以外の肥前・瀬戸・美濃・関西その他諸窯の製品は大橋康二・中野泰裕両氏にその鑑識を依頼した。

- 7) 在地産磁器では銘のあるもの、文様・釉調・胎土から明らかに能茶山産であると判定できたもののみを表に取り上げている。肥前系磁器として今回取り扱われているものの中には能茶山産の可能性をもつと思われるが幾分存在しているが、今後の研究により能茶山産磁器の全実態数が明らかにされるものと期待し、今回はその生産窯の決定を保留している。又、能茶山産陶器については、先の組成分析の結果と形態・仕様の両側面から能茶山窯製品のをを行った。この様に、能茶山製品は磁器・陶器ともに研究過程にあるため、今回のデータは実態数よりやや少ない点数となっている。
- 8) 『三谷氏廻文控』天保八年。丸山和夫『土佐の陶磁』より引用
- 9) 伊東正統「土佐尾戸・能茶山年譜」『能茶山と土佐の陶工たち』より
- 10) 7)と同じ

#### 参考文献

- 藤方正治「小籠遺跡出土の近世陶磁器について」『小籠遺跡Ⅲ』1997年（財）高知県埋蔵文化財センター
- 丸山和夫『土佐の陶磁』1973年 雄山閣出版
- 伊東正統『能茶山と土佐の陶工たち』1973年 高知高専研究報告第1号
- 扇浦正義「江戸遺跡の年代決定方法と出土遺物の様相」
- 扇浦正義「江戸のくらし」『江戸のくらしー近世考古学の世界ー』1990年 新宿歴史博物館・新宿区教育委員長佐古真也「近世江戸市場の動向と窯業生産への影響」
- 『東京大学本郷構内遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』1990年 東京大学遺跡調査室
- 白神典之「堺播鉢について」『堺環濠都市遺跡』1988年 堺市文化財調査報告書37集

## 第4節 陣山海軍送信所と爆発事故

今回実施した陣山北遺跡の調査区内には、旧高知海軍航空隊送信所（以下送信所）の敷地の一部が含まれており、敗戦直後に同敷地内で生じた大爆発の生々しい痕跡を検出することができた。送信所の存在と爆発事故については、アジア太平洋戦争を記録する上で、或いは本県の近現代史上極めて重要な事項であるにも関わらず、高知県史・南国市史などの正史に全く記述が見られないのである。<sup>(1)</sup>ここでは、今次発掘調査によって得られた成果と文献資料等による調査結果に基づき明らかになったことを若干の考察を含めて述べるものである。なお、起稿にあたって香長ゼミナール館発行の『証言陣山送信所爆発の記録』<sup>(2)</sup>が大変役立ったことを銘記しておきたい。

### 1. 送信所と高知海軍航空隊

送信所の敷地面積は37,000㎡を測り、現在の市道陣山中線の南に対辺を南北にとる台形状の平面を有して占地していた。敷地内には通信機械室、兵舎、炊事場等が設けられていたが、現況は水田・果樹園・ビニールハウスになっており、今日地表においてその痕跡を留めるものは、炊事場の井戸（猪野明氏所有地）と一辺が4m、深さ約2mを測る扇形に作られた鉄筋コンクリート製の重油貯蔵庫のみである。ただ付近の水田畦畔や用・排水路壁面の随所には建築材であった橙色の煉瓦が利用されている。

今次発掘調査区は、送信所敷地跡の東側部分を幅34mで横切るかたちをとり（Fig.5）、送信所跡地の大部分が調査区内に入っているが、関連遺構として確認できたものは、先述したように調査Ⅱ区において送信所北東を画する側溝とその北側で柱穴を検出したに留まる。側溝以西についても数箇所の特レンチを設定したが、爆発事故や農地再生の開墾により攪乱が激しく関連遺構の残存が期待できないこと、また砲弾の出土が多く危険が伴うことから調査を打ち切らざるをえなかった。

さて、この送信所は、当地より南6kmの香美郡三島村に造営された海軍高知航空隊（現南国市高知空港）の通信部門を受け持つ付属施設として設置されたもので、航空隊とは専用電線で結ばれていた。送信所建設のための土地取得については、1941年12月2日に最初の海軍省への所有権移転が見られ、43年5月から7月にかけて多くの所有権移転が行なわれており、飛行場建設と併行して進められていたことが分かる。1945年5月1日時点の、航空隊の人員は士官・下士官兵合わせて3285名となっている。この内の何人が送信所に配置されていたのかは不明であるが、送信所の要員は、航空隊から通勤する者と近所の民家に下宿している者がいた。今調査中、窪田充治氏宅に下宿していた通信科下士官高井久五郎（岐阜県加茂郡上米田村比久見出身 現同郡川辺町）の存在が、窪田氏所蔵の写真帳より明らかとなった。出身地に向き調査したところ、高井は1904年生まれ、1941年12月2日付きで、逓信省通信書記補として岐阜郵便局に在勤を命ぜられ、その後海軍に応召、当送信所に配属されていたのである。<sup>(3)</sup>なお当送信所は、戦争の激化に伴い1km北の小山に横穴を掘り、通信設備を移動している。

すでに周知のようにアジア太平洋戦争は、制空権の争奪如何が戦争の勝敗を決定することとなり、

激烈な航空消耗戦が展開された。このため飛行機搭乗員の大量かつ急速養成が急務となり、国内及び国外に多数の練習航空隊を新設した。1942年11月1日以降、数字を冠称した作戦航空隊に対して、地名冠称の練習航空隊が次々に開隊されていったのである。そしてその対象の主体となったのが飛行予科練習生と海軍飛行予備学生であった。1941年から1945年までの両者の搭乗員養成状況を見ると41年:6,344名、42年:9,939名、43年:51,397名、44年:110,480名、45年:93,796名となっている。高知航空隊は、このような背景の中で、養成員数の最も多かった1944年3月15日、第2郡山（福島県）・築城（福岡県）とともに開隊、第13連合航空隊の傘下に入り、各地航空隊出身の飛行練習生（主として甲飛13期）に機上作業練習機白菊を用いて偵察教育を行なったのである。<sup>(4)</sup>しかし戦況は悪化の一途をたどり、44年7月絶対国防圏と言われたサイパン島が陥落、45年2月硫黄島の玉砕と続き、4月連合軍が沖縄に迫るなかで、練習航空隊は閉隊となり45年5月5日実戦配備の第12航空戦隊（第5航空艦隊）に編入となり、それまでの練習機を用いて特攻訓練が開始されるのである。そして鹿屋基地に進出し5月24日から6月25日まで菊水作戦に参加、神風特別攻撃隊菊水部隊白菊隊として26機、52名が未帰還となった。<sup>(5)</sup>最高速度226kmという性能から夜間単機出撃となり、海面を這うように飛び沖縄の海に消えたのである。

## 2. 送信所の爆発

今次調査区の送信所跡およびその付近からは、耕作土を除くと夥しい砲弾とその破片が出土した。発掘調査前の聞き取り調査によって、送信所跡地が日本軍の砲弾集積所となり、火薬抜き取り作業中に大爆発を起こした場所であることを承知していたので、調査に際しては金属探知機を用いたが、送信所付近では金属反応を示す警報が鳴りっぱなしであった。埋文センターの調査打ち切り後は、自衛隊が道路予定地出土の砲弾類の処理にあたった。これらの砲弾は、後述するように紛れもなく1945年本土決戦に備えて展開していた日本陸軍の砲弾であり、戦争末期高知平野において何が起こっていたのか当時の状況を知るうえで貴重な資料である。

アジア太平洋戦争末期、1945年の春から夏にかけての四国には太平洋岸を中心には約12万の地上兵力が四国防衛軍（第55軍、司令部は高知県長岡郡長岡村新改 現土佐山田町）として布陣しており、高知平野には、第11師団（錦部隊）、第155師団（護土部隊）、第205師団（安芸部隊）約6万が展開していた。<sup>(6)</sup>これらの部隊は8月15日の敗戦と共に大きな混乱もなく数日の内にそれぞれの出身地に引き揚げたが、携行していた膨大な武器弾薬は、送信所に集められた。そして占領軍の本隊が高知入りした（11月4日）後、11月10日より復員軍人や勤労奉仕の人たちが、火薬の抜き取り作業を実施した。兵器破壊という目的だけでなく砲弾に使われている真鍮などは生活物資に転用することができたからである。爆発事故は11月19日、火薬の焼却処分中に起こった。この時の状況について池知幸雄氏（南国市陣山）は次のように証言している。「忘れもしない昭和二十年十一月十九日、砲弾から薬莖を外し、中の火薬を焼き捨て、真鍮の薬莖を鍋・釜などに再利用する作業をしていて、大爆発が起こった。中の火薬は、30センチくらいのセルロイド状のもので、大きな穴を掘って、その中で焼却していた。リング箱の5～6個分を焼き捨てていたが、200人もの勤労奉仕の人たちの中には、面白がって一度に大量の火薬をくべた人がいたようだ。それで大きな火になって、近くの火薬や枯れ草に燃え移

った。私はその時、麦を蒔いていた。大きな火になって処置なしだった。私の家は近くだから、バケツをもってきて消し始めたが、奉仕の人も、進駐軍も逃げ出した。(中略) 風下にはキャラメルの箱くらいの黄色火薬の山がある。これに燃え移ったら大変だと思って、私も消すのをやめて、家に水をかけ、家の中に入り、窓を開け、タンスをひっくりかえした。

送信所は、もう一面の火になっていたので、家の裏に回った。その時、黄色火薬に火がついて大爆発したらしい。私は、飛んでくる弾を避けるために家の後ろの川の橋の上に身を伏せていた。すると何か風のかたまりが押し寄せてくるような感じだった。音は全く聞こえない。その衝撃で一瞬気を失っていた。ふと気が付くと家がなくなっていた。これはどうしたことだろうと思った。遠くから見た人の話では、原子爆弾のキノコ雲のように、真っ黒い煙があがっていたそうだ。家は粉々になって、爆心地の方へ畳が吸い込まれるように飛び散っていた。(後略)」(註2より引用)

この時の爆発は凄まじいもので、爆発が完全に収まるまでに3日を要しており、全壊家屋5戸、全焼家屋4戸、周辺の民家はほとんどが半壊状態であった。また送信所から北に2.1kmの久礼田小学校の窓ガラスが割れ、南3.3kmの南国市立田にある変電所の窓ガラスも割れている。爆心地を中心に半径2～3kmに被害が及んでいるのである。この事故について占領軍の報道管制により新聞報道は全くなされていないが、高知県の記録によると「十一月十日ヨリ兵器破壊作業ヲ開始シ今月二十五日完了セリ本作業中事故ノ為数名ノ死傷者ヲ出シ又長岡郡陣山元海軍送信所及香美郡日章村元高知航空隊ニテ火薬処理作業中爆発ノ为一七〇〇戸余(軽微ナル被害ヲ除ク)ノ家屋ニ被害ヲ生セリ——」とある。<sup>7)</sup> 高知航空隊の処理は殆ど海中投棄をしており、1700余戸の被害はすべて送信所爆発によって生じたものである。

今回出土した砲弾類は、自衛隊処理分も含めて400点以上にのぼる。出土砲弾類の種類は、105mm榴弾砲(91式)、70mm榴弾砲(90式・97式)、70mm徹甲弾(1式)、迫撃砲、手榴弾(97式・99式)、20mm機銃弾、6.5mm小銃弾(38式)などである。<sup>8)</sup> これらの組成比率を性格に把握することはできないが、最も多かったのが榴弾砲である。榴弾砲は陸軍で最も多く使われた連隊砲(野砲)であり、歩兵中心主義の象徴的存在である。今回の出土例は、展開部隊が有していた砲弾の極一部であり、組成比についても普遍性に乏しいくらいは否めないが、対戦車用の徹甲弾が僅少であることは、上陸してくる敵に対して、伝統的な歩兵中心による肉弾突撃を主要戦法とする作戦を想定していたことが考えられる。しかも榴弾砲にしても1930年(90式)、31年(91式)製のものであり、かなり旧式のものが多いことを指摘することができる。

なお今回発掘した砲弾は、調査区内すなわち「あけぼの道路」建設敷地内のものであり、周辺部にはまだ多くの砲弾が埋まっていることを指摘しておく。

### 3. まとめ

最近、考古学の発掘調査の対象としてアジア太平洋戦争関係の遺構・遺物を取り上げられることが多くなった。本県においては今回の事例が初めてであるが、他県では高射砲陣地や防空壕、掩体など多くの調査があり、史跡指定に至っている例もある。軍隊の装備やその布陣は、軍隊の性格や軍事思想を端的に表しているものと考え、このような視点からの本格的な研究は文献史においてもま

だまだ少ない。考古学には大地に残された痕跡からの積極的な取り組みが期待されよう。帝国陸海軍は、1871年「御親兵」設置以来、僅か70数年間に拡大膨張を続け、アジア太平洋戦争集結までわが国が採用した国策遂行の象徴的存在であった。今回の事例は高知平野で確認されたその最後の姿として位置付けることができる。日本国内各地域はもとより、諸外国に何を残したのか検証されなければならぬ。

今次調査を通して感じたことは、文献資料と証言の整合性をはかりながら進めることの重要性である。筆者の勉強不足から十分な成果を出すことが出来なかったが、後日に期したい。一連の作業を通して香長ゼミナール館館長窪田充治氏からは、数々の貴重な指導を得ることができた。記して謝意を表したい。

(註)

- 1) 『長岡村史』(平尾道雄 1955年)と『高知空港史』(高知県 1984年)に僅かに触れられているのみである。
- 2) 香長ゼミナール館『証言 陣山送信所爆発の記録—市史にも新聞にもかかなかった大惨事—』 1995年
- 3) 高井久五郎氏は1993年逝去された。ご子息高井治氏より岐阜郵便局への辞令等を見せて頂いた。  
夜分にお伺いしたにもかかわらず親切な対応を頂き、厚くお礼申し上げたい。
- 4) 『日本海軍航空史』(2) 軍備編 時事通信社1969年
- 5) 高知県『高知空港史』1984年
- 6) 茶園義男『本土決戦四国防衛軍』上・下徳島県出版文化協会1971年
- 7) 香長ゼミナール館館長窪田充治氏より昭和二十一年一月「長官事務引継書」なる書類の写しを見せて頂いた。その中に「兵器破壊作業」の一項がある。引用文はそれに記載されている。
- 8) 砲弾の鑑定については、主として陸上自衛隊第二混成団後方支援中隊武器小隊長川崎貴生氏にご教示頂いた。





# 写真図版



# 陣山遺跡





I区調査前全景（北より）

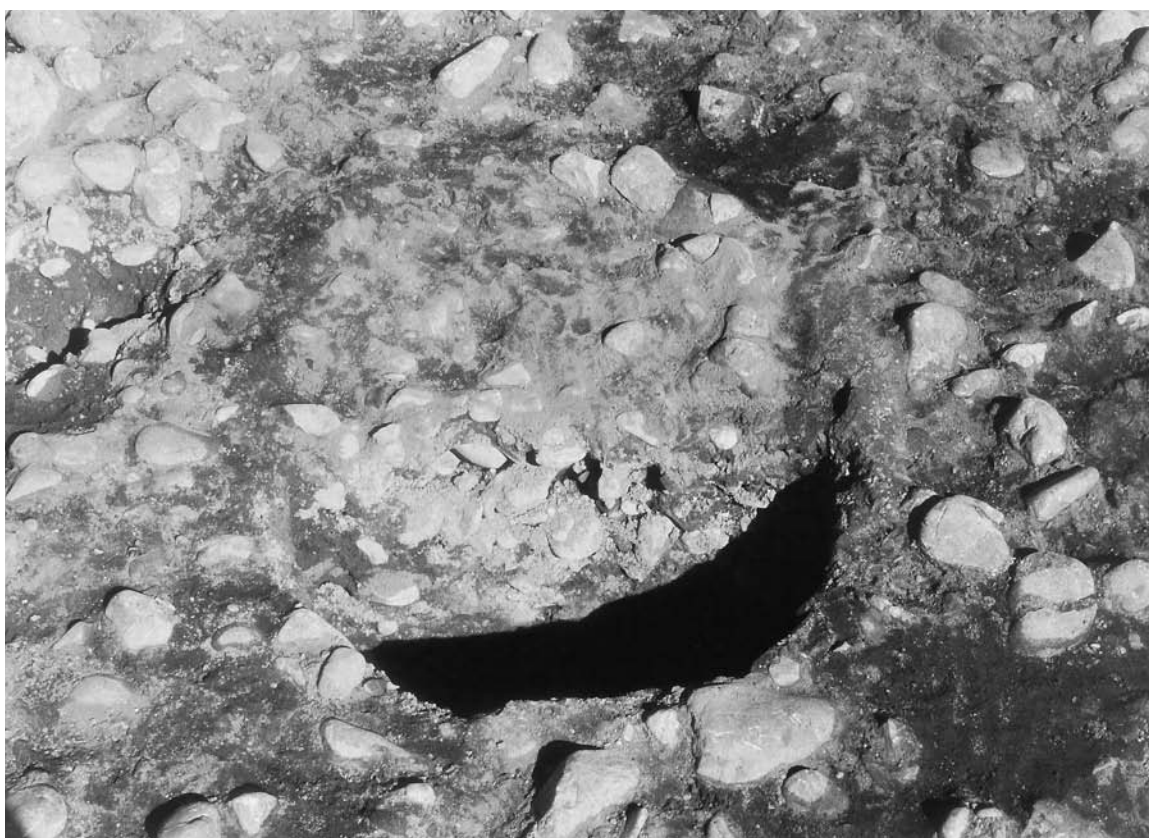


II区同上（北より）

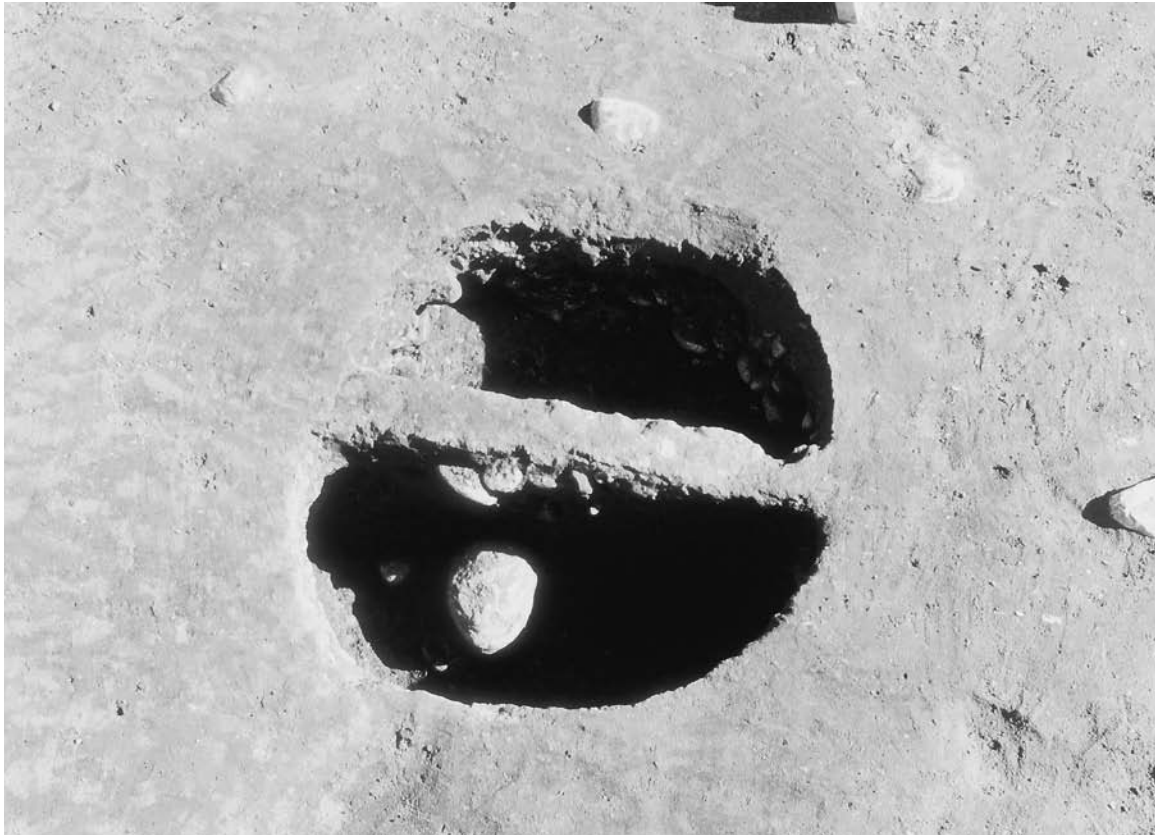
PL.2



I区 遺構検出状況（西より）



SK1 半截状況



SK2



SK3・4・13 完掘状況

PL.4



SK7 礫及び遺物出土状況



SK8 完掘状況



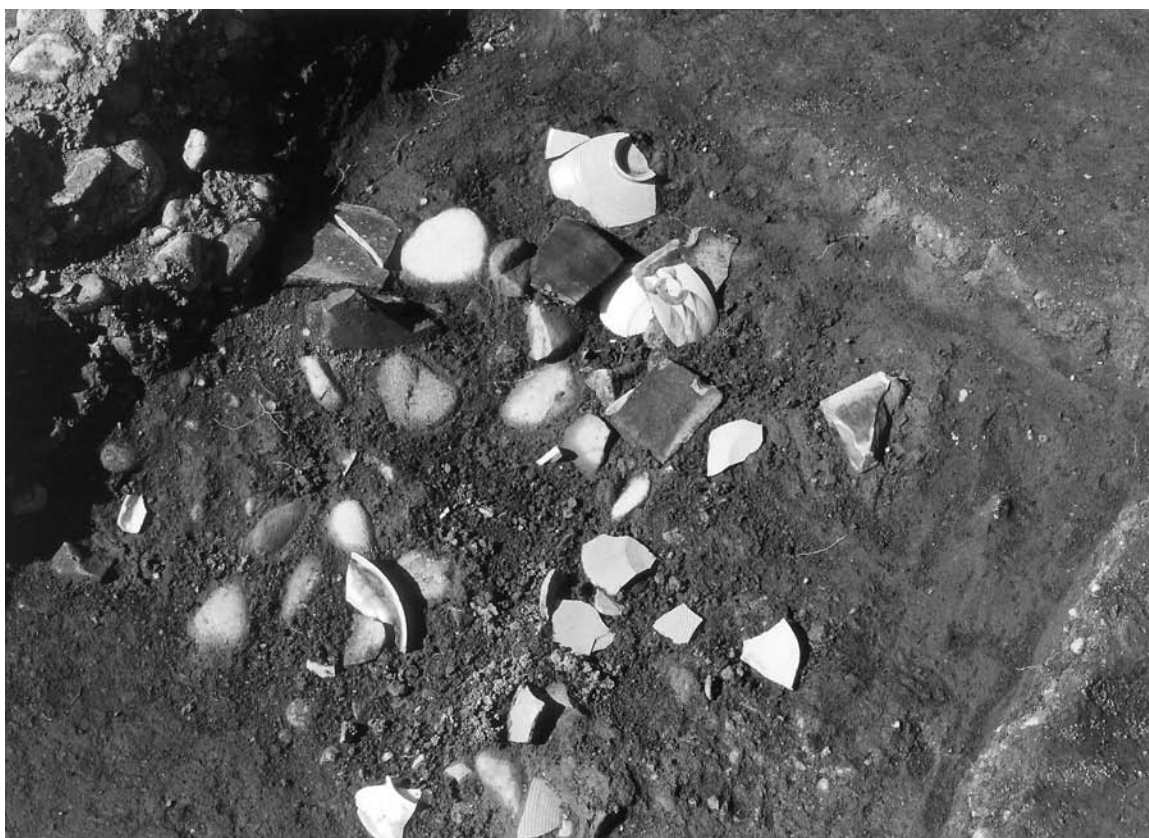


SK9 完掘状況



SK10 半截状況

PL.6



SK12 遺物出土状況



SK12 半截状況及び遺物出土状況



SD1 検出状況



SD1 遺物出土状況

PL.8



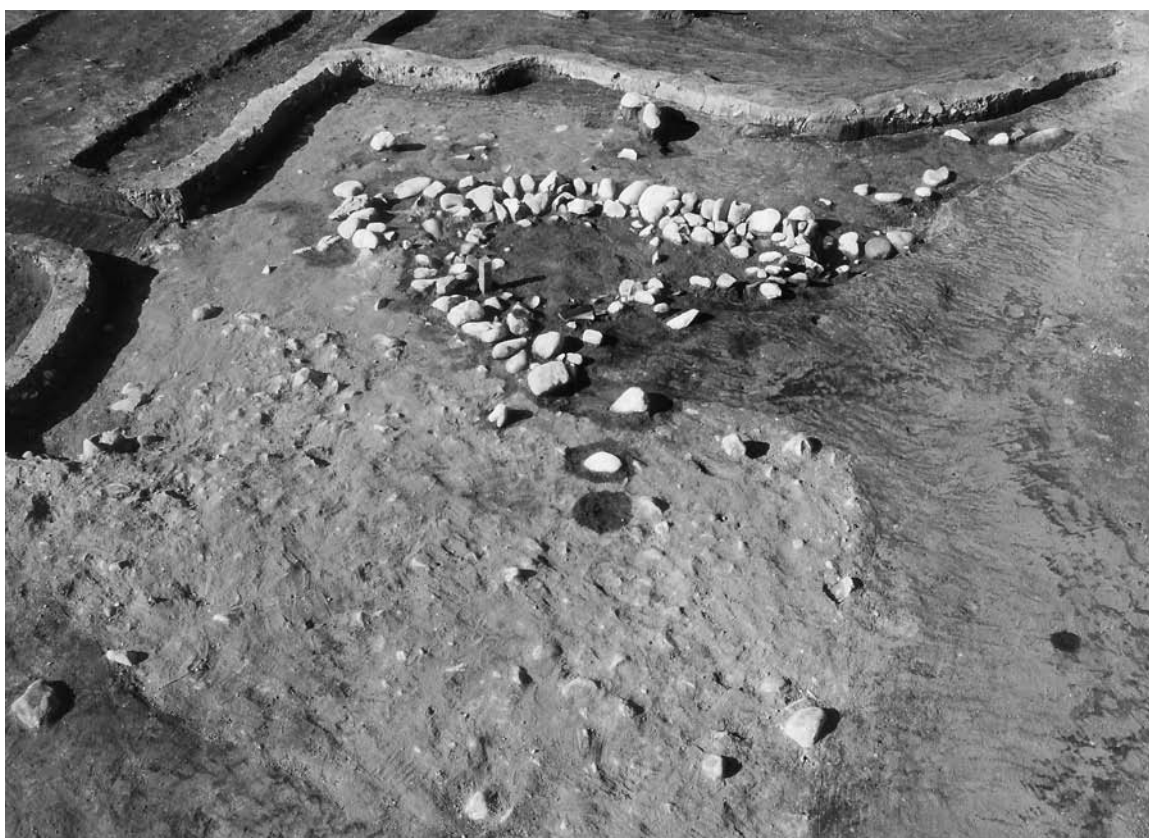
SD1 セクション (西)



SD1 セクション (東)



SD1 (西から)



SP1 検出状況

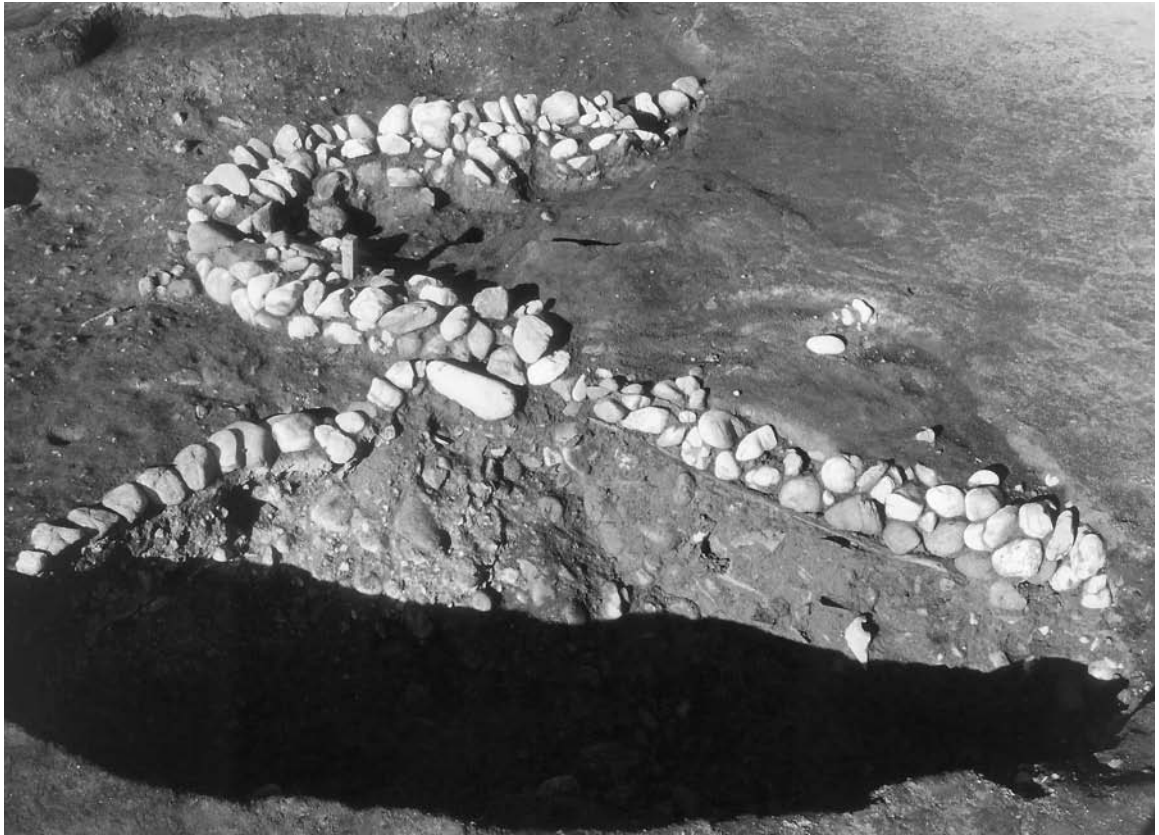
PL.10



SP1 遺物出土状況



SP1 セクション

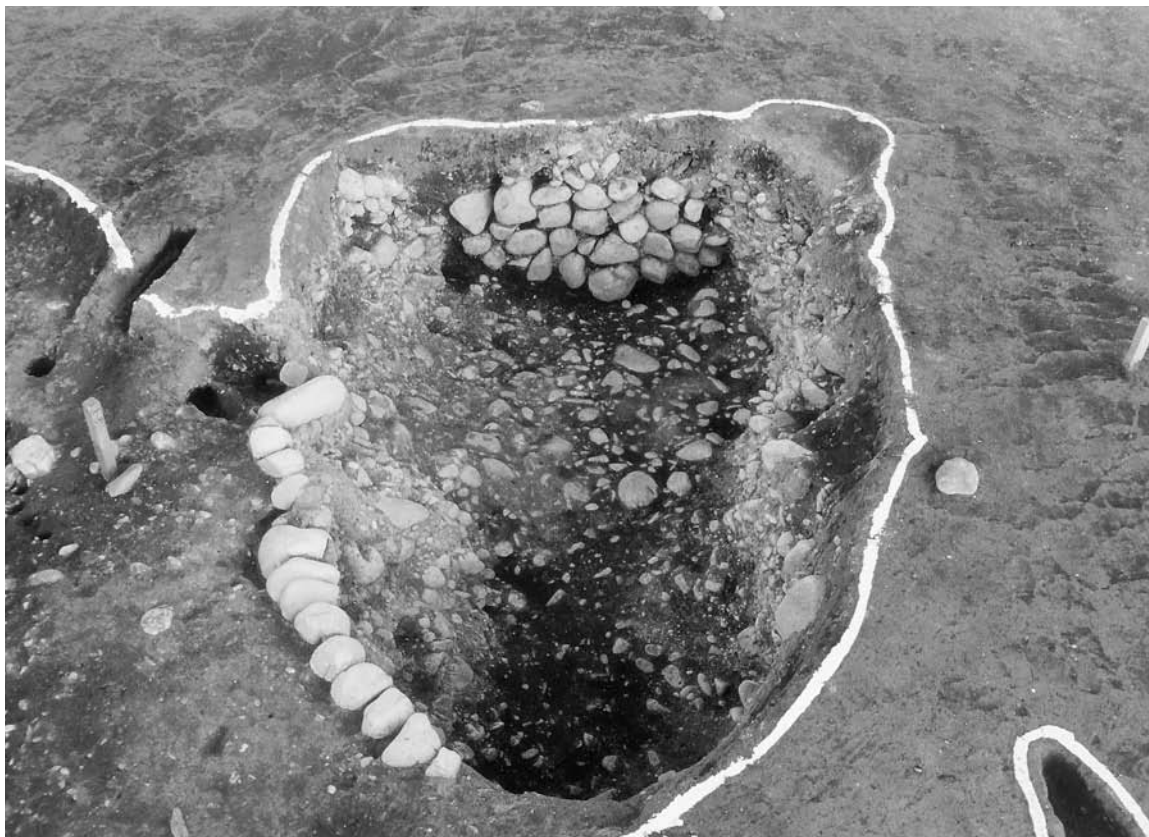


SP1 石組み検出状況



SP1 桐木検出状況

PL.12



SP1 南側掘り込み部完掘状況



SP1 完掘状況 (手前右はSK11、左はSK10)





SS1 礫出土状況



I区完掘状況全景



Ⅱ－北区 東壁セクション



Ⅱ－北区 遺構検出状況



SD4・SR1 検出状況



SD4 (手前)・SR1 (奥) 礫出土状況

PL.16



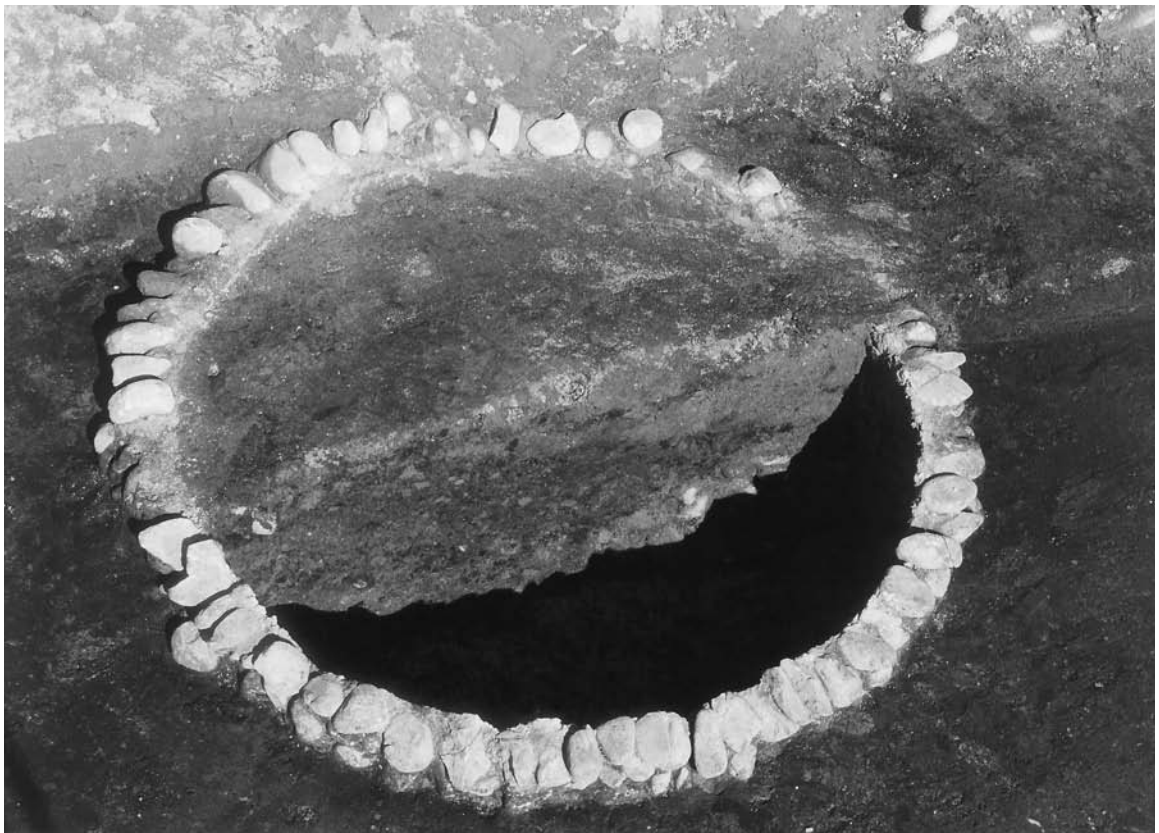
SD4 礫出土状況



II-北区 完掘状況全景



SK5 検出状況



SK5 半截状況

PL.18



SK6 検出状況



SK6 半截状況



SD5 (中央) ・SK5 (右) ・SK6 (左)



II - 南区 完掘状況全景 (南より)

PL.20

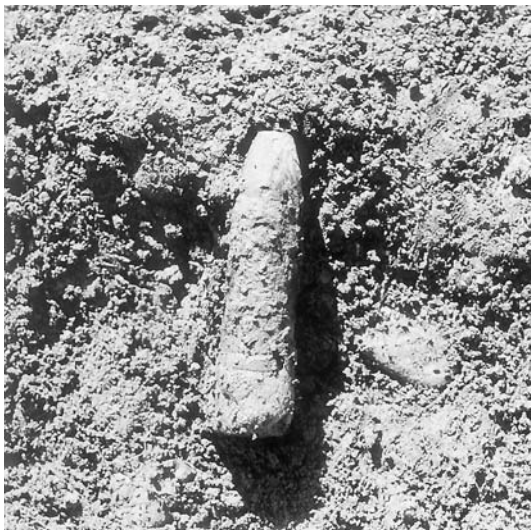
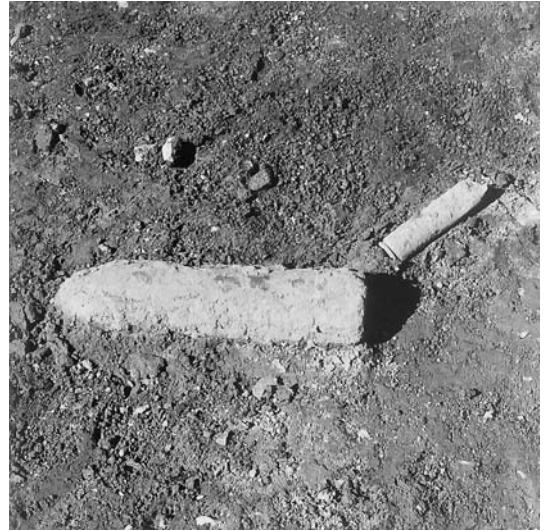


送信所跡遺物出土状況

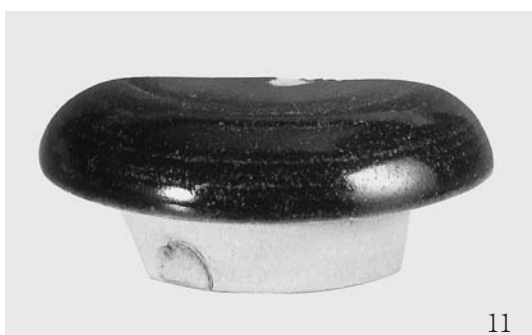
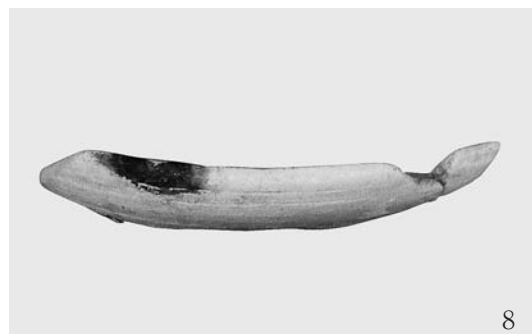
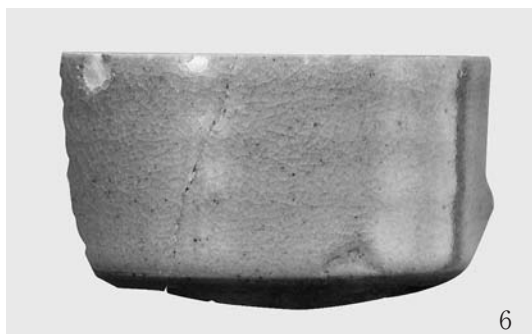
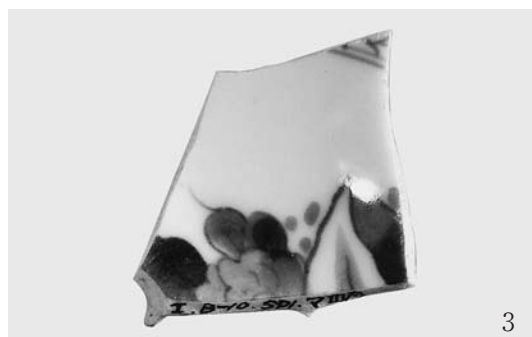
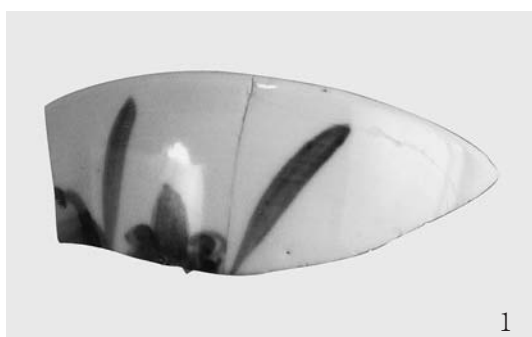


同上

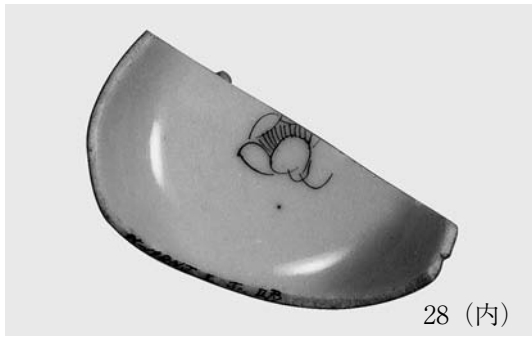
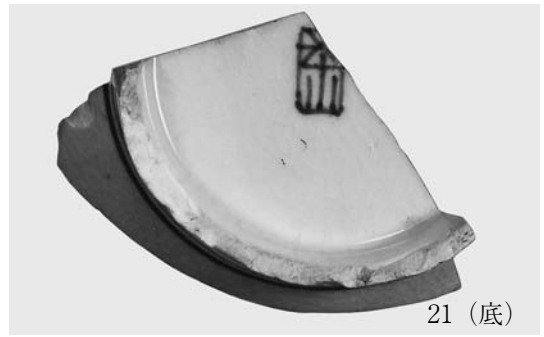
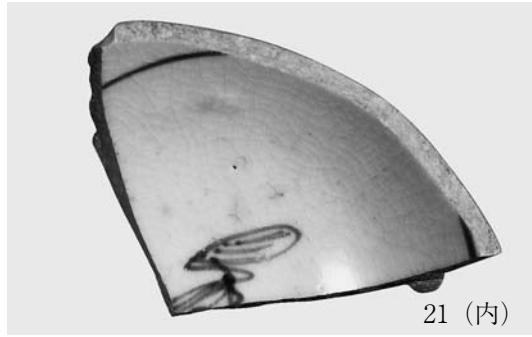
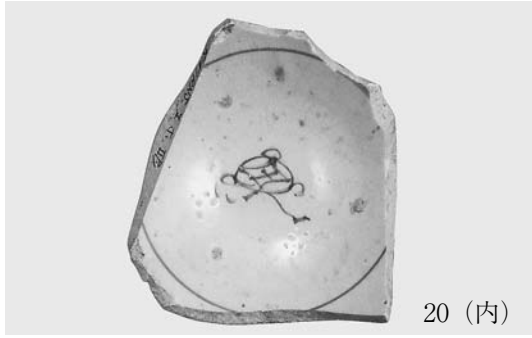
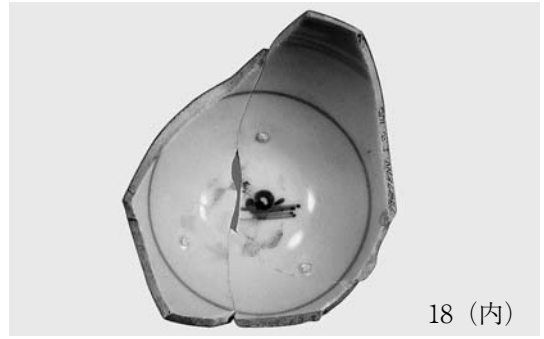
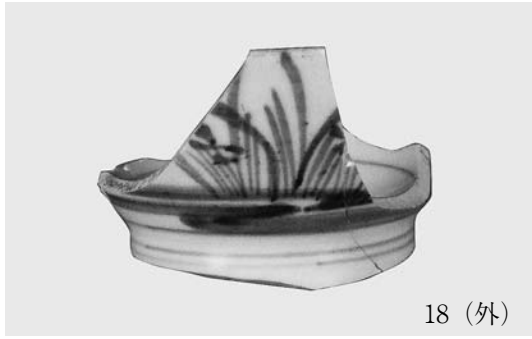




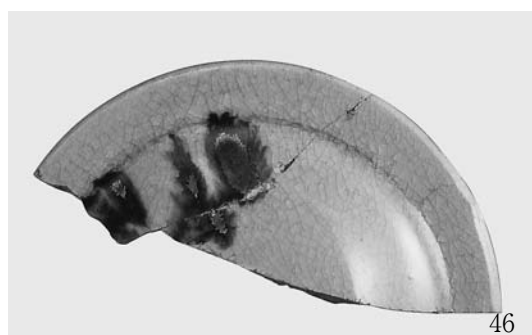
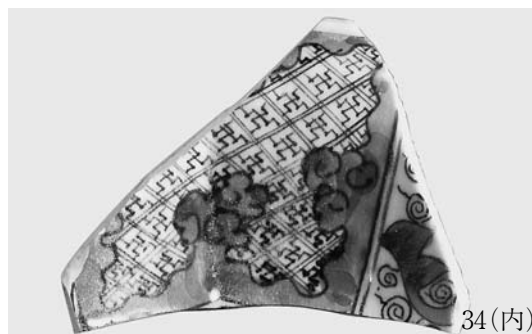
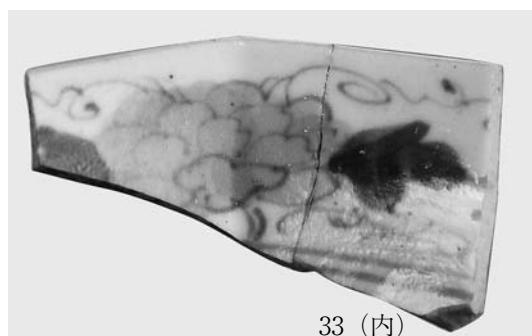
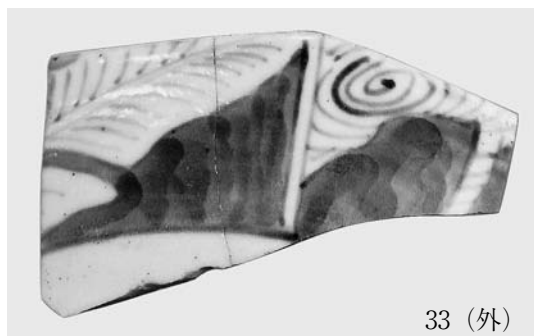
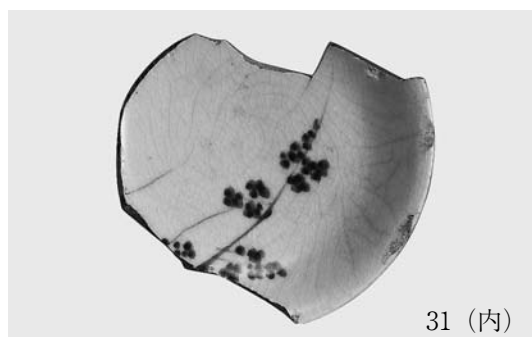
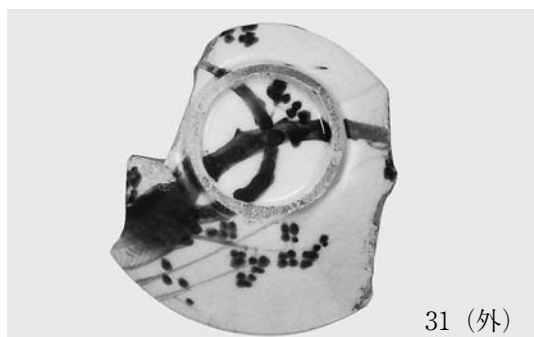
送信所跡遺物出土状況

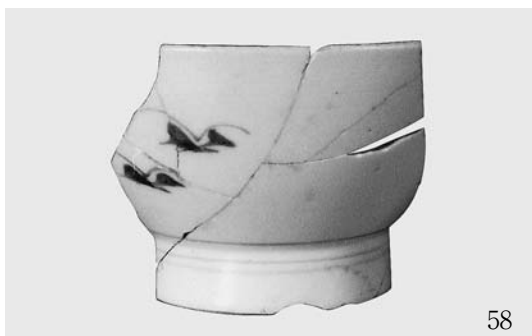
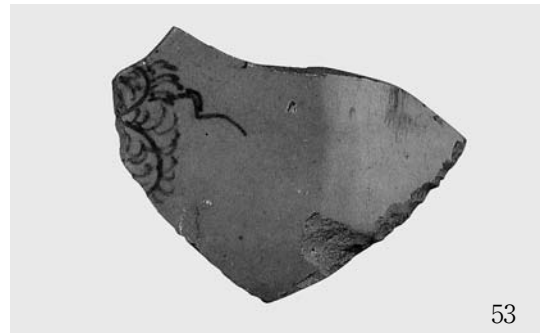
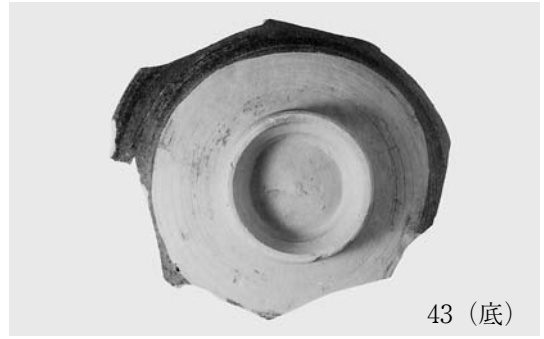
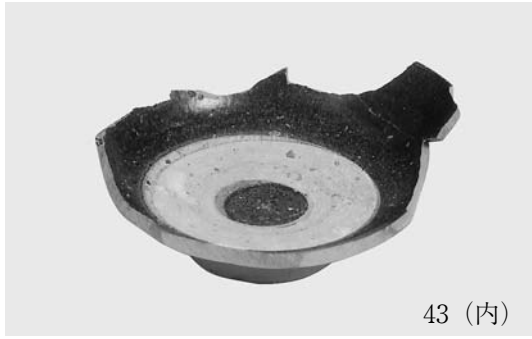


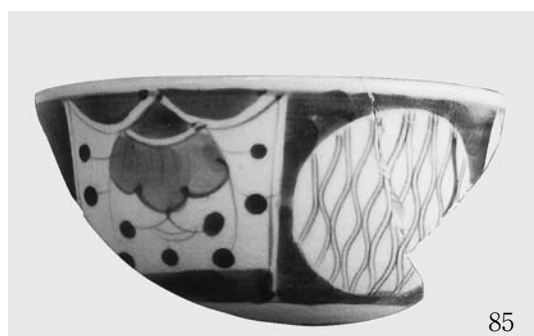
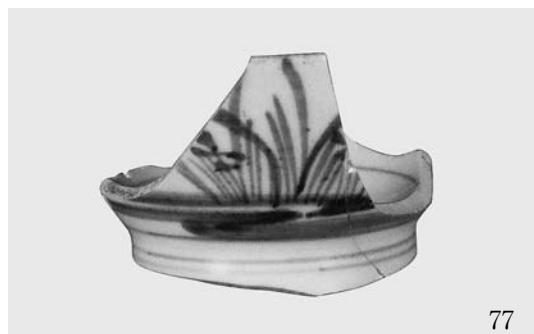
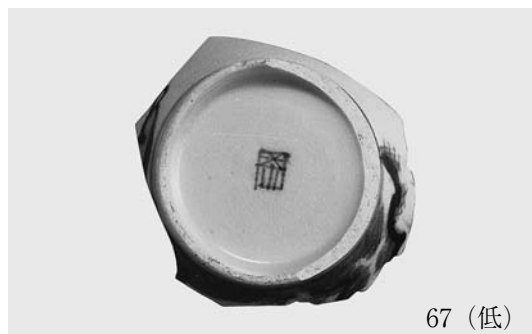
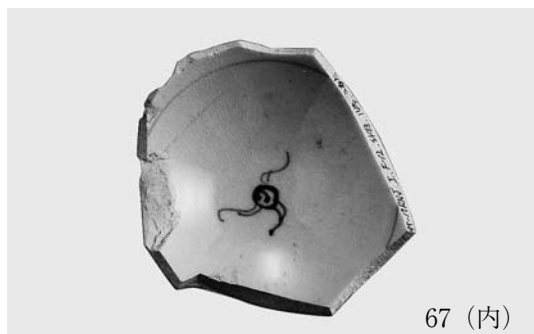
I 区SD1 (1·3·4~6·8) · SP1 (9~11·13) 出土遺物



I区包含層出土遺物







I 区一括廃棄遺物 (磁器)



104



107



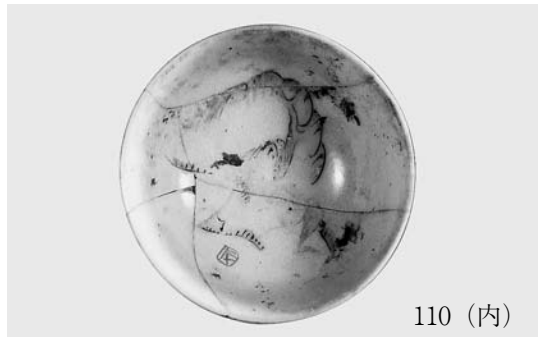
108



109



110 (外)



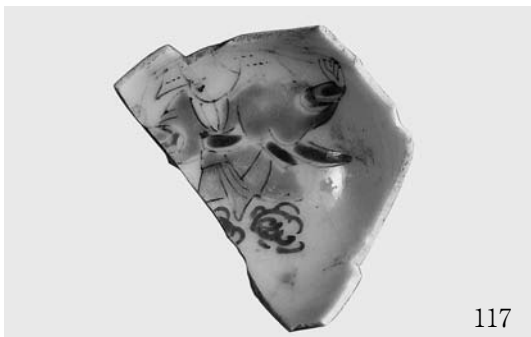
110 (内)



114



116

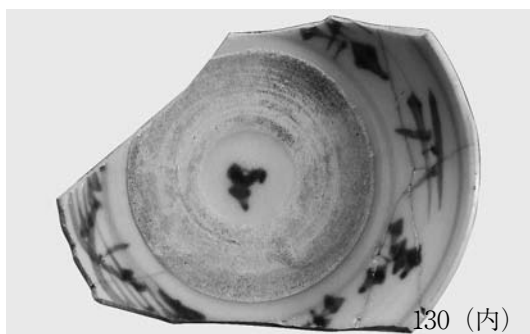
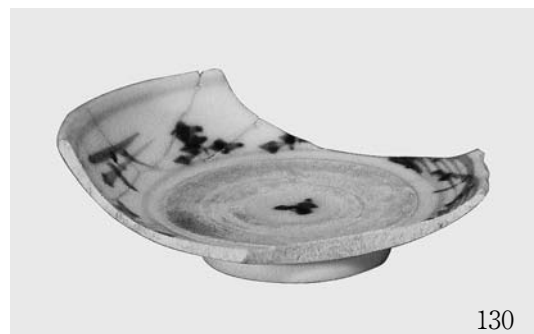
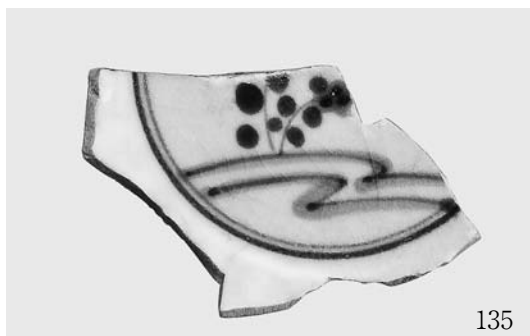
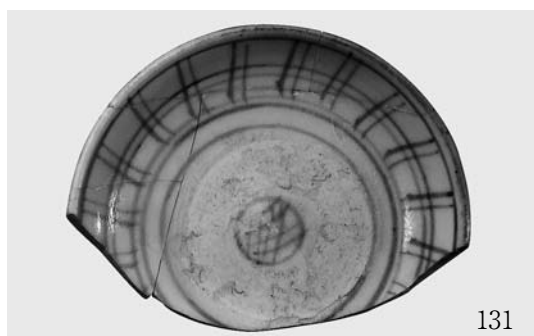
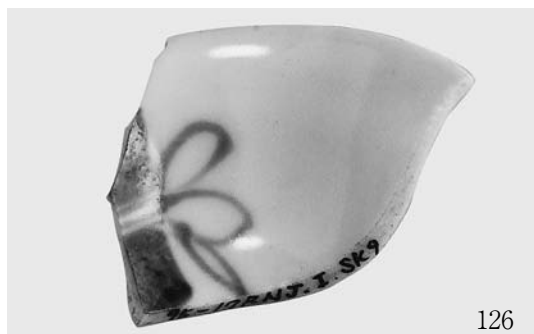
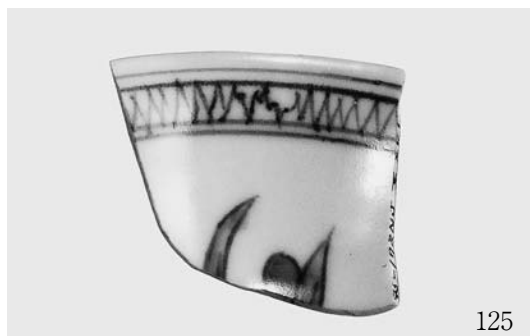
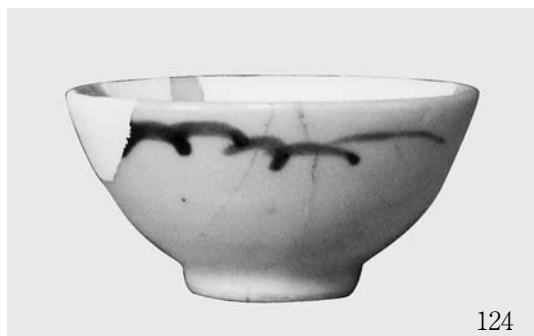


117



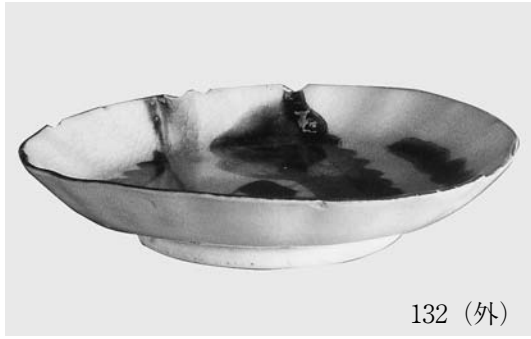
118

I区一括廃棄遺物（磁器）

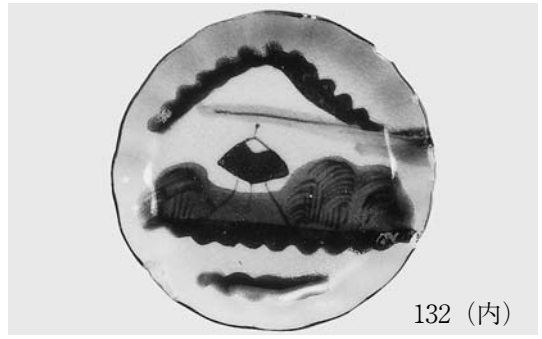


I区一括廃棄遺物（磁器）

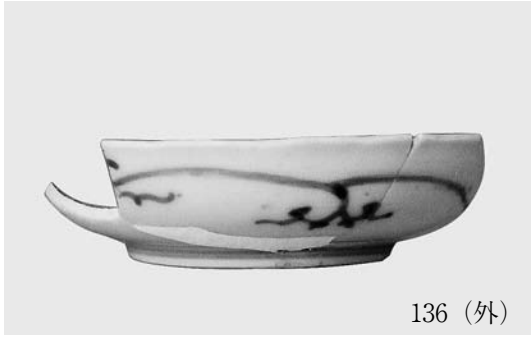




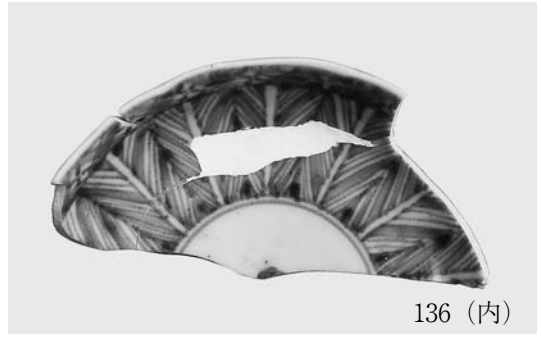
132 (外)



132 (内)



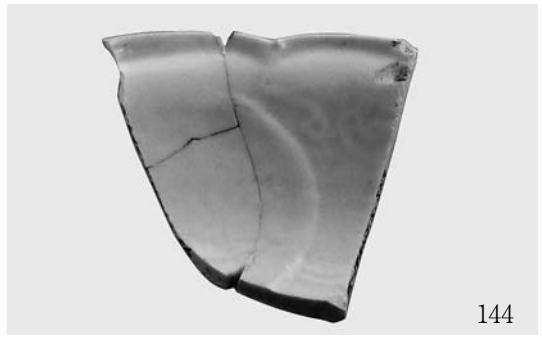
136 (外)



136 (内)



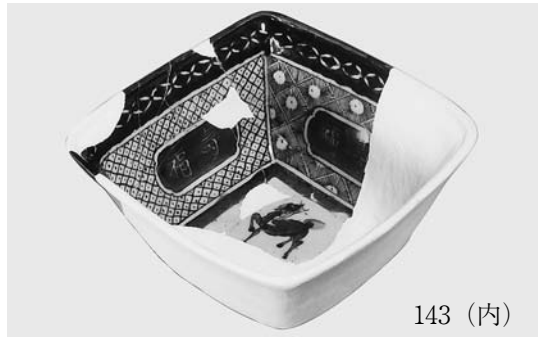
141



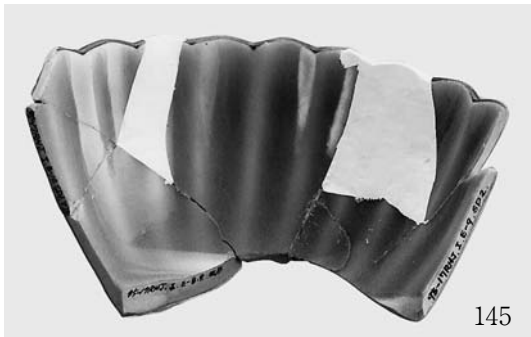
144



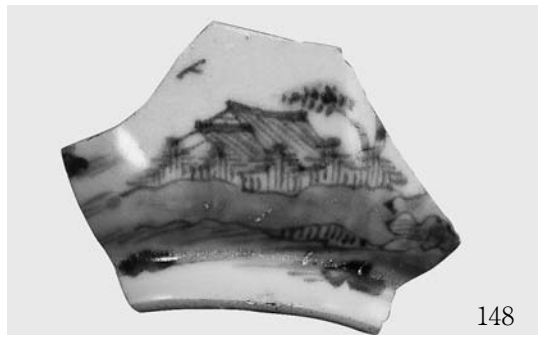
143 (外)



143 (内)



145



148

I区一括廃棄遺物 (磁器)



146 (外)



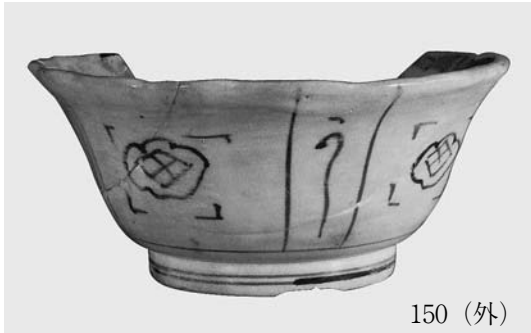
146 (内)



149



149 (内)



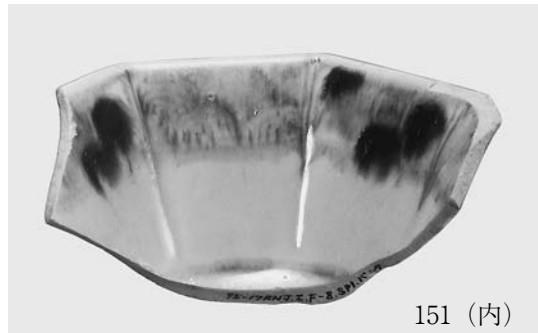
150 (外)



150 (内)



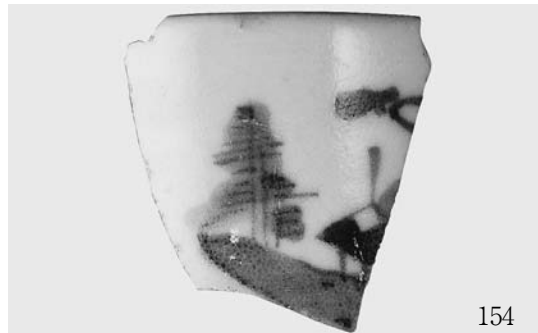
151 (外)



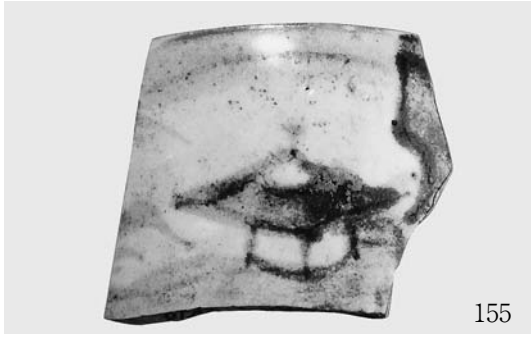
151 (内)



153



154



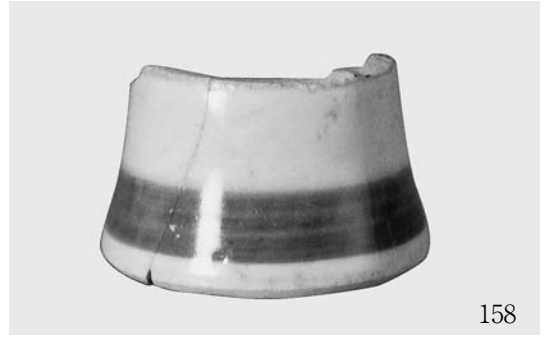
155



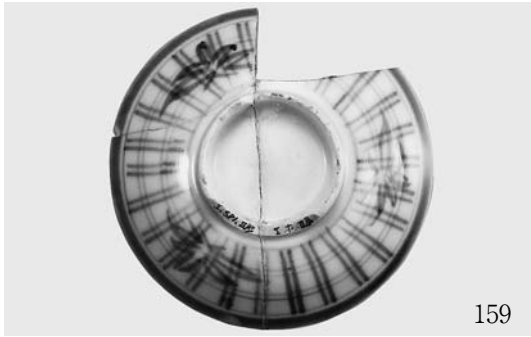
156



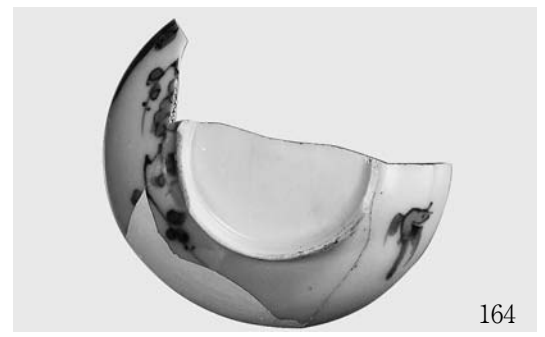
157



158



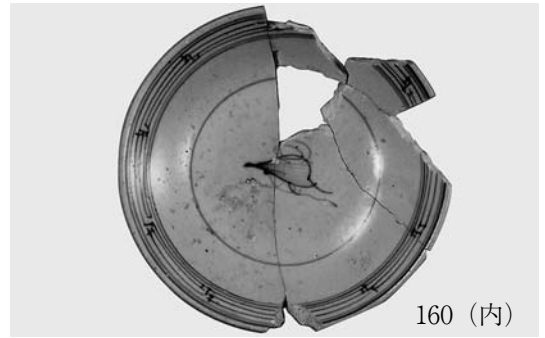
159



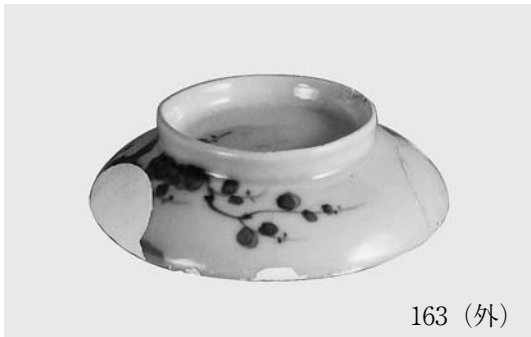
164



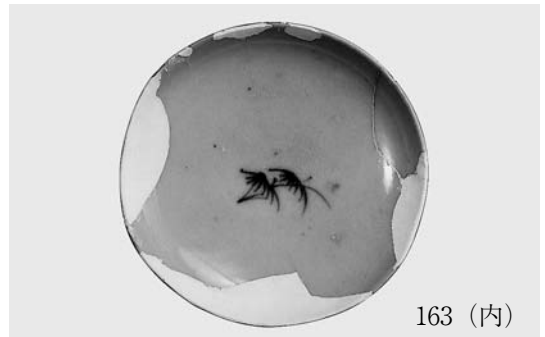
160 (外)



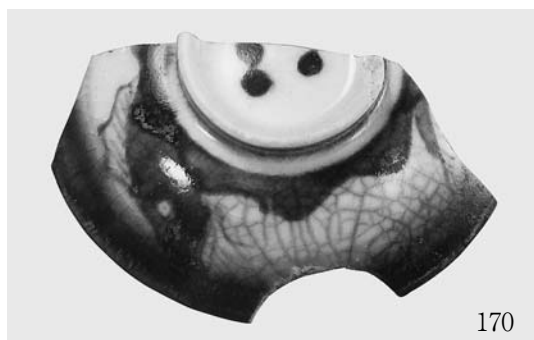
160 (内)



163 (外)



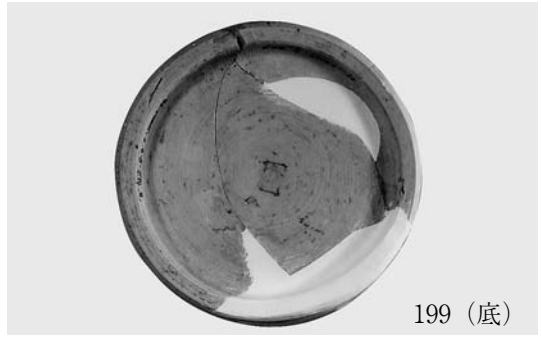
163 (内)



I 区一括廃棄遺物 (磁器)



199 (外)



199 (底)



200 (外)



200 (底)



205



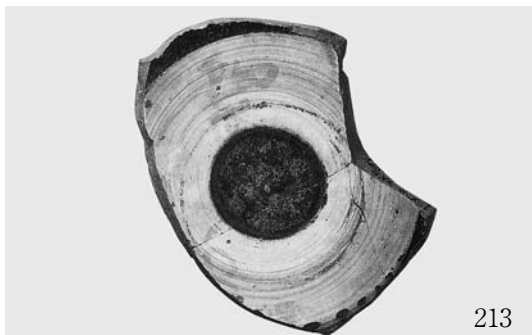
206



207



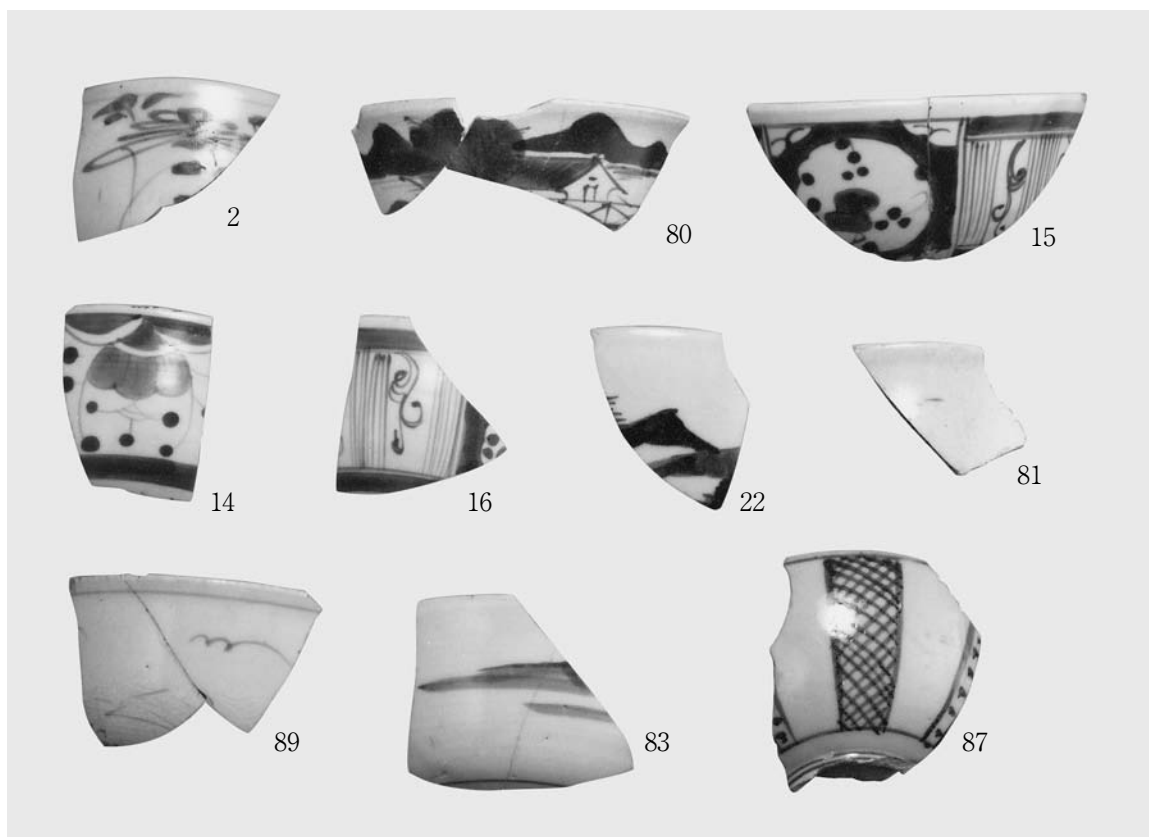
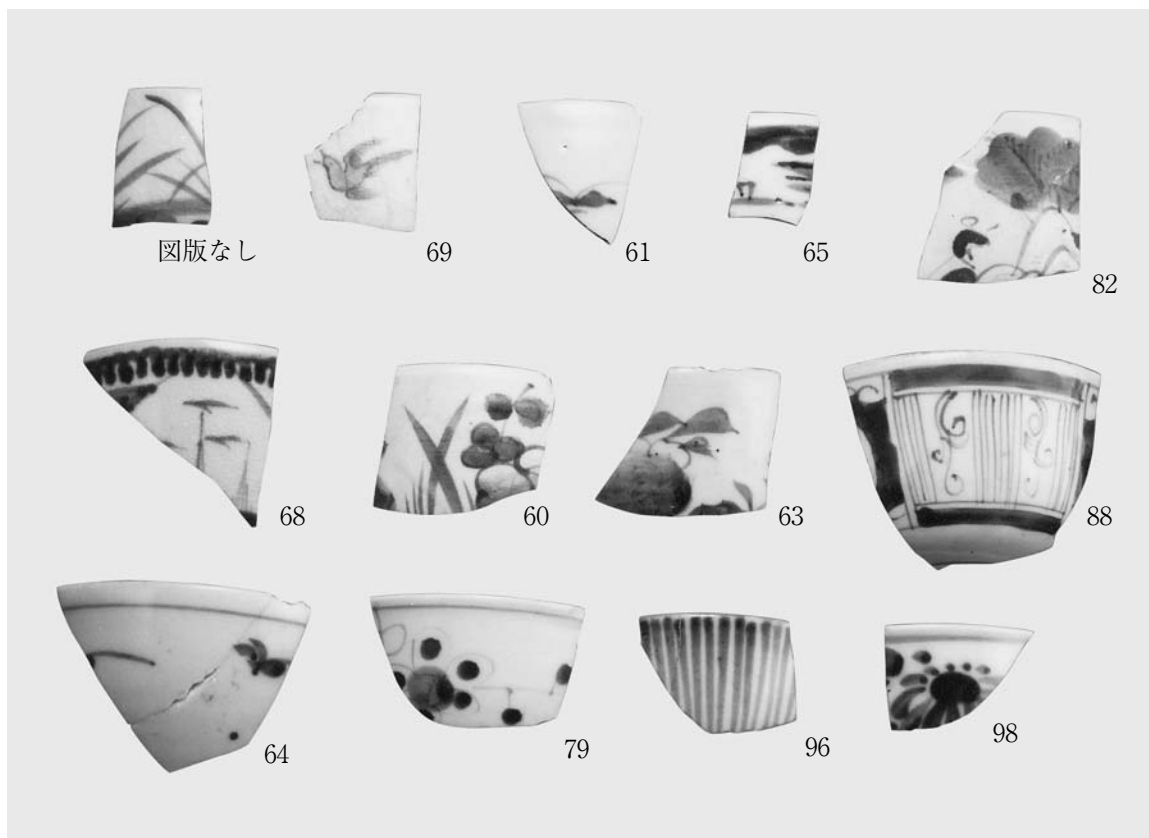
209



213



219



I区 SD1出土 (2)、包含層出土 (14・15・16・22)、一括廃棄 (その他) 遺物



211



225



227



228



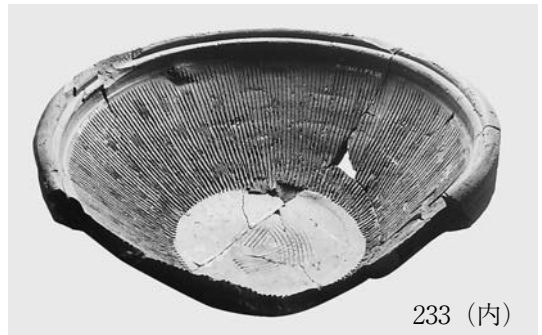
229 (外)



229 (底)



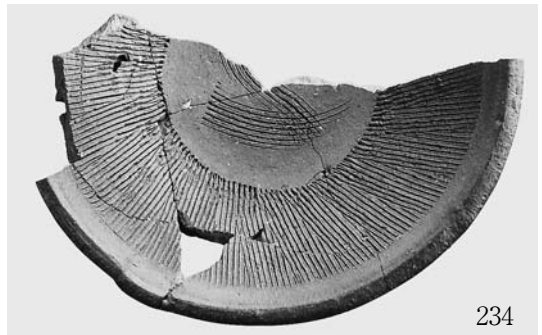
233 (外)



233 (内)

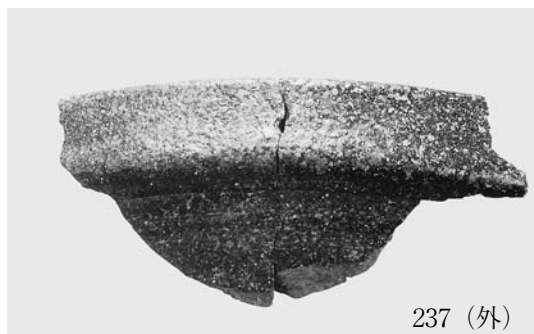


236

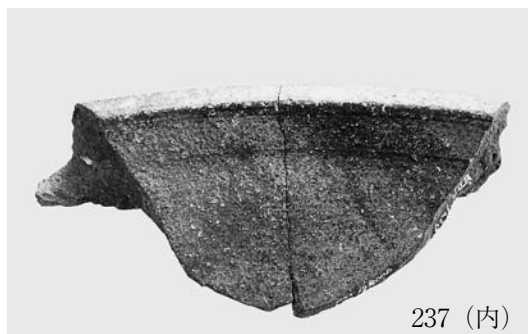


234

I区一括廃棄遺物 (陶器)



237 (外)



237 (内)



240



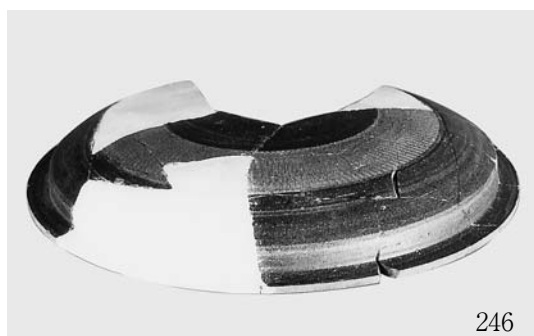
242



244



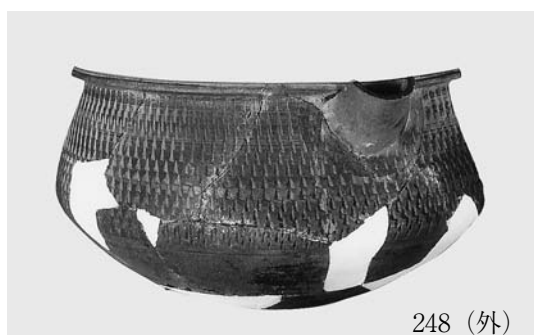
245



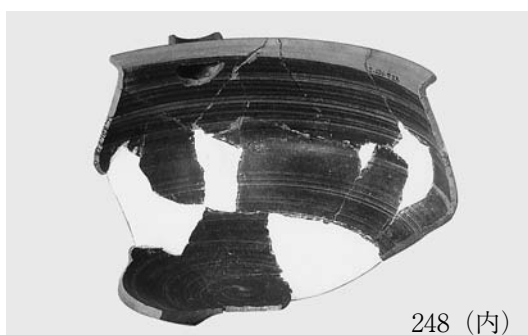
246



247

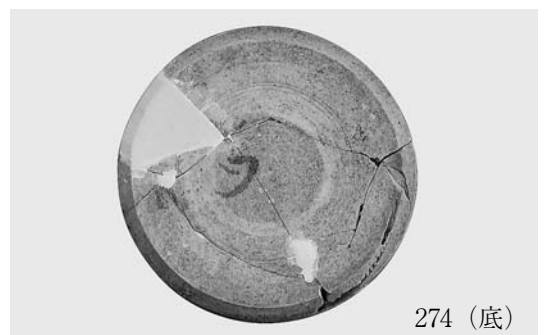
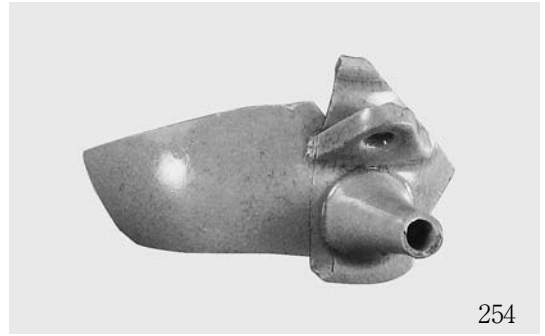
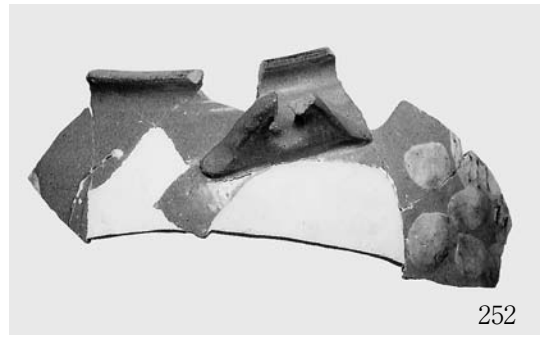


248 (外)

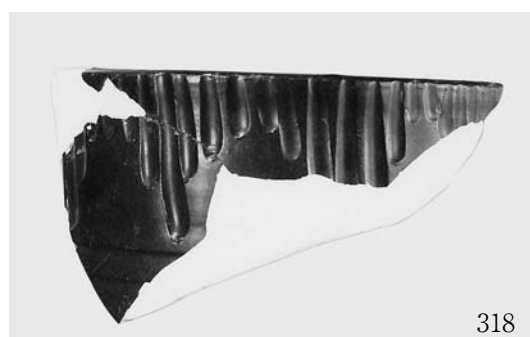
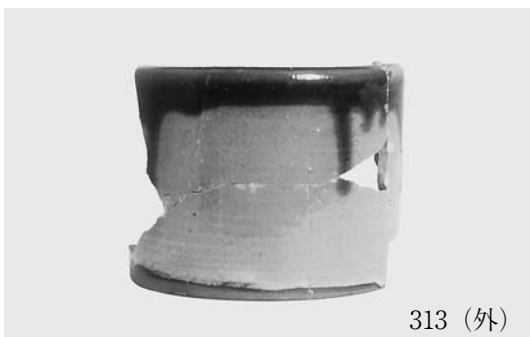
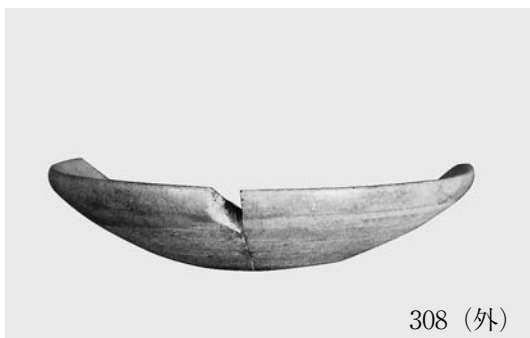


248 (内)

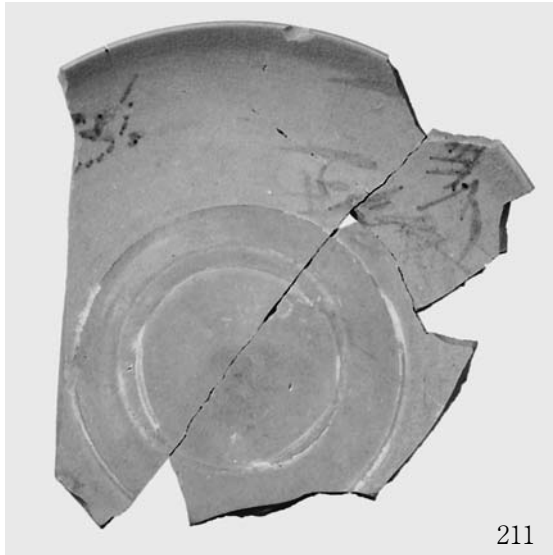




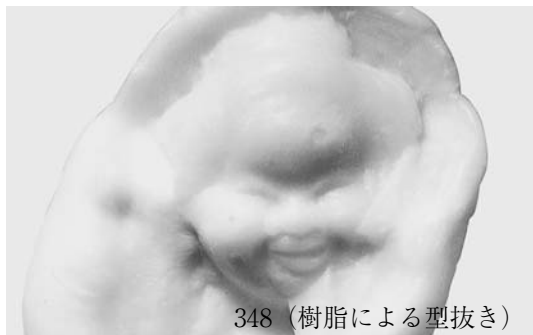
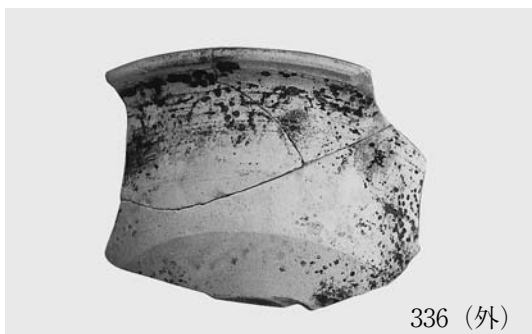
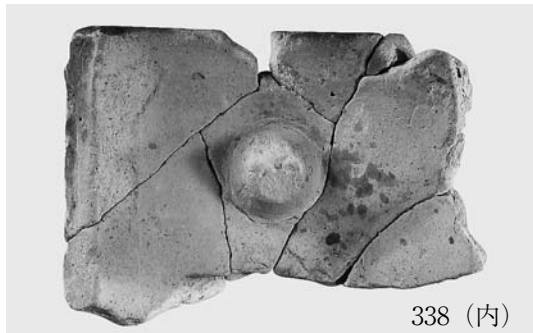
I区一括廃棄遺物（陶器）



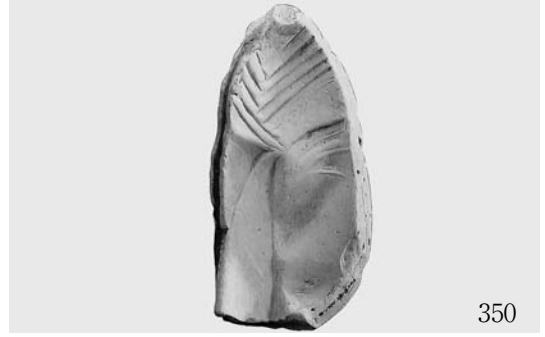
I 区一括廃棄遺物 (陶器)



I区一括廃棄遺物（陶器・土師質土器）



I区一括廃棄遺物 (陶器・瓦質・土師質土器・土人形型)



I 区一括廃棄遺物 (土人形型)



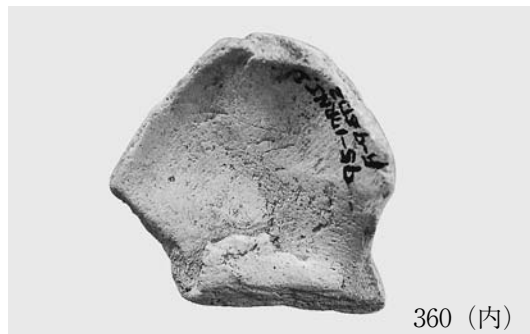
358



358 (外)



360 (外)



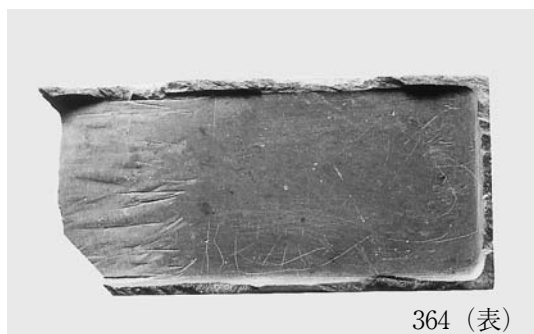
360 (内)



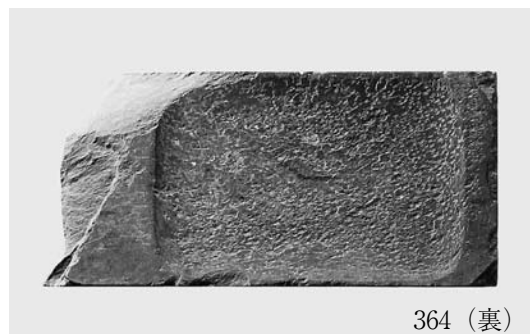
図版なし



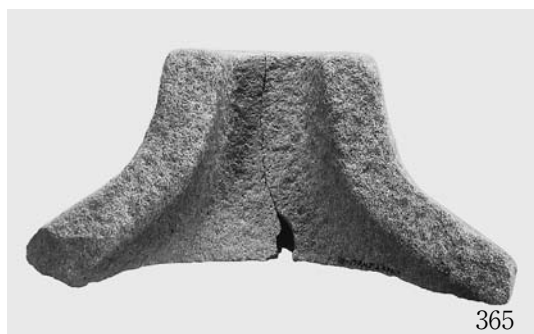
363



364 (表)



364 (裏)



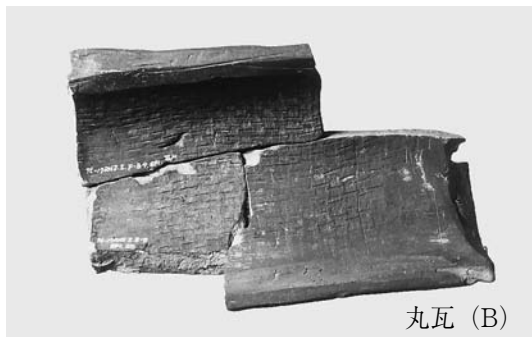
365



365 (正面)



I区一括廃棄遺物（金属製品）

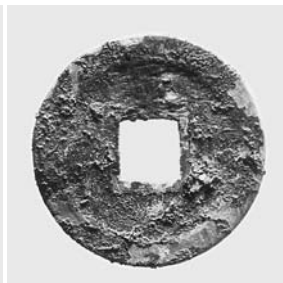


I 区一括廃棄遺物 (瓦)

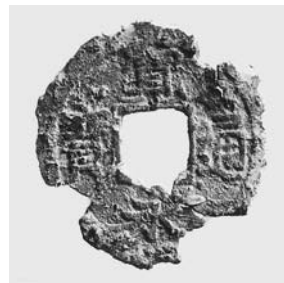




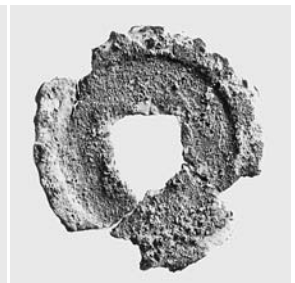
a (表)



a (裏)



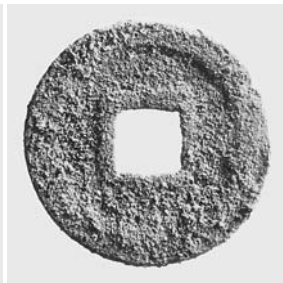
b (表)



b (裏)



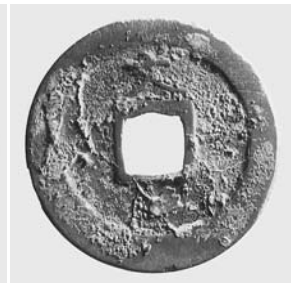
c (表)



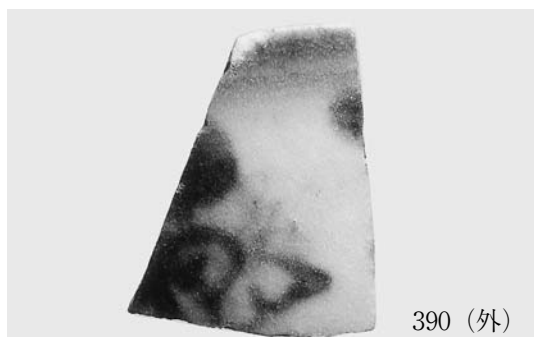
c (裏)



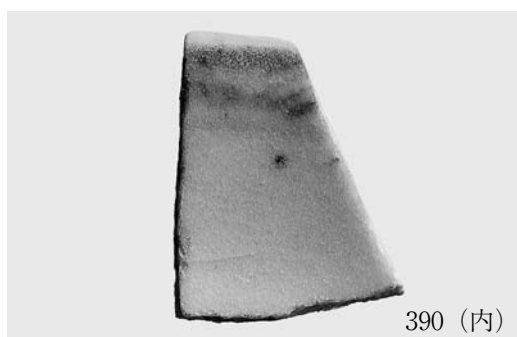
d (表)



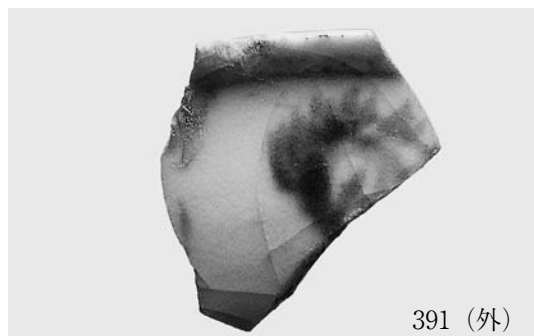
d (裏)



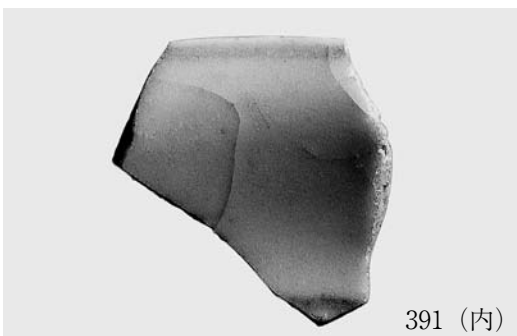
390 (外)



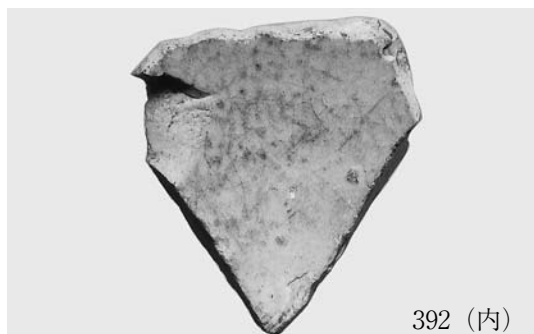
390 (内)



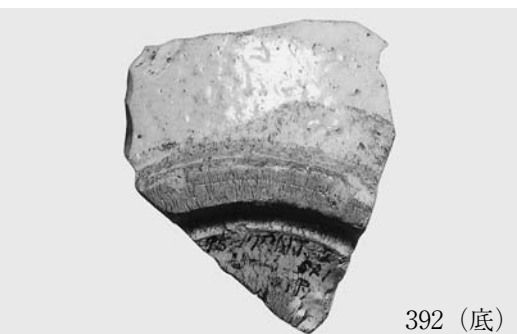
391 (外)



391 (内)



392 (内)



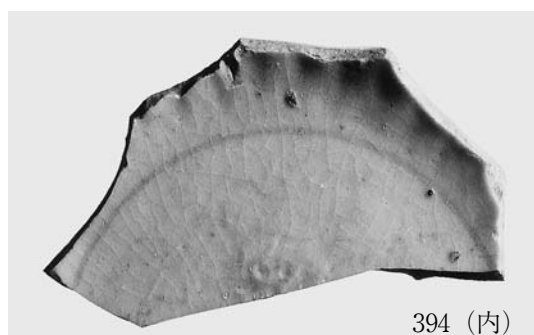
392 (底)



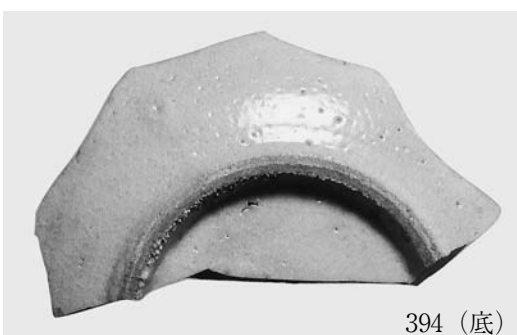
393



393 (内)



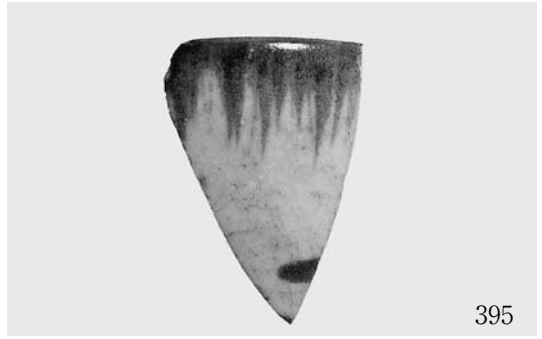
394 (内)



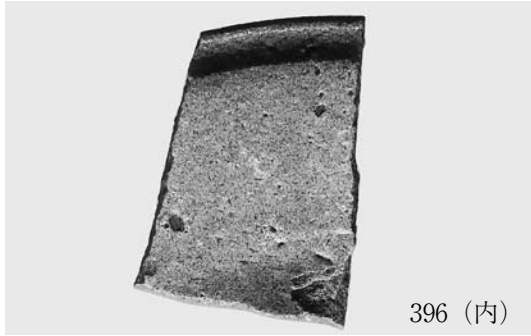
394 (底)



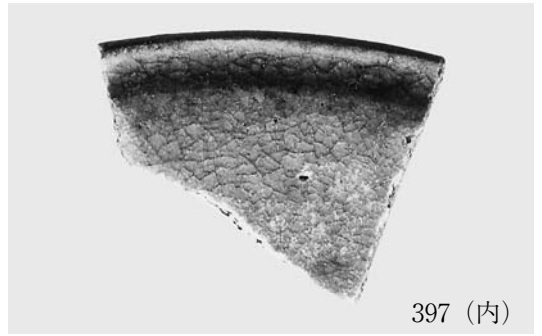
394



395



396 (内)



397 (内)



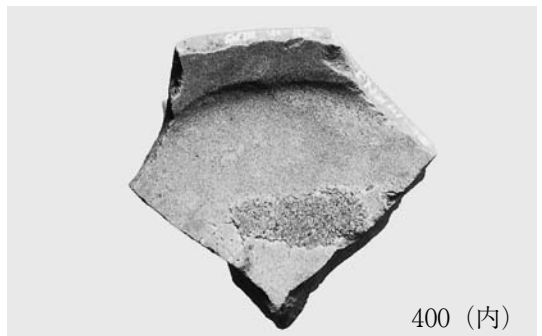
399 (内)



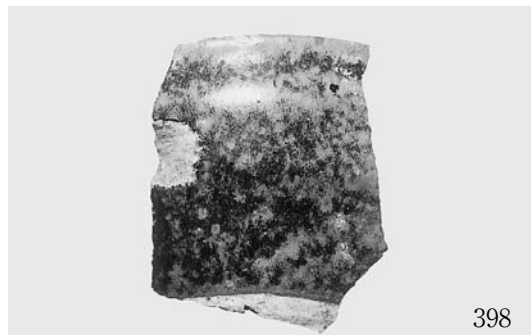
399 (底)



400 (外)



400 (内)



398



401

II区包含層出土遺物



Ⅱ区包含層出土遺物



送信所跡出土遺物 (91式105mm柳弾砲彈)

# 陣山北三区遺跡





調査前全景（南西より）

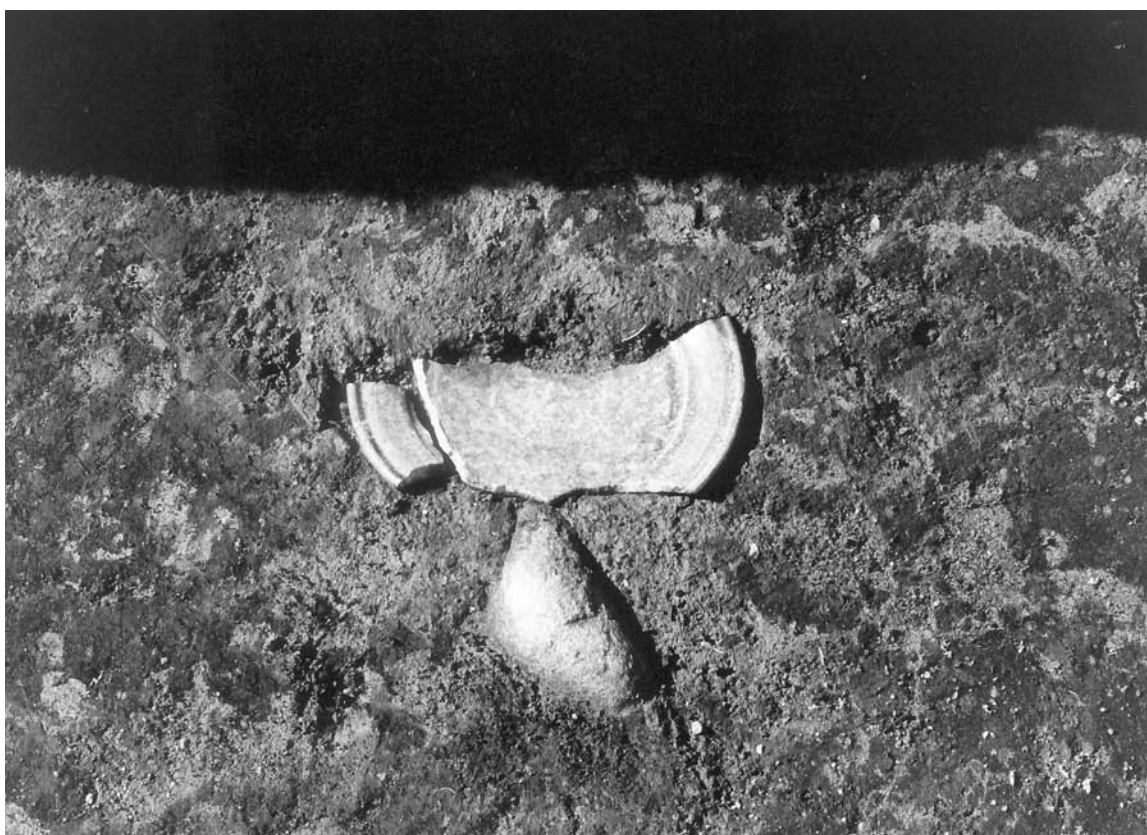


I区西壁 セクション

PL.50



I区 ピット列完掘状況（南より）



I区 遺物出土状況



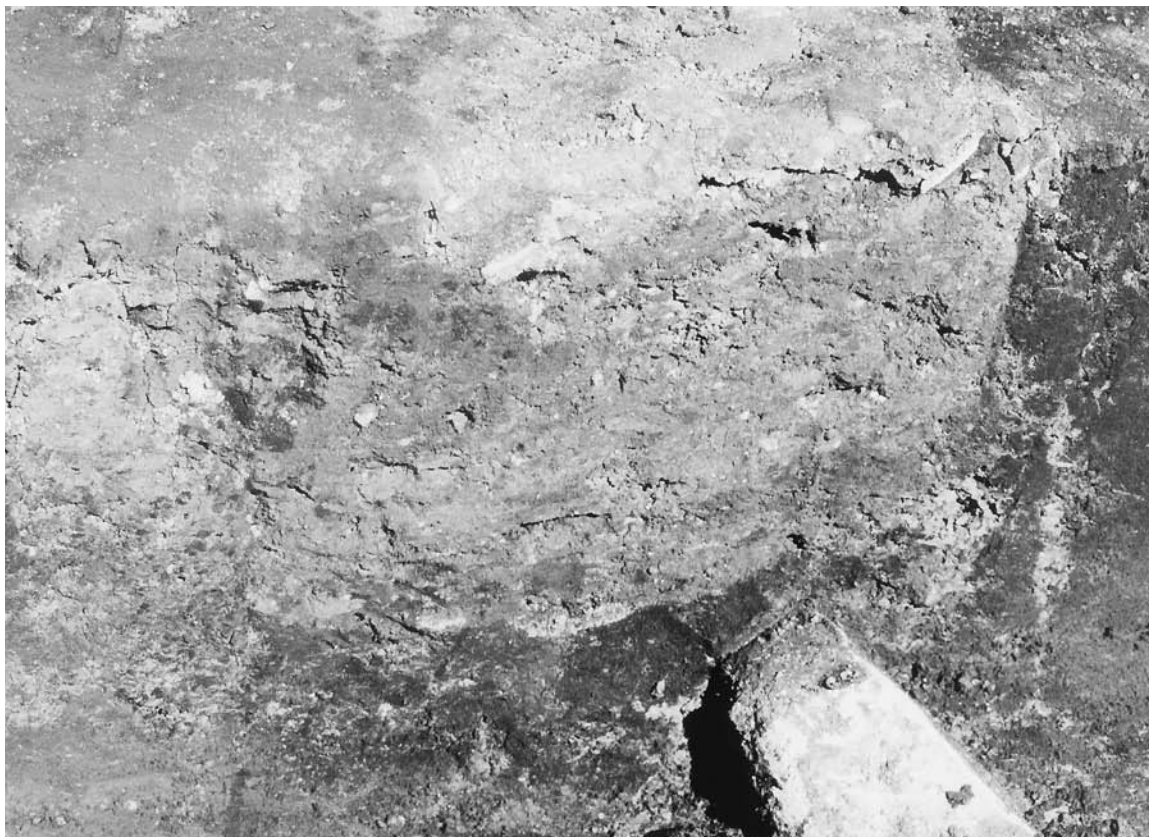


I区 遺物出土状況



I区 SD1 (南より)

PL.52



I区 SD1 セクション (南より)



I区 SD2 (東より)



I区 SD2 (西より)



I区 SD2・3 合流点 (南より)



I区 SD2a・b (南より)



I区 SD2a・b及びセクション (東より)



I区 SD2 西セクション (西より)



I区 SD2 中央セクション (西より)



I区 SD2 東セクション (東より)



I区 SD3 セクション (南より)



I区 SD4 セクション (南より)



I区 西半分全景 (北より)



II区 SD2 セクション (南より)

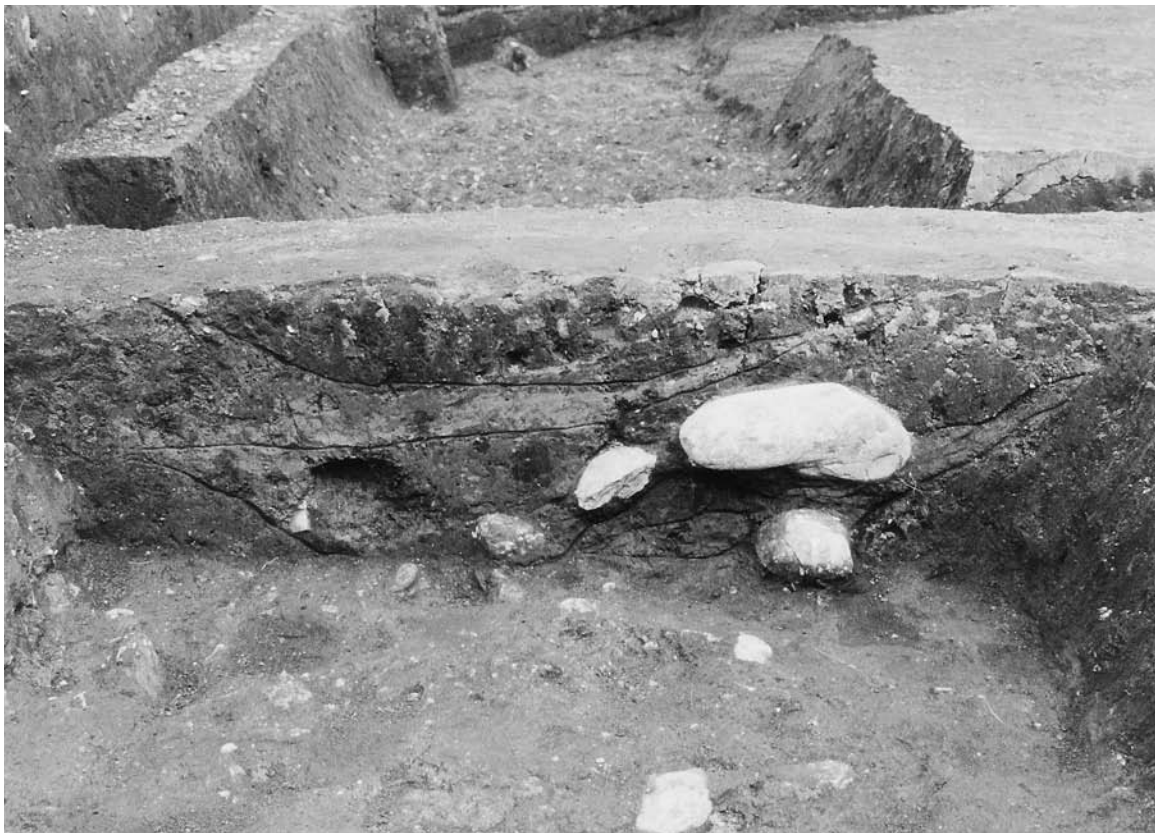


II区 SD2 (南より)





Ⅱ区 全景（東より）



Ⅲ区 SD4 セクション（南より）



Ⅲ区 SD4 (南より)



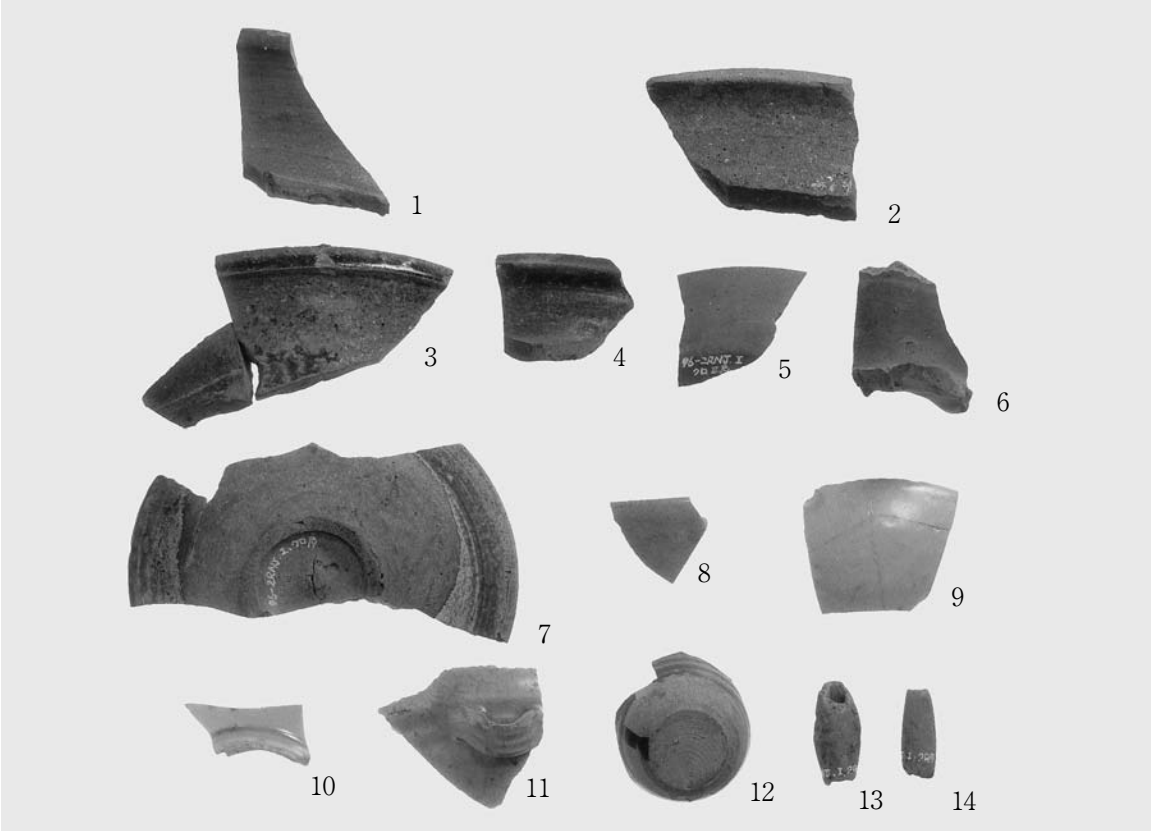
Ⅲ区 SD1~4 (北より)



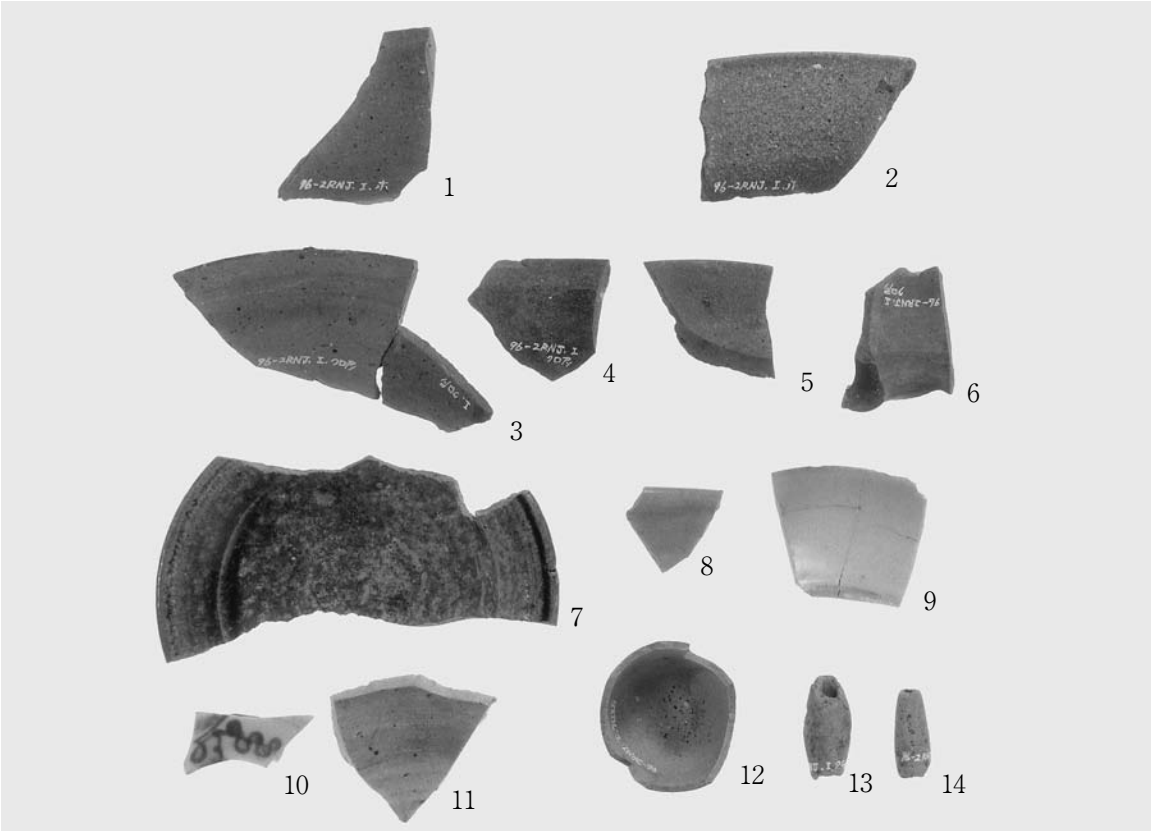
IV区全景（東より）



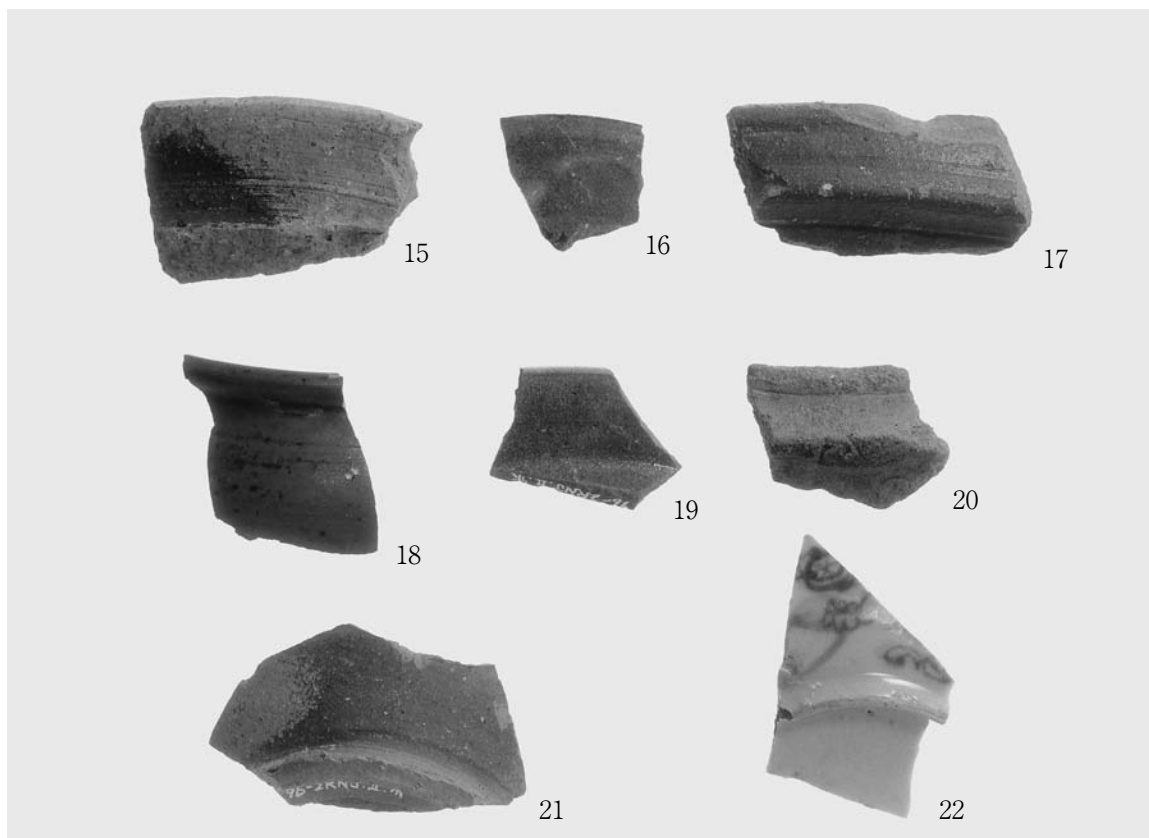
I区 SD2 作業風景



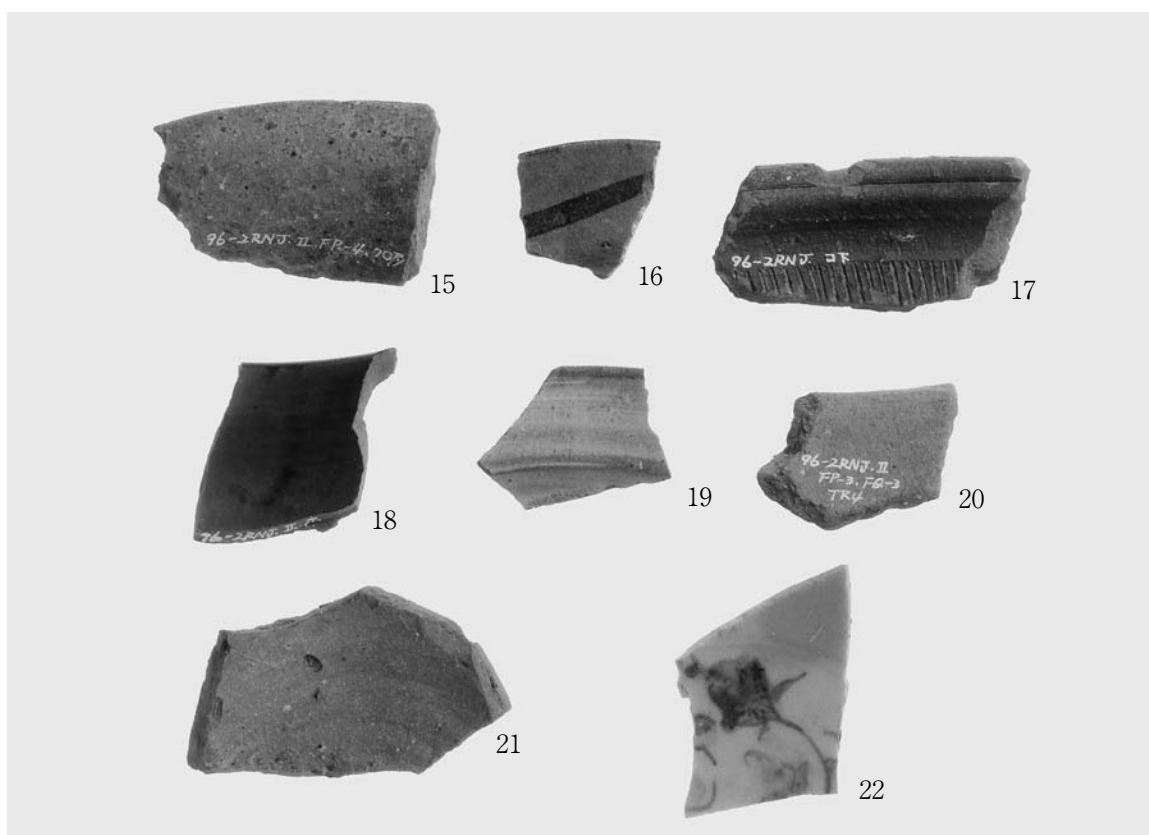
I区包含層出土遺物（外面）



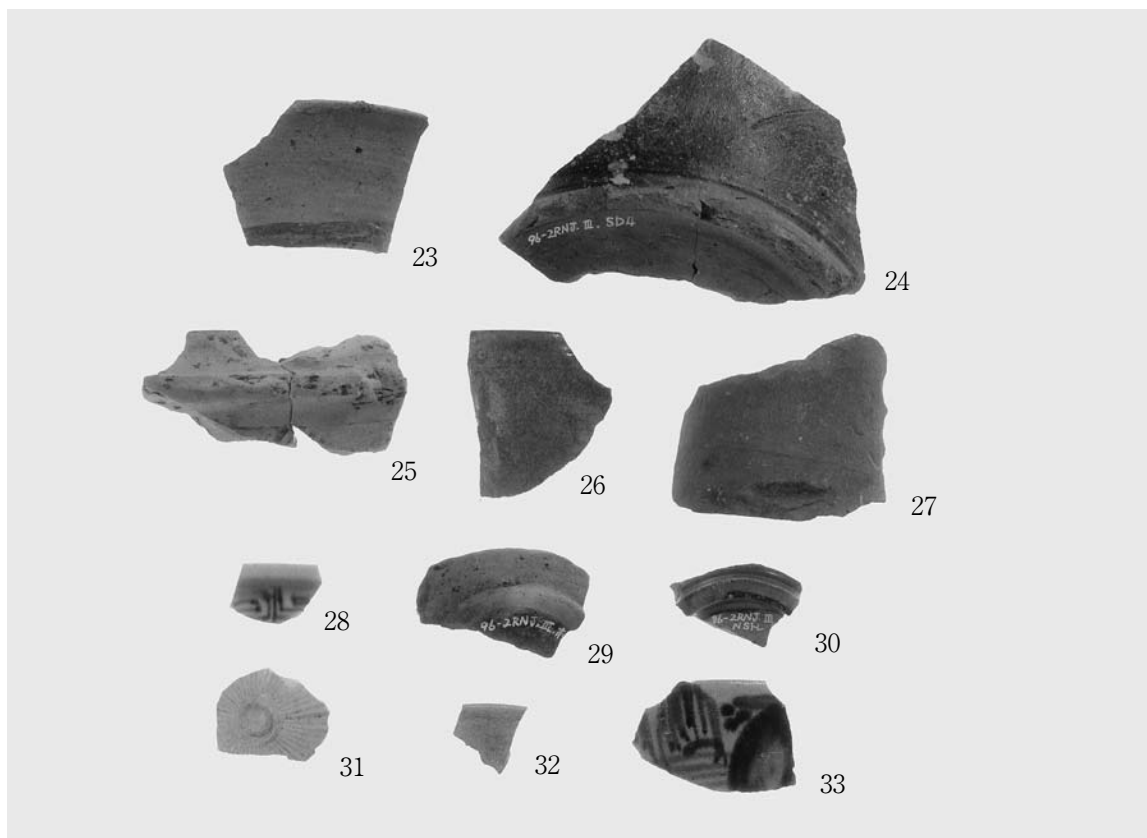
同上（内面）



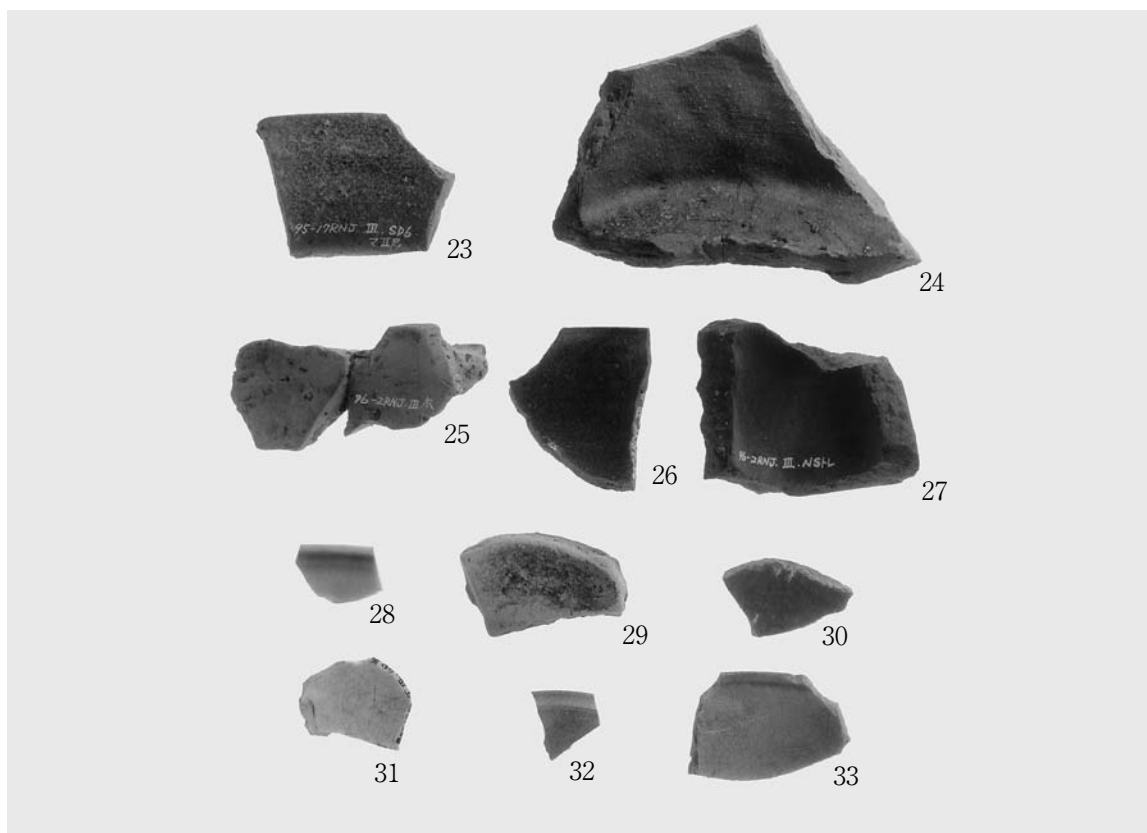
Ⅱ区包含層出土遺物（外面）



同上（内面）



Ⅲ区SD4・包含層出土及び表面採集遺物（外面）



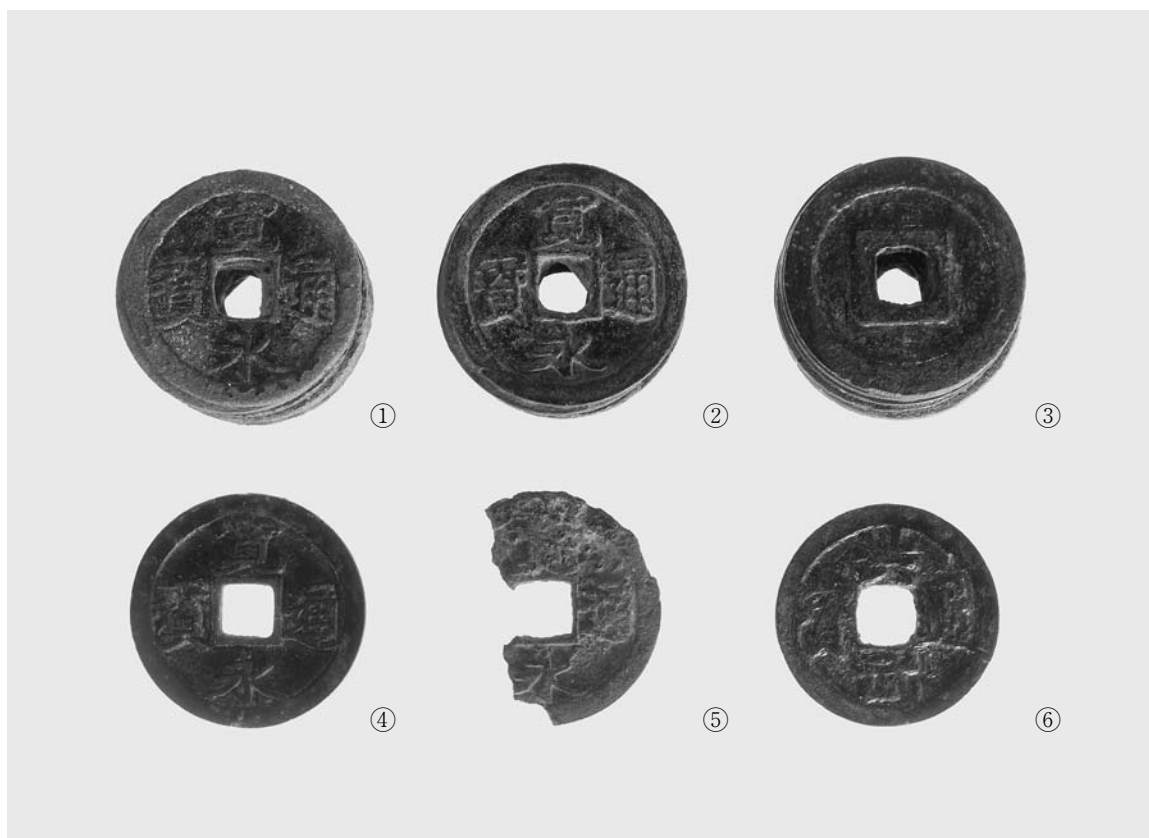
同上（内面）



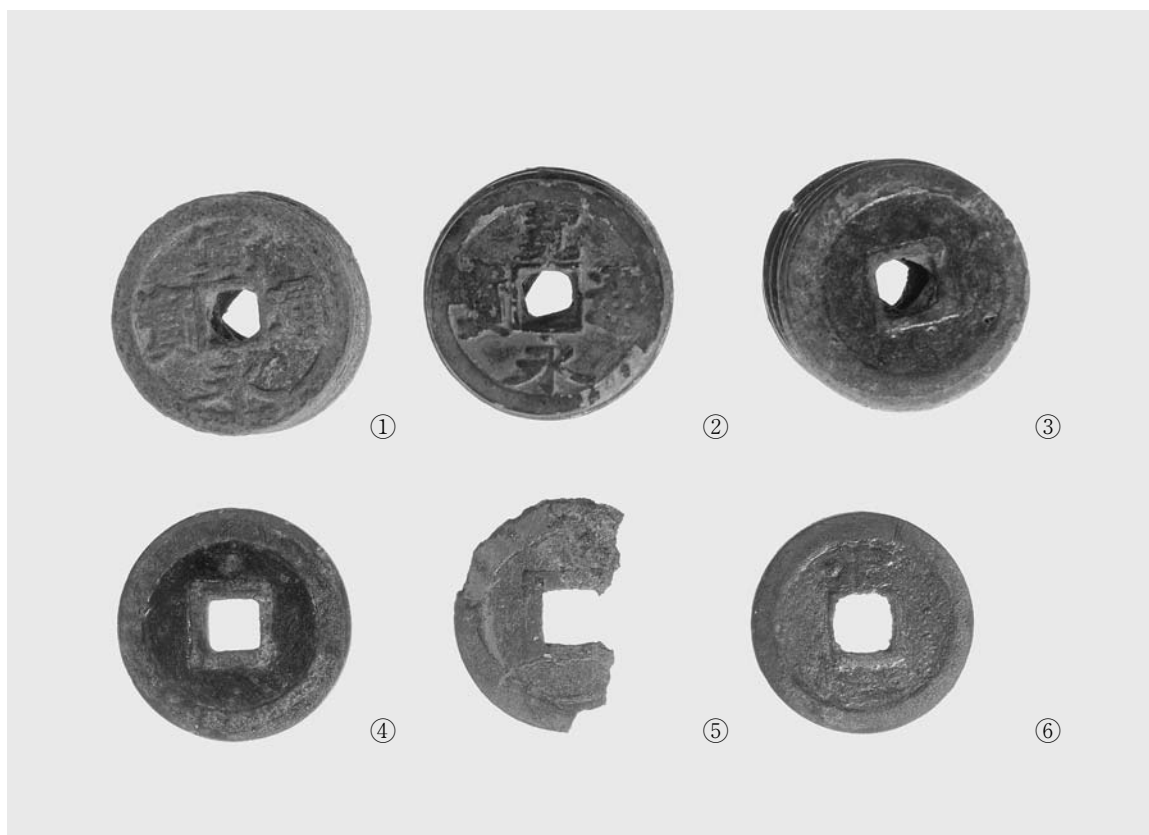
I 区包含層出土遺物（古錢）



同上



I 区包含層出土遺物 (古錢・表面)



同上 (裏面)



## 報告書抄録

ふりがな	じんやまいせき、じんやまきたさんくいせき							
書名	陣山遺跡、陣山北三区遺跡							
副書名	あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書							
巻次	4							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第31集							
編著者名	出原恵三・吉成承三・浜田恵子・佐竹 寛							
編集機関	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒783 高知県南国市篠原南泉1437-1 TEL 0888-64-0671							
発行年月日	西暦 1997年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
じんやまいせき 陣山遺跡	こうちけんなんこくし 高知県南国市 じんやまみなみかぎやま 陣山南鍵山	39204	—	33度 35分 52秒	133度 40分 14秒	1995年 9月13日～ 12月13日	3331m <sup>2</sup>	あけぼの道路建設工事に伴う事前調査
じんやまきたさんくいせき 陣山北三区遺跡	なんこくしじんやま 南国市陣山 きたかぎやま 北鍵山	39204	—	33度 35分 56秒	133度 40分 16秒	1996年 8月26日～ 11月13日	4505m <sup>2</sup>	同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
陣山遺跡	屋敷散布地 旧軍施設	中世 近世 近代	溝・池・土坑	近世陶磁器		近世の郷土屋敷に関連する遺構・遺物を確認		
陣山北三区遺跡	散布地	中世 近世	溝・土坑	須恵器 近世陶磁器 古銭		近世から近代にかけての河川跡確認		



高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第31集

---

陣山遺跡  
陣山北三区遺跡  
(あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書)

---

1997年9月

編集 (財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター

発行 高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 0888-64-0671

印刷 共和印刷株式会社